

生活復興調査

調査結果報告書

平成 15 年度

兵 庫 県

は じ め に

阪神・淡路大震災から 10 年目を迎えようとしている。本報告書は、平成 15 年 1 月に実施した生活復興調査の結果をまとめたものである。本調査は、わが国の防災分野において、これまで考えられてこなかった生活復興過程を中心に、巨大な都市災害から立ち直ろうと努力してきた被災地の人々の努力を科学的に調査し、次の災害に備えることを目的としたものである。兵庫県は、このような震災復興に関する科学的な調査を継続的に実施することについての重要性を認識し、平成 11 年以来、隔年で調査を実施してきた。第 1 回は、平成 11 年 2 月に、財団法人阪神・淡路大震災記念協会からの委託を受け、「震災後の居住地の変化とくらしの実情に関する調査」として実施した。第 2 回は、兵庫県阪神・淡路大震災復興本部総括部からの委託事業として、平成 13 年 1 月に実施した。そして、今回の調査が 3 回目となる。調査の企画・実施は、3 回の調査とも、京都大学防災研究所巨大災害研究センターが担当した。

まったく同じ災害は二度と起きることはないだろう。しかし、阪神・淡路大震災からの生活復興にかかる被災地の人々の経験や教訓は、次の災害場面でも、また別な形で発現するはずである。

前回までの調査では、調査時点で被災地の人々が抱く生活復興感を科学的に測定することに主眼をおき、その規定因として「すまい」「つながり」「まち」「そなえ」「ところとからだ」「くらしむき」「行政とのかかわり」という生活再建の 7 要素のかかわりについて分析した。今回の調査では、これまでの調査を継続し、平成 13 年から 15 年にかけての変化を追跡するとともに、新たに、生活復興の基底になる生活復興過程について検討を行った。

本調査の実施にあたっては、調査設計から最終報告書の作成までの全過程において、同志社大学文学部立木茂雄教授、奈良女子大学大学院人間文化研究科野田隆教授、京都大学防災研究所矢守克也助教授、名古屋大学災害対策室木村玲欧助手、京都大学防災研究所巨大災害研究センター田村圭子研究員からなるチームを編成し活動してきた。また、調査の実査は、ハイパーリサーチ(株)大阪事務所の浦田康幸所長に全面的にご協力いただいた。

震災 10 周年の平成 17 年 1 月には、次回調査にも再度応じることをご快諾いただいた回答者に新たな対象者を加えて、最後となる第 4 回目の調査を実施する予定である。

こうした地道な努力の積み重ねが、今後の減災・復興対策の一助となることを切に願う。

平成 16 年 3 月
京都大学防災研究所 教授
林 春男

目 次

調査概要

第1章 調査のフレーム

1. 調査目的	1
2. 調査概要	1
3. 回収状況及び回答者特性	4
4. 被害実態	7
5. 検定結果	9
第2章 調査結果のポイント	10

調査結果

第1部 平成15年1月時点での復興のようす

第1章 都市の再建

1. すまいの再建	25
2. ライフラインの復旧	36
3. まちの再建	41

第2章 経済の再建

1. 暮らしむきの変化(家計簿調査)	48
2. 震災による仕事への影響	58

第3章 生活の再建

1. 復興カレンダー	65
2. ころとからだの変化	71
3. つながりの変化	76
4. 行政との関わり	88

第4章 将来の災害に対するそなえ意識の変化

1. 被害の予測	96
2. 自助・共助・公助への態度	101

第2部 生活復興感

第1章	生活復興感尺度の結果	109
第2章	生活復興感を規定する生活再建課題	
	1. すまい	111
	2. 人と人とのつながり	113
	3. まち	115
	4. そなえ	116
	5. ところとからだ	118
	6. 暮らしむき	118
	7. 行政とのかかわり	120
第3章	地域や職業による生活復興感の違いとその規定因	
	1. 地域による違い	121
	2. 職業による違い	126

第3部 新たな生活復興モデルの構築

第1章	生活復興モデルの充実に向けた検討	132
第2章	生活復興過程の概念化	
	1. 生活復興過程尺度	134
	2. 人生変化尺度	137
	3. 生活復興過程尺度と人生変化尺度の統合	138
第3章	統合的な生活復興モデルの構築	
	1. 生活復興過程要因と生活復興感との関係	142
	2. 統合的な生活復興モデルの構築	144
	3. 今後の生活復興施策のあり方への提案	147

基礎資料

1.	質問文及び単純集計	153
2.	用語説明	205

調査概要 編

第1章 調査のフレーム

1. 調査目的

本調査は、「阪神・淡路震災復興計画最終3か年推進プログラム」のフォローアップの一環として、被災地の住民を対象に継続的な定点観測を行い、被災地の生活復興の実態を明らかにするとともに、復興施策が個人や世帯の生活に与える影響等を分析することを目的としたものである。

2. 調査概要

調査企画・実施	: 兵庫県、京都大学防災研究所
調査地域	: 神戸市全域、神戸市以外の兵庫県南部地震震度7地域及び都市ガス供給停止地域
調査対象者	: 上記地域在住の成人男女
調査法	: 層化2段抽出法(330地点 各地点10名)
標本抽出	: 住民基本台帳からの確率比例抽出(2001年調査との重複者はない)
調査数	: 3,300名 (調査地域内総人口2,530,672人<平成12年度国勢調査>の0.13%)
調査方法	: 郵送自記入・郵送回収方式
調査実施期間	: 平成15年1月15日調査票発送開始、同年2月3日有効回収締切 注)回収状況・回答者特性は、「3.回収状況及び回答者特性」を参照

1) 調査手法

調査地域は、神戸市全域と、被害が甚大であった兵庫県南部地震震度7地域及び都市ガス供給停止地域(参考1)である。

神戸市、尼崎市、明石市、西宮市、芦屋市、伊丹市、宝塚市、川西市、猪名川町、津名町、淡路町、北淡町、一宮町、東浦町(8市6町)

調査法は層化2段抽出法を用いた。具体的には、調査地域から無作為に330地点を抽出し、次に各地点の住民基本台帳から、1世帯から1人が抽出されるように、10人ずつ確率比例抽出を行った。また男女比がほぼ同じになるように、各世帯から個人を抽出した。このような方法で、3,300人を調査対象者として決定した。

調査方法は、郵送自記入・郵送回収方式である。

調査期間は、2003年1月15日に調査票発送を開始し、2月3日に回収を締め切った。なお、2003年1月下旬時点で質問紙が回収されていない全調査対象者に対し、ハガキによる督促を行った。

(参考1) 都市ガス供給停止地域

供給停止地区(兵庫県のみ)
<新たに供給停止が判明した地区>(約900戸) 神戸市北区の一部(南五葉、大池見山台)約200戸 伊丹市の一部(中野西、池尻)約100戸 尼崎市の一部(東本町、南塚口、常松)約50戸
<従来からの供給停止地区> 神戸市の一部 東灘区、灘区、中央区、兵庫区、長田区の全域 須磨区のうちつぎの地域を除く全域 (除かれる地域:高倉台、横尾団地、名谷団地、落合団地、白川台、 緑ヶ丘、友が丘、神の谷、若草町) 垂水区のうち神和台を除く地域 西区のうち西神ニュータウン、西神南ニュータウン、学園都市などを除く南部地域 北区のうち唐櫃台団地、有野台団地、東有野台、花山台、東大池団地、 西大池団地 芦屋市の全域 川西市、伊丹市の各一部(各市のうち国道176号線以北) 宝塚市の一部(国道176号線以南および武庫川以西) 西宮市のうち山口町、すみれ台、北六甲台を除く全域 明石市のうち明石川以東の全域 猪名川町の全域 尼崎市の一部(立花町、大西町、尾浜町、三反田町、築地本郷地中通、 築地北浜、築地南浜地区)

2) 主な調査内容

前回調査(2001年調査)

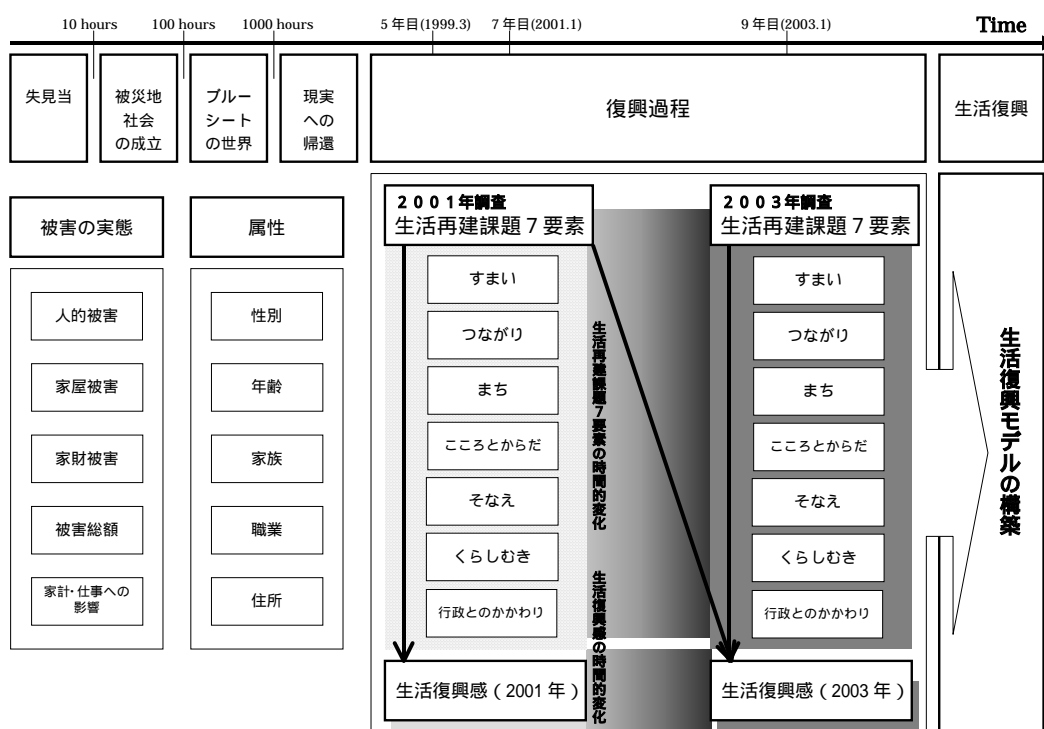
2001年調査では、被災者の生活復興に対する認識(生活復興感)を、日々の生活の充実度、現在の生活の満足度、1年後の生活の見通しで測った。震災によって大きな変容を迫られた社会の中で、市民がさまざまな生活の変化にうまく適応して生活に満足を得ることが、すなわち生活復興であると考えたからである。さらに、この生活復興感を規定する要因について、「すまい、人と人とのつながり、まち、こころとからだ、そなえ、くらしむき、行政とのかかわり」の生活再建課題7要素を仮説として用いて、生活復興感との関連を検証し、「生活復興感を規定する要因モデル」を構築した。(参考文献4)参照)

今回調査(2003年調査)

2003年調査では、被災地に暮らす一人ひとりの生活復興がどこまで進んだのか、被災者自身はそれをどのように認識しているのかといった点を中心に、震災後の時間経過の移り変わりを考慮(参考2)しながら、1)被害の状況、2)避難場所と期間、3)家族関係に関する意識の変化、4)人間関係の変化、5)市民意識の変化、6)現在のこころとからだの適応度、7)仕事の変化および現在の家計簿、8)現在の生活の満足度などについて、2001年調査結果と比較しながら分析した。

また、今回は、新たに、ライフイベント(きわめて重大な人生のできごと)に関する社会学や心理学の研究を参考にしながら、被災者の震災直後から現在に至るまでの「生活復興過程」の分析(概念化)を行うとともに、生活再建課題7要素、生活復興過程要因、生活復興感(アウトカム指標)という諸要因間の構造的な関係の解明を試みた。

(参考2) 震災後の時間経過等を考慮した調査設計の概念図



(注) 災害発生後の社会のようすは、時間経過とともにさまざまに移りかわっていくことが、阪神淡路大震災を対象とした調査から明らかになっている。本調査では、阪神・淡路大震災を対象とした調査で明らかになった3つの社会の転換点を分析に活用した。

3つの社会の転換点とは「震災後10時間(震災当日)」「震災後100時間(震災後2-4日間)」「震災後1000時間(震災後2ヶ月頃)」である。

これら3つの時間軸によって分けられる4つの社会のようすは、「失見当: 震災の衝撃から強いストレスを受け、身体的精神的に変調をきたしている時期」「被災地社会の成立: 震災によるダメージを理性的に受け止め、新しい現実が始まったことを理解する時期」「ブルーシートの世界: 震災による一時的な社会が完成し、人々がその中で活動する時期」「現実への帰還: ライフラインなどの社会のフローシステムの復旧により、一時的な社会が終息に向かい、人々が生活の再建に向け動き出す時期」の4つのようすである。

参考文献

- 1) 石塚智一・渡部洋・芝祐順(編): 統計用語辞典, 新曜社, 1984
- 2) 林春男(編): 震災後の居住地の変化とくらしの実情に関する調査 京都大学防災研究所巨大災害研究センター・テクニカルレポート, 1999-01, 1999
- 3) 兵庫県(編): 震災後の居住地の変化とくらしの実情に関する調査, 2000
- 4) 兵庫県(編): 生活復興調査, 2002
- 5) 青野文江他: 阪神・淡路大震災における被災者の対応行動に関する研究~西宮市を事例として~, 地域安全学会論文報告集, No.8, pp.36-39, 1998
- 6) 田中聡他: 被災者の対応行動にもとづく災害過程の時系列展開に関する考察, 自然災害科学, 18(1), pp.21-29, 1999
- 7) 木村玲欧他: 阪神・淡路大震災後の被災者の移動とすまいの決定に関する研究, 地域安全学会論文集, No.1, pp.93-102, 1999

3 . 回収状況及び回答者特性

1) 回収状況

調査票送付数は 3300 票、回答総数は 1356 票（回答率 41.1%）であった。

そこから、白紙、未記入・誤記入多、年齢性別・住所未記入票を除外した。

また、本調査では、被災者を「震災時兵庫県内在住者」と定義しているため、震災時に兵庫県外にいた人も分析対象から除外した。

その結果、最終的な有効回答数は、1203 票（有効回答率 36.5%）であった。

	合 計	男性	女性
有効回答数	1203	573	630
有効回答率	36.5		

有効回答数の単位は人、有効回答率の単位は%

2) 回答者特性

回答者の性別、年代、現在の家族人数、現在の住所、現在の住居形態、現在の職業の各項目について、性別(男性、女性)、世代(20・30 代、40・50 代、60 代以上)で特性の差を明らかにした。

性別 × 年代

回答者の性別は、男性は 47.6%、女性は 52.4%であった。

性別と年代をみると、男性では 60 代が最も多く（全体の 13.7%）、女性では 50 代及び 60 代が最も多かった（同率、全体の 12.0%）。

	合 計	男性	女性
合計	100.0	47.6	52.4
20～29歳	7.0	2.2	4.8
30～39歳	8.6	4.0	4.6
40～49歳	16.0	7.6	8.4
50～59歳	22.7	10.8	12.0
60～69歳	25.7	13.7	12.0
70歳以上	19.9	9.5	10.4
平均年齢 (歳)	56.04		

単位：%

現在の家族人数

回答者の現在の家族人数は、2、3人の世帯が多かった。

性別で見ると、男性より女性の方が、単身世帯が多かった。

年代別で見ると、20代～50代の家族人数は3、4人が多いが、60代以上は2人世帯が多かった。

	合 計	男性	女性	20・30代	40・50代	60代以上
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
単身世帯	9.0	5.8	11.9	4.3	7.5	11.9
2人	32.8	35.1	30.6	18.2	22.2	46.9
3人	25.9	26.2	25.7	29.4	27.7	23.2
4人	17.5	17.1	17.8	31.6	23.9	6.9
5人	8.5	8.6	8.4	11.8	12.0	4.4
6人以上	6.1	6.8	5.4	4.3	6.2	6.6
無回答	0.3	0.5	0.2	0.5	0.4	0.2

単位：%

現在の住所

回答者の現在住所の内訳は、下表のとおりである。

西宮市の回答者は20・30代の比率が高かった（17.6%）。長田区の回答者は20・30代（2.1%）に比べ60代以上（7.8%）が多かった。

	合 計	男性	女性	20・30代	40・50代	60代以上
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
1. 神戸市 中央区	3.7	4.4	3.2	4.3	4.1	3.3
2. 灘区	5.6	6.6	4.6	5.3	4.5	6.6
3. 東灘区	7.3	7.3	7.3	10.7	6.9	6.6
4. 兵庫区	5.0	5.9	4.1	8.0	4.9	4.0
5. 長田区	5.7	5.4	5.9	2.1	4.5	7.8
6. 須磨区	9.2	9.2	9.2	8.6	8.8	9.7
7. 垂水区	9.6	9.9	9.2	7.5	8.6	11.1
8. 西区	9.2	6.6	11.6	11.2	11.8	6.4
9. 北区	9.9	10.3	9.5	7.0	10.3	10.4
10. 西宮	14.2	13.3	15.1	17.6	14.0	13.3
11. 芦屋市	2.7	2.4	2.9	3.7	2.8	2.2
12. 明石市	3.8	3.7	4.0	2.1	4.1	4.2
13. 宝塚・川西市	7.8	9.2	6.5	5.3	6.9	9.5
14. 伊丹・尼崎市	2.2	2.1	2.2	2.7	2.6	1.5
15. 猪名川町	0.7	1.0	0.5	0.0	1.3	0.5
16. 淡路	1.9	1.6	2.2	2.1	2.2	1.6
17. 無回答	1.5	0.9	2.1	1.6	1.5	1.3

単位：%

現在の住居形態

回答者の現在の住居形態をみると、持地持家の比率が55.4%と最も多かった。

	合計	男性	女性	20・30代	40・50代	60代以上
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
1.持地持家	55.4	57.8	53.2	44.9	54.0	60.2
2.分譲集合住宅	13.2	11.0	15.2	19.8	16.6	8.0
3.公団・公社	8.0	9.1	7.1	6.4	6.7	9.9
4.公営	6.7	5.4	7.8	5.9	5.8	9.1
5.社宅	1.2	1.7	0.6	1.6	2.2	0.2
6.借地持家	3.3	2.8	3.8	2.1	3.2	3.8
7.借家	3.2	3.5	2.9	4.3	3.4	2.6
8.民間賃貸集合住宅	7.5	7.0	7.9	14.4	7.3	5.1
9.その他・無回答	0.9	1.0	0.8	0.5	0.9	1.1

単位：％

現在の職業

回答者の現在の職業の内訳は、表のとおりである。

全体の有職率は49.4%（男性59.5%、女性40.2%）であった。

*「有職者」とは、全体から、「16.年金・恩給生活者」「17.専業主婦」「19.学生」「20.無職・その他」「21.無回答」と回答した人を除いた人々である。

	合計	男性	女性	20・30代	30・40代	60代以上
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
1.研究・技術職	2.4	4.2	0.8	6.4	2.6	0.9
2.教員	1.6	1.0	2.1	2.7	2.8	0.2
3.保険医療従事者	1.6	0.9	2.2	1.6	2.6	0.7
4.弁護士・税理士などの専門職	0.2	0.3	0.0	0.0	0.0	0.4
5.自由業	1.7	2.1	1.3	1.6	2.2	1.3
6.管理職の公務員(課長以上)	0.3	0.7	0.0	0.0	0.9	0.0
7.一般の公務員	2.4	3.7	1.3	3.7	4.1	0.5
8.会社・団体等の役員	2.4	4.2	0.8	1.6	2.8	2.4
9.会社・団体等の管理職(課長以上)	3.9	7.9	0.3	1.6	7.5	1.6
10.一般事務従業者	6.6	5.8	7.3	16.6	9.5	0.7
11.店員・外交員等のサービス業の従業者	4.4	6.3	2.7	8.0	5.4	2.4
12.運輸・通信の現場従業者	1.9	3.5	0.5	3.2	3.0	0.5
13.製造・建設業の現場従業者	4.0	7.0	1.3	2.1	7.5	1.6
14.自営・商工経営者	7.6	11.7	3.8	4.8	8.4	7.8
15.農林業者	0.4	0.3	0.5	0.0	0.2	0.7
16.年金・恩給生活者	10.8	14.3	7.6	0.0	0.6	23.2
17.専業主婦	15.1	0.2	28.7	13.4	14.6	16.1
18.パート主婦	8.1	0.0	15.4	7.5	15.1	2.4
19.学生	1.7	1.6	1.9	10.7	0.2	0.0
20.無職・その他	22.3	23.9	20.8	14.4	9.2	35.8
21.無回答	0.7	0.5	0.8	0.0	0.9	0.7

単位：％

4 . 被害実態

回答者の被害実態について、「家族被害」「家屋被害」「家財被害」「被害額が年収に占める割合」を分析した。

家族被害

家族被害をみると、家族が死亡した人は0.9%、入院した人は2.2%、軽いケガや病気をした人が15.0%、被害なしが73.9%であった。

	合計	男性	女性	20・30代	40・50代	60代以上
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
1.死亡家族あり	0.9	0.7	1.1	0.0	1.3	0.9
2.入院傷病者あり	2.2	2.3	2.2	2.7	1.5	2.7
3.軽傷病者あり	15.0	13.6	16.2	17.1	16.6	13.0
4.被害なし	73.9	76.3	71.7	76.5	75.1	71.9
5.無回答	8.0	7.2	8.7	3.7	5.6	11.5

単位：%

家屋被害

家屋被害をみると、全壊全焼世帯が17.5%、半壊半焼世帯が20.9%、一部損壊世帯が42.6%、被害なしが18.6%であった。

	合計	男性	女性	20・30代	40・50代	60代以上
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
1.全壊	16.3	16.9	15.7	12.8	11.8	21.4
2.全焼	1.2	1.6	0.8	1.1	0.4	1.8
3.半壊	20.7	19.2	22.1	18.7	19.6	22.4
4.半焼	0.2	0.3	0.2	0.0	0.0	0.5
5.一部損壊	42.6	41.4	43.7	44.4	49.0	36.7
6.被害なし	18.6	20.4	17.0	22.5	18.9	16.8
7.無回答	0.4	0.2	0.6	0.5	0.2	0.4

単位：%

家財被害

家財被害をみると、家財が全部被害を受けた人は 12.5%、半分被害を受けた人は 28.9%、軽い被害を受けた人は 48.3%、被害なしは 8.6%であった。

	合 計	男性	女性	20・30代	40・50代	60代以上
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
1.全部被害を受けた	12.5	13.1	11.9	9.1	9.0	16.6
2.半分被害を受けた	28.9	25.7	31.9	33.2	26.9	29.4
3.軽い被害を受けた	48.3	49.4	47.3	44.9	55.5	43.1
4.被害なし	8.6	10.5	6.8	10.2	7.3	9.1
5.無回答	1.8	1.4	2.1	2.7	1.3	1.8

単位：%

被害の年収に対する割合

被害額の年収に対する割合をみると、被害額が年収の 10%未満の人は 37.4%であった。また、年収と同程度(100%)以上の被害を受けた人は 17.8%であった。

	合 計	男性	女性	20・30代	40・50代	60代以上
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
1.300%以上	9.0	8.7	9.2	6.4	4.9	13.3
2.200-300%	3.9	4.2	3.7	2.7	3.2	4.9
3.100-200%	4.9	4.9	4.9	4.3	4.5	5.5
4.70-100%	3.8	3.8	3.8	2.1	2.4	5.7
5.50-70%	6.3	5.9	6.7	4.8	6.7	6.6
6.30-50%	12.0	9.8	14.0	12.3	11.8	12.0
7.10-30%	20.9	20.9	21.0	20.6	24.5	18.1
8.10%未満	28.1	29.7	26.7	34.8	32.9	21.5
9.被害なし	9.3	10.3	8.4	9.6	8.2	10.0
10.無回答	1.7	1.7	1.7	2.1	0.9	2.4

単位：%

5 . 検定結果

前回調査との継続性が統計的に有効であるかどうかを、カイ自乗検定（pearson のカイ自乗検定）という統計手法によって検定（統計的仮説検定）した。

検定項目は、性×年齢・職業・住所・身体被害・建物被害の5アイテムであり、これらについて、前回調査との間に大きな差異があるかどうかを検定した結果が下表である。

これによると、両調査間の性別×年齢については、若干の統計的な有意差（漸近有意確率が0.1%以下の有意な水準。数字が小さくなるほど、大きな差異がある。）が見られるものの、職業、住所、身体被害、建物被害については、両調査間での差異は小さく、全体として、前回調査との継続性については、問題はないと考えられる。

	Pearsonのカイ自乗値	自由度	漸近有意確率（両側）	
性×年齢	61.748	11	0.000	***
職 業	12.949	6	0.044	*
住 所	9.716	15	0.837	
身体被害	8.773	3	0.032	*
建物被害	3.115	3	0.374	

5% : *
1% : **
0.1% : ***

（2003年度調査 n=1203、2001年度調査 n=1203）

Pearson のカイ自乗値：カイ自乗分布（あるものの集合の中で、特定の変数の値がどのようになっているかの相対的様相の分布）を用いて分析した度数

漸近有意確率：同じような調査を行った場合に全く違う結果になる危険率。通常、危険率を5%（ $=0.05$ ）に許容しており、ある調査結果に基づく危険率（有意水準）が5%以下の場合、統計的に有意な差があったと判断される。

なお、本調査結果については、検定が可能な結果又は検定が必要な結果については、すべて検定を行った。

第2章 調査結果のポイント

1. 平成15年1月時点での復興のようす

1) 都市の再建(すまい・まち・ライフライン)

すまい

ア. 震災当日に(避難先ではなく)自宅にいた被災者は全体の68.6%(自宅以外への避難者は31.4%)であったが、震災後7~8年では96.6%が自宅に居住している。(P29)

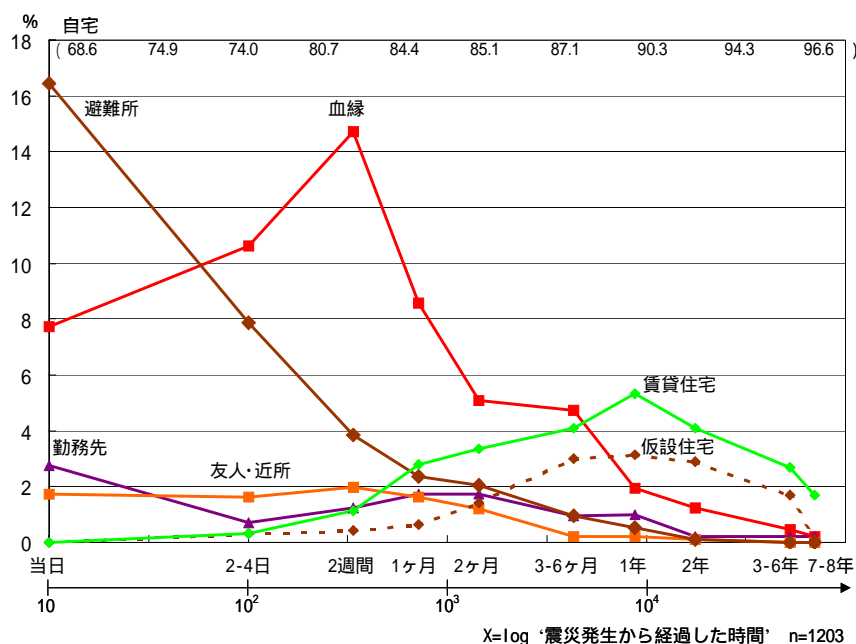
震災当日に(避難先ではなく)自宅にいた被災者は全体の68.6%(自宅以外への避難者は31.4%)であったが、震災後2~4日では74.0%、震災後2週間では80.7%、震災後1年では90.3%と、避難先から戻り自宅に居住する人が増加した。

今回の調査時点の「震災後7~8年」では96.6%が「(避難先ではなく)自宅に住んでいる」と回答している(自宅以外への避難者は3.4%)。

イ. 被災者の自宅以外への避難先の変遷は、避難所 血縁宅 賃貸住宅というパターンが最も多い。(P29)

自宅以外への避難先の変遷をみると、震災当日は避難所、震災後2~4日~3~6ヶ月までは血縁宅が多かった。震災後2ヶ月頃から賃貸住宅が増加し、震災後1年以降では最も多い避難先であった。

仮設住宅への避難者は、震災後2ヶ月頃から増加し、震災後3~6年までの間、自宅外への避難者の約3割が居住していた。



時間経過に伴う被災者の移動

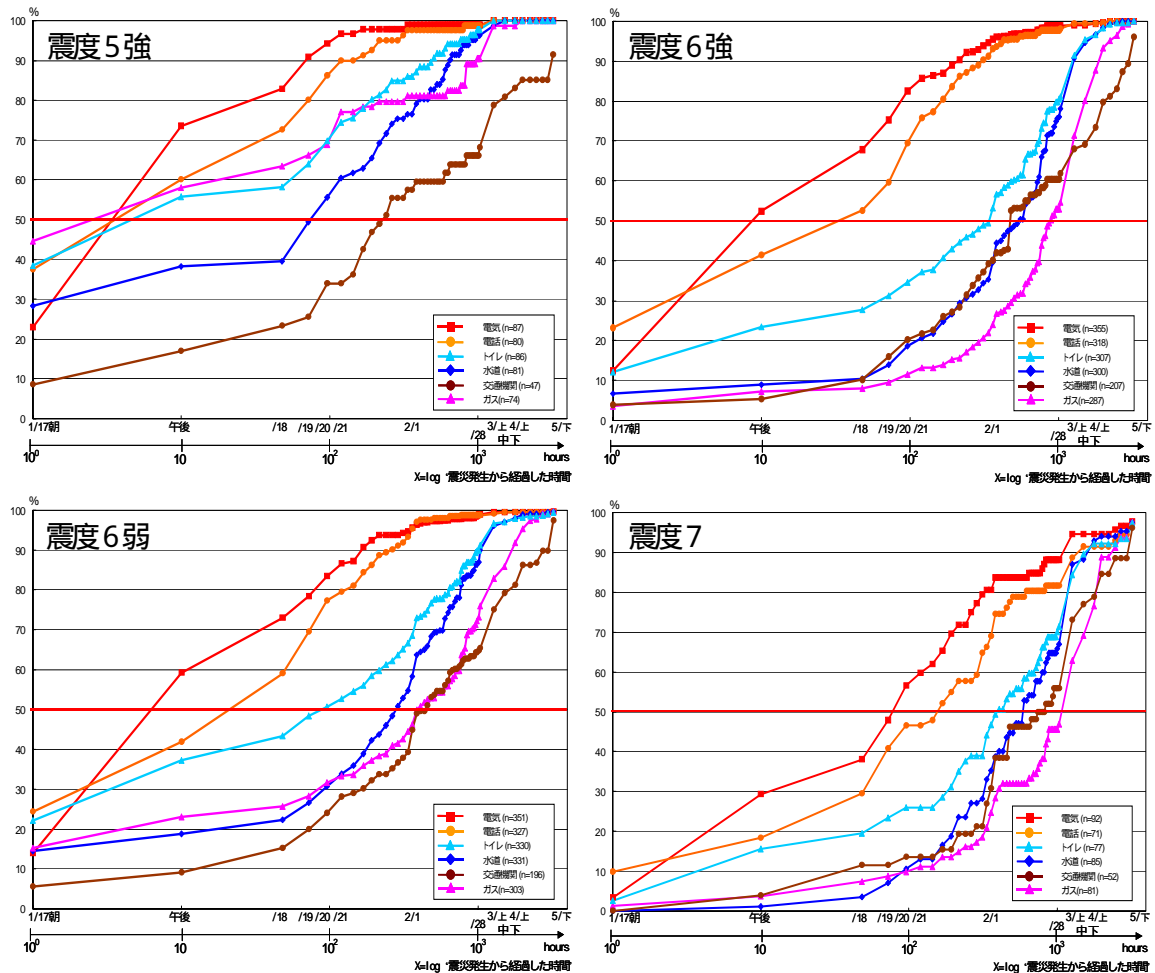
ライフライン

ライフラインの復旧時期の遅かった地域の被災者は、家屋被害が軽微であっても、満足な日常生活を送ることができなかつた。(P37)

市民（需要者）側からのライフラインの復旧に関するデータを、今回初めて収集することができた。

例えば、被害の大きかった震度7地域では、どのライフラインも震災直後の被害率が9割を超えていた。回復時期（使用可能率が50%を超えた時期）は、電気・電話が震災後2～4日、トイレ・水道・交通機関が震災後2週間～1ヶ月、ガスが震災後1ヶ月半以降であった。

ライフラインの復旧時期の遅かった地域の被災者は、たとえ家屋被害程度が軽微なものであっても、ライフラインが利用できないために、満足な日常生活を送ることができなかつたことが改めて明らかになった。



ライフラインがどのように復旧していったか（震度5強～震度7）

まち

ア．まちの復興が速いと感じている人は44.6%であり、前回調査に比べて6.3ポイント増加している。(P42)

まちの復興が速い(「かなり速い」+「やや速い」と回答した人は 44.6% (*前回調査比 + 6.3ポイント)、遅い(「かなり遅い」+「やや遅い」と回答した人は 16.8% (同 + 3.7%) であり、まちの復興が速いと感じている人が増加している。(*前回調査比とは 2001 年(H13)生活復興調査との比較である。)

イ．地域の夜の明るさが震災前以上になったと感じている人は66.0%であり、前回調査に比べて13.5ポイント増加している。(P42)

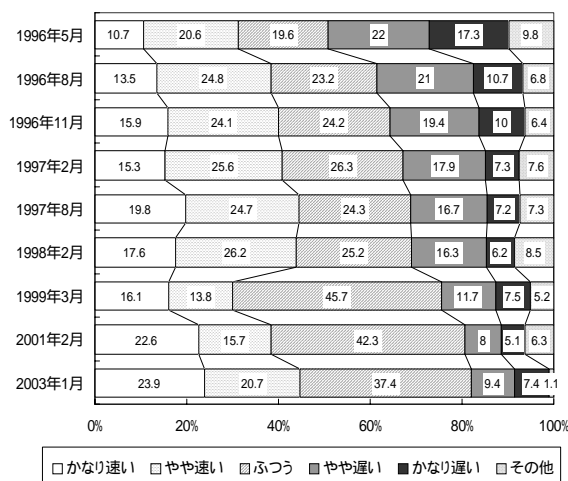
地域の夜の明るさについて、「震災前の状態に戻った」「震災前より明るくなった」と回答した人は合わせて 66.0%(前回調査比 + 13.5ポイント)、「震災前より暗くなった」と回答した人は 11.6%(同 + 2.4%)であり、震災前以上の明るさになったと感じている人が増加している。

ウ．まちの復興が遅いと感じている人が多いのは、長田区、兵庫区、淡路島、中央区などである。

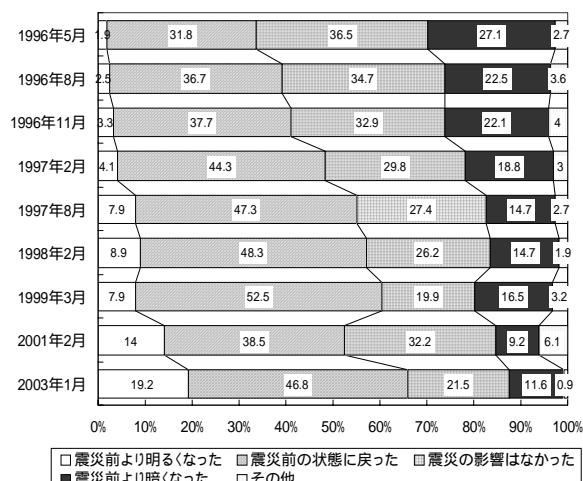
エ．夜の明るさが震災前より暗くなったと感じている人が多いのは、長田区、淡路島である。(P43)

まちの復興が遅い(「かなり遅い」+「やや遅い」との回答が全体傾向(16.8%)より多い地域は、長田区(48.5%)、兵庫区(30.0%)、淡路島(26.1%)中央区(24.4%)などである。

地域の夜の明るさが震災前より暗くなったとの回答が全体傾向(19.2%)より多い地域は、長田区(39.7%)、淡路島(21.7%)である。



まちの復興速度イメージ



地域の夜の明るさ

* 1996年5月～1998年2月は「神戸市復興定期便」、1999年3月は「震災後の居住地の変化とくらしの実情に関する調査」(阪神・淡路大震災記念協会)における同様の質問に対する回答結果を参考値として掲載している。

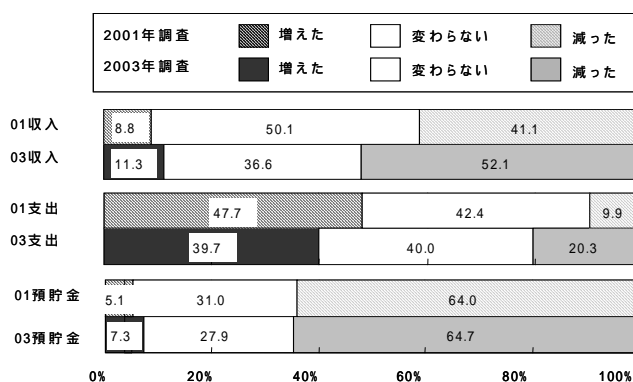
2) 経済の再建(くらしむきの変化・震災による仕事への影響) くらしむき(家計)の変化

ア. 震災前より収入が減った人が52.1%、支出が減った人が20.3%、預貯金が減った人が64.7%となっている。(P49)

くらしむき(家計)の全体傾向をみると、震災前に比べて収入が減った人の割合が52.1%(前回調査比+11.0ポイント)、支出が減った人の割合が20.3%(同+10.4ポイント)、預貯金が減った人の割合が64.7%(同+0.7ポイント)となっている。前回調査と比べると、収入の減少分を、預貯金の取り崩しだけでなく、支出を押さえることによって、家計全体のバランスを図っている状況が浮き彫りになっている。

2001年・2003年

くらしむきの全体傾向の比較



イ. 前回調査に比べて、「保険料」「交通費」「食費」「日用雑貨費」の支出を減らした人が多くなっている。(P52)

家屋被害程度別の支出細目をみると、以下のタイプに分類される。

「ふえる一方型」 (家屋被害が大きければ大きいほど支出が増える)	「住居・家具費」「医療費」
「けずる一方型」 (家屋被害が大きいかほど支出が減る)	「外食費」「レジャー費」
「ふえる主体のやりくり型」 (やりくりをしても支出が増える)	「保険料」「光熱費」
「へらす主体のやりくり型」 (やりくりをして支出を減らす)	「交通費」「食費」「日用雑貨費」 「文化・教育費」「衣服費」
「やりくり型」 (やりくりして支出の増減を均衡)	「交際費」

前回調査と比べると、以下の4費目の支出を減らした人が多くなった。

- ・「保険料」…「ふえる一方型」「ふえる主体のやりくり型」
- ・「交通費」…「ふえる主体のやりくり型」「へらす主体のやりくり型」
- ・「食費」「日用雑貨費」…「やりくり型」「へらす主体のやりくり型」

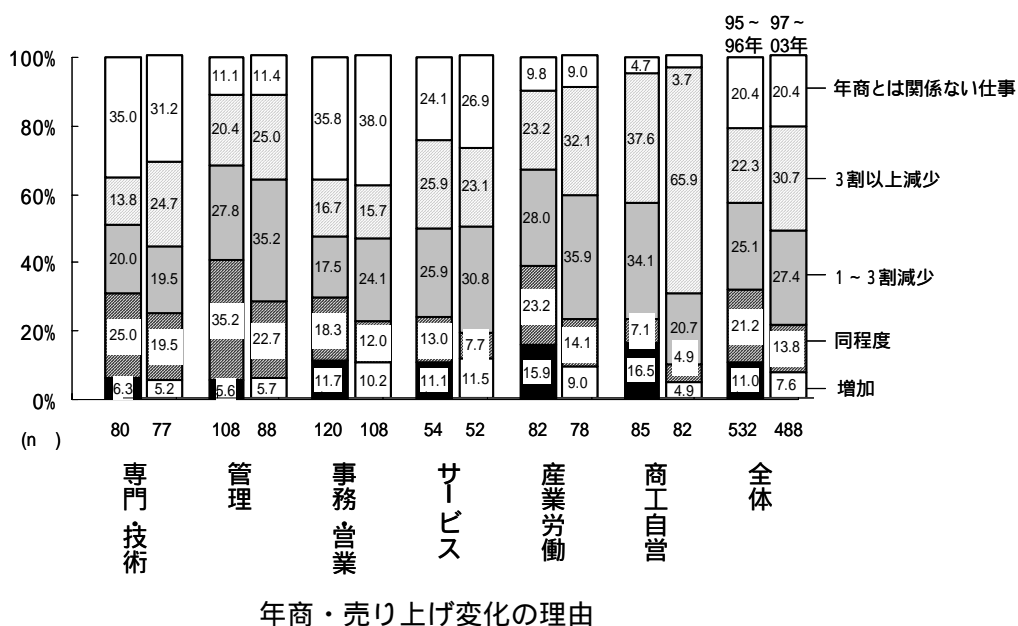
このことから、これらの生活に密着した支出をより切り詰めることで、くらしむきのバランスをとろうとしていることが明らかになった。

震災による仕事への影響

ア．年商・売上が震災前より「3割以上減少」が30.7%となっている。特に、商工自営業は約9割が年商・売上を減らし、厳しい状況になっている。（P63）

震災による年商・売上的変化をみると、震災3年後から調査時点（1997年～2003年）において、年商・売上が震災前より「増加」が7.6%、「3割以上減少」が30.7%、「1～3割減少」が27.4%となっている。

特に、商工自営業は「3割以上減少」が65.9%、「1～3割減少」が20.7%と、あわせて約9割が年商・売上を減らしており、他の職業に比べて厳しい状況になっている。



イ．年商・売上の増減理由については、震災3年目以降、震災の影響が大幅に減少している。（P64）

年商・売上が減少した理由については、1995～1996年は「日本全体の不況の影響を受けた（59.6%）」、「商圈が変わった（45.1%）」、「建物・設備が破壊された（34.5%）」の順であったが、1997～2003年では「日本全体の不況の影響を受けた」が81.4%を占めている。

年商・売上が増加した理由については、1995～1996年は「震災による需要増」が87.9%を占めていたが、1997～2003年では「営業努力の成果」が62.2%を占め、「震災による需要増」は18.9%に減少している。

3) 生活の再建

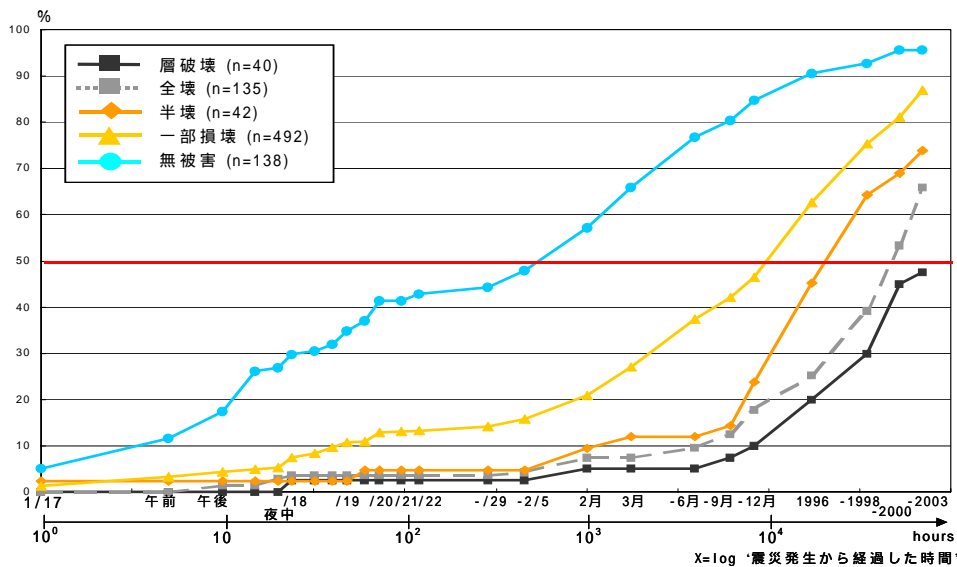
生活復興カレンダー

「自分が被災者だと意識しなくなった」人が過半数を超えたのは1996年であり、調査時点(2003年1月)では82.8%となっている。(P70)

被災者の時系列的な生活復興カレンダー(被災者のさまざまな気持ちや行動が全体の過半数を超えた時期)をみると、「不自由な暮らしが当分続くと覚悟」したのは震災当日の夜、「被害の全体像がつかめた」のは翌18日午前、「もう安全だと思った」のは1月30日~2月5日、「仕事/学校がもとに戻り」、「すまいの始末がついた」のは2月中となっている。

「自分が被災者だと意識しなくなった」人が全体の過半数を超えたのは1996年(58.5%)であり、調査時点(2003年1月)では82.8%となっている。家屋被害別にみると、「家屋被害なし」の被災者では95.7%、「一部損壊」では87.0%、「半壊」では73.8%、「全壊」では65.9%、「*層破壊」では47.5%となり、家屋被害程度の大きい被災者ほど低い割合となっている。

*「層破壊」とは全壊家屋のうち、ある階がつぶれたり瓦礫状態になった家屋の状態のことであり、それ以外の全壊家屋より死者発生率が高い。



(上図) 「自分が被災者だと意識しなくなった」人の割合

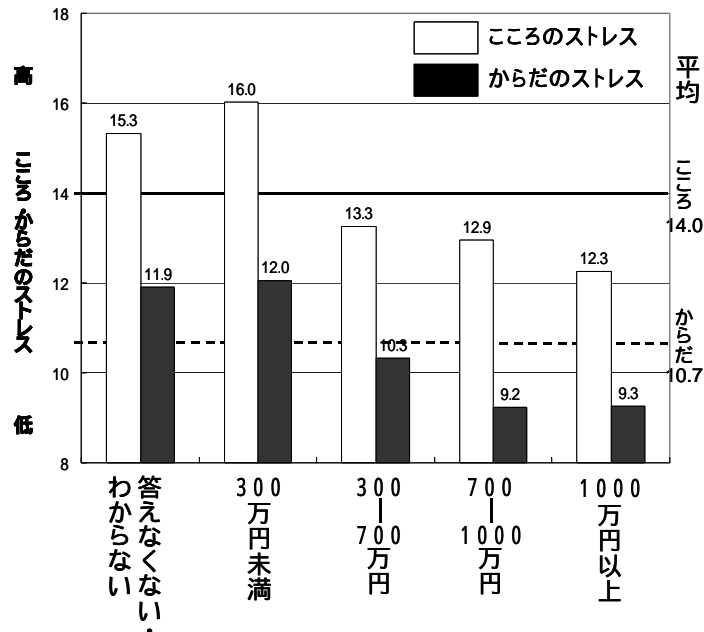
(右図) 震災時に居住していた家屋の被害程度

<被害の特徴>	<被害例>	% N=1203	被害程度
6 ← 瓦礫(がれき)状態になった。		4.2 (50)	層破壊
5 ← ある階がつぶれた。		2.3 (28)	
4 ← 家の構造に大きな被害が出て、住宅に傾きが見られた。		14.8 (178)	全壊
3 ← 屋根の部分全体に壊れた。		1.4 (17)	半壊
2 ← 屋根の瓦(かわら)の大部分が、はがれ落ちた。 柱や梁(はり)が折れた。		4.2 (50)	
1 ← 壁にひびが入ったり、壁がはがれ落ちた。 屋根の瓦(かわら)がずれたり、落ちたりした。		54.6 (657)	一部損壊
0 ← 被害はなかった。		14.9 (179)	被害なし
		不明 3.7 (44)	

こころとからだ

被災者のこころとからだのストレスは、前回調査に比べて高く、年収300万円未満の人のストレスが全体平均より高い。(P74)

被災者のこころとからだのストレスは、前回調査に比べて高くなっている。また、年収が300万円未満の人のストレスが、全体平均に比べて高い。



つながり

ア．若い世代より60歳以上の世代の方が市民性が高くなっている。

イ．地域のイベントや活動への参加が活発な人ほど市民性が高くなっている。(P77)

若い世代より60歳以上の世代の方が*市民性が高くなっている。また、「まちのイベントへの参加やお世話」、「趣味やスポーツのサークルへの参加」など地域のイベントや活動への参加が活発な人ほど市民性が高くなっている。

*「市民性」とは、行政だけが公共の領域を担うのではなく、市民も「共」の領域から公共に参画するという自律と連帯の市民意識である。

ウ．家族のきずな・かじとりのバランスがとれているほど、こころとからだのストレスが低くなっている。(P81)

被災者の家族関係を、「家族のきずな(心理的な結びつき)・かじとり(リーダーシップ)」と「こころとからだのストレス」との関連でみると、家族のきずな・かじとりのバランスがとれているほど、こころとからだのストレスが低くなっている。

エ．コミュニティ活動への参加は、小被害地域に比べて、中被害地域、大被害地域の方が低くなっている。（P86）

「まちのイベントへの参加やお世話」「趣味やスポーツサークルへの参加」「自治会の仕事」「PTAの仕事」「ボランティア活動」などのコミュニティ活動への参加は、*小被害地域（西区、北区、垂水区、明石市等）に比べて、中被害地域（中央区、須磨区、西宮市、芦屋市）、大被害地域（灘区、東灘区、兵庫区、長田区）の方が低くなっている。

*全壊・全焼率が10%未満を「小被害地域」、10%以上15%未満を「中被害地域」、15%以上を「大被害地域」と分類した。

行政との関わり

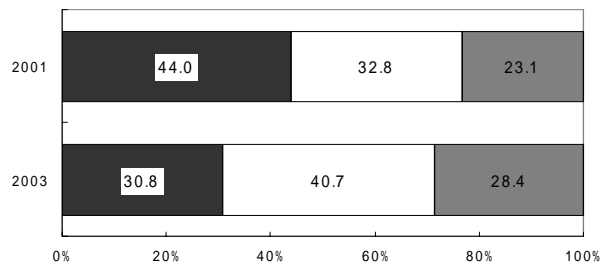
ア．前回調査に比べて、「共和主義的（公共への積極的関与型）」な人が減少し、「自由主義的（行政フリー型）」な人が増加している。（P89）

市民の行政との関わり方についてみると、「共和主義的（公共への積極的関与型）」な人が30.8%（前回調査比 - 13.2ポイント）、「自由主義的（行政フリー型）」な人が40.7%（同 + 7.9ポイント）、「後見主義的（行政依存型）」な人が28.4%（同 - 5.3ポイント）となり、前回調査に比べて、「共和主義的」な人が減少し、「自由主義的」「後見主義的」な人が増加している。

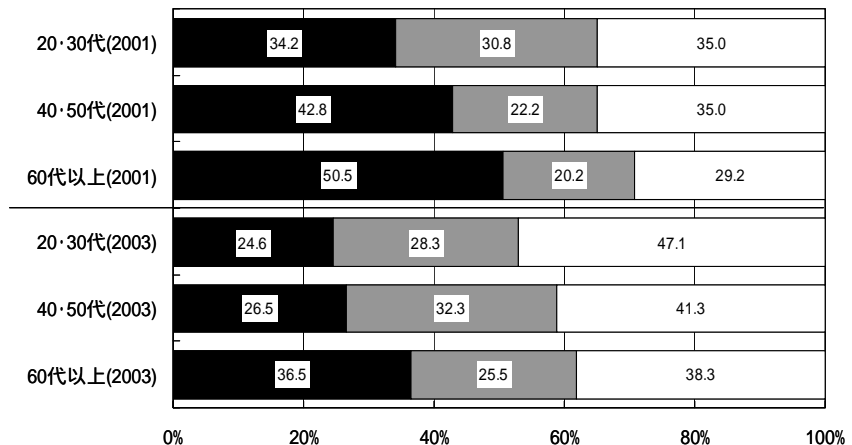
また、世代別にみると、前回調査と同様、世代が上になるほど、共和主義的な考え方の人が多く、若い世代ほど、自由主義的な考え方の人が多くなっている。

行政とのかかわりにおける各カテゴリ
ーに属する人数の割合

■ 共和主義
□ 自由主義
■ 後見主義



（各世代別）



イ。「公園の維持管理」「地域の行事」「地域活動・市民活動」に提供できる負担金・時間は、前回調査より減少傾向になっている。(P93)

「近所の公園の維持管理」「地域の行事」「地域活動・市民活動」に提供できる負担金の平均額は、1,626円(前回調査比-194円)、1,788円(同-342円)、1,759円(同-281円)で、最頻値(最も多い回答)は、いずれも1,000円(前回調査と同額)となっている。

また、これらに提供できる時間の平均は、15.8時間(前回調査比-5.7時間)、11.4時間(同-5.1時間)、16.6時間(同-7.1時間)で、最頻値は10時間(前回は12時間)、0時間(前回は10時間)、0時間(前回は12時間)となり、提供できる負担金、時間ともに減少傾向となっている。

地域に必要な費用の提供を求められたら・・・年間何円まで負担しますか

	2001年度調査			2003年度調査		
	有効回答数	平均負担金	最頻値(n)	有効回答数	平均負担金	最頻値(n)
1. 公園の維持管理	641	1820	1000(249)	659	1626	1000(286)
2. 地域の行事	670	2130	1000(254)	696	1788	1000(282)
3. 地域・市民活動	658	2040	1000(257)	678	1759	1000(267)

地域に必要な労働の提供を求められたら・・・年間何時間までなら提供しますか

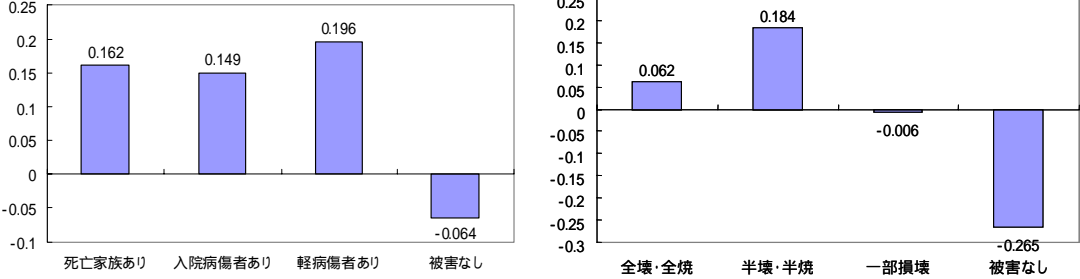
	2001年度調査			2003年度調査		
	有効回答数	平均労働時間	最頻値(n)	有効回答数	平均労働時間	最頻値(n)
1. 公園の維持管理	682	21.5	12(101)	695	15.8	10(101)
2. 地域の行事	655	16.5	10(121)	662	11.4	0(114)
3. 地域・市民活動	692	23.7	12(101)	674	16.6	0(103)

4) そなえ意識

ア. 震災で大きな被害を受けた人より、中程度の被害を受けた人の方が、東南海・南海地震に対して大きな被害を予測している。(P97)

東南海・南海地震に対する被害予測は、震災の被害程度によって、大きく左右される。具体的には、震災で大きな被害(死亡家族あり・全壊・全焼等)を受けた人より、中程度の被害(軽病傷者あり、半壊・半焼)を受けた人の方が、東南海・南海地震に対して、大きな被害予測をしている。

これは、大きな被害を被ったために、非常事態に対する自らのコントロール感覚が低くなり、次の大災害に対する恐怖や不安を感じなくなっていることが考えられる。

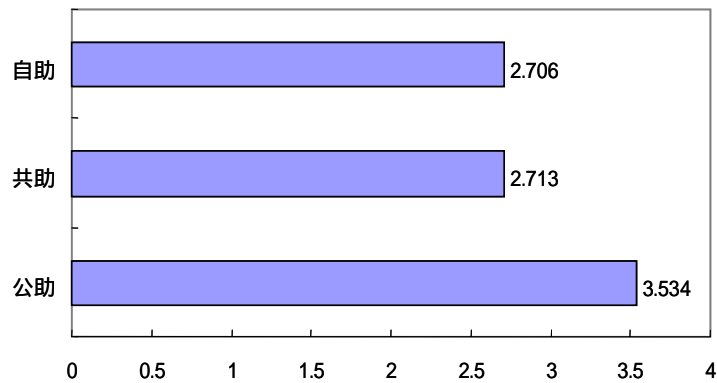


東南海・南海地震の被害予測(人的被害・家屋被害別)

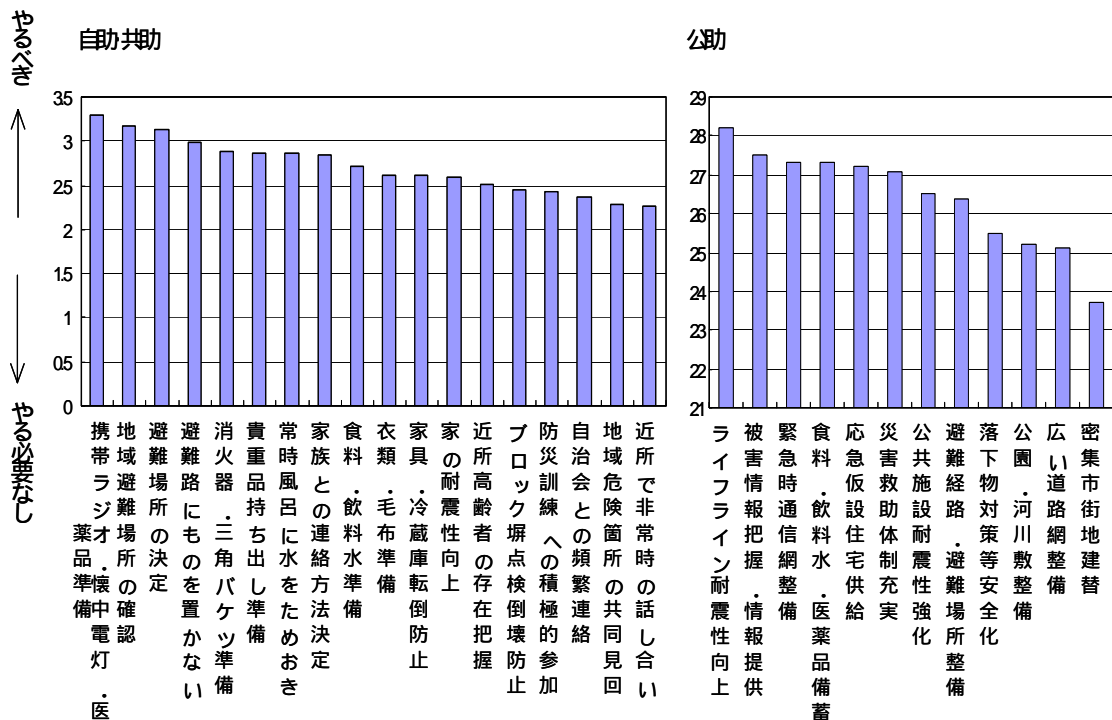
イ．被災者のそなえ意識は、「公助に対する期待」が「共助の認識」「自助の準備」より高い。（P106）

将来の災害に対するそなえ意識は、「公助に対する期待」（被害軽減・被害抑止）、「共助の認識」（地域人としての自覚・地域協力）、「自助の準備」（被害軽減・被害抑止）の3要素で構成されている。

被災者の意識としては、「公助に対する期待」が、「共助の認識」「自助の準備」より高い。



どのような「そなえ」が求められているかについては、「自助・共助」に関しては、「携帯ラジオ、懐中電灯等の準備」「地域の避難場所の認知」等であり、「公助」に関しては、「ライフライン施設の耐震性の向上」「被害状況の把握・情報提供」「緊急時通信網の整備」等があがっている。



2. 生活復興感

本調査では、被災者の「生活の充実度」「生活の満足度」「1年後の生活の見通し」について分析し、生活復興感として尺度化した。

また、生活復興感に影響を与えると考えられる*生活再建課題7要素との関連、地域・職業による生活復興感の違いについて分析した。

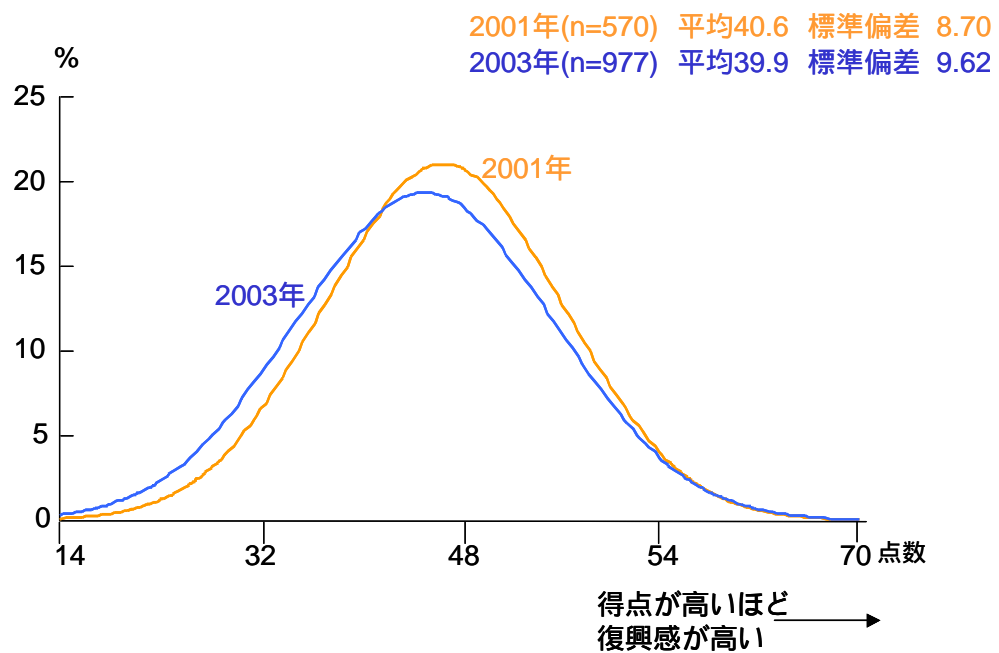
*生活再建課題7要素とは、震災5年目の神戸市震災復興検証のワークショップにおいて、生活再建に関する言語データを集約・分析した結果、導き出された被災者の生活再建に係る要素(すまい、つながり、まち、そなえ、こころとからだ、くらしむき、行政との関わり)である。

1) 全体傾向

被災者の生活復興感の全体傾向は、この2年間ではあまり変化はなかった。(P110)

被災者の生活復興感の全体傾向は、前回調査に比べてやや低い値ではあるが、統計的に意味のある差ではなく、この2年間ではあまり変化はなかった。

生活復興感



2001年と2003年間には統計的に見て、有意な差は見られなかった($F(1,1545)=1.963, n.s.$)

2) 生活再建課題7要素との関連

生活再建課題7要素	生活復興感の高低	備考
すまい	現在の住居に対する満足度が高い人ほど、生活復興感が高い。	(P111)
人と人とのつながり	市民性が高い人ほど、生活復興感が高くなっている。 近所づきあいや地域活動への参加が積極的な人ほど、生活復興感が高い。 家族間の「きずな(心理的な結びつき)」や「かじとり(リーダーシップ)」のバランスがとれた人ほど、生活復興感が高い。	(P113) (P113) (P114)
まち	まちの復旧・復興のスピードが「速い」と感じている人は、「遅い」と感じている人に比べて、生活復興感が高い。 地域の夜の明るさが「震災前より明るくなった」と感じている人は、「震災前より暗くなった」と感じている人に比べて、生活復興感が高い。	(P115) (P115)
そなえ	将来の災害によってもたらされる被害の程度が「小さい」と予測している人は、「大きい」と予測している人に比べて、生活復興感が高い。	(P116)
こころとからだ	こころとからだのストレスが低い人は、ストレスが高い人に比べて、生活復興感が高い。	(P118)
くらしむき	家計が「好転」した人は、「悪化」した人に比べて、生活復興感が高い。 「震災以外の原因で転職・転業」した人は、「震災が原因で退職・廃業」「震災が原因で転職・転業」した人に比べて、生活復興感が高い。	(P118) (P119)
行政とのかかわり	「共和主義的(公共への積極的関与型)」な人は、「自由主義的(行政フリー型)」「後見主義的(行政依存型)」な人に比べて、生活復興感が高い。	(P120)

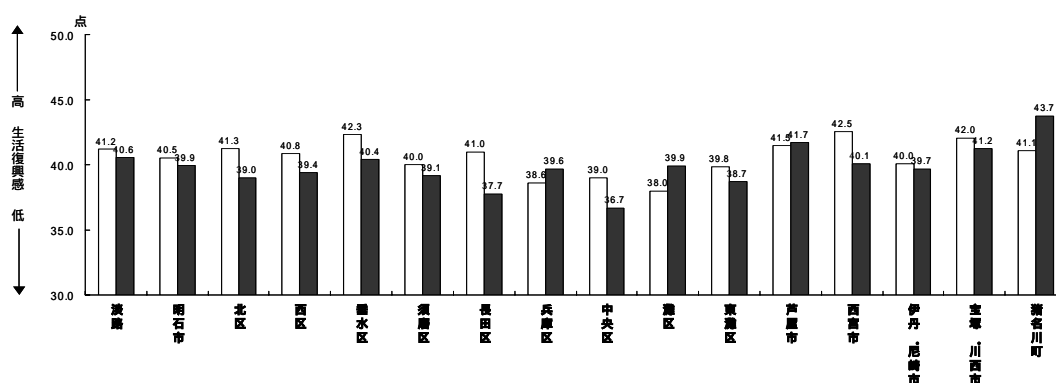
3) 地域や職業による生活復興感の違い

(1) 地域による違い

生活復興感が高い地域は、猪名川町、芦屋市、宝塚・川西市、低い地域は、中央区、長田区、東灘区、北区、須磨区となっている。(P121)

地域による生活復興感の違いをみると、生活復興感が高いのは、猪名川町、芦屋市、宝塚・川西市、低いのは、中央区、長田区、東灘区、北区、須磨区となっている。

前回調査と比べると、生活復興感が上昇したのは、猪名川町、灘区、兵庫区、芦屋市、下降したのは、長田区、西宮市、中央区、北区などである。



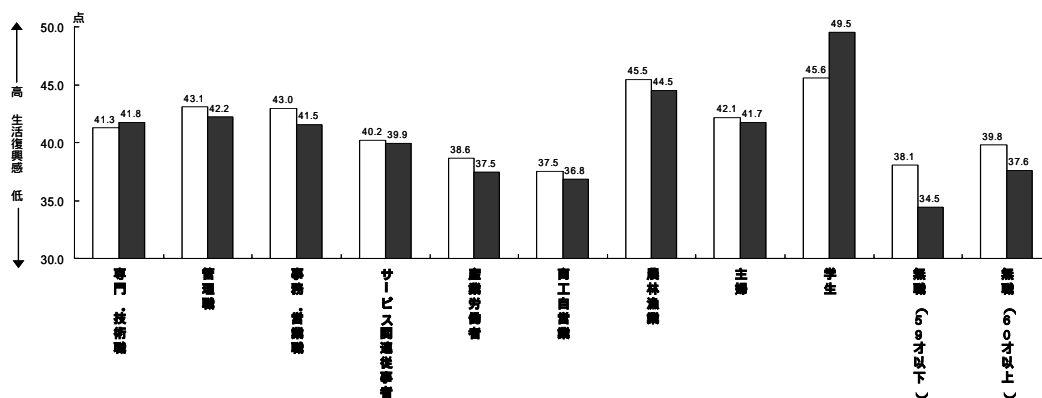
地域でみた生活復興感

(2) 職業による違い

生活復興感が高い職業は、学生、農林漁業、管理職、低い職業は、無職、商工自営業、産業労働者となっている。(P126)

職業による生活復興感の違いをみると、生活復興感が高いのは、学生、農林漁業、管理職、低いのは、無職、商工自営業、産業労働者（製造・建設業等の現場従事者等）となっている。

前回調査と比べると、生活復興感が上昇したのは、学生、専門・技術職、下降したのは、無職、事務・営業職、産業労働者などである。



職業でみた生活復興感

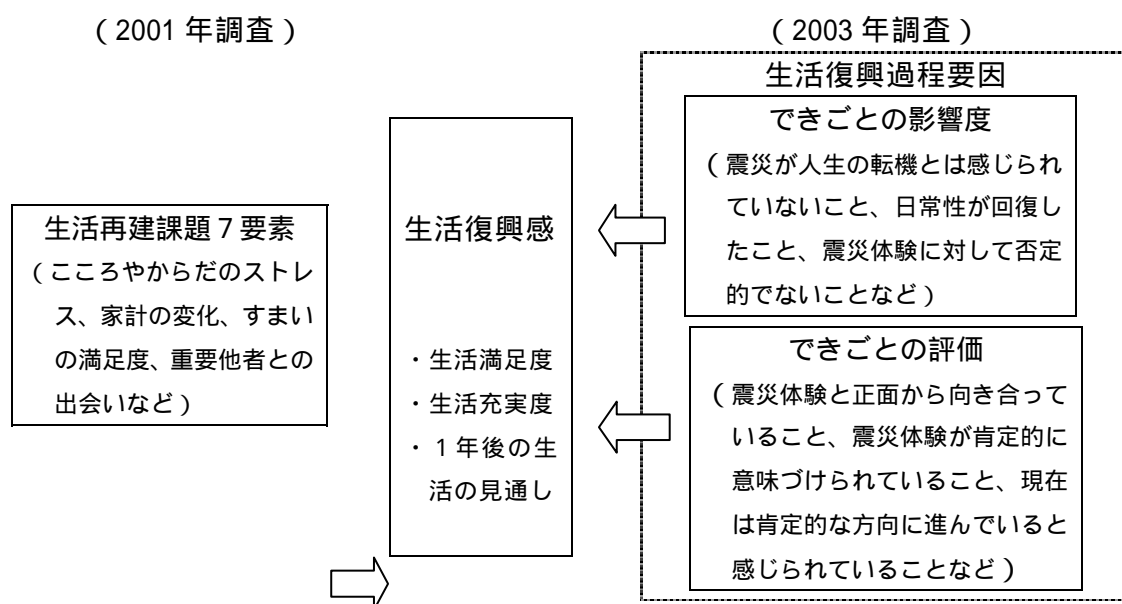
3. 新たな生活復興モデルの構築

本調査では、「生活復興感」「*生活復興過程要因」「生活再建課題7要素」に関連する諸要因の因果関係について解明し、その結果を「統合的な生活復興モデル」として明らかにした。

*「生活復興過程要因」とは、できごとの影響度（震災というできごとの現在に対する影響度）、できごとの評価（震災というできごとへの現在の評価）からなる統合的な概念である。

統合的な生活復興モデルの概要と今後への提案

生活復興感・生活復興過程要因・生活再建課題7要素の因果関係の解明(P144)
生活復興感は、前回調査で明らかになった「生活再建課題7要素」に加え、「生活復興過程要因（震災というできごとの影響度・震災というできごとの評価）」によって規定されることが新たに解明された。

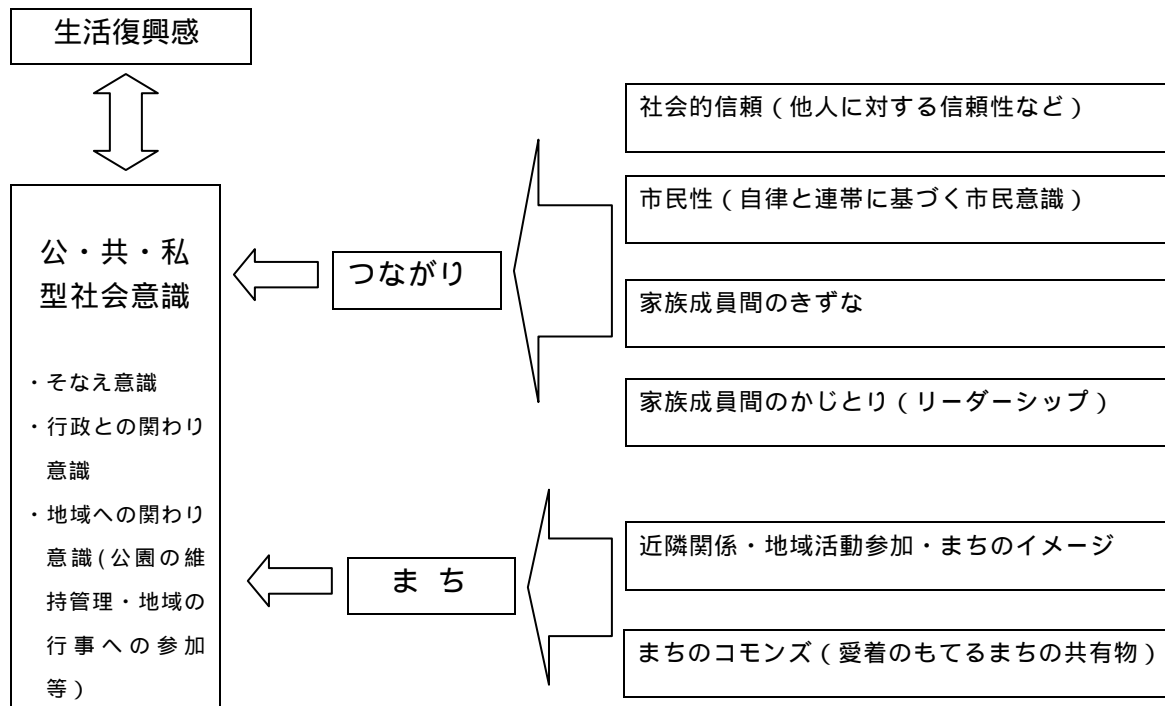


「公・共・私」型社会意識の形成についての定量的な実証 (P146)

因果関係の分析過程において、「つながり」と「まち」の2つの要素（家族・地域における豊かな人間関係や、地域活動への熱心な参加など）が大きな促進要因となって、新しい社会意識（「公・共・私」型社会意識）が形成されていることが判明した。

このことは、震災後、被災地において広がってきたと考えられている創造的な市民社会意識の存在が、定量的にも実証されたものといえる。

しかしながら、一方で、生活復興感が高まるにつれて、この「公・共・私」型社会意識が薄れることも明らかになった。これは、被災地における生活復興の進展に伴って、「喉元過ぎれば熱さを忘れる」効果を示しているといえる。



今後への提案 (P148)

今回の新たな生活復興モデルを踏まえ、復興 10 年を見据えたこれからの施策のあり方については、生活復興の視点を超えて、市民社会づくりの一環として、家族や地域における人間関係の豊かさ、いわゆるソーシャル・キャピタルの醸成や、地域活動の促進につながる施策を、より一層進めていくことが重要である。

すなわち、今後、大震災を経験した兵庫県において、

家族のきずなやつながり、地域・コミュニティにおける人と人とのつながりを高めるための施策、

地域の住民がそれぞれ「まち」への帰属意識を高め、地域活動への積極的な参加を促すための施策、

市民が「公」の領域に積極的に参画し、市民と行政との協働を進めていくための施策

などが推進されることによって、「公・共・私」型社会意識（創造的市民意識）の形成につながっていくことが期待される。

調査結果 編

第1部 平成15年1月時点での復興のようす

第1章 都市の再建

1. すまいの再建

本節では、1)住居形態の変化、2)すまいの移動、3)当日の避難理由、4)すまい満足度について述べた。

「住居形態の変化」では、震災によって被災者がどのような住居構造に移り変わったのかについて、2001年調査の結果と比較しながら分析した。

「すまいの移動」では、震災発生後、被災者が時間経過に伴って、具体的にどのような場所を移動しながら自宅へ戻っていったのかについて、2001年調査結果を参考にしながら分析した。

「当日の避難理由」では、震災当日に避難行動をとった人々が、どのような理由で避難を行ったのかについて分析を行った。

「すまい満足度」では、調査時点で居住しているすまいにどの程度満足しているのかについて分析を行った。

1) 住居形態の変化(問15・18)

- ・民間賃貸住宅(集合住宅・借家)から分譲集合住宅・持地持家へと変化している。

震災時と現在の住居形態の変化

震災時と調査時点で、住居形態の変化をみると(表1)、震災時に比べて、分譲集合住宅(震災時14.5% 調査時点18.0%)や、持地持家(震災時54.0% 調査時点55.4%)の比率が高まったのに対して、借家(震災時5.2% 調査時点3.2%)、借地持家(震災時4.6% 調査時点3.3%)、民間賃貸集合住宅(震災時10.2% 調査時点7.5%)、社宅(震災時2.7% 調査時点1.2%)の比率は低くなった。

この傾向は、2001年調査結果でも同様であり、2001年調査時点での見られた「民間賃貸住宅(集合住宅・借家)から分譲集合住宅・持地持家へ」という傾向が、今回調査時点でも引き続き見られることがわかった(2001年調査と2003年調査の震災時時点の住居形態比率には統計的な有意差はない)。

また、2001年調査・2003年調査ともに、民間賃貸集合住宅に住む人の比率が震災時よりも減少した一方で、分譲集合住宅に住む人の比率は増加している傾向が見られた。これは、神戸を中心とする阪神地域の分譲マンションの価格下落が一因として考えられる。

表1：調査対象の居住形態(2003 - 2001年調査)

	2003年調査		2001年調査	
	震災時	調査時点 (2003.1)	震災時	調査時点 (2001.1)
戸建	650	666	679	701
持地持家	(54.0)	(55.4) +	(56.4)	(58.3) +
分譲 集合住宅	175 (14.5)	216 (18.0) ++	155 (12.9)	208 (17.3) ++
公団・公社	36 (3.0)	40 (3.3)	36 (3.0)	37 (3.1)
公営住宅	64 (5.3)	88 (7.3) +	60 (5.0)	68 (5.7) +
社宅	32 (2.7)	14 (1.2) -	45 (3.7)	28 (2.3) -
借地持家	55 (4.6)	40 (3.3) -	49 (4.1)	33 (2.7) -
借家	63 (5.2)	38 (3.2) -	66 (5.5)	39 (3.2) -
民間賃貸 集合住宅	123 (10.2)	90 (7.5) -	110 (9.1)	87 (7.2) -
仮設住宅	-	-	-	-
無回答等	5 (0.4)	11 (0.9)	3 (0.2)	2 (0.2)

2003年調査(n=1203), 2001年調査(n=1203)

2003年調査と2001年調査には統計的に意味のある差はなし($\chi^2(7)=5.31, n.s.$)

住居形態の移り変わり

被災者の住居形態が、震災時から2003年調査時点まで、どのように変わっていったのかについて分析を行った(表2)。

震災時に持地持家、分譲集合住宅に住んでいた人は、震災後も同じ住居形態のすまいに住んでいる人がそれぞれ約9割、約8割であった。

一方、震災時に民間賃貸集合住宅に住んでいた人の22.8%が分譲集合住宅、15.4%が持地持家に移り、震災時に借家に住んでいた人の15.9%が持地持家、12.7%が分譲集合住宅に移るなど、賃貸住宅や借家に住んでいた人の持地持家化がみられた。

表2：震災時と現在の住居形態の移りかわり

	震災時の住まい									合計	
	戸建 持地持家	分譲 集合住宅	公団・ 公社	公営住宅	社宅	借地持家	借家	民間賃貸 集合住宅	無回答		
合計	650 (100)	175 (100)	36 (100)	64 (100)	32 (100)	55 (100)	63 (100)	123 (100)	5 (100)	1203 (100)	
現在の 住まい	戸建 持地持家	591 (90.9)	14 (8.0)	6 (16.7)	4 (6.3)	10 (31.3)	11 (20.0)	10 (15.9)	19 (15.4)	1 (20.0)	666 (55.4)
	分譲 集合住宅	14 (2.2)	142 (81.1)	7 (19.4)	8 (12.5)	8 (25.0)	1 (1.8)	8 (12.7)	28 (22.8)	-	216 (18.0)
	公団・公社	9 (1.4)	1 (0.6)	20 (55.6)	1 (1.6)	1 (3.1)	1 (1.8)	4 (6.3)	2 (1.6)	1 (20.0)	40 (3.3)
	公営住宅	9 (1.4)	4 (2.3)	1 (2.8)	46 (71.9)	1 (3.1)	2 (3.6)	9 (14.3)	16 (13.0)	-	88 (7.3)
	社宅	1 (0.2)	2 (1.1)	-	1 (1.6)	7 (21.9)	1 (1.8)	-	1 (0.8)	1 (20.0)	14 (1.2)
	借地持家	2 (0.3)	1 (0.6)	-	1 (1.6)	-	33 (60.0)	3 (4.8)	-	-	40 (3.3)
	借家	5 (0.8)	3 (1.7)	-	-	2 (6.3)	1 (1.8)	21 (33.3)	6 (4.9)	-	38 (3.2)
	民間賃貸 集合住宅	17 (2.6)	6 (3.4)	2 (5.6)	2 (3.1)	3 (9.4)	4 (7.3)	6 (9.5)	49 (39.8)	1 (20.0)	90 (7.5)
	無回答等	2 (0.3)	2 (1.1)	-	1 (1.6)	-	1 (1.8)	2 (3.2)	2 (1.6)	1 (20.0)	11 (0.9)
	同居形態で 同住所	543 (83.5)	126 (72.0)	16 (44.4)	45 (70.3)	6 (18.8)	30 (54.5)	15 (23.8)	32 (26.0)		

注：上：実数、下（カッコ内）：％（各列の合計を100％とした場合）、枠囲みのデータ：震災時と現在の住居形態が同じ％は、震災時における住居形態に住んでいた人が、現在はどのような住居形態に移り住んでいるのかの割合を表す。同居形態で同住所：震災前と現在が同じ住居形態の人（枠囲みデータ）の中で、住所も変わっていない人

2) すまいの移動（問5・21）

震災後、被災者が、時間の経過に伴って、具体的にどのような場所を移動していったのか（すまいの移動）について分析を行った。

まず、2001年調査で明らかになった結果を述べ、次に、「長期的なすまいの変遷過程」を分析した今回調査（2003年調査）の結果について述べた。

すまいの移動パターン（2001年調査）

- ・被災者のすまいの移動は、「地震発生 避難所 仮設住宅」というパターン以外にも多岐にわたっていた。

ア．時間経過に伴う避難先の変化

2001年調査では、被災者が、時間経過に伴って、移動先を次々と変化させたことが明らかになった（図1）。

震災後10時間（震災当日）時点においては、全体の63.2%が自宅にとどまっており、避難所にいた人は15.6%だった。

100時間（震災後2-4日間）時点においては、自宅以外では、血縁宅にいた人が13.9%、避難所にいた人が12.3%であった。

1000～5000時間（震災後数年）時点においては、自宅以外では、賃貸住宅にいた人が3.5%であり、仮設住宅にいた人（1.8%）よりも多かった。

イ．すまいの移動パターン

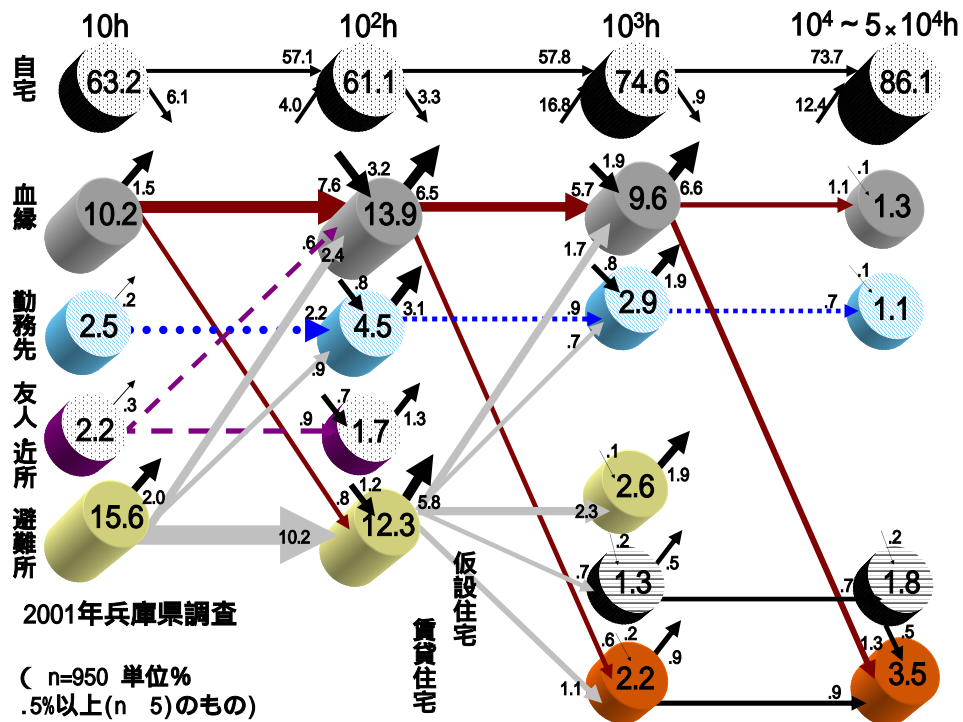
すまいの移動パターンをみると、震災後100時間(震災後2-4日間)時点で血縁宅にいた人は、その後、約半数が自宅に戻り、残りはそのまま血縁宅に留まるか、避難先として借りたアパートやマンション(賃貸住宅)に移動した。

勤務先の施設に避難した人は、7割近くが自宅へ戻り、残りはそのまま勤務先の施設を利用していた。

友人・近所に避難したのは震災後100時間までで、その後は8割近くが自宅へ戻った。

震災後100時間(震災後2-4日間)時点で避難所にいた人は、他の避難先と違って、その後、避難所から様々な避難先に移動した。約5割は自宅に戻ったが、約2割は引き続き避難所に留まった。それ以外は、約15%が血縁宅、約10%が賃貸住宅、残りは勤務先の施設や仮設住宅に移動した。

図1：震災当日からの時間経過に伴う被災者の移動(2001年調査)



ウ．震災後2ヶ月時点で避難所にいた人の移動先

2001年調査では、震災後1000時間(震災後2ヶ月)時点で避難所にいた人の移動先に注目した。

この時点で避難所にいた人は、その後、7割強が自宅へ戻り、15%が賃貸住宅、12%が仮設住宅に移動した。つまり、この時期に避難所にいた人は、自宅の再建を

目指していた人が大多数であり、仮設住宅の完成を待つ仮設住宅入居者予備軍は少なかったといえる。

すなわち、この時期の避難所では、いわゆる災害弱者対策に加え、住宅の再建や修理・補修等に関する資金援助等の情報提供を行うなど、スムーズな自宅再建等につながるような支援が必要であると考えられる。

すまいの変遷過程（2003年調査）

- ・被災者の避難先の変遷は、時間経過に伴い、「避難所（震災当日） 血縁宅（震災後2-4日～震災後2ヶ月） 避難先として借りたアパート・マンション（震災後2ヶ月以降）」というパターンが多い。

2003年調査では、「被災者の長期的なすまいの変遷過程」に焦点をあて、被災者が震災当日から震災後7-8年目（調査時点（2003年1月））に至るまでに、どのような避難先を利用したのかについて質問し、避難先の量的把握を行った。（問5・21）質問した時点は、震災当日、震災2-4日、震災後2週間、震災後1ヶ月、震災後2ヶ月、震災後3-6ヶ月、震災後1年、震災後2年、震災後3-6年、震災後7-8年の10時点である。

その結果をもとに、各時点における被災者の避難先等の割合を表したのが図2である。上図は自宅にいた人もあわせた被災者全体の割合を表した図であり、下図は自宅にいた人を除いた純粋な避難者（自宅以外に避難をした人）の割合を表した図である。

ア．避難先から自宅への帰宅

上図をみると、震災当日に自宅にいた被災者は全体の68.6%であった。その後、時間経過に伴い、避難先から自宅に戻る人が増えていった。震災後2-4日間では74.0%、震災後2週間では80.7%、震災後2ヶ月では85.1%、震災後1年では90.3%の人が自宅に戻った。調査時点の震災後7-8年では、96.6%の人が「（避難先ではなく）自宅に住んでいる」と回答している。

イ．具体的な避難先

具体的な避難先を見てみると、避難所は、震災後10時間時点では、最も多くの被災者（16.4%）が避難したが、時間の経過に伴い、人数は減少していった。

血縁宅は、震災当日から増え始め（7.7%）、震災後2週間でピーク（14.7%）を迎えた。震災後1ヶ月頃から減少したものの、震災後3-6ヶ月に至るまでは最も多くの被災者が避難していた。

避難先として自分で借りたアパート・マンションは、震災後1ヶ月頃から多くなりはじめ（2.8%）、震災後1年目（5.3%）からは、最も多い避難先であった。

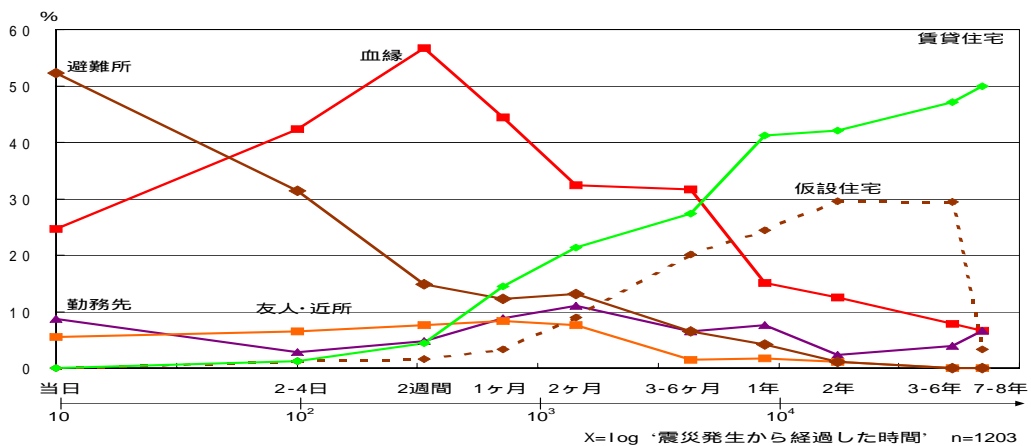
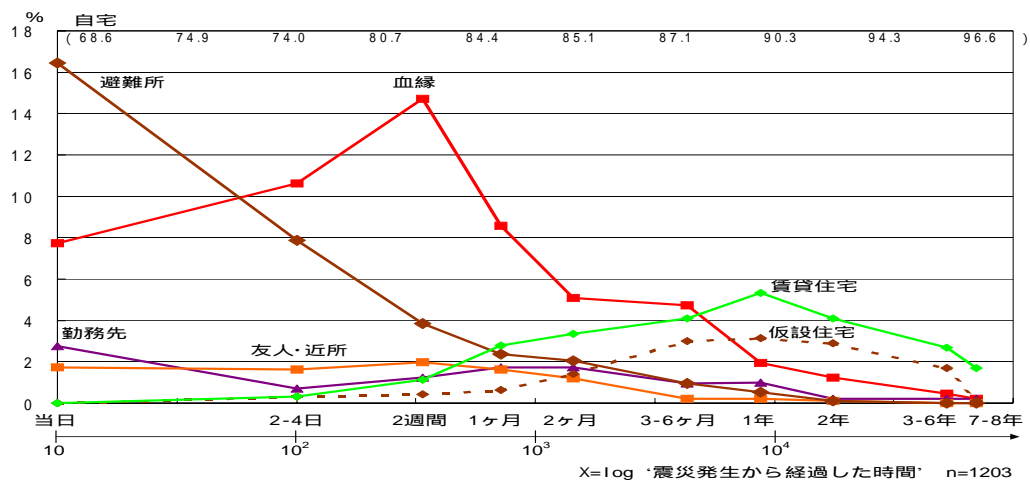
また、仮設住宅は、震災後2ヶ月頃から、多くの人に利用されはじめ（1.4%）、震災後1年目に利用のピーク（3.2%）を迎えていたことがわかった。

下図は、各時点で避難した人を100%としたときの割合であり、この図から、各時点でどのような避難先が最も使われているのかを知ることができる。

震災当日は避難所、震災2-4日～震災後3-6ヶ月までは血縁宅が多く、震災後2ヶ月以降は、避難先として借りたアパート・マンションが増加し、震災後1年以降は、最も多い避難先となった。また仮設住宅は、震災後2ヶ月頃から利用されはじめ、震災後1年から3-6年までにおいて、3割弱の人が利用した。

なお、2001年・2003年調査における「震災当日、震災後2-4日間・震災後2ヶ月、震災後数年における人々の避難場所の割合」について、それぞれの調査方法・質問方法を考慮に入れながら比較検討を行った結果、すべての時点で、統計的に同じ傾向がみられることがわかった。

図2 被災者の長期的なすまいの変遷過程



3) 震災当日の避難理由(問4付問)

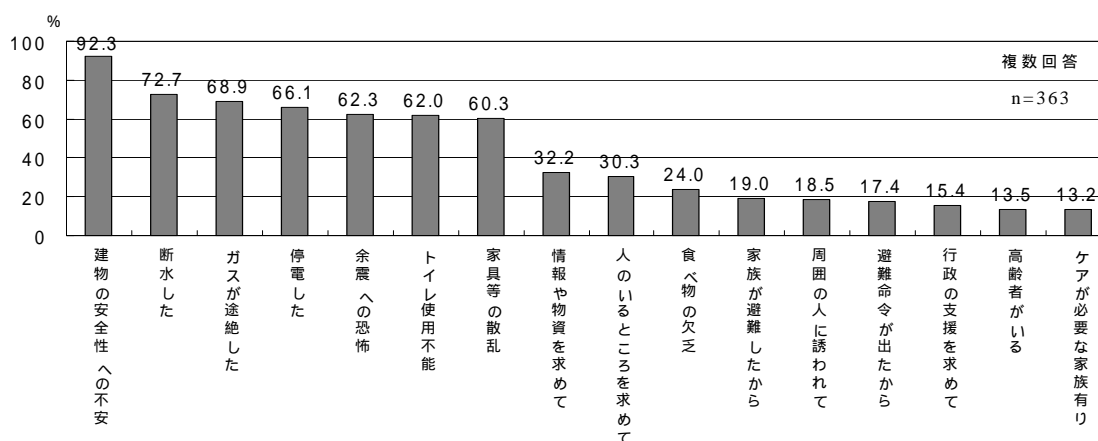
- ・震災当日の避難理由は、「居住不能」「物資・支援の要求」「余震への恐怖」「ケアの必要性」の4つに分類できる。

避難の理由

震災当日に避難をした人(n=363)に対して、複数回答可でその理由を尋ねた。(問4付問)

その結果、建物の安全性への不安(92.3%)、断水(72.7%)、ガス途絶(68.9%)、停電(66.1%)、余震への恐怖(62.3%)、トイレ使用不能(62.0%)、家具等の散乱(60.3%)が過半数を超える避難理由であった。以上により、避難理由として多いものとして、「建物の安全性への不安」「余震への恐怖」「ライフラインの停止」「家具等の散乱」があげられることがわかった(図3)。

図3: 震災当日に避難した理由



避難理由の傾向

震災当日に避難をした人の避難理由にどのような傾向があるのかを分析するために、最尤法(さいゆうほう)・プロマックス回転という統計分析手法を用いて因子分析を行った(表3)。

その結果、被災者の避難理由には、4種類の理由が存在することがわかった。

1つ目の理由としては、自宅等の「居住不能」であり、「断水」「ガスの停止」「停電」「トイレ使用不可」「家具等の散乱」がこれにあてはまる。

2つ目の理由としては「物資・支援の要求」であり、「情報や物資を求めて」「行政の支援を求めて」「人のいるところを求めて」「食べ物の欠乏」「家族が避難したから」「避難命令が出たから」「周囲の人に誘われて」がこれにあてはまる。

3つ目の理由としては、「余震への恐怖」であり、「余震への恐怖」「建物の安全性への不安」がこれにあてはまる。

4つ目の理由としては、「ケアの必要性」であり、「ケアが必要な家族あり」「高齢者がいる」がこれにあてはまる。

表 3：因子分析による震災当日の避難理由

震災当日に避難した理由	因子負荷量				共通性
	因子1	因子2	因子3	因子4	
断水	.96	-.04	-.03	-.11	.82
ガスの途絶	.94	-.05	.01	-.04	.82
停電	.69	.09	.00	.11	.60
トイレの使用不能	.68	.05	-.03	.08	.55
家具等の散乱	.28	.07	.21	.23	.25
情報や物資の要求	-.03	.78	-.02	-.03	.58
行政の支援の要求	-.03	.64	.05	-.07	.41
人のいるところへの要求	-.00	.50	.10	-.13	.29
食べ物の欠乏	.19	.45	-.05	.02	.30
家族の避難	.10	.32	-.05	.01	.13
避難命令の発令	.01	.28	-.11	.05	.09
周囲の人の誘い	-.06	.23	.14	.09	.08
余震への恐怖	.02	-.06	.99	-.09	.99
建物の安全性への不安	-.05	.12	.29	.26	.15
ケアが必要な家族の存在	.03	-.16	.02	.38	.16
高齢者の存在	.03	.04	-.03	.33	.12
固有値	3.4	2.4	1.3	1.0	

4) すまい満足度 (問 19)

2001年調査では、「すまい」に関する評価を「今お住まいのところに住みつづけたいですか」という永住希望の有無という形で質問した。(問19)

2003年調査では、質問項目を6問とし、現在居住している住宅の満足度について、さらに詳しく質問した。

具体的には「現在あなたのお住まいについて、あなたの考えを教えてください」として、6設問に対して、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の4選択肢で回答を求めた。

得られた回答について因子分析を行なったところ、これら6設問が1つの概念を測っていることが明らかとなり、この概念を「すまい満足度」とした(表4)。

さらに「そう思う」に4点、「どちらかといえばそう思う」に3点、「どちらかといえばそう思わない」に2点、「そう思わない」に1点を与え、「すまい満足度得点」とした。

表4 因子分析表（住まい満足度）

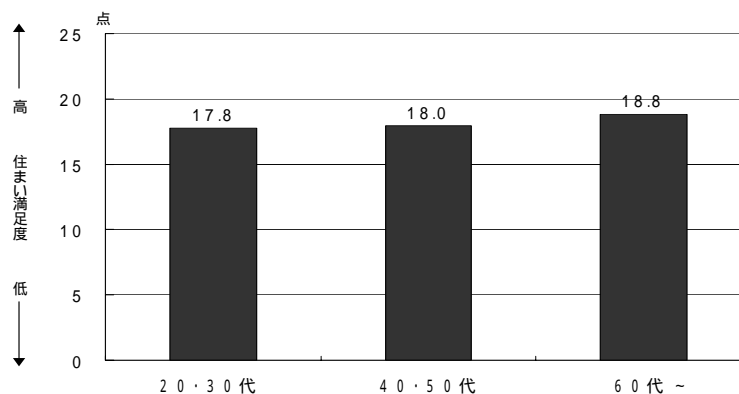
			住まい満足度	共通性
問19	1	今まで住んできたなかで、現在の住まいがいちばんいい	0.871	0.645
	2	今住んでいる環境を大事にしたい	0.803	0.542
	3	現在の住宅は住みごちがよい	0.736	0.758
	4	現在の住まいには不満がある	0.734	0.434
	5	この住宅にずっと住み続けるつもりだ	0.663	0.440
	6	今の住宅で安心して暮らせる	0.659	0.539
固有値			3.358	
寄与率			55.96	

世代と住まい満足度

- ・世代の高い人ほど、住まい満足度が高い

回答者の世代と住まい満足度との関係を見ると(図4)、若い世代より60才以上のの方が、住まい満足度が高かった。

図4：住まい満足度（世代）



住宅被害

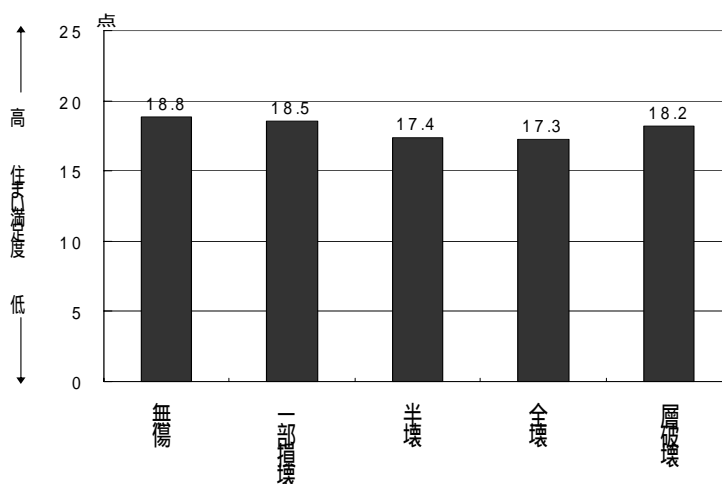
- ・住宅が「層破壊&瓦礫化」した人の住まい満足度は「全壊」「半壊」よりも高い

震災時の住宅の被災程度と現在の住宅満足度との関係を見ると(図5)、「被害なし」「一部損壊」であった人の住まい満足度は高く、「全壊」「半壊」だった人のすま

い住宅満足度は低かった。

ところが、全壊よりも被害程度が高い「層破壊」(ある階が潰れたり瓦礫化)した人のすまい満足度は「全壊」「半壊」よりも高かった。これは、住宅のある層が破壊され瓦礫となったために、住み続けることができなくなり、震災以降に何らかの形で新しいすまいを手に入れた人が、「現在の新しいすまい」に満足を感じている割合が高いことを示していると想定される。

図5： すまい満足度（家屋構造被害）

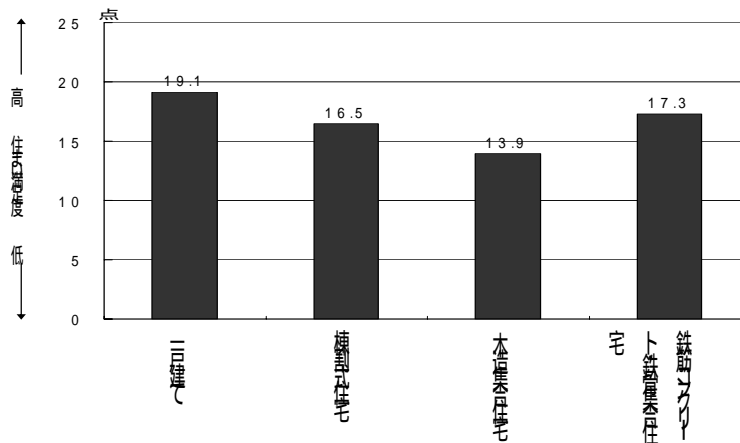


住居構造

- ・「一戸建て」に住んでいる人のすまい満足度は高い

現在のすまいの構造とすまい満足度との関係を見ると(図6)、「一戸建て(すまい満足度得点平均値19.1点)」、「鉄筋コンクリート・鉄骨集合住宅(17.3点)」に住んでいる人のすまい満足度が高かった。

図6： すまい満足度（住居構造）

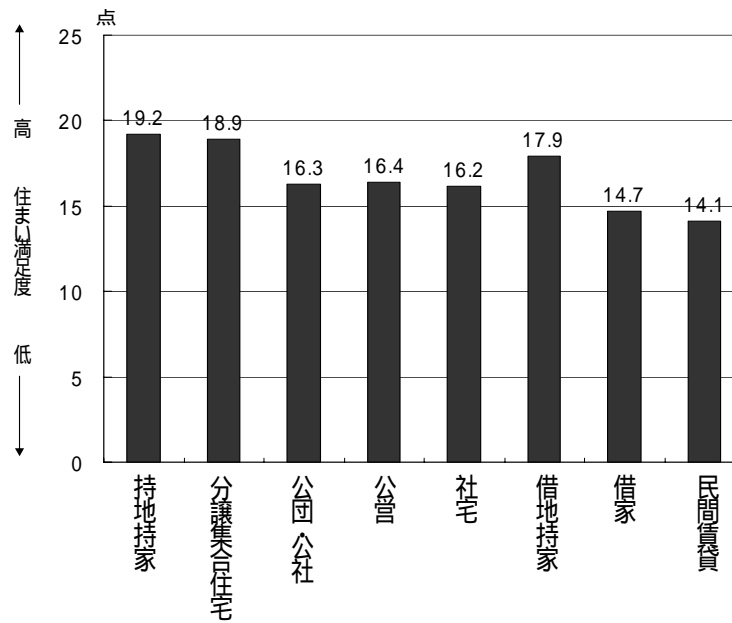


住居形態

- ・持ち家に住んでいる人の住宅満足度は高い

現在のすまいの形態とすまい満足度との関係を見ると(図7)、すまい満足度が高かったのは、「持地持家(すまい満足度得点平均値19.2点)」「分譲集合住宅(18.9点)」「借地持家(17.9点)」であり、すまい満足度が低かったのは、「民間賃貸集合住宅(14.1点)」であった。

図7： すまい満足度(住居形態)



2. ライフラインの復旧

本節では、ライフラインの被害と復旧過程について明らかにした。

ライフラインの被害については、供給が停止したおおまかな地域や総数としての被害戸数については知られているが、具体的にどのような地域で、どのようなライフラインの不便があり、それがいつまで続いたのかについては明らかになっていない。

そこで被災地全域における無作為抽出調査である本調査において、調査対象者に、「電気」「水道」「ガス」「電話」「トイレ(下水)」「いつも使う交通機関」について、「発災直後に自宅で不便・不都合があったか」「不便・不都合があった場合、それがいつまで続いたのか」を尋ねた。(問 11・12)

これにより、発災直後の各ライフラインにどの程度の不便・不都合があり(被害率)、時間経過に伴ってどのように復旧していったのか(使用可能率)を明らかにした。

また、調査対象地域における震度(アンケート震度結果を基にした計測震度¹⁾ごとに、ライフラインの被害率・使用可能率にどのような違いがあるのかについても分析を行った。

- 1 兵庫県南部地震の地震動の強さとして、本論文では神戸大学・兵庫県南部地震アンケート調査分析グループ(1996)による兵庫県南部地震のアンケート震度を用いた。アンケート震度とは太田他(1979)が開発した地震動の強さの推定手法であり、質問紙による地震動の強さの評価手法である。アンケート震度の調査対象地域は、神戸市、明石市、芦屋市、西宮市、尼崎市、宝塚市、淡路島であった。2003年調査の調査対象地域は「兵庫県南部地震震度7および都市ガス供給停止地域、および神戸市全域」であったので、上記の市・地域以外にも、伊丹市、川西市、猪名川町を調査対象地域としていた。これらの地域以外に震災時住んでいた回答者と無回答者の合計100票については、分析対象外とした。アンケート震度については、震度5強までの領域では計測震度と高い一致があることが知られている。また、震度6弱以上の強い震動に関しては、兵庫県南部地震を契機に小山・太田(1998)によって補正式(略算変換式)が提案されている。それに基づいて、アンケート震度で得られた推定式を気象庁計測震度から推定する場合には、修正式を用いることが望ましいとされている。本分析ではこの略算変換式を用いて、アンケート震度を気象庁計測震度へ変換し「計測震度」を求め、それを基に震度を算出した。

<文献>

- 神戸大学兵庫県南部地震アンケート調査分析グループ(代表 高田至郎): 兵庫県南部地震に関するアンケート調査 - 集計結果報告書 -, 神戸大学工学部建設学科土木系教室耐震工学研究室, 1-592, 1996
- 小山真紀・太田裕: アンケート震度の気象庁震度への略算変換式, 自然災害科学, 17(3), pp.245-247, 1998
- 太田裕他: アンケートによる地震時の震度の算定, 北海道大学工学部研究報告, 第92号, 117-128, 1979

1) ライフラインの被害(問 11・12)

- ・電気・電話は震災当日、トイレは震災後2-4日間、水道・交通機関・ガスは震災後2ヶ月で使用可能率が50%を超えた。

各ライフラインについて発災直後にどれくらい不便・不都合があり(被害率)、時間経過に伴ってどのように復旧していったのかを分析した。

図1の横軸は、震災発生後の時間経過を表し(対数軸で時間経過を表現)、縦軸は、「ライフラインが使用可能である」と回答した回答者の割合(使用可能率)である。

図1を見ると、それぞれのライフラインによって復旧の速度・過程が異なることが明らかになった。

発災時点においては、どのライフラインについても、8割前後の人が「不便だった・不都合があった」と回答した。

具体的に震災当日の不便・不都合と回答した割合(被害率)をみると、電話が74.8%、トイレが77.3%、水道が84.2%、電気が85.1%、ガスが86.8%、交通機関が93.8%であった。

しかし震災当日のうちに、電話は約30%、電気は約50%が復旧し、ともに、震災当日のうちに使用可能率が50%を超えていたことがわかった。またトイレ(下水)は、震災後2-4日間で使用可能率が50%を超えていたことがわかった。水道・交通機関・ガスの使用可能率が50%を超えたのは、震災後2週間以降になってからであることが明らかになった。

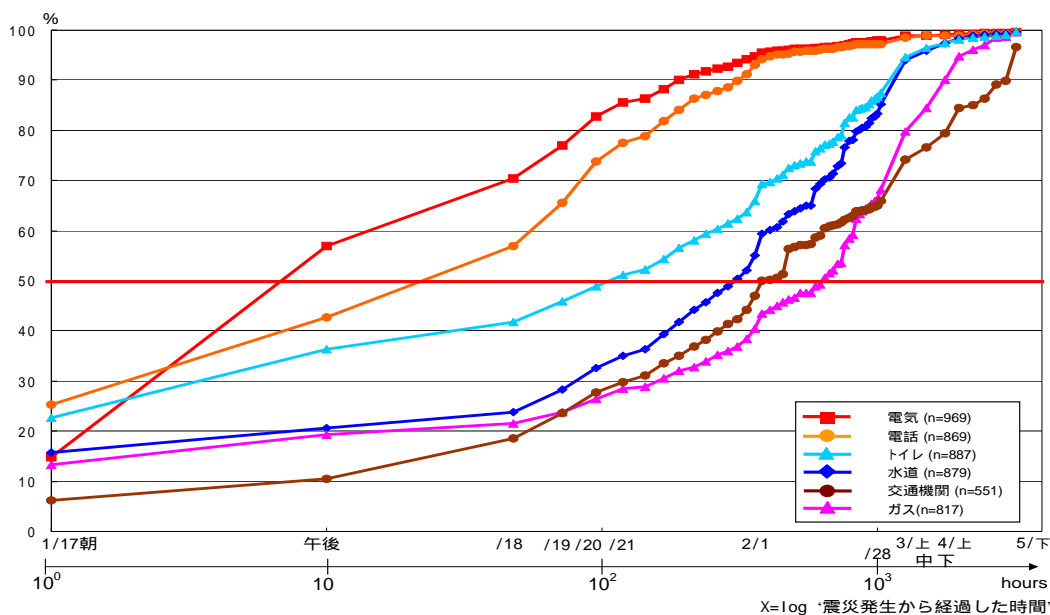


図1：ライフラインがどのように復旧していったか(全体)

2) 震度ごとに見たライフラインの被害

・ライフラインの被害率や復旧過程は、震度によって様相が異なっていた。

ライフラインの復旧時期の遅かった地域の被災者は、家屋被害が軽微であっても、満足な生活を送ることができなかった。

震度ごとに、ライフラインの被害率と復旧過程をみることによって、震度によって生活の不便さにどのような違いがあるのかについて分析を行った。

震度5弱では(図2)、発災直後は、交通機関の被害を除き、各ライフラインとも50%前後しか被害を受けておらず、比較的大きな被害を受けた電気、電話の使用可能率も震災当日中に50%を超えた。

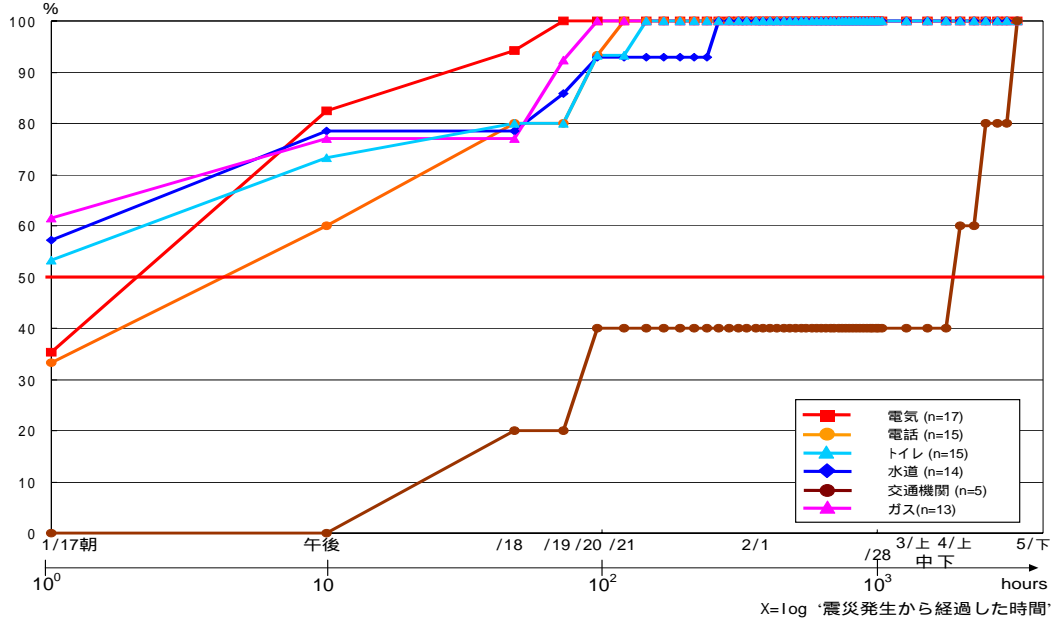


図2：ライフラインがどのように復旧していったか(震度5弱)

震度5強(図3)になると、電気・電話・ガス・トイレの使用可能率は、震災当日中に50%を超えたものの、水道は震災後2-4日間になるまで使用可能率は50%を超えなかった。

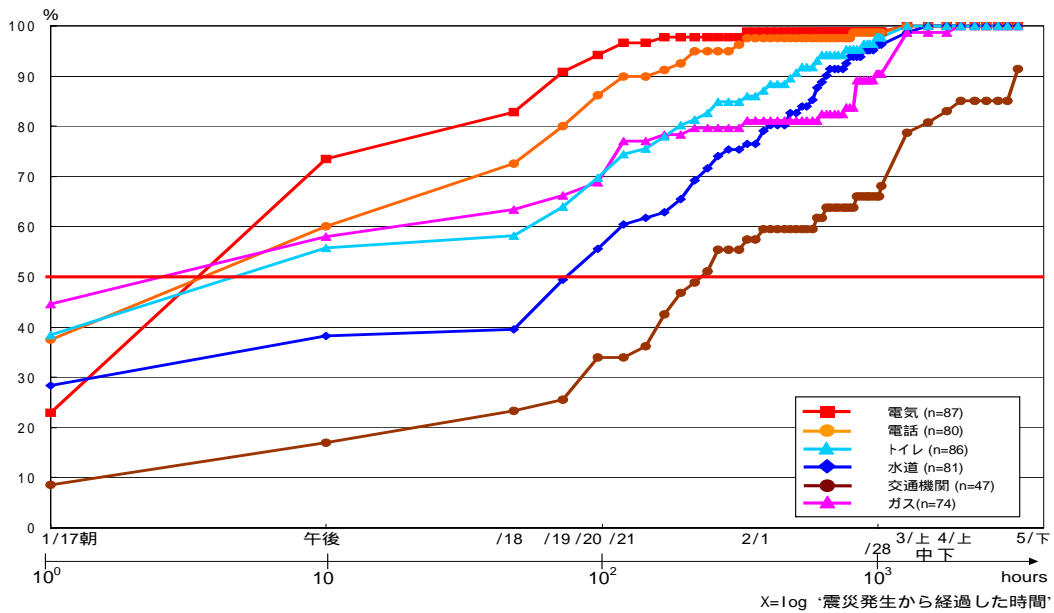


図3：ライフラインがどのように復旧していったか(震度5強)

震度6弱になると(図4)、発災直後の被害率はどれも8割前後と大きなものになり、使用可能率が50%を超える時期も、電気・電話が震災当日、水道が震災後2-4日間、水道・ガス・交通機関が震災後2週間以降と、ライフラインによって回復時期に大きな違いがみられた。

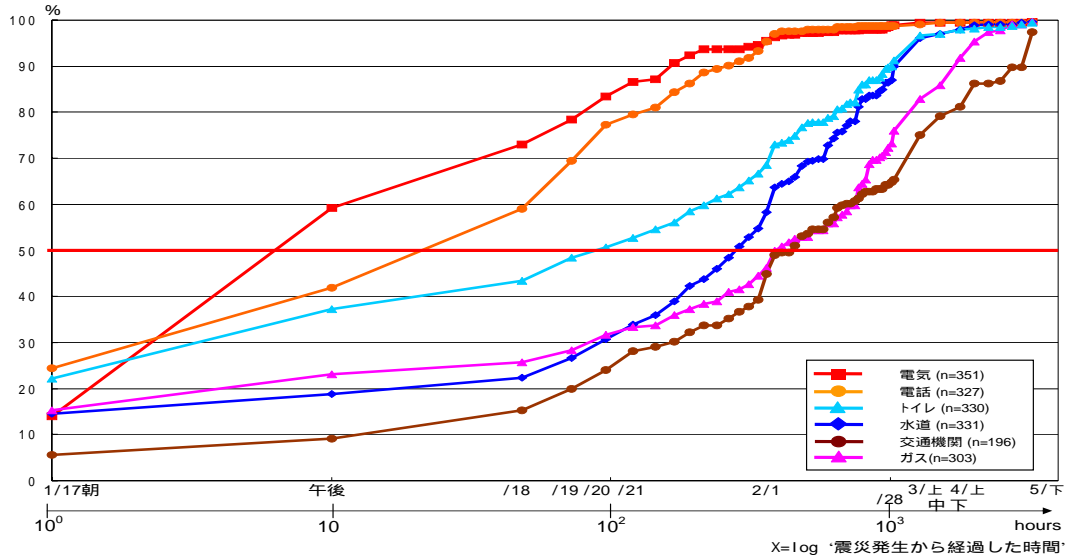


図4：ライフラインがどのように復旧していったか(震度6弱)

震度6強になると(図5)、発災直後の被害率は震度6弱と大きな違いはないものの、各ライフラインの回復時期が遅くなった。使用可能率が50%を超えた時期をみると、電気・電話が震災当日中で変わらないものの、トイレ・交通機関・水道は震災後2週間以降、ガスは震災後1ヶ月以降であった。

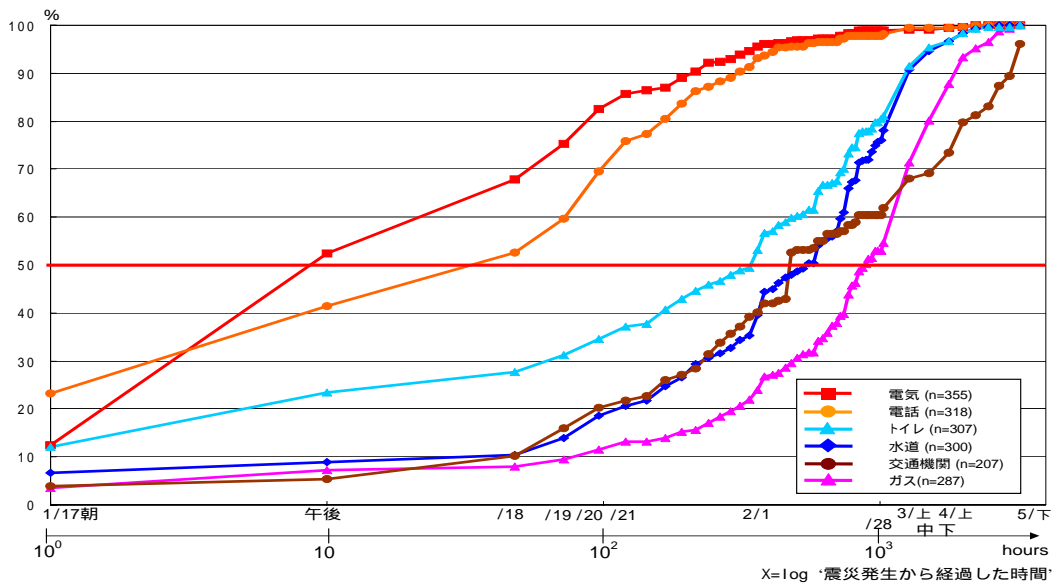


図5：ライフラインがどのように復旧していったか(震度6強)

震度7は(図6)、被害率・回復時期ともに他の震度と大きく異なった様相を呈していた。発災直後の被害率はどのライフラインも9割を超え、電話が9割、電気・トイレ・水道・ガス・交通機関については95%以上であった。回復時期を見ても、使用可能率が50%を超えたのが、電気・電話が震災後2-4日間、トイレ・水道・交通機関が震災後2週間~1ヶ月、ガスが震災後1ヶ月半以降であった。また、使用可能率が50%を超えたあとの回復過程も遅く、電気・電話を例にとると、震災後1ヶ月を過ぎても全体の1割~2割の人は不便・不都合があると回答していた。

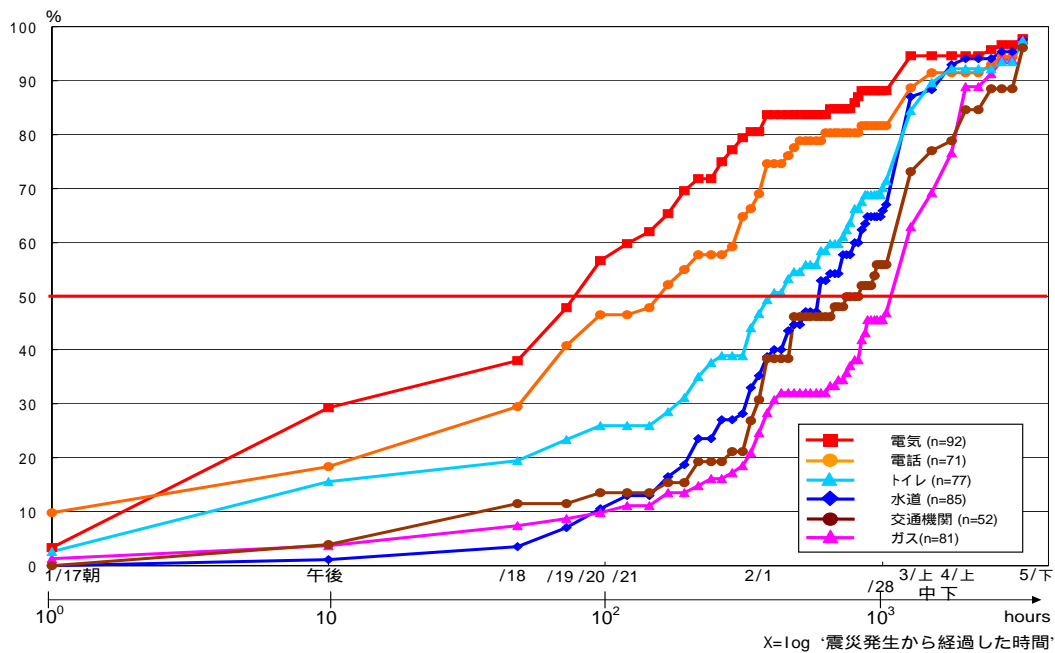


図6：ライフラインがどのように復旧していったか(震度7)

上記をまとめると、ライフラインの被害率や回復過程は、震度によって様相が異なることが明らかになった。

ライフラインの復旧時期の遅かった地域の被災者は、家屋被害程度が軽微なものであっても、長期にわたってライフラインが利用できないために、満足な日常生活を送ることができなかったことが改めて明らかになった。

3. まちの再建

1) まちの復興イメージ(問33A、B)

まちの復興状況に対して、市民一人ひとりがどのようなイメージを持っているかを調べるために、「まちの復旧・復興状況」「地域の夜の明るさ」について、2001年調査に引き続き2003年調査でも同様の項目をたずねた。

具体的には、「あなたの現在住んでいるまちでの震災後の状況についてお聞きします。それぞれの質問で、あなたの印象にあてはまるもの1つをつけてください」という質問をして、「まちの復旧・復興状況」に関しては「かなり速い かなり遅い」までの5段階の選択肢を与えた。(問33A)「地域の夜の明るさ」に関しては「震災前より明るくなった、震災前の状態に戻った、震災前より暗くなった、震災の影響はなかった」の4選択肢で回答を求めた。(問33B)

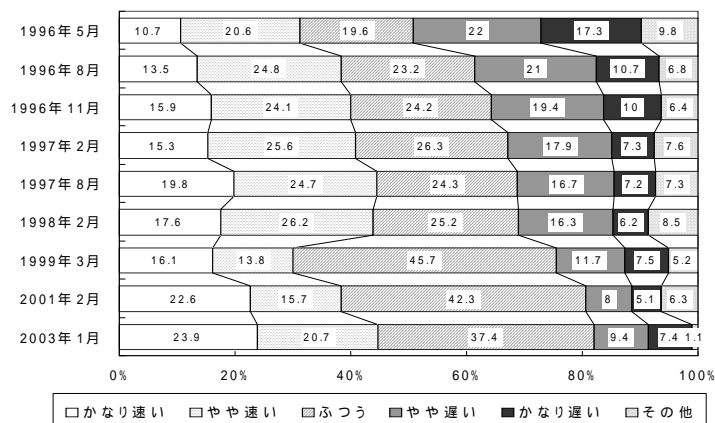
まちの復興速度感

・時間経過とともにまちの復興速度が「速い」と感じている人の割合が増えている。

まちの復興速度をどのように感じているかについて示した。(図1)

図1は、左から順に「かなり速い」「やや速い」「ふつう」「やや遅い」「かなり遅い」「その他」であるが、「かなり速い」から「ふつう」までを合算すると、時間経過とともに、復興速度を「速い」と感じる人の割合は漸増していることがわかる。この結果から、地域におけるまちの復興が着実に進んでいる様子が伺われる。

図1 まちの復興速度感



(注1) 今回調査と同様の項目を質問した神戸市の「市政アドバイザー復興定期便」(第1回:1996年5月、第2回:1996年8月、第3回:1996年11月、第4回:1997年2月、第5回:1997年8月、第6回:1998年2月)及び「震災後の居住地の変化と暮らしの実情に関する調査」((財)阪神・淡路大震災記念協会(1999年3月))の結果もあわせて分析の参考とした(これらの調査とは、調査対象者が異なっており、一概に論じることはできないが、全体の傾向を考察するための参考とした。)

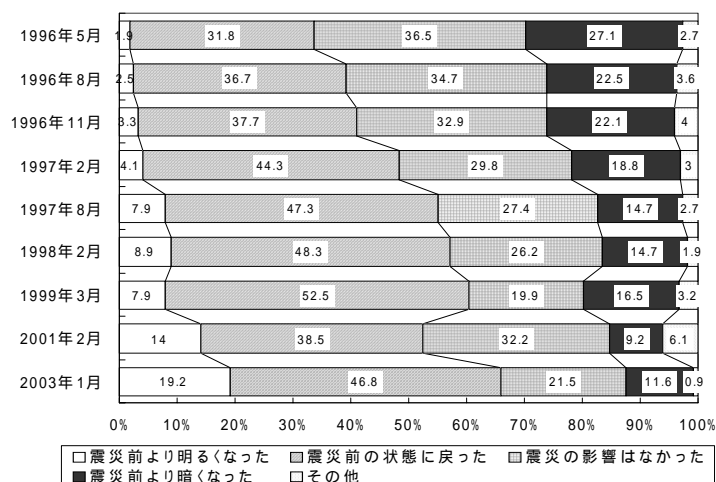
夜の明るさ

・時間の経過とともに、「震災前より明るくなった」という人の割合が増えている。

地域の夜の明るさをどのように感じているかについて、図2に示した。図は、左から順に「震災前より明るくなった」「震災前の状態に戻った」「震災の影響はなかった」「震災前より暗くなった」であるが、時間経過とともに、震災前より明るくなったととらえる人が漸増していることがわかる。

「震災前より暗くなった」とする人の割合は、震災直後の1996年では、全体の27%であったが、2003年調査時点では11%まで減った。(注2)注1と同様。

図2 夜の明るさ



の結果から明らかなように、被災地の全体傾向としては、まちの復旧・復興は順調に進んでおり、まちの様子を震災前より明るくなった、震災前に戻ったとする人の割合は、1996年以降漸増していることがわかった。

地域別の復興イメージ

- ・「まちの復興が遅れている」との回答が全体傾向より多いのは、長田区、兵庫区、淡路島、中央区、須磨区、芦屋市、灘区である。
- ・「震災前より暗くなった」との回答が全体傾向より多いのは、長田区と淡路島である。

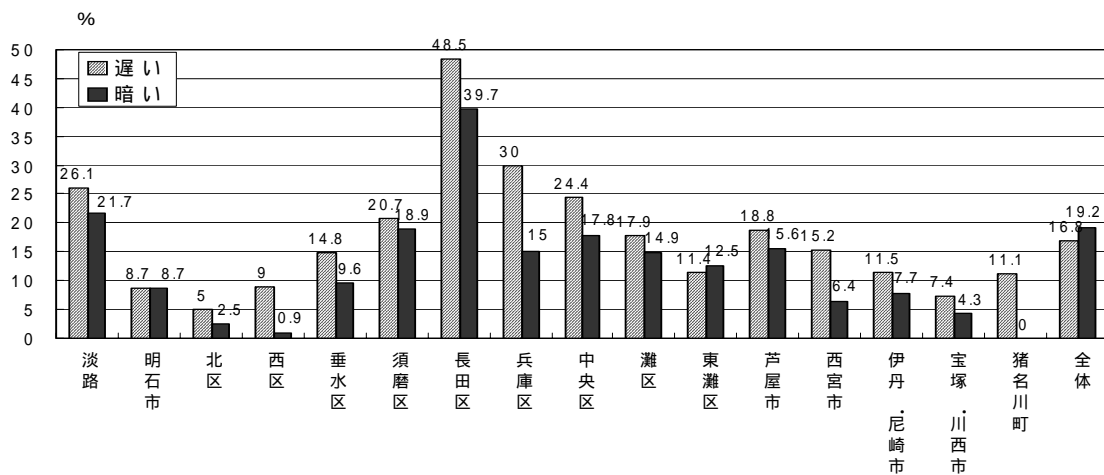
地域によって、まちの復興イメージに差異があるかどうか注目した。

図3は、地域毎の「復興が遅れている」(= 「やや遅い」 + 「かなり遅い」) と回答した人の割合及び「震災前より暗くなった」と回答した人の割合を示したものである。

「復興が遅れている」との回答が、全体傾向(16.8%)より多いのは、長田区(48.5%)、兵庫区(30.0%)、淡路島(26.1%)、中央区(24.4%)、須磨区(20.7%)、芦屋市(18.8%)、灘区(17.9%)、「震災前より暗くなった」との回答が、全体傾向(19.2%)より多いのは、長田区(39.7%)と淡路島(21.7%)であった。

特に、長田区は、外観的な復興イメージについての停滞感が顕著であることがわかった。

図3 地域別の復興停滞感



2) まちへの愛着 (問43)

まちへの愛着を測定する項目は、2001年調査の質問項目を原則として踏まえ、「まちなみ」「歴史」「人の営み」の3つの側面から測定した。

「まちなみ」については、「豊かな緑」「愛着のある公園」「あなたが好きだと思う街並み」の3項目から測定した。

「歴史」については「震災を後世に伝えるもの」「歴史を感じさせる建物や言い伝え」「他のまちとは違う独自の雰囲気」の3項目から測定した。

「人の営み」については、「みんなが気軽に集まれる場所」「自治会や市民活動を行っているグループ」「地域の行事(祭り、運動会など)」「立ち話ができそうな道ばた・路地」の4項目で測定した。

これらの項目に対して「ある・ない・知らない」という回答選択肢によって、「まちへの愛着」の度合いを測定した(表1)。

さらに、「ある」に3点、「ない」に2点、「知らない」に1点を与え、回帰による方法で因子得点を計算した。

なお、これらの項目に対し「ある・ない」と反応することは、自分の住むまちに関心を払う積極的な態度であり「まちへの愛着」の現れとしてとらえ、逆に「知らない」という反応は、まちへの関心がない態度として扱うこととした。

表1 まちへの愛着因子分析結果

	人の営み 因子	歴史 因子	まちなみ 因子	共通性
自治会や市民活動グループ	0.765	0.143	0.007	0.475
地域の行事(祭り・運動会など)	0.758	0.129	0.061	0.508
立ち話ができそうな道ばた・路地	0.580	0.065	0.243	0.565
みんなが気軽に集まれる場所	0.573	0.112	0.354	0.466
歴史を感じさせる建物や言い伝え	0.097	0.750	0.029	0.594
震災を後世に伝える「もの」	0.041	0.724	0.079	0.400
ほかのまちとは違う独自の雰囲気	0.118	0.523	0.388	0.606
お地蔵さん・小さな祠	0.296	0.488	-0.097	0.438
好きだと思ふ街並み	0.011	0.328	0.677	0.531
豊かな緑	0.104	-0.092	0.675	0.573
愛着のある公園	0.267	0.015	0.661	0.335
固有値	15.502			
寄与率(%)	49.935			

地域別の「まちへの愛着」

- ・まちへの愛着の3側面とも全体平均より高い値を示したのは、灘区、須磨区、宝塚・川西市、猪名川町である。
- ・まちへの愛着の3側面とも全体平均より低い値を示したのは、長田区である。

因子得点の地域別の平均値を計算し、グラフ表現の便宜上、各値を100倍して傾向をわかりやすく示した。(図4)

3因子の平均値が3つとも正の値を示した(まちへの愛着が全体平均より高い値だった)のは、灘区、須磨区、宝塚・川西市、猪名川町であった。

逆に、3つとも負の値を示したのは長田区だけだった。

外観的復興イメージの停滞感が他に比べて強かった長田区では、「まちへの愛着」感においても相対的に低い傾向を示している。

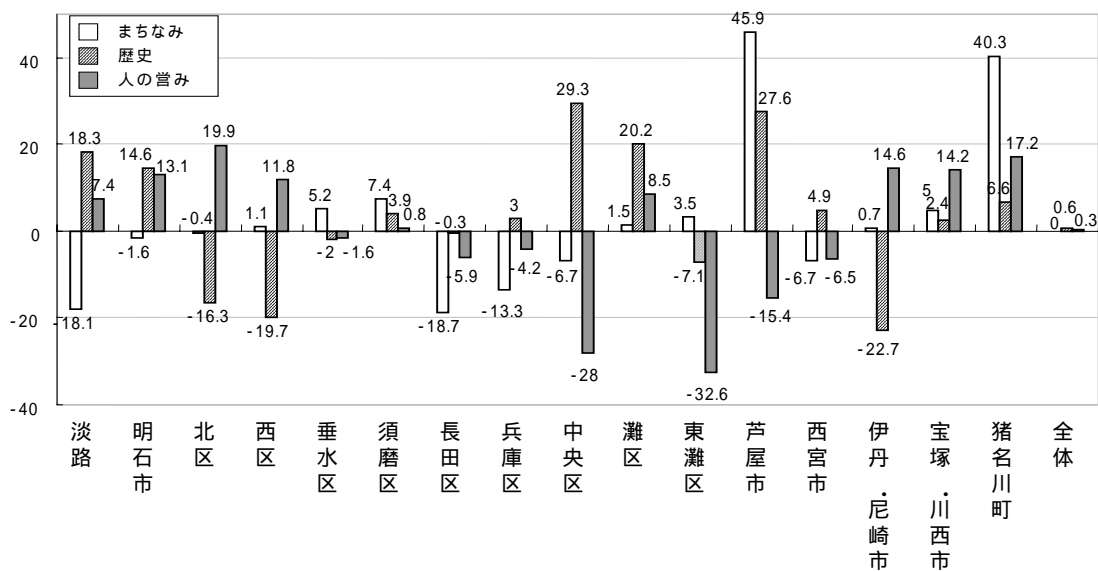


図4：まちへの愛着3側面の地域別平均値プロット

現住所での居住年数と「まちへの愛着」

- ・現住所への居住年数の長い人ほど、まちへの愛着は強い。

まちへの愛着の強弱は、現在地への居住年数の長短と明確な関係があると予想される。

震災前から現在地に居住している人と、震災後に現在地に移転して居住している居住期間の短い人とを比較すると、現在地に長く住んでいる人の方が、まちへの愛着感が強い。(表2)

表2 居住年数(2分)別にみたまちへの愛着3因子の平均値

	現在地の居住年数	N	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差
人の営み	8年以下	255	-.244	.913	.057
	9年以上	818	.081	.734	.026
まちなみ	8年以下	255	-.133	.792	.050
	9年以上	818	.040	.706	.025
歴史	8年以下	255	-.126	.815	.051
	9年以上	818	.045	.706	.025

(参考)

長田区についてみると(表3)、居住年数分布では、他の地域と大きな差はみられなかった。
(現在地での「居住年数8年以内」は、全体が24.9%(N=1187)、長田区が20.9%)

長田区のまちへの愛着感が比較的低いのは、居住年数よりむしろ長田区の空間的性格との関係が考えられる。

まちなみ要因として用いられたアイテムは、「豊かな緑」「愛着のある公園」「好きだと思いう街並み」であるため、都市空間に、緑や公園が少なく、街並みが未整備な地域であれば、居住年数に関わらず「ない」と答えることが予想される。

実際に、長田区の回答者については、この3項目が「ない」と答える比率が全体に比べて高かった。

表3 居住年数別にみたまちへの愛着3因子(長田区)

	現在地の居住年数	N	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差
人の営み	8年以下	10	-.028	.881	.278
	9年以上	47	-.077	.819	.119
まちなみ	8年以下	10	.237	.546	.173
	9年以上	47	-.263	.737	.107
歴史	8年以下	10	-.463	1.032	.326
	9年以上	47	.095	.838	.122

2001年調査との比較

- ・「まちなみ」については、兵庫区・長田区・芦屋市で改善がみられた。
- ・「歴史」については、灘区で改善がみられた。
- ・「人の営み」については、灘区・兵庫区・長田区で改善がみられた。

2001年調査・2003年調査における地域別の相対的な順位を見るために、3側面毎に、両調査の値を市町別に示した。(図5)(図6)(図7)

2001年調査と2003年調査の間で大きな順位の変動がある地域では、この2年間に地域における何らかの新たな取り組みがあったことがうかがわれる。

「まちなみ」については、兵庫区・長田区・芦屋市で改善が見られた。

「歴史」については、灘区で改善が見られた。

「人の営み」については、灘区・兵庫区・長田区で改善が見られた。

(猪名川町についても改善傾向が見られるが、調査回答者の数が少ないため、全体傾向を表すとは判断しなかった。)

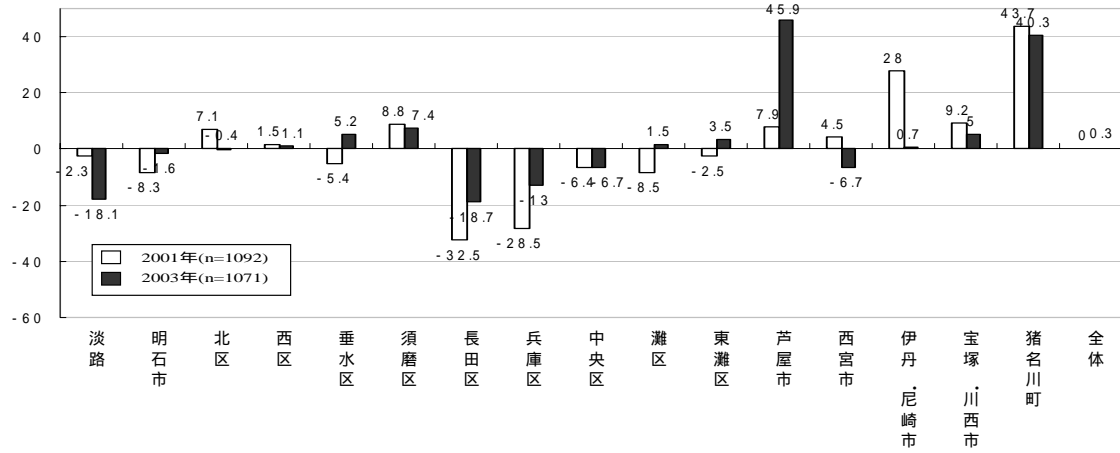


図5 まちなみ

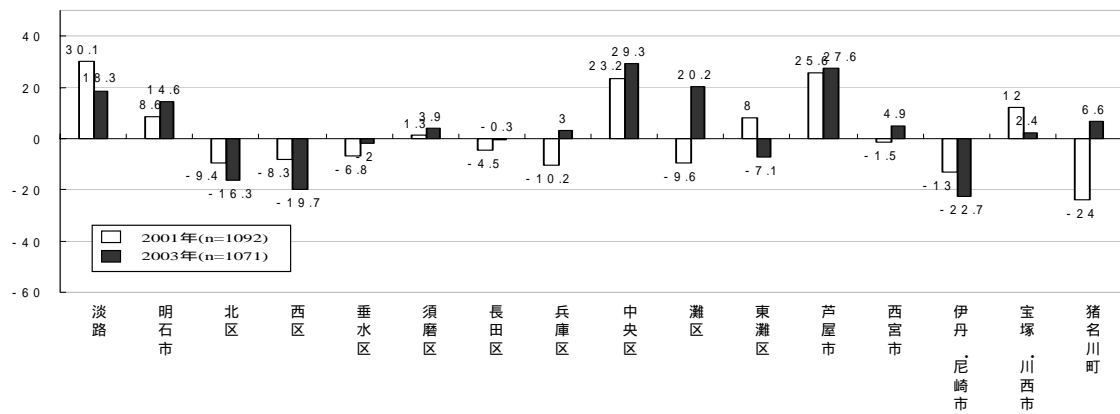


図6 歴史

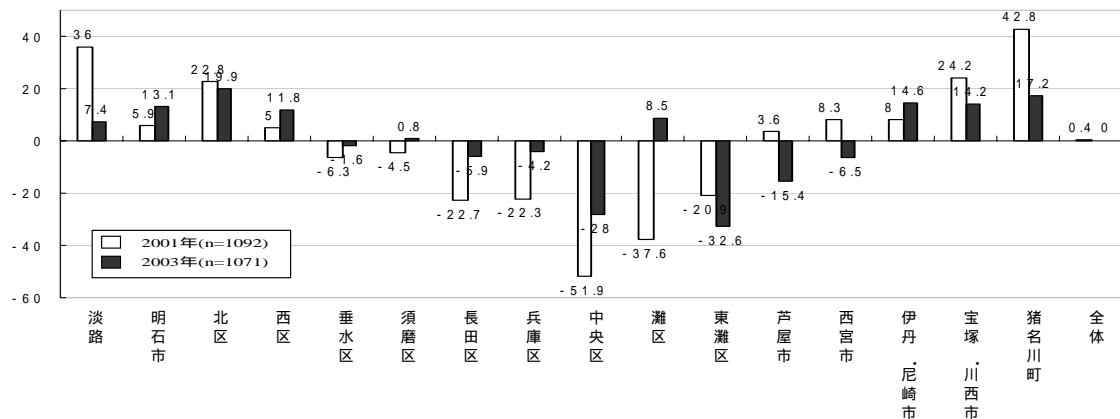


図7 人の営み

第2章 経済の再建

1. 暮らしむきの変化（家計簿調査）

震災が世帯単位の暮らしむきに及ぼした影響を見るために、家計簿調査を実施した。

具体的には、市井に出回っている家計簿の形式を採用し、「家計のやりくりには、震災後どのような変化がありましたか。家計簿を思いうかべて、各項目についてそれぞれあてはまるところにをつけてください。」と質問し、収入、支出、預貯金に関して「増えた、変わらない、減った」の3選択肢で回答を求めた。（問22、図1）

また、支出に関しては、さらに細かく「食費、外食費、住居・家具費、光熱費、日用雑貨費、衣服費、文化・教育費、交際費、レジャー費、交通費、医療費、保険料、自動車費」の13費目に細分し、同じく3選択肢で回答を求めた。

*自動車費に関しては、全回答者が自動車を所有するわけではないので、全体の分析からは除いた。

図1： 暮らしむきに関する質問項目

問、家計のやりくりには、震災後、どのような変化がありましたか。現在の家計簿を思い浮かべて、各項目について、それぞれあてはまるところにをつけてください。

震災前と比べて、お宅の家計簿では...	
1) 収入	(増えた・変わらない・減った)
2) 支出	(増えた・変わらない・減った)
3) 食費	(増えた・変わらない・減った)
4) 外食費	(増えた・変わらない・減った)
5) 住居・家具費	(増えた・変わらない・減った)
6) 光熱費	(増えた・変わらない・減った)
7) 日用雑貨	(増えた・変わらない・減った)
8) 衣服費	(増えた・変わらない・減った)
9) 文化・教育費	(増えた・変わらない・減った)
10) 交際費(冠婚葬祭費を含む)	(増えた・変わらない・減った)
11) レジャー費	(増えた・変わらない・減った)
12) 交通費	(増えた・変わらない・減った)
13) 医療費	(増えた・変わらない・減った)
14) 保険料	(増えた・変わらない・減った)
15) 自動車費(ある方のみ)	(増えた・変わらない・減った)
16) 預貯金	(増えた・変わらない・減った)



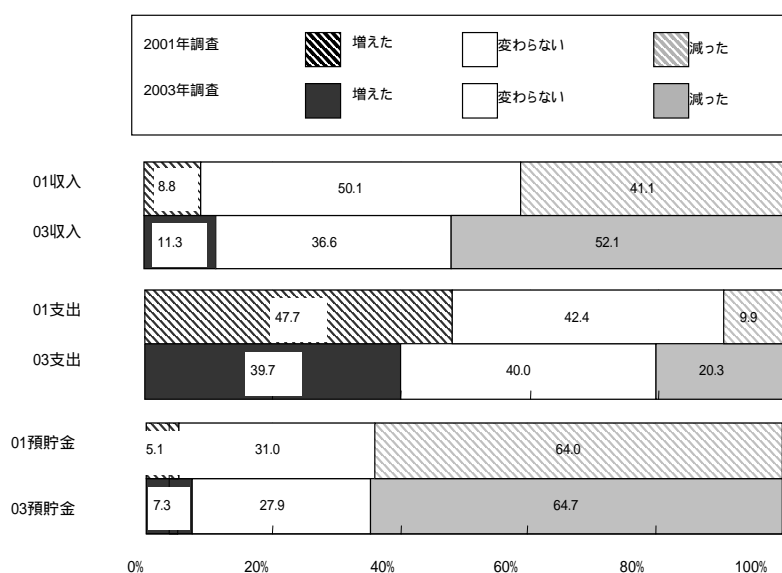
全体傾向

・全体傾向をみると、2001年調査・2003年調査とも、収入が減った分を、支出を切り詰めて、家計のバランスをとっていた。

くらしむきの全体傾向については、2001年調査に比べ、収入が減った、支出も減ったという人が多かった。預貯金については、ほとんどその傾向に差はなかった。

収入が減った分を、預貯金の取り崩しだけでなく、支出を切り詰めて、家計のバランスをとっているという状況がうかがえる。(図2)

図2：2001・2003年調査 くらしむきの全体傾向の比較



くらしむきと家屋被害程度との関連性

ア．家屋被害程度と収入・支出・預貯金との関連性

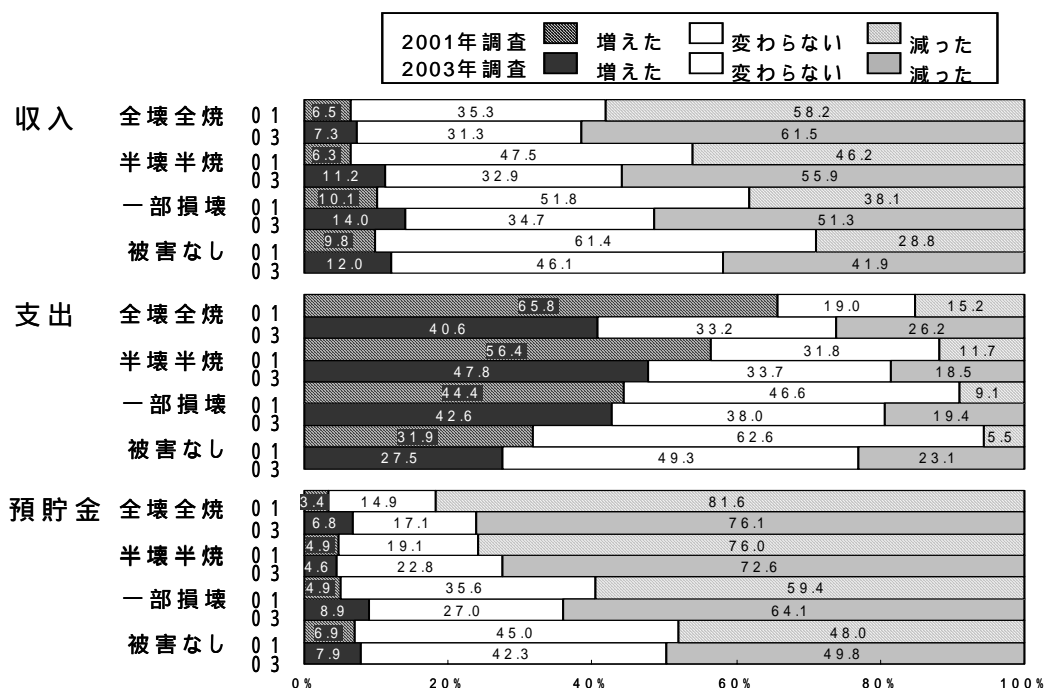
・家屋被害程度の高い人ほど、収入・預貯金を減らした人が多かったが、その傾向は2001年調査に比べて小さかった。

家屋被害程度によって、被災者のくらしむきにどのような違いがあるのかを分析した。(図3)

2001年調査においては、家屋被害程度の高い人ほど、収入が減り、支出が増え、預貯金を減らした人が多かった。

2003年調査においては、依然として、家屋被害程度の高い人ほど、収入・預貯金を減らした人が多かったが、2001年に比べると、その傾向は小さくなっていった。支出と家屋被害程度の関連性については、もはや特別な傾向は見られなかった。

図3： 2001・2003年調査
くらしむきの全体傾向の比較（家屋被害程度別）



イ．2003年調査における支出細目と家屋被害程度との関連性

・家屋被害程度別に、支出細目の支出パターンを見ると、2001年調査と同様に、「ふえる一方」型、「やりくり」型、「けずる一方」型の3パターンに分類された。

2003年調査においても、家屋被害程度別の支出細目の回答傾向に対して、クラスター分析をおこなったところ、3つのパターンが明らかとなった。

それぞれのパターンについて、解釈を行ない、各パターンを2001年調査と同様に、「ふえる一方」型、「やりくり」型、「けずる一方」型と名づけた。（図4）

a) 「ふえる一方」型

「ふえる一方」型は、「住居・家具費」「医療費」であった。

震災から8年経過した2003年調査時点においても、「住居・家具費」「医療費」については、家屋被害程度が大きかった人ほど、支出が増えた人が多かった。

たとえ、くらしむきに変化があったとしても、個人裁量のやりくりでは減らすことのできないのが、これらの支出細目の特徴といえる。

b)「やりくり」型

「やりくり」型は、2001年調査と同様、「やりくりをしても支出が増えた」パターン、反対に「やりくりをして支出を減らした」パターン、「支出の増減がほぼ拮抗した」パターンの3つに分類できた。

やりくりをしても増えた経費は、「保険料」「光熱費」であった。反対に減らした経費は、「交通費」「食費」「日用雑貨」「文化・教育費」「衣服費」であった。増減がほぼ拮抗した経費は「交際費」であった。

くらしむきを維持するために、各世帯の裁量でやりくりしているのがこれらの細目であるが、支出を減らす方向でやりくりしている人が多いことが明らかとなった。

c)「けずる一方」型

「けずる一方」型の経費は、2001年調査と同様、「外食費」「レジャー費」であった。多くの人が、生活のうまい部分であるこれらの支出を減らし、増やした人は顕著に少なかった。

(参考) 2001年調査における支出細目と家屋被害程度との関連性

家屋被害程度別に、支出細目の支出パターンを見ると、「ふえる一方」型、「やりくり」型、「けずる一方」型の3パターンに分類された。

家屋被害程度別の支出細目の回答に対して、クラスター分析をおこなったところ、3つのパターンが明らかとなった。

それぞれのパターンについて、解釈を行ない、各パターンを「ふえる一方」型、「やりくり」型、「けずる一方」型と名づけた。

さらに、12支出細目ごとに、家屋被害程度別に作成したグラフをクラスターごとに配置した図(図4)を作成し、回答傾向の解釈を行った。

a)「ふえる一方」型

被害程度が大きいほど支出が「ふえる一方」型の経費は、「住居・家具費」「医療費」「保険料」であった。これらは、住宅の損失に伴って修理・改築の必要性が高まった「住居・家具費」をはじめ、生活に安心を与えるための経費であり、収入が減って生活が苦しくなっても、個人裁量のやりくりでは、減らすことができなかつた経費といえる。

b)「やりくり」型

「やりくり」型は、さらに「やりくりをしても支出が増えた」パターン、反対に「やりくりをして支出を減らした」パターン、「支出の増減がほぼ拮抗した」パターンの3つに分類できた。

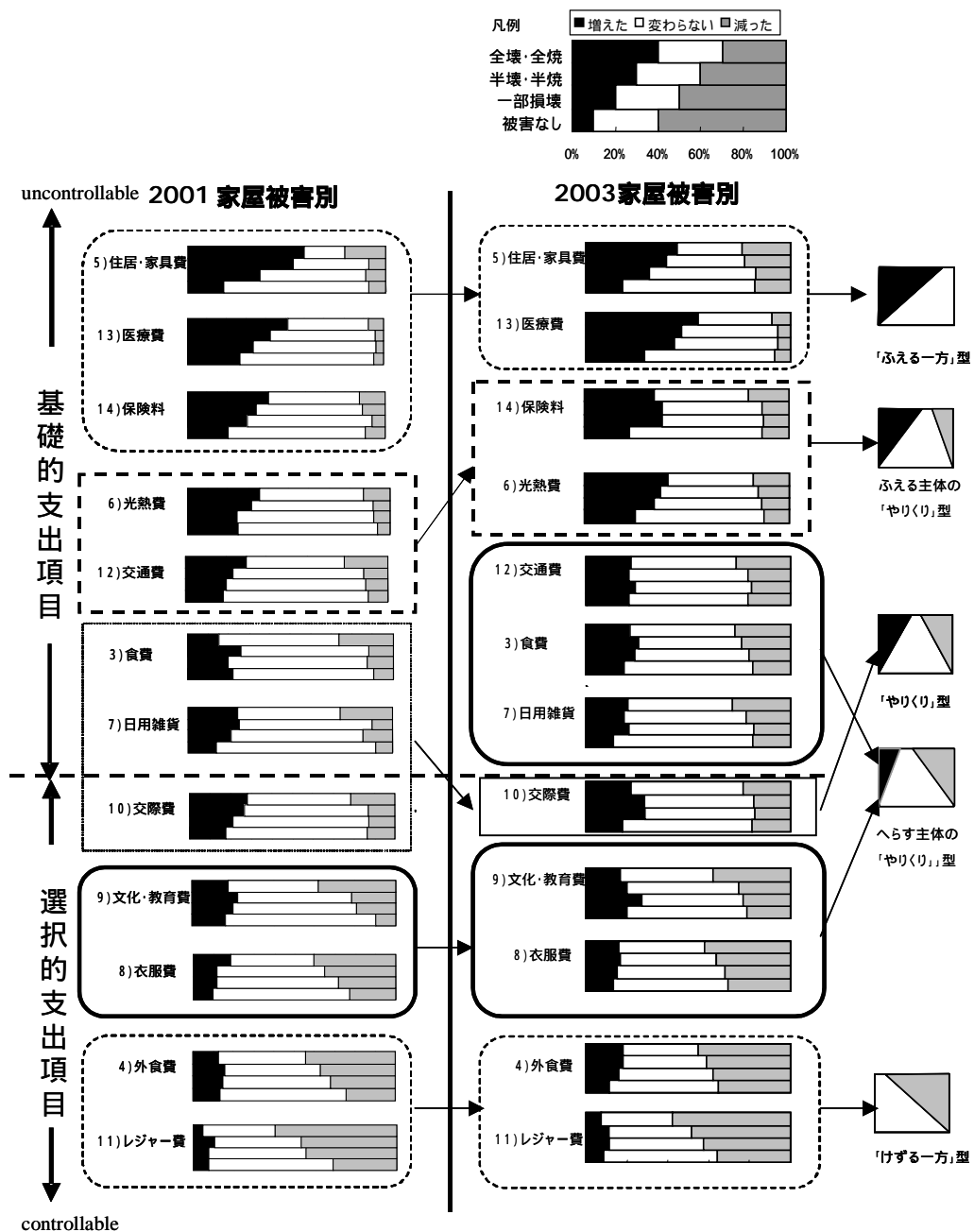
やりくりをしても増えた経費は、「光熱費」「交通費」であった。反対に減らした経費は「文化・教育費」「衣服費」であった。両者がほぼ拮抗した経費は「食費」「日用雑貨」「交際費」であった。

c) 「けずる一方」型

被害程度が大きいほど支出を減らした「けずる一方」型の経費は、「外食費」「レジャー費」であった。

これらの経費については、収入が減ったとき、個々人の生活のなかで、切り詰めることが容易な経費である一方で、生活のうらおいを保つために大切な行動に関するものである。これを減らした人が多いという事実から、家屋被害の大きさによって、被災者の生活から余裕が奪われ、震災からの復興を実感するまでには至っていない状況がうかがわれた。

図4：2001・2003年調査 家屋被害程度別支出パターン(支出細目別)



ウ．2001年調査と2003年調査の比較

- ・家屋被害程度別の支出パターンの全体傾向には、大きな差はなかった。
- ・4つの支出細目（保険料・交通費・食費・日用雑貨費）については、2001年調査時点に比べて、支出を減らした人が多かった。

2001年調査・2003年調査における支出細目のパターンを比較すると（表1）、2001年から2年経過しても、基本的な支出のトレンドに変化はなかった。しかし、次の4細目については、支出パターンが「へらす」方向に変化した。

「ふえる一方型」 「ふえる主体のやりくり型」：「保険料」

「ふえる主体のやりくり型」 「へらす主体のやりくり型」：「交通費」

「やりくり型」 「へらす主体のやりくり型」：「食費」「日用雑貨費」

これらの支出細目については、2001年調査時点に比べて、「減った」とした人が多かった。

これらのことから、生活に密着したこれらの支出をより切り詰めることで、くらしむきのバランスをとろうとしていることが明らかになった。景気低迷等によって、相変わらず人々のくらしむきは厳しく、個人消費が落ち込んでいることが伺われる。

表1：2001・2003年調査 家屋被害程度別支出パターン（支出細目別）の結果の比較

	支出細目	2001年調査支出パターン	2003年調査支出パターン
1	住居・家具費	ふえる一方型	ふえる一方型
2	医療費	ふえる一方型	ふえる一方型
3	保険料	ふえる一方型	ふえる主体のやりくり型
4	光熱費	ふえる主体のやりくり型	ふえる主体のやりくり型
5	交通費	ふえる主体のやりくり型	へらす主体のやりくり型
6	食費	やりくり型	へらす主体のやりくり型
7	日用雑貨	やりくり型	へらす主体のやりくり型
8	交際費	やりくり型	やりくり型
9	文化・教育費	へらす主体のやりくり型	へらす主体のやりくり型
10	衣服費	へらす主体のやりくり型	へらす主体のやりくり型
11	外食費	けずる一方型	けずる一方型
12	レジャー費	けずる一方型	けずる一方型

くらしむきと世帯年収との関連性（問 22 付問）

ア．世帯年収と収入・支出・預貯金との関連

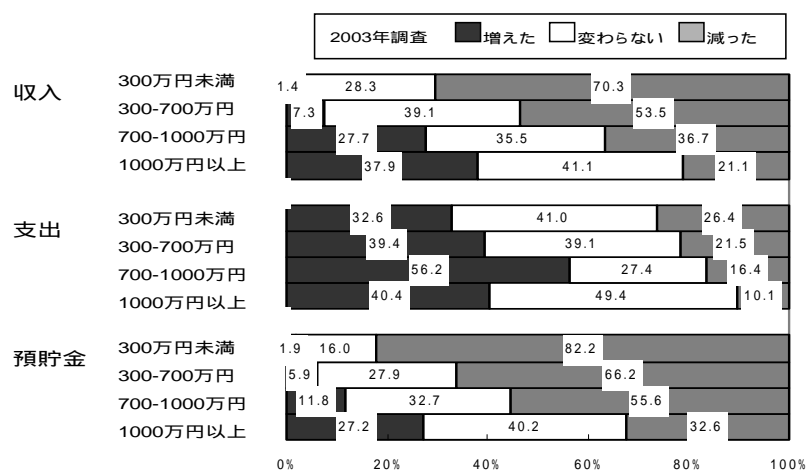
- ・2003年調査においては、収入・支出・預貯金の全体傾向を規定する最も大きな要因は「年収」であった。

2003年調査においては、2001年調査にはなかった「年収」についての質問項目を設けた。

くらしむきと世帯年収との関係を見ると、年収の額が大きくなればなるほど、収入・預貯金が増えた人が多かった。支出については、年収1000万円までは、年収の額が大きくなればなるほど増えた人が多かった。（図5）

前節で明らかになったように、くらしむきと家屋被害程度との関係が小さくなっていることをあわせて考えると、震災後8年が経過した現在における被災者のくらしむきを規定する最も大きな要因は、家屋被害程度ではなく、世帯ごとの年収であるといえる。

図5：2003年調査 くらしむきの全体傾向（年収別）



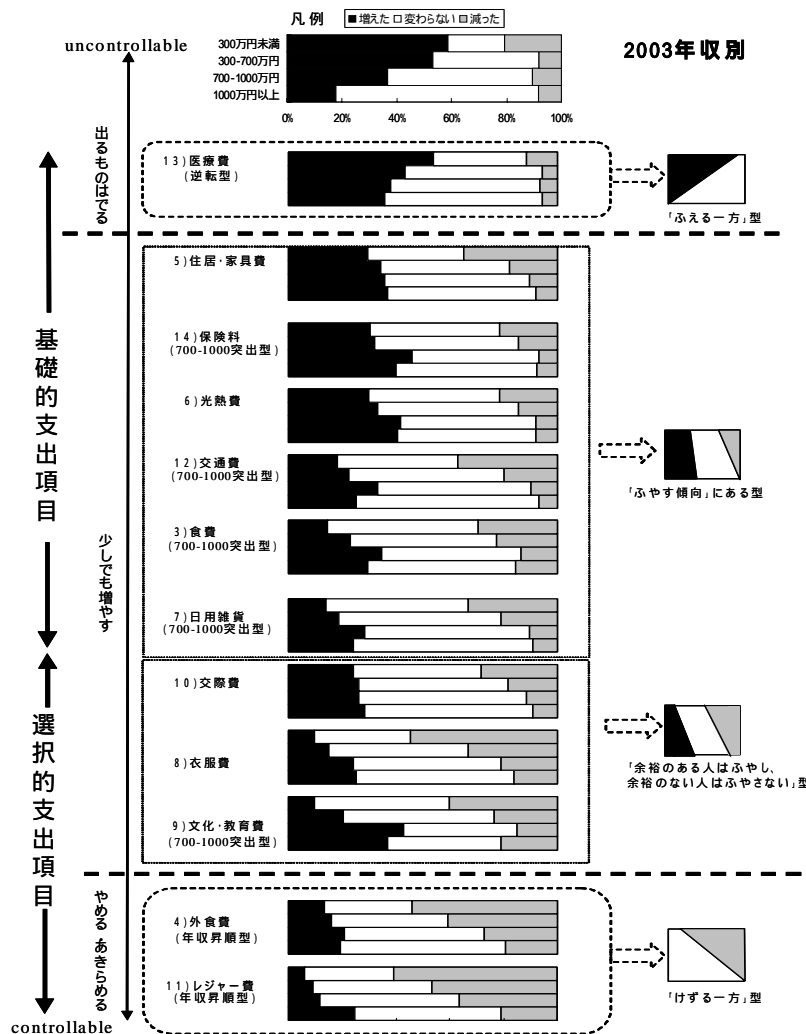
イ．2003年調査における支出細目と世帯年収との関連性

- ・世帯年収別に、支出細目のパターンを見ると、「ふえる一方」型、「増やす傾向」にある型、「余裕のある人は増やし、余裕のない人は増やさない」型、「けずる一方」型の4パターンに分類された。

世帯年収別の支出細目の回答傾向に対して、クラスター分析をおこなったところ、4つのパターンが明らかとなった。

それぞれのパターンについて解釈を行ない、各パターンを「ふえる一方」型、「増やす傾向」にある型、「余裕のある人は増やし、余裕のない人は増やさない」型、「けずる一方」型と名づけた。(図6)

図6：2003調査年収別支出パターン
(支出細目別)



- a) 「ふえる一方」型
 低所得者ほど支出が増えた経費は「医療費」であった。
 たとえ年収が少なくとも、個人の裁量で支出の増減がコントロールできないものであることが特徴である。
- b) 「ふやす傾向」にある型
 高所得者ほど支出を「ふやす傾向」にある経費は、「住宅・家具費」「保険料」「光熱費」「交通費」「食費」であった。
 これらの経費は、年収による支出の差がそれほど顕著ではなく、年収にかわりなく、全体的に支出を増やした人が多かった。これらは、医療費以外の生活に最低限必要な細目であることから、切りつめようとしても難しい状況であったことが示唆された。
- c) 「余裕のある人は増、余裕のない人は減」型
 生活に余裕のある高所得者ほど支出を増やし、余裕のない低所得者ほど支出を減らした経費は、「交際費」「衣服費」「文化・教育費」であった。
 具体的には、年収 700 万円以上の生活に余裕がある人は、支出を増やした人が多く、700 万円以下の人は減らした人が多かった。
 つまり生活に最低限必要ではないこれらの細目については、余裕のある人ほど支出をふやし、余裕のない人は減らしていることが明らかとなった。
- d) 「けずる一方」型
 年収が少ないほど厳しく節約した経費は、「外食費」「レジャー費」であった。
 低所得者ほど支出を減らした人が顕著に多く、余裕のない生活では、まっ先に削られる細目であることが明らかとなった。
 また、高所得者でも、支出を増やした人は、相対的に少なく、社会全体の厳しい経済状態を反映していると考えられる。

ウ．2003 年調査における世帯年収による支出内容の特徴

- ・「住居・家具費」「医療費」「保険料」「光熱費」「食費」「日用雑貨費」などの生活に密着した経費の支出が増えた人が多かった。

家計調査においては、消費支出を品目別に分類する際、「基礎的支出項目」と「選択的支出項目」の 2 つに分類して、支出動向を分析する手法が一般的である。

基礎的支出項目は、生活に最低限必要で、支出動向が好不況の影響を受けにくい項目である。選択的支出項目は、それ以外の項目であり、支出動向は好不況の影響を受けやすいとされる。

2003 年調査における 12 細目においては、基礎的支出項目が「住居・家具費」「医療費」「保険料」「光熱費」「食費」「日用雑貨費」の 7 項目、選択的支出項目が、「文化・教育費」「衣服費」「交際費」「外食費」「レジャー費」の 5 項目である。

基礎的支出項目、選択的支出項目に着目してみると、基礎的支出項目の 7 項目すべてが、「ふえる一方型」「ふやす傾向にある型」に分類され、これら生活に密着する支出が「増えた」と答えた人が多かった。

この結果は 2001 年調査の支出パターンの全体傾向を踏襲するものであり、本来、好不況の影響を受けることが少ないこれらの支出を増やしていることから、厳しいくらしむきがうかがわれる。

エ．回答者の年収における支出パターンの特徴

- ・支出が「増えた」に着目すると、「逆転型」「年収 700-1000 万円突出型」「年収昇順型」の 3 パターンに分類された。

2003 年調査における年収別支出細目の中で「増えた」と答えた人の分布に注目すると、3つのパターンに分類できた。

a)「逆転型」

年収の少ない人ほどその支出を増やしている項目は「医療費」であった。

これはライフステージと密接な関係があると考えられる。すなわち、比較的収入の少ない高齢者等（年金所得者等）が、医療費等を増やしていることなどが考えられ、この層への何らかの配慮が今後とも必要であることを示唆している。

b)「年収 700 - 1000 万円突出型」

「保険料」「交通費」「食費」「日用雑貨費」「文化・教育費」については、年収 1000 万円以上よりも年収 700 - 1000 万円の層の方が支出を増やした。これについても、ライフステージとの関連が見られ、支出が絶対的に多い「壮年層」がこれらの支出を増やしたことが考えられる。

c)「年収昇順型」

年収が多ければ多いほど支出を増やした項目は、「外食費」「レジャー費」であった。生活にあまり密着していない「外食費」「レジャー費」が、最も年収との関連性が高いことが明らかになった。

2 . 震災による仕事への影響

本節では、1)震災後の転職・転廃業とその理由、2)職業別でみた震災後の転職・転廃業、3)震災による職場への影響、4)震災後の年商 / 売り上げの変化とその理由について述べた。

「震災後の転職・転廃業とその理由」では、震災前と調査時点(2003年1月)を比較し、転職・転廃業の人がどのくらい存在し、その原因が震災によるものなのか否かを世代別に明らかにした。

「職業別でみた震災後の転職・転廃業」では、転職・転廃業の状況が職業によって違いがあるのかについて明らかにした。

「震災による職場への影響」では、震災によって職場が影響を受けたかどうか、被害総額がどの程度か、被害総額の年商に対する割合がどの程度かについて職業別に明らかにした。

「震災後の年商・売り上げの変化とその理由」では、震災後に年商・売り上げがどのように変化したのかについて、その理由もあわせて明らかにした。

1) 震災後の転職・転廃業とその理由(問25)

- ・震災が原因で転職・転廃業をした人は、全体の7.1%(退職・廃業4.5%、転職・転業2.6%)であるのに対して、震災以外が原因で転職・転廃業した人は全体の20.2%(退職・廃業14.6%、転職・転業5.6%)である。
- ・震災時に職についていた60代以上の約2割が、震災をきっかけに退職・廃業をしている。

震災後の転職・転廃業の状況

震災後の転職・転廃業の状況をみると(図1)、震災後も震災前と同じ仕事を続けている人が33.0%、震災後に何らかの原因で転職・転廃業をした人が27.3%、その他(仕事についていなかった等)が29.7%であった。

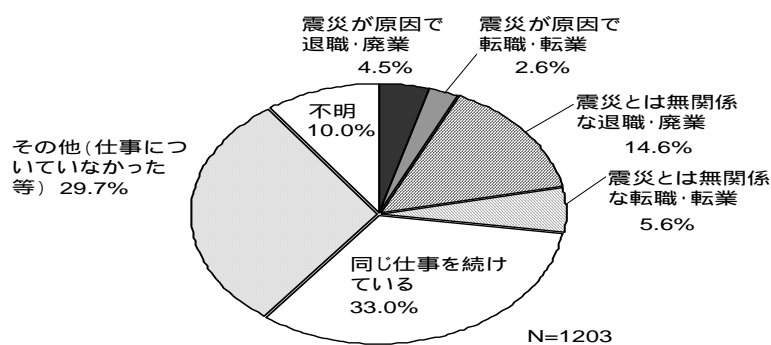


図1 : 震災前と現在を比較した転職状況

転職・転業をした人の内訳をみると、震災が原因で転職・転業をした人が7.1%(退職・廃業：4.5%、転職・転業：2.6%)、震災とは無関係な転職・転業をした人が20.2%(退職・廃業：14.6%、転職・転業：5.6%)であった。

世代別の状況

回答者の震災時の世代別にみると(図2)、どの世代においても震災が原因で転職・転業をした人が見られた(20・30才代が5.6%、40・50才代が8.6%、60才以上7.4%の人が転職・転業)。

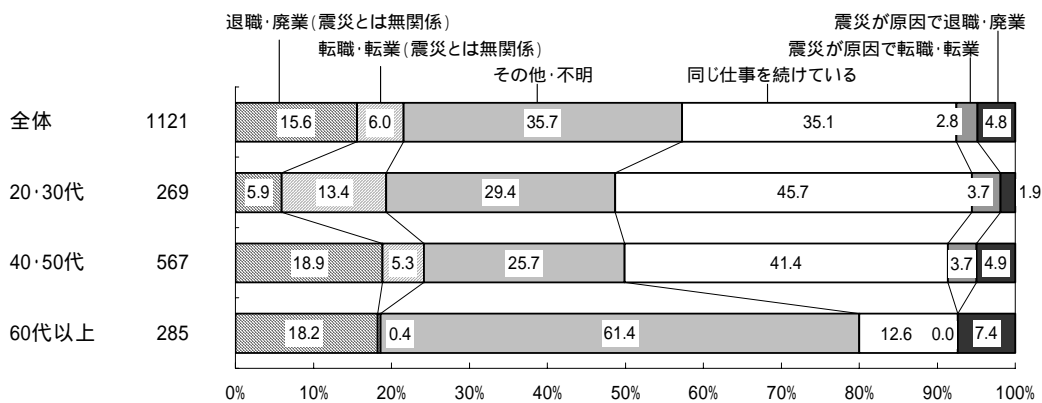


図2： 震災後の転職の状況(震災時世代別)

震災時に職についていた人の状況

震災時に職についていた人のみを100%として考えると(図3)、震災時60代以上の19.1%が「震災が原因で退職・廃業をした」と回答し、高齢という素因に震災という誘因が加わることによって、より多くの人が退職・廃業をした事実が明らかになった。

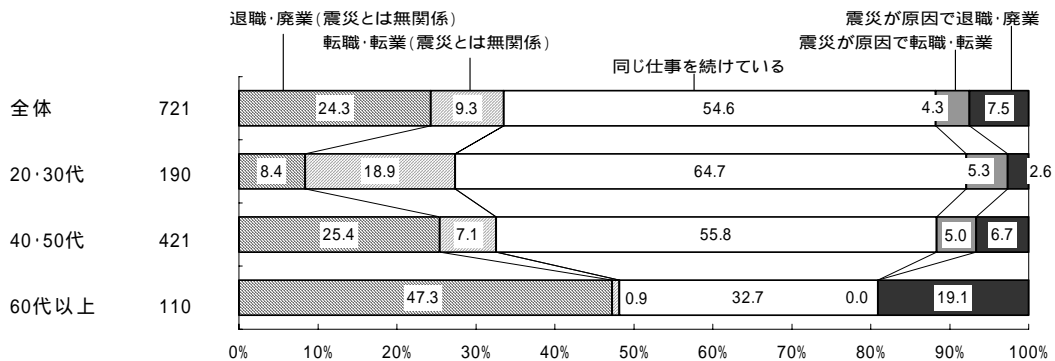


図3： 震災後の転職退職の状況（震災時世代別）
（震災時に職業についていた人）

2) 職業別でみた震災後の転職退職・転廃業（問24・25）

- ・サービス関連従事者と産業労働者は、震災と不況によって、転職退職を余儀なくされている。

震災が原因の転職退職・転廃業

震災時の職業別による転職退職・転廃業の状況をみると(図4)、震災が原因で転職退職した人の割合が大きかった業種は、サービス関連従事者(店員・外交員・その他のサービス業の従業員)(21.1%)、産業労働者(運輸・通信・製造・建設業などの現場従事者)(15.8%)、商工自営業(14.9%)であった(農林漁業(16.7%)はn=6のため参考値とした)。これらの業種は、被害が大きく、転職退職・転廃業に至ったと考えられる。

震災以外が原因の転職退職・転廃業

震災以外が原因で転職退職・転廃業をした人をみると、管理職(49.1%)、サービス関連従事者(38.2%)、事務・営業職(30.7%)、専門・技術職(26.1%)、産業労働者(25.7%)の順に割合が大きかった。定年退職をした人の割合が大きい「管理職」「専門・技術職」を除くと、他の業種である「サービス関連従事者」「事務・営業職」「専門・技術職」「産業労働者」は、震災後の不況の影響を強く受けていることが考えられる。

以上をまとめると、サービス関連従事者と産業労働者については、震災の影響も不況の影響も大きく受け、そのために転職退職を余儀なくされている状況が明らかになった。

また、商工自営業で転廃業した人は、震災の影響を強く受け、事務・営業職で転職退職した人は、不況の影響を強く受けていることがわかった。

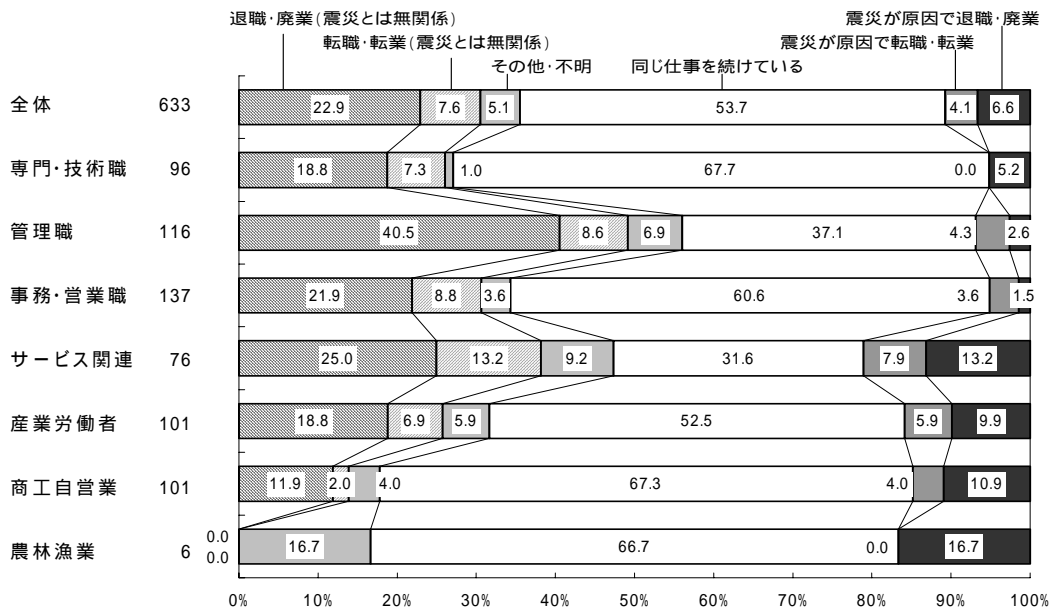


図4： 震災後の転退職の状況（職業別）

3) 震災による職場への影響（問26）

- ・商工自営業は、被害総額は小さいが、被害額の年商に対する割合が大きく、少しでも被害を受ければ、多大な影響につながり転廃業に至っている。

震災による職場への影響

震災による職場への影響をみると(図5)、どの業種も、70%前後の回答者が「震災時に勤めていた仕事場は、震災によって何らかの影響を受けた」と回答した。

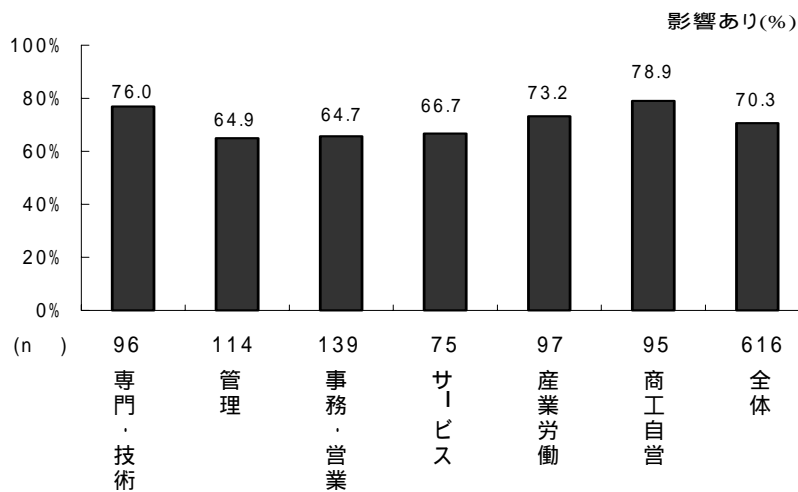


図5： 震災による職場への影響

職場の被害総額、職場被害総額の年商に対する割合を見ると、職業によって大きな違いがみられた。

被害総額

職場における被害総額をみると(図6)、産業労働者の39.3%、管理職の33.3%、サービス業の23.3%、事務・営業職の22.5%が、「職場は1億円以上の被害を受けた」と回答した。

一方、商工自営業は、「1億円以上の被害を受けた」のは1.4%で、ほぼ半数の47.9%の人が「100万円～1000万円の被害を受けた」と回答した。

被害総額の年商に対する割合

職場における被害総額が年商のどれくらいの割合にあたるかをみると(図7)、最も被害総額が小さかった商工自営業では、年商の100%以上被害を受けた人が23.3%、年商の30-100%被害を受けたと答えた人が27.4%と最も大きな影響を受けていたことがわかった。その他の職業でみると、産業労働者の職場では、年商の100%以上被害を受けたと答えた人が24.1%、年商の30-100%被害を受けたと答えた人が13.0%、サービス関連従事者の職場では、年商の100%以上被害を受けたと答えた人が17.9%、年商の30-100%被害を受けたと答えた人が15.4%であった。

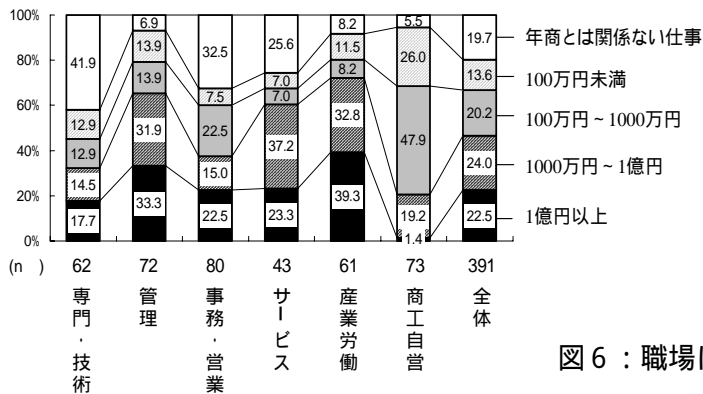


図6：職場における被害総額

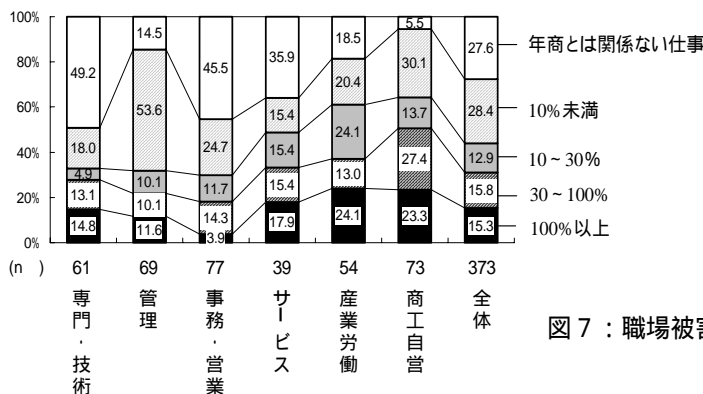


図7：職場被害総額の年商における割合

以上をまとめると、商工自営業においては、被害総額こそ少ないものの、被害総額の年商に対する割合は大きく、少しでも被害を受ければ多大な影響につながり、転業・廃業に至っていることが明らかになった。

また、産業労働者・サービス関連従事者の職場では、被害総額及び被害総額の年商に対する割合が大きく、従業員の転退職につながったことがわかった。

4) 震災後の年商 / 売り上げの変化とその理由 (問 27)

- ・商工自営業は、1997 年以降は、9 割が年商・売上を減らしており、どの職業よりも震災と不況の両方の影響を受け、厳しい経済状況におかれていた。
- ・年商・売上の増加理由は、1996 年までは、震災による需要増が 9 割であったが、1997 年以降は、営業努力の成果が 6 割、震災による需要増が 2 割であった。

震災前に比べ、年商・売上が、震災後どのように変化していったのかを質問した。

質問では、震災後を、「震災による影響が大きいと考えられる震災発生後の 2 年間 (1995 年～1996 年)」と「全国的な景気低迷に見舞われた震災 3 年後から調査時点 (1997 年～2003 年)」の 2 つの時期に分類し、それぞれについて「この期間において、あなたのお勤めになっている事務所・会社の年商・売上は、震災前と比べてどのような変化があったか」「またそのような年商・売上になった理由としてどのようなことが考えられるか」を尋ねた。(問 27)

全体傾向

年商・売上の変化の全体傾向をみると(図 8)、「1995～96 年」よりも「1997 年以降」の方が、売り上げが減少していることがわかった。

特に「1997 年以降」については、「年商が 3 割以上減少している」と回答した人が、1995～96 年よりも 8.4%多い 30.7%と、全体の 3 割を占めていることがわかった。

また「震災前より増加」「震災と同程度」は、両方あわせて 21.4%と、1995 年～96 年より 10.8%も減少していることがわかった。

職業別の状況

職業別にみると、商工自営業が、震災の影響、不況の影響を大きく受けて、厳しい経済状況の中におかれていることが明らかになった。

商工自営業は、「1995 年～96 年」では、年商の「3 割以上減少」が 37.8%、「1～3 割減少」が 34.1%と、減少の割合が最も大きい職業であった。さらに 1997 年以降になると、「年商の 3 割以上減少」が 65.9%、「年商の 1～3 割減少」が 20.7%と、あわせて 9 割近い人々が「年商が減少した」と回答していた。

また、産業労働者についても、会社の年商が減少したと回答した人が、1995 年～96 年に 51.2%(3 割以上減少 23.2%、1～3 割減少 28.0%)であったのが、1997 年以降では 68.0%(3 割以上減少 32.1%、1～3 割減少 35.9%)と増加しており、震災の影響に加え、不況の影響も大きく受けていることがわかった。

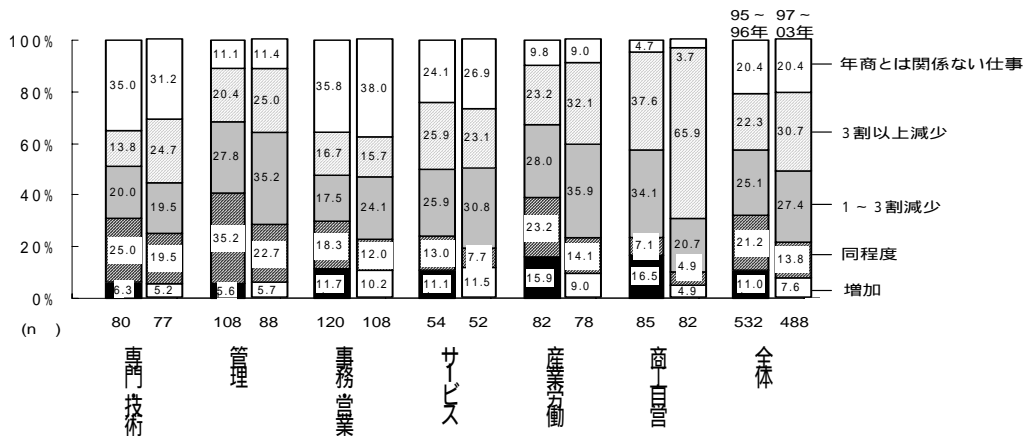


図8： 年商・売上げの変化

年商・売上げの変化の理由

各時期における年商・売上げの変化の理由をたずねたところ(図9)、「1995年～96年」においては、「日本全体の不況の影響を受けた(59.6%)」「商圏が変わった(45.1%)」「建物・設備が破壊された(34.5%)」が大きな理由としてあげられていたが、「1997年以降」になると、「日本全体の不況の影響を受けた」が全体の8割(81.4%)と大部分を占め、「商圏が変わった(37.5%)」が続いた。

年商・売上げの増加理由については、「1995年～96年」においては、「震災による需要増」が約9割(87.9%)を占めていたが、「1997年以降」になると、「震災による需要増」は2割程度(18.9%)となった。この時期に年商・売上げを伸ばしているのは、各企業等における「営業努力の成果(62.2%)」であり、震災特需等の要因は、震災後約2年でほとんどなくなっていたことが明らかになった。

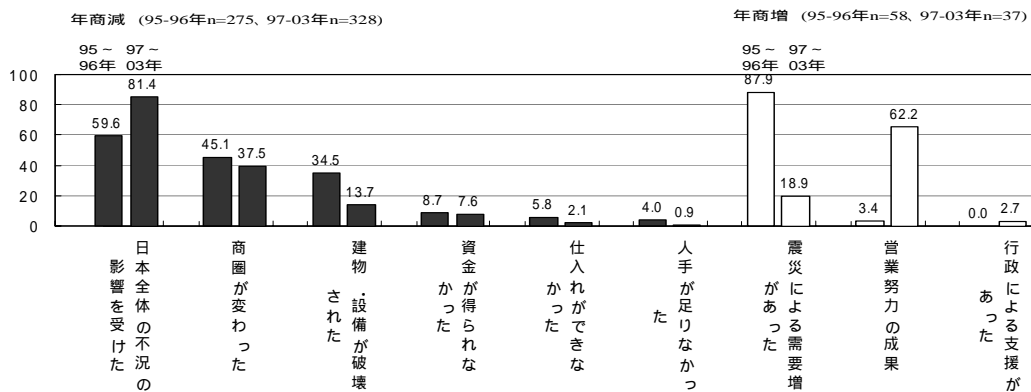


図9： 年商・売上げ変化の理由

第3章 生活の再建

1. 生活復興カレンダー

本節では、被災者の時系列的な生活復興過程、すなわち「生活復興カレンダー」について明らかにした。

震災によって被災者は、それまでの日常とは違う新しい現実の中に放り込まれ、その中で壊れてしまった生活を立て直し、新たな日常生活を確立しなければならなかった。

しかしながら、このような事実は誰もが知っているものの、「実際に被災者が、どのような時期に、どのようなことについてどのように考え、どのように生活復興を成し遂げていったのか」という生活復興過程については、インタビュー等による個々の事例は存在するものの、その全体像は明らかになっていない。

そこで、被災地全域における無作為抽出調査である本調査では、生活復興に関する被災者の気持ちや行動が、震災発生後、時間とともにどのように変化していったのかを尋ねることで、被災者の生活復興過程の全体像を明らかにすることを試みた。

具体的には、生活復興の節目となりうる6つの気持ち・行動について、それらの気持ち・行動がいつ頃起こったのかを振り返ってもらい、震災発生以降の「カレンダー」をつけるかたちで回答してもらった。(問35)

質問項目とした生活復興の節目となりうる気持ち・行動は、「不自由な暮らしが当分続く」と覚悟した」「被害の全体像がつかめた」「もう安全だと思った」「すまいの始末がついた」「仕事/学校がもとに戻った」「自分が被災者だと意識しなくなった」の6つである。

1) 被災地の人々がどのように復旧・復興したか(問35)

- ・被害の全体像を把握し、当分不自由な生活を覚悟するのに10時間を要していた。
- ・自分やまわりの安全性が確認でき、仕事やすまいの片がつくのに、1000時間を要していた。
- ・自分が被災者だと思わなくなるまでに、10000時間を要していた。

生活復興の節目となりうる気持ち・行動について、発災からの時間経過にともなってどれくらいの人々が「そう思った/行った」のかについて分析を行った。

図1の横軸に、震災発生後の時間経過を表し(対数軸で時間経過を表現)、縦軸にその時点までに「そう思った/行った」と回答した割合を表した。この割合が50%を超えた(全体の半数が「そう思った/行った」)時期を、「その気持ち(行動)が感じられた(行われた)」時期と定義して分析を進めると、生活復興の節目である6つの気持ち・行動は、3つの時期(震災後10時間、震災後1000時間、震災後10000時間)に集約できることがわかった。

震災後 10 時間のフェーズでは、「不自由な暮らしが当分続くと覚悟し」(1 月 17 日(震災当日)夜 : 56.3%)、「被害の全体像がつかめた」(1 月 18 日午前 : 54.2%)ことがわかった。

震災後 1000 時間のフェーズでは、「もう安全だと思い」(1 月 30 日~2 月 5 日 : 50.1%)、「仕事 / 学校がもとに戻り」(2 月 : 59.7%)、「すまいの始末がついた」(2 月 : 50.2%)ことがわかった。

「自分が被災者だと意識しなくなった」のは、震災後 10000 時間のフェーズ(1996 年 : 58.5%)であった。震災後 9 年目である調査時点(2003 年 1 月)では、82.8%の人が自分を被災者だと意識しなくなっているが、まだ、17.2%の人は、「自分を被災者だと意識している」ことが明らかになった。

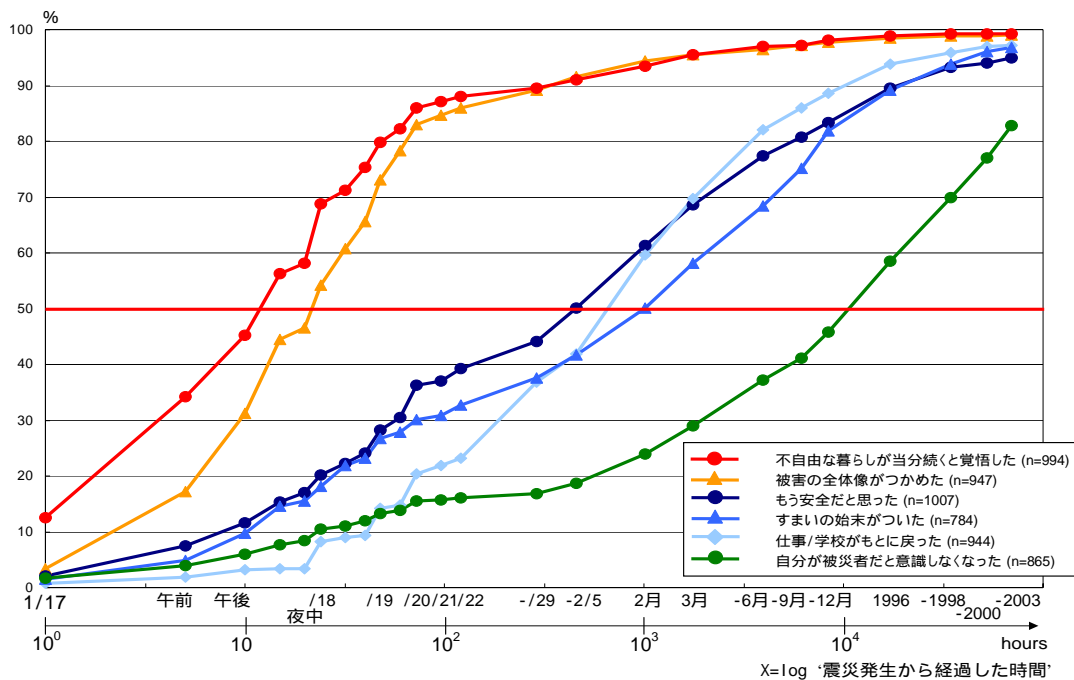


図 1 : 被災地の人々がどのように生活復興したか (生活復興カレンダー)

2) 家屋構造被害程度別にみた復旧・復興のちがい

- ・家屋被害のなかった被災者でも、「不自由な暮らしが続くと覚悟し」「被害の全体像をつかむ」のに 10 時間を要していた。
- ・「自分が被災者だと意識しなくなった時期」については、家屋構造被害程度が強く影響し、層破壊家屋の被災者の約 5 割、全半壊家屋の被災者の約 3 割が、調査時点(2003 年 1 月)においても、依然として自分たちを被災者だと認識していた。

すまいは生活の根幹であり、発災時に住んでいたすまいの被害程度の違いは、その後の生活復興過程に大きな影響があることが考えられる。

そのため、2003 年調査では、家屋構造被害程度別に、生活復興に関する被災者の気持ちや行動の起こり方について、どのような違いがあるのかを分析した。

居住していた家屋の被害程度は、「層破壊」「全壊」「半壊」「一部損壊」「被害なし」の5パターンとした。「層破壊」とは、家屋が全壊したもののうち「ある階がつぶれたり」「瓦礫(ガレキ)状態になった」ような被害の甚大な状態を指し、通常の全壊状態より死者発生率が高いことが知られている。そのため同じ全壊でも「層破壊」と「全壊(層破壊以外)」に分類した。

家屋被害程度別の生活復興

図2～図6は、家屋被害程度別における生活復興カレンダーである。

これを見ると、まず、「不自由な暮らしが当分続くと覚悟した」と「被害の全体像がつかめた」については、家屋被害程度に関わらず震災発生から10時間を要することがわかった。このことは、家屋被害程度に関わらず、地震によってすべての人々が「失見当」(自分自身や周囲の状況を正確に把握し理解できない状態)に陥り、その回復に10時間を要していることが考えられる。

また「すまいの始末がついた」については、「層破壊・全壊・半壊家屋」の被災者と「一部損壊被災者・被害無し」の被災者の間に差があることがわかった。半壊以上の家屋被害を受けた人は、すまいの始末をつけるのに、約半年間(約5000時間)を要していることが明らかになった。

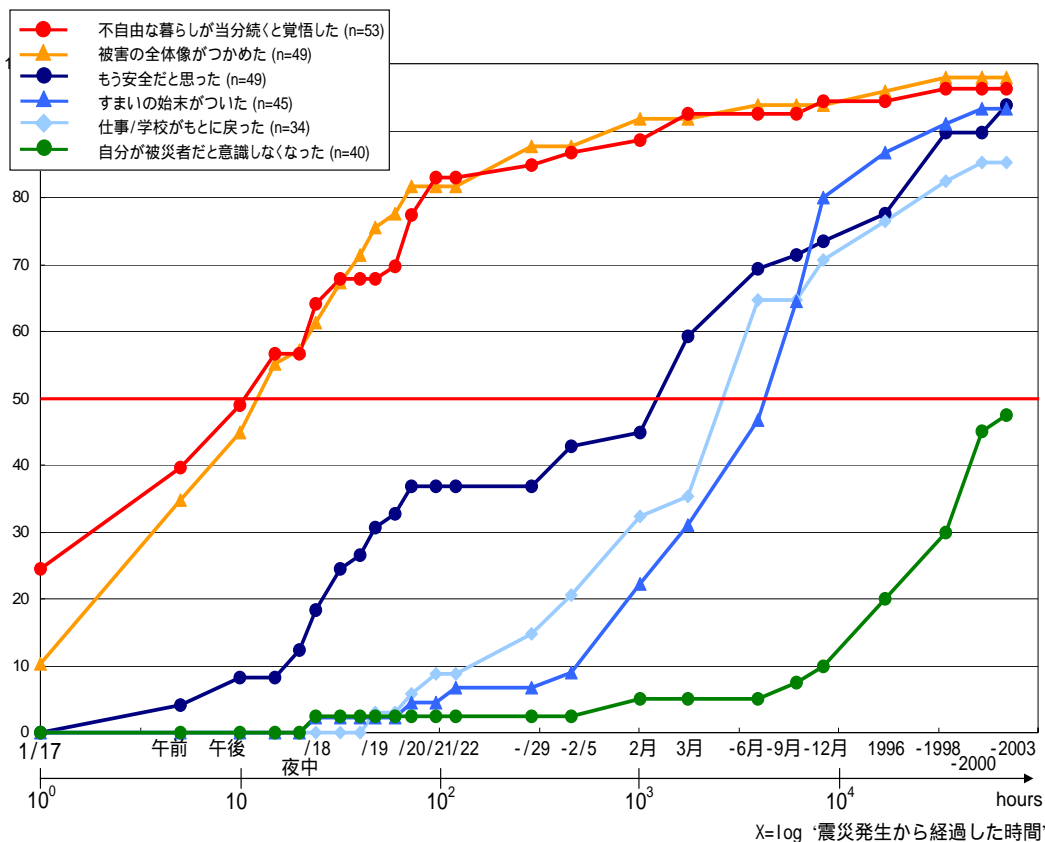


図2：生活復興カレンダー（層破壊家屋被災者）

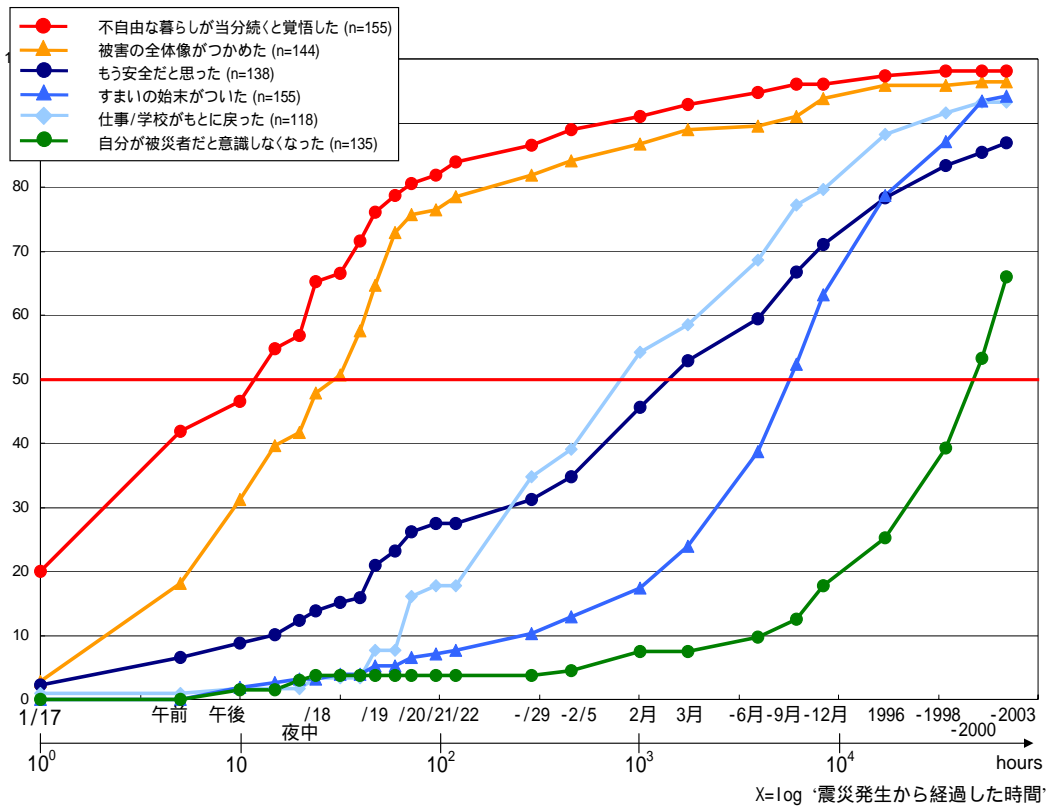


図3：生活復興カレンダー（全壊家屋被災者）

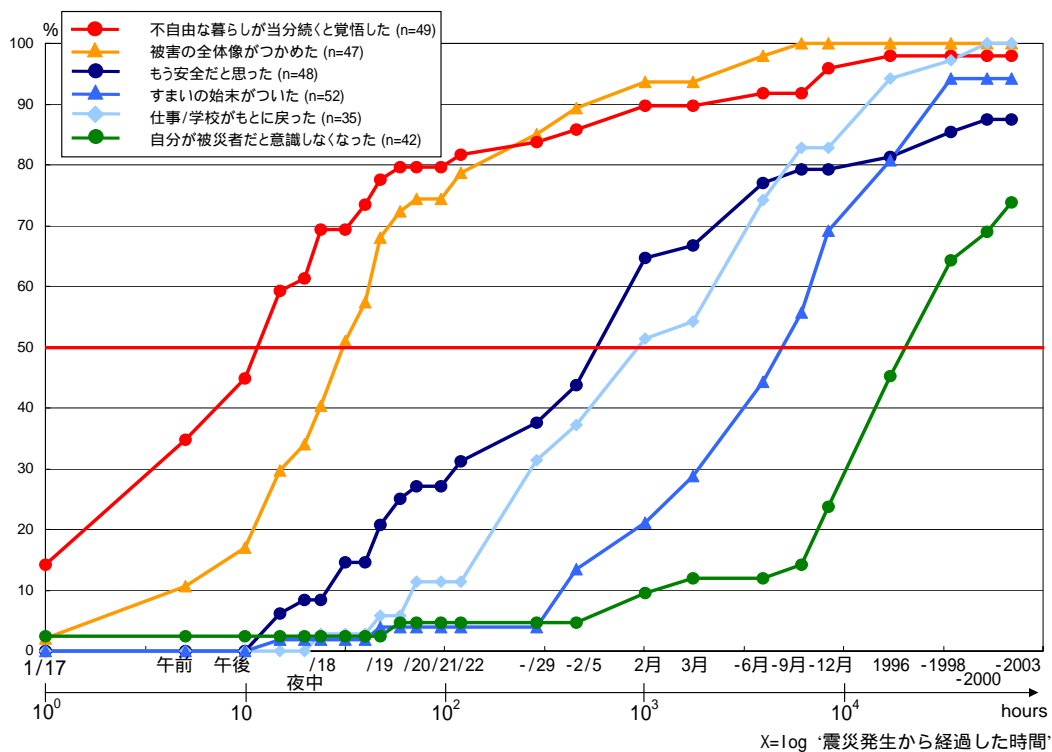


図4：生活復興カレンダー（半壊家屋被災者）

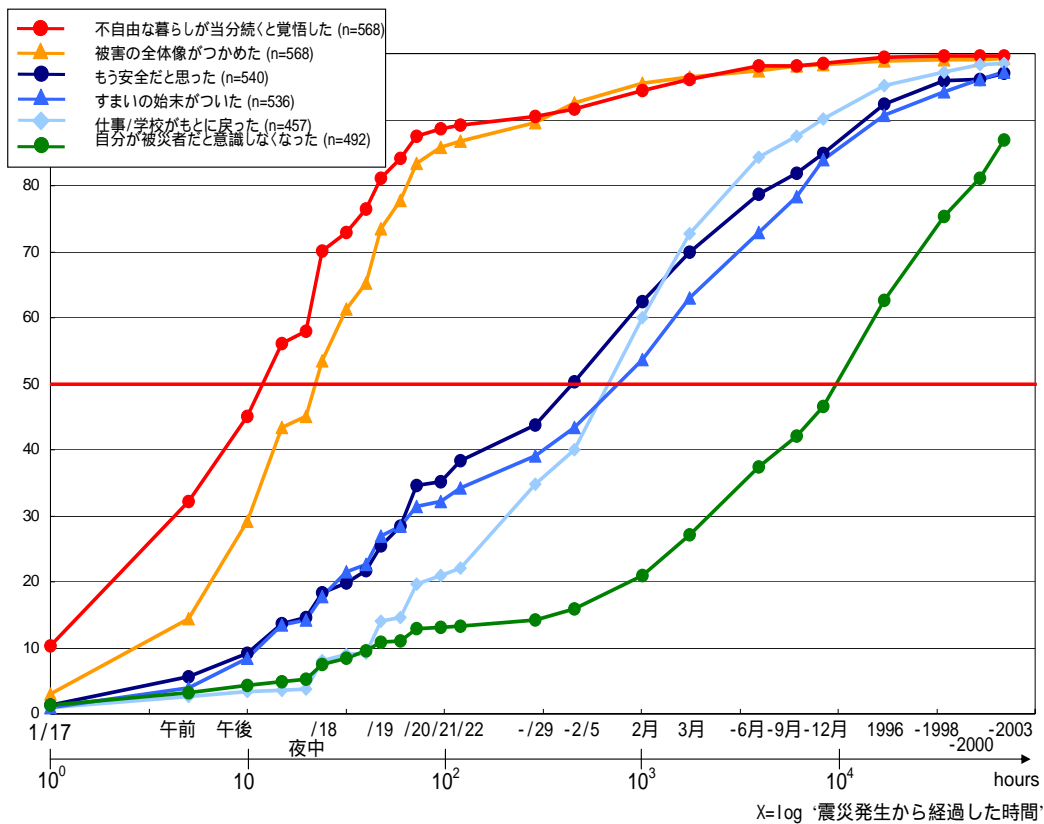


図5：生活復興カレンダー（一部損壊家屋被災者）

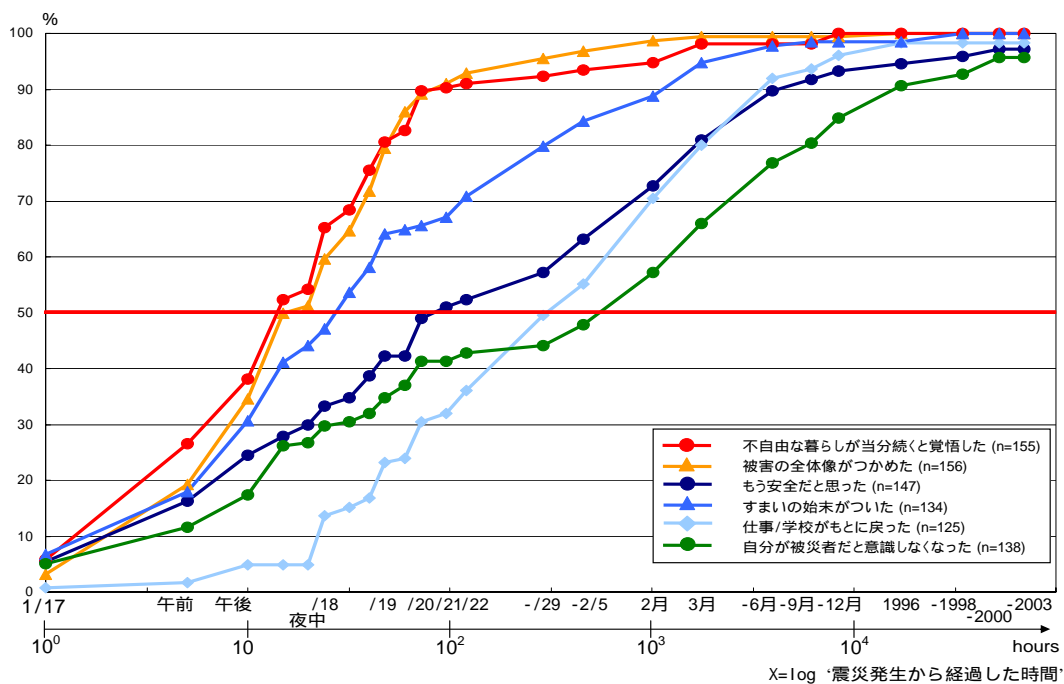


図6：生活復興カレンダー（家屋被害なし被災者）

自分が被災者だと意識しなくなった時期

「自分が被災者だと意識しなくなった」時期は、家屋被害程度によって大きな差がみられた。(図7)。

「自分が被災者だと意識しなくなった」人が50%を超えた時期でみると、被害なし被災者は震災後1ヶ月の2月中、一部損壊被災者は1996年、半壊被災者は1997-1998年、全壊被災者は1999-2000年であった。

また、震災から9年目を迎えた調査時点(2003年1月)では、層破壊被災者の過半数である52.5%、全壊被災者の34.1%、半壊被災者の26.2%が「自分はまだ被災者である」と認識していることがわかった(一部損壊被災者は13.0%、被害なし被災者は4.3%)。

このことから、震災後9年目を迎えた調査時点においても、家屋被害程度の大きかった被災者には、震災の影響が強く残っていることが明らかとなった。

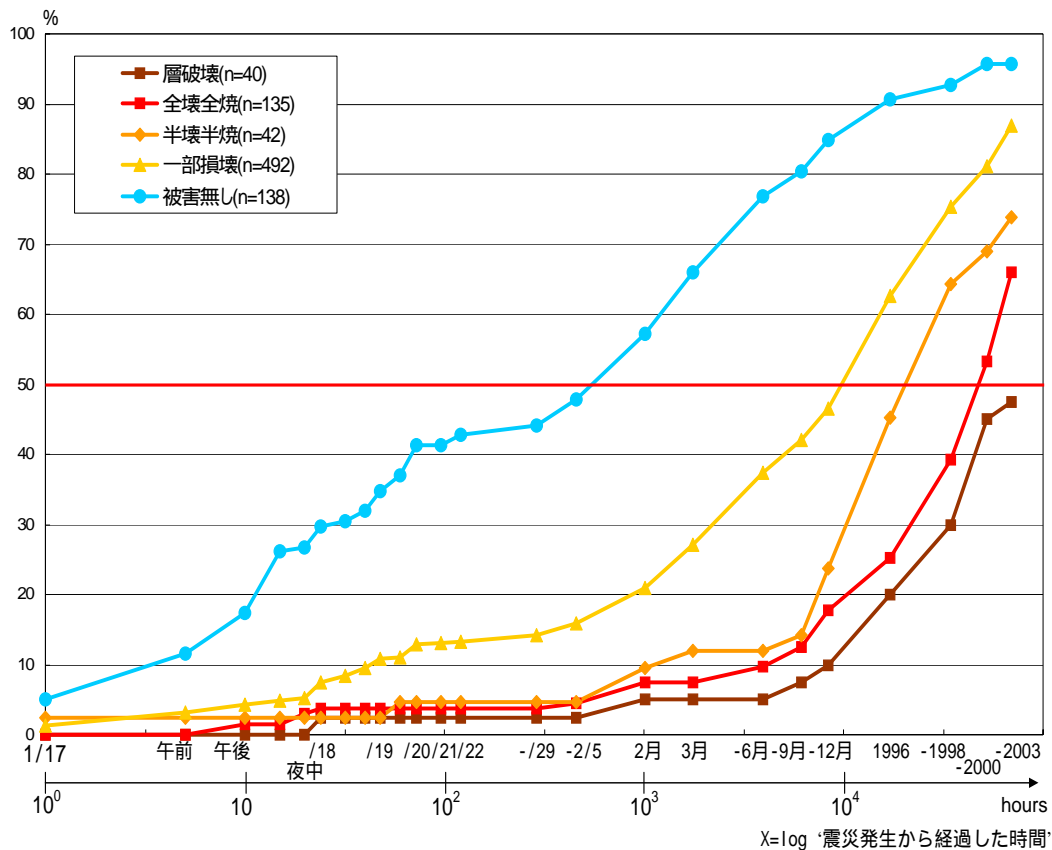


図7： 「自分を被災者だと意識しなくなった」人の割合（家屋構造被害程度別）

2. こころとからだの変化

こころとからだについては、その健康度を測るために、最近1ヶ月にどのようなストレス反応を経験していたのかをたずねた。(問30)

具体的には「あなたは最近1ヶ月の間(平成14年12月～平成15年1月)につぎにあげた『こころやからだの状態』をどのくらい体験しましたか」として、12項目をあげ、「まったくない-いつもあった」の5段階評定で回答を求めた。

これらの項目は1995年12月に行われた日本赤十字社の調査(参考文献1)におけるストレス反応の影響度を測った全111項目についての主成分分析の結果、第一主成分における負荷量の高いものについて、こころとからだの領域ごとに抽出した12項目である。

得られた回答に対して因子分析を行った結果、2つの因子が抽出された。

第1因子は「こころのストレス」であり、第2因子は「からだのストレス」である(表1)。

この「こころのストレス」「からだのストレス」については、2001年調査でも同様の質問項目を設けてきたが、同様の分析結果が得られており、こころとからだのストレスを測る尺度としての安定性が証明されたといえる。これらの質問項目を用いることで、その時々社会に暮らす人々が持っているストレスの度合いを測ることが可能である。

表1：こころとからだのストレス・因子分析の結果

問30	項目	「こころのスト」「からだのスト レス因子 レス因子 共通性		
		レス因子	レス因子	共通性
1	気持ち落ち着かない	.877	.278	.705
2	寂しい気持ちになる	.827	.280	.761
3	気分が沈む	.785	.324	.846
4	次々とよくないことを考える	.784	.343	.747
5	集中できない	.782	.306	.715
6	何をするのもおっくうだ	.696	.342	.673
7	動悸がする	.263	.829	.733
8	息切れがする	.249	.820	.763
9	頭痛 頭が重い	.251	.730	.553
10	胸がしめつけられるような痛みがある	.284	.659	.595
11	めまいがする	.367	.635	.530
12	のどがかわく	.334	.592	.462
		4.24	3.62	
		35.33	30.24	

2001年調査との比較

・こころ・からだのストレスは、全体傾向として増加の傾向を示している。

(図1)(図2)

2001年調査、2003年調査では、「こころとからだのストレス」を問う質問項目12項目を設定し、「まったくない、まれにあった、たまにあった、たびたびあった、いつもあった」の5選択肢を与えた。

回答者の回答から、「まったくない」と答えたものに1点、「まれにあった」に2点、「たまにあった」に3点、「たびたびあった」に4点、「いつもあった」に5点を与え、各回答者の得点を足し合わせることで、各回答者の「こころのストレス得点」「からだのストレス得点」とした。このように得点化することで、被災者のこころ・からだのストレス度合いの変化を見ることができた。

「こころのストレス」「からだのストレス」について、2001年・2003年調査における回答者の得点分布を示したものが、図1と図2である。

「こころのストレス」については、増加傾向が見られた。「からだのストレス」についても、「こころのストレス」ほどではないが、増加傾向が見られた。

図1:こころのストレス:2001年調査・2003年調査全体傾向の比較

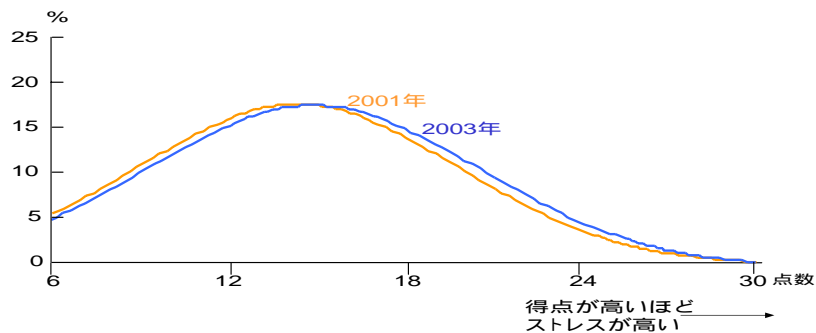
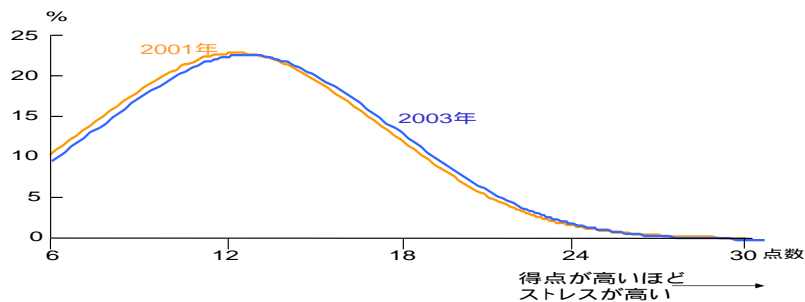


図2 からだのストレス:2001年調査・2003年調査全体傾向の比較



属性との関連

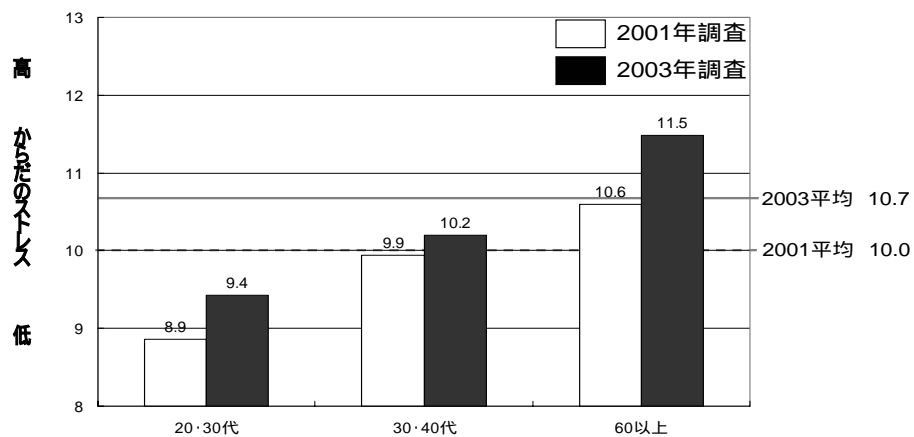
・若い世代の「からだのストレス」は、中高年世代に比べて低かった。(図3)

「こころのストレス」「からだのストレス」とも、性別・年齢とは有意な(統計的に意味のある)関連性は見られなかった。

世代と「こころのストレス」とは関連性は見られなかったが、「からだのストレス」とは、関連性が見られた。

20・30代の「からだのストレス」は、40・50代、60以上に比べて低かった。この傾向は、2001年調査においても同様であった。

図3：世代別 からだのストレス



家屋被害程度との関連

・2001年調査、2003年調査とも、家屋被害程度が大きい人ほど、こころとからだのストレスは高かった。(図4)(図5)

2001年調査・2003年調査とも、家屋被害の程度が大きい人ほど、「こころのストレス」「からだのストレス」ともに高かった。

また、2003年調査時点の方が、被災者のこころとからだのストレスは増加していた。

しかし、2001年調査と2003年調査の傾向に大きな差はないことから、この増加は、家屋被害程度の大小に関わりなく、被災地に暮らす人々全体のストレス度合いが、この2年間で増加したことがうかがえる。

図4：家屋被害程度別 こころのストレス

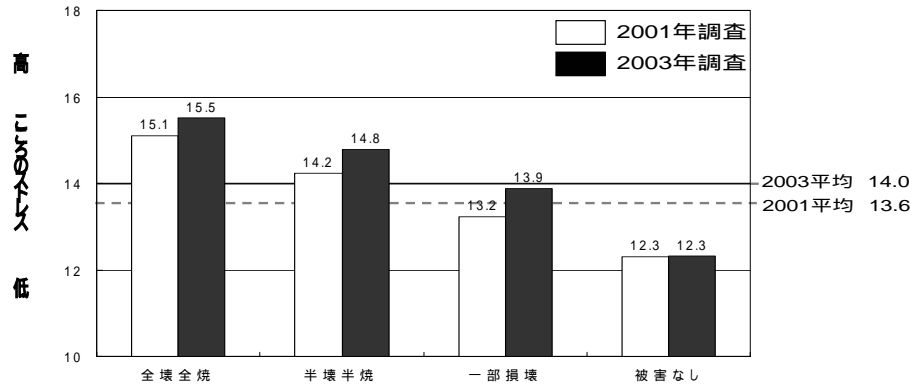
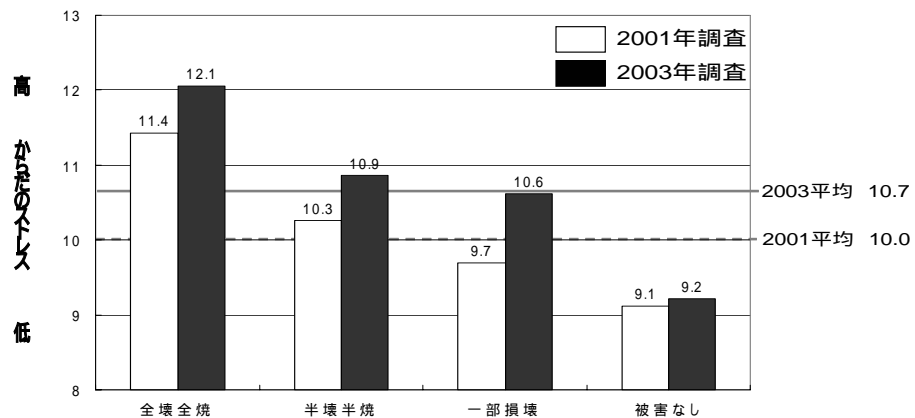


図5：家屋被害程度別 からだのストレス



世帯年収との関連

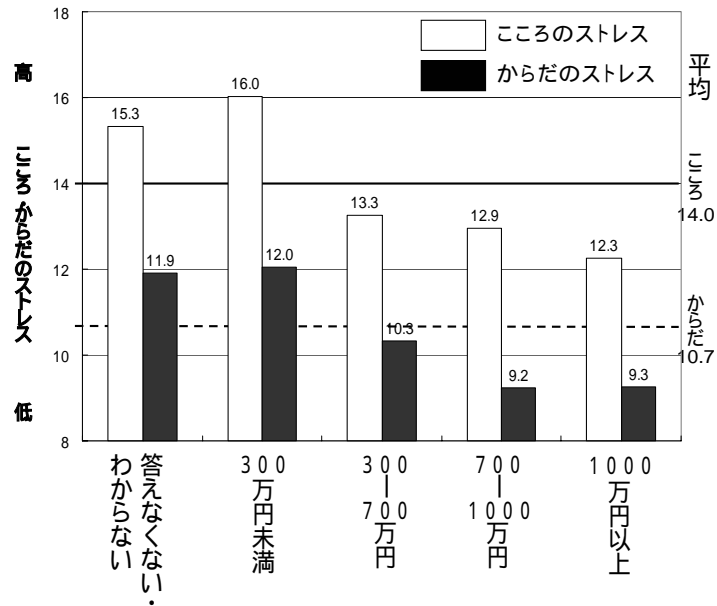
・世帯年収の高低が、こころ・からだのストレスに影響を与えている。(図6)

2003年調査では、新たに「世帯年収」について質問項目を設けた。

こころとからだのストレスと世帯年収との関連をみると、年収が「300万円未満」の人のストレス得点の平均値が最も高くなっていた。

世帯年収が300万円を超えると、ストレス得点の平均値は、全体平均より低い値で推移した。

図6：世帯年収別 心・からだのストレス



2001年調査、2003年調査の心とからだのストレスの分析結果から、2003年調査時点での被災地に暮らす人々の心・からだのストレスには、もはや震災の直接的な影響は見られないことが明らかとなった。

2003年調査時点での人々のストレスのもっとも大きな規定因はその後の生活のさまざまな負荷が影響していると推測できる。

参考文献

- 1) 日本赤十字社：大規模災害発生後の高齢者生活支援に求められるメンタル・ヘルス・ケアの対応に関する調査研究報告書、日本赤十字社、1996

3. つながりの変化

1) 市民性 (問 38)

被災地では、阪神・淡路大震災を契機として、自律と連帯に基づく新しい市民意識（市民性）が生まれ、復興を進める市民の力として機能してきた。

「市民性」とは、世の中を「公」と「私」に二分してとらえるのではなく、あらたに「共」という概念を加え、「公・共・私」の3つの関連としてとらえ、行政だけが公共の領域を担うのではなく、市民も「共」の領域から公共に参画するという発想を持つ意識といえる。

2001年調査では、人々の社会生活に関する価値観や行動傾向を問う質問項目から、現在の被災地に暮らす人々の市民性を測った。

2003年調査では、「あなたのお考えをお聞かせください」として13項目をあげ、「まったくそう思う - まったくそう思わない」の5段階評定で回答を求めた（問38）。今回の質問項目については、より信頼が高く妥当性の高い指標（尺度）を構築するため、2001年調査の項目に改良を加えたものである。

得られた回答に対して因子分析を行なったところ、1因子が抽出され、これら13項目が「市民性」という1つの概念を測っていることがわかった（表1）。

そこで「まったくそう思う、どちらかといえばそう思う、どちらとも言えない、どちらかといえばそう思わない、まったくそう思わない」の5選択肢に対して、「まったくそう思う」と答えたものに5点、「どちらかといえばそう思う」に4点、「どちらとも言えない」に3点、「どちらかといえばそう思わない」に2点、「まったくそう思わない」に1点を与え、各回答者の得点を足し合わせることで、「市民性得点」とした。

表1： 市民性尺度

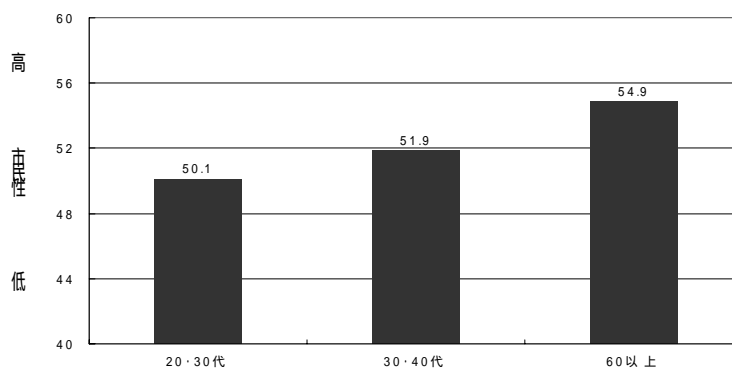
			市民性 尺度	共通性
問38	1	集会で話し手に耳を傾けるのが礼儀だ	0.41	0.17
	2	不快な目にあったら気持ちを抑える	0.45	0.20
	3	みんなで考える事で解決の糸口見える	0.54	0.29
	4	苦労は将来に役立つ試練と考える	0.53	0.28
	5	他人の権利を侵さないよう気をかける	0.69	0.47
	6	欲求をかなえる時もバランス感覚が大切	0.62	0.39
	7	幸せな事が続くと逆に心を引き締める	0.56	0.32
	8	自分で決めたことは最後まで守る方だ	0.63	0.40
	9	約束はできるだけ守るようにしている	0.64	0.41
	10	用事があれば自分から話しかける方だ	0.51	0.26
	11	してほしくないことは他人にもしない	0.60	0.36
	12	たとえ方便でも人に嘘をつくのは嫌だ	0.50	0.25
	13	いつ子供に見られても自分を誇れる	0.59	0.35
固有値			4.14	
寄与率			31.86	

世代との関連

- ・世代が上になるほど、市民性が高い。

20・30代では、市民性得点の平均値は50.1点であったのに対して、30・40代では51.9点、60以上では54.9点と、世代が高くなればなるほど、市民性が高いことがわかった。(図1)

図1： 世代と市民性



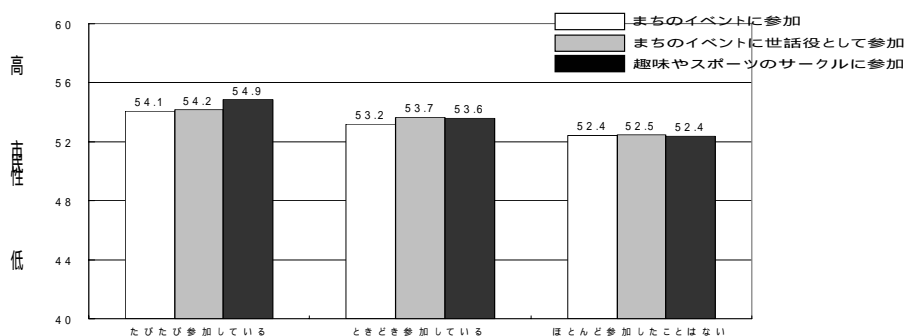
地域のイベント等への参加との関連

- ・地域のイベントや活動への参加が活発な人ほど、市民性が高い。

「まちのイベント(お祭り、運動会、盆踊りなど)に参加」「まちのイベントにお世話をする立場で参加」「趣味やスポーツのサークルに参加」の3項目の頻度を尋ねた質問項目への回答傾向と、市民性との関連を見た。(図2)

地域のイベントや活動への参加頻度の高い人ほど、市民性得点の値が高いことがわかった。

図2： 「地域のイベントや活動への参加」と市民性



地域のしごとへの関わりとの関連

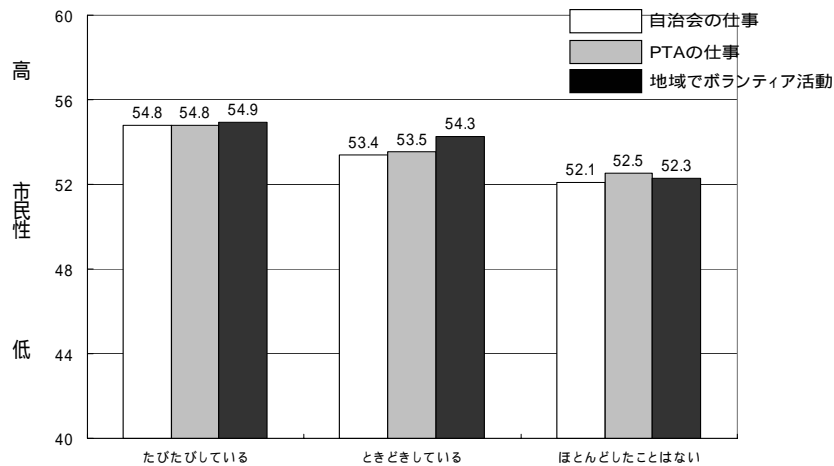
- ・地域のしごとへの関わりの活発な人ほど、市民性が高い。

「自治会の仕事」「PTA の仕事」「地域でボランティア活動」の3項目について、その関わり頻度を尋ねた質問項目への回答傾向と、市民性との関連性を調べた。

(図3)

地域のしごとへの関わり頻度の高い人ほど、市民性得点の値が高いことがわかった。

図3： 「地域のしごと」と市民性



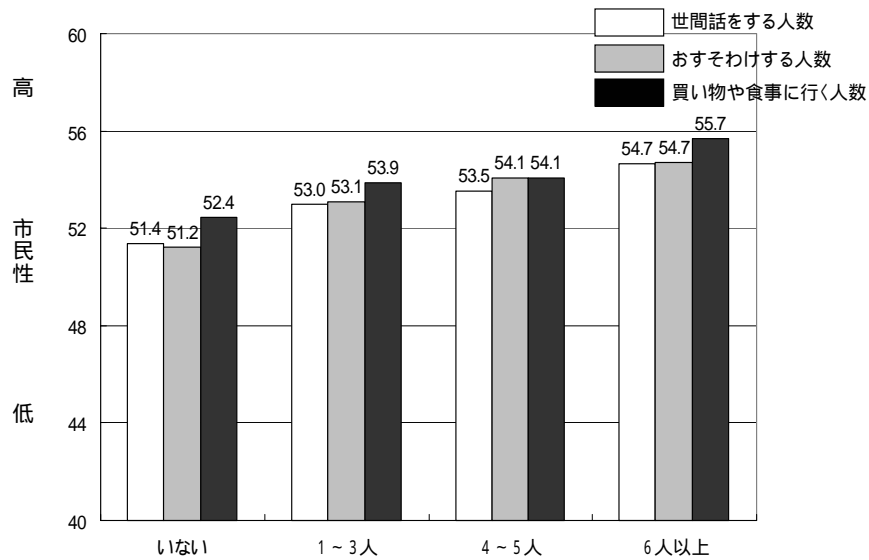
近所づきあいとの関連

- ・近所づきあいの活発な人ほど、市民性が高い。

近所における「世間話をする人数」「おすそわけをしたり、おみやげをあげたりもったりする人数」「先月1ヶ月の間にいっしょに出かけたり、買い物や食事などに行ったことがある人数」の3項目について尋ねた質問項目への回答傾向と、市民性との関連を見た。(図4)

これらの近所づきあいをする人数が多ければ多いほど、市民性得点の値が高いことがわかった。

図4： 「近所づきあい」と市民性



まちのイメージとの関連

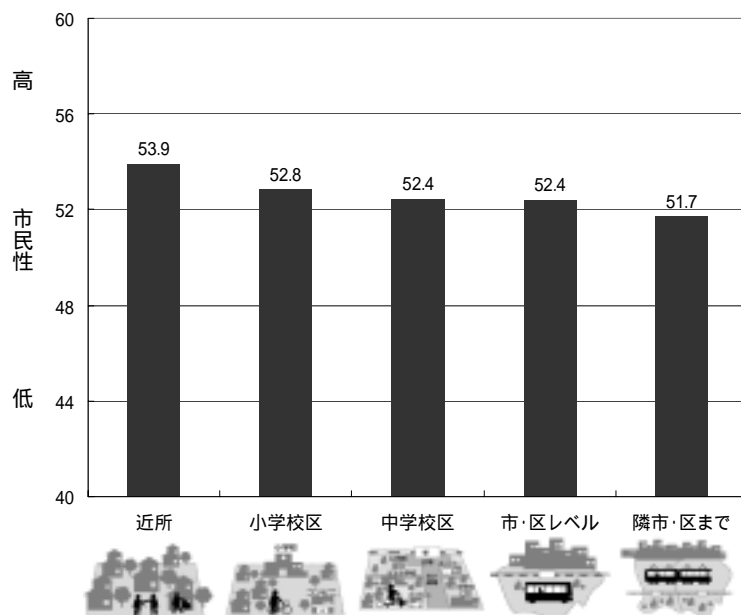
・「まち」のイメージを「近所」と考える人の方が、より広い範囲で「まち」のイメージを捉える人より、市民性が高い。

「あなたにとっての『まちのイメージ』」に対して、「近所、小学校区、中学校区、市・区レベル、隣市・区まで」の5選択肢で尋ねた質問項目に対する回答傾向と、市民性との関連を見た。(図6)

最も市民性得点が高かったのは「近所」の53.9点、次いで、「小学校区」の52.8点であった。「中学校区」「市・区レベル」はともに市民性得点は52.4点、「隣市・区まで」は最も低く51.7点だった。

まちのイメージを、最も自分の身近である「近所」と考える人の方が、「近所」よりも広い範囲でまちのイメージを捉える人より、市民性が高いことが明らかとなった。

図6： 「まちのイメージ」と市民性



2) 家族 (問 37)

被災地における現在の家族関係について調べるために、2003年調査では、家族システム評価尺度 FACESKGIV-16 (Version 2) を利用した。

この家族システム評価尺度は、北米で開発されたデイビッド・H・オルソン (David H. Olson) の円環モデル (Circumplex Model of Marital and Family Systems) に基づく尺度を、日本の社会や文化に適合させるために、オリジナルに項目を作成し、実証的な項目分析を経て作り上げたものがある。

家族システム円環モデルとは、家族をそれぞれの成員間で相互に作用し合う一つのシステムとらえ、家族関係の機能を「きずな」と「かじとり」という二つの側面から調べるモデルである。

きずなとは、家族成員間の心理的・社会的な距離を指す。かじとりは、家族内のリーダーシップや役割関係、決まりなどを、状況の変化に応じて変化させる柔軟性を示している。FACESKG の最新版 (第4版) では、円環モデルが想定する「家族のきずな」および「家族のかじとり」と、家族機能度との関係をとらえることに重点をおいて項目の開発が行われている。

システム円環モデルによれば、通常の社会生活では、「きずな」「かじとり」とも中庸でバランスのとれた場合に、家族関係の機能度が最も高まると想定する。逆にきわめて低すぎるか、高すぎる場合には、家族成員を支える力が弱まると考える。

家族のきずなに関しては、そのきずなの強い順に、回答者を「ベッタリ、ピツタリ、サラリ、バラバラ」の4つのグループに分けた。

家族のかじとりに関しては、そのかじとりの感度の強さによって、「てんやわんや、柔軟、キッチリ、融通なし」の4つのグループに分けた。

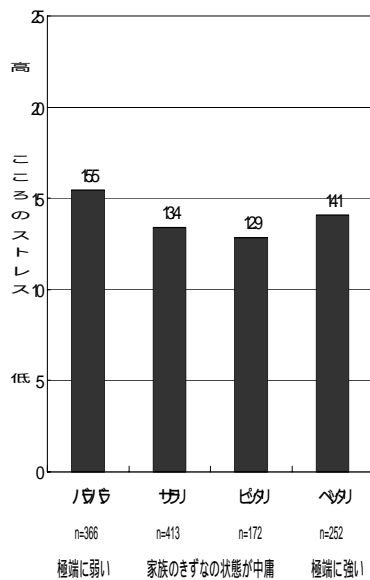
こころとからだのストレスとの関連

- ・家族のきずなのバランスが取れているほど、こころとからだのストレスは低かった。
- ・家族のかじとりのバランスが取れているほど、こころとからだのストレスは低い

「家族のきずな・かじとり」と「こころのストレス」(図7)(図8)、「からだのストレス」(図9)(図10)との関連を調べた。

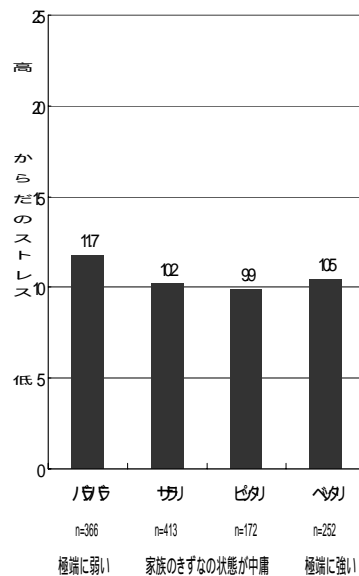
家族関係において、そのきずな・かじとりの水準が中庸であればあるほど、つまり家族のきずな・かじとりのバランスがとれていればいるほど、こころとからだのストレスが低いことがわかった。

図7： 家族のきずなとこころのストレス



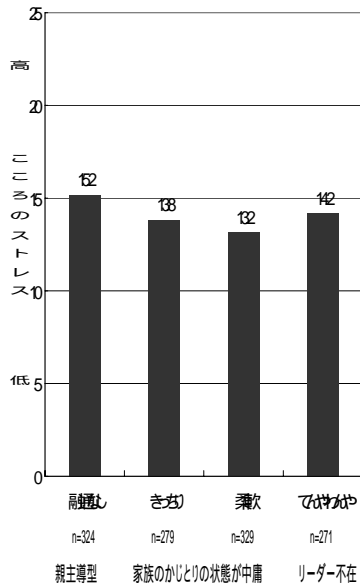
F(3, 1199)=9.49**

図8： 家族のきずなとからだのストレス



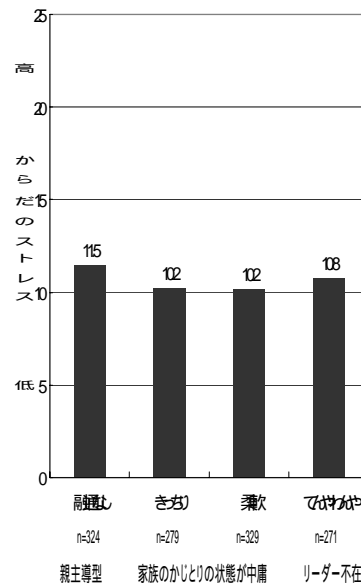
F(3, 1199)=8.28**

図9：家族のかじとりとこころのストレス



F(3, 1199)=5.69**

図10：家族のかじとりとからだのストレス



F(3, 1199)=4.59**

2001年調査結果と2003年調査結果の比較

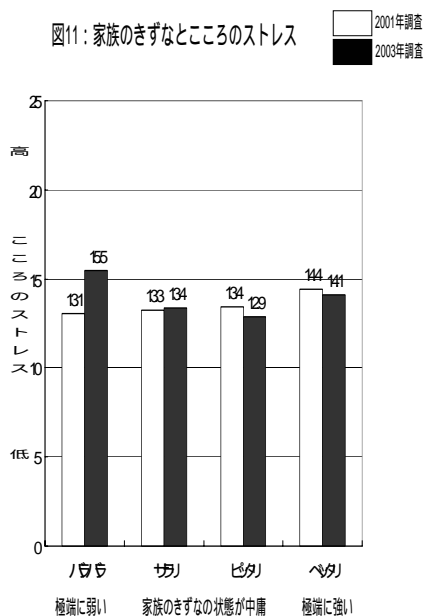
・「家族関係が中庸であればあるほど、こころとからだのストレスが低い」という同様の傾向が見られた。

2003年調査と2000年調査の結果を比較すると、どちらの調査結果でも「家族関係が中庸であればあるほど、こころとからだのストレスが低い」という同様の傾向が見られた。(図11)(図12)

詳しく見ると、2003年調査の結果の方が、家族のきずなのバランスが極端に弱いほど(家族のきずなが「バラバラ」であるほど)こころ・からだのストレスが高いという傾向がより顕著になった。

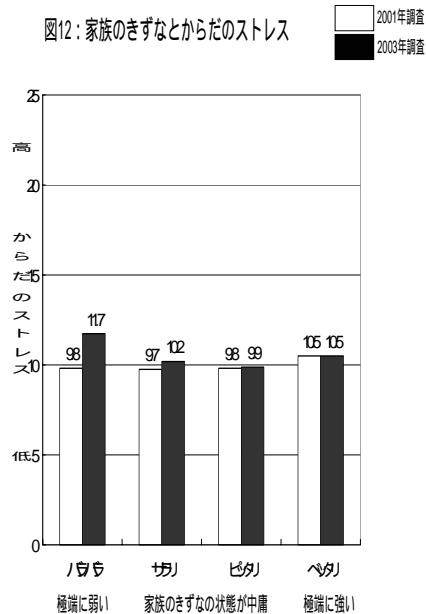
また、家族のかじとりにおいては、「親主導型」であればあるほど、こころ・からだのストレスが高いという傾向がより顕著になった。

図11：家族のきずなとところのストレス



2001年 $F(3, 1199)=2.90^*$

図12：家族のきずなとからだのストレス



2001年 $F(3, 1199)=0.15$

3) 近隣関係 (問 39)

災害は、建物を破壊するだけではなく、人と人との関係性も断絶させるものである。本節では、2003年時点における被災者の近隣関係について、2001年調査でも用いた次の4項目で測定した。

世間話をする近所の人は何人くらいいますか。

おすそわけをしたりおみやげをあげたりもらったりする近所の家は何軒くらいありますか。

先月1ヶ月の間に一緒に出かけたり、買い物や食事などに行ったことのある近所の人は何人くらいいますか。

月に何回くらい、近所を散歩したり、近くの公園に出かけますか。

～ は「近所づきあいの深さ」について、～ は「近所づきあいのチャンス」について尋ねたものである。しかし、～ については、有効回答者全員が「散歩に出かけていた」ことから、分析からは除外した。

個人属性との関連

被災者の世帯年収、身体被害、住宅被害と近所づきあいとの関連をみると、統計的に意味のある関連は見られなかった。これらの個人属性は、現在の近所づきあいには、直接的な影響を及ぼしていないと考えられる。

震災後の転居の有無との関連

- ・震災後に転居経験のある人は、近所づきあいの人数・軒数が少ない。

震災後の転居の有無と近所づきあいとの関連をみると、震災後に転居経験のある人は、転居経験のない人に比べて、近所づきあいの人数・軒数が少なかった。(表1)

震災によって、多くの被災者が転居を余儀なくされ、それが被災者の近所づきあいに対しても影響を及ぼしていると考えられる。

表1 震災後の転居の有無と近所づきあい

	震災後の転居の有無	N	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差
世間話をする人数 (実数)	転居なし	840	4.63	6.432	.222
	転居	327	3.31	4.676	.259
おすそわけやおみやげをする軒数 (実数)	転居なし	839	2.89	2.473	.085
	転居	327	2.07	2.242	.124
買い物、食事に行く人数 (実数)	転居なし	839	1.20	2.986	.103
	転居	328	.75	1.593	.088

性別との関連

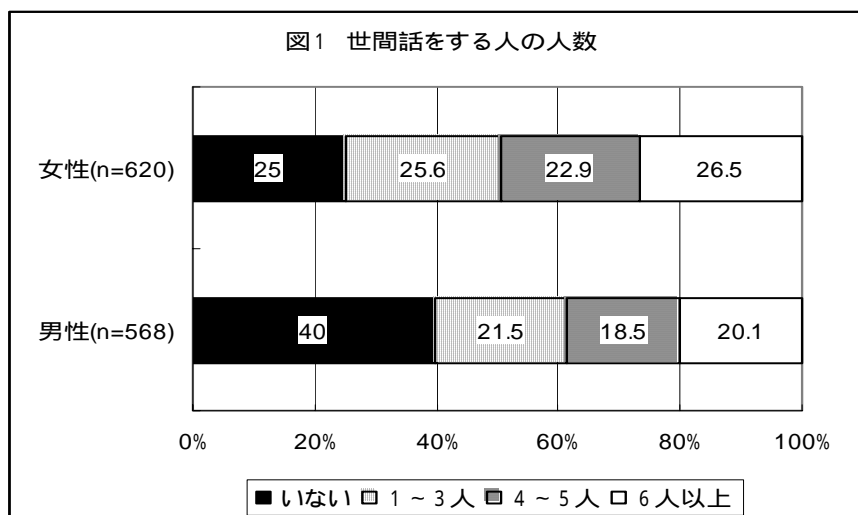
- ・女性の方が男性より、近所づきあいの人数(世間話をする人数、買い物・食事に行く人数)が多かった。

一般に、女性の方が近所づきあいの人数が多くなると言われている。

性別と近所づきあいの関連をみれば、世間話をする人の人数は、女性の方が、男性より多かった。(図1)

なお、買い物・食事に行く人数と性別との関連は、同様の傾向であったが、おすそわけ等の軒数と性別との関連については、統計的に意味のある差が見られなかった。これは、個人的なつきあいというよりも、世帯同士のつきあいというやや質を異にする項目であることによるものと考えられる。

図1 世間話をする人の人数（男女別）



4) 地域活動（問41）

地域活動については、次の6項目について、それぞれ「たびたび（参加）している」、「ときどき（参加）している」、「ほとんど（参加）したことはない」の3選択肢で回答を求め、6項目の総和をもって、コミュニティ的活動参加得点とした。

- まちのイベント（お祭り、運動会、盆踊りなど）への参加
- まちのイベントにお世話をする立場での参加
- 趣味やスポーツのサークルなどへの参加
- 自治会の仕事
- PTAの仕事
- 地域でのボランティア活動

地域別のコミュニティ的活動参加

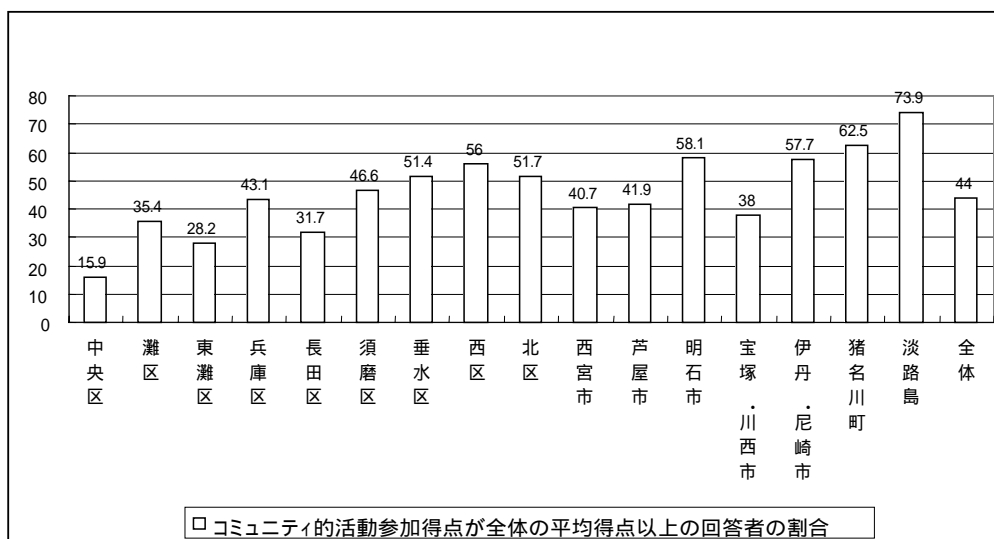
- ・コミュニティ的活動参加は、中央区、灘区、東灘区、長田区で低かった。

地域別のコミュニティ的活動参加得点を、全体の平均得点の「未満」と「以上」に2つに分類した上で、「以上」と回答した割合を、地域別に示した。（図3）

コミュニティ的活動参加が高いのは、神戸市西区、北区、明石市、伊丹・尼崎市、猪名川町、淡路島で、低いのは、中央区、灘区、東灘区、長田区であった。

これらから、被害の深刻だった地域で、コミュニティ的活動への参加が低調なまま推移してきたことが示唆される。

図1 地域別に見たコミュニティ的活動参加



被害の大きさとコミュニティ的活動参加との関連

・地域の被害程度がコミュニティ的活動参加に影響を与えていることがわかった。

被害の大きさとコミュニティ的活動参加との関連については、地域被害と個人被害に区分して検討した。

ア．地域被害との関連

地域被害については、兵庫県及び神戸市の統計に従って家屋被害を算出し、便宜的に、次のように分類した。

小被害地域...垂水区、西区、北区、明石市、宝塚・川西市、伊丹・尼崎市、猪名川町、淡路地区（全壊・全焼率（全壊・全焼家屋数／世帯数×100）が10%未満）

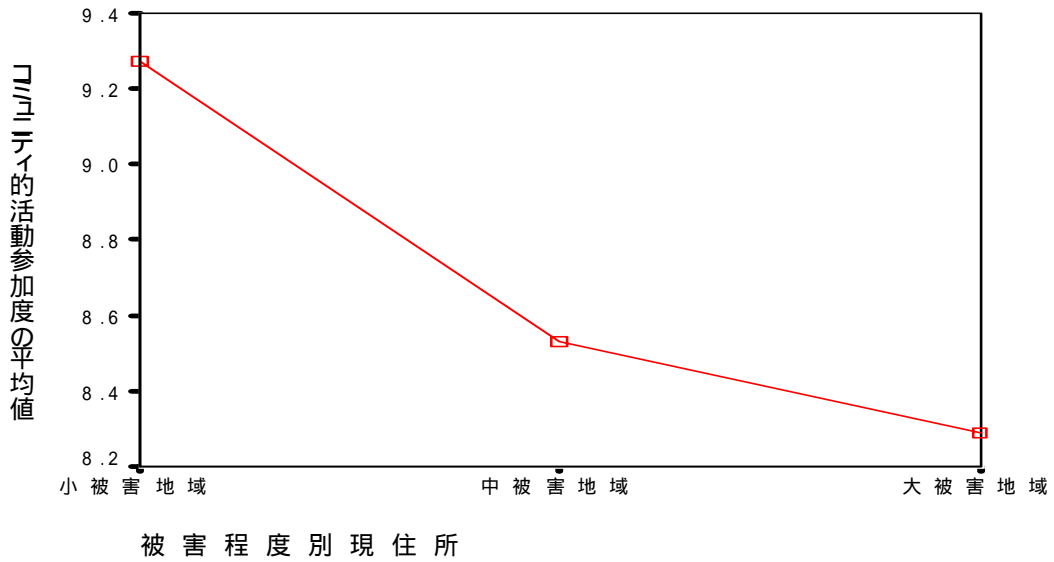
中被害地域...中央区、須磨区、西宮市、芦屋市（全壊・全焼率が10%以上15%未満）

大被害地域...灘区、東灘区、兵庫区、長田区（全壊・全焼率が15%以上）

この3地域間で、コミュニティ的活動参加尺度の平均値に差があるかどうかを、分散分析と呼ばれる統計的手法を用いて検討した。（図2）

小被害地域は、中被害地域、大被害地域に比べて、コミュニティ的活動参加の度合いが高いことがわかった。

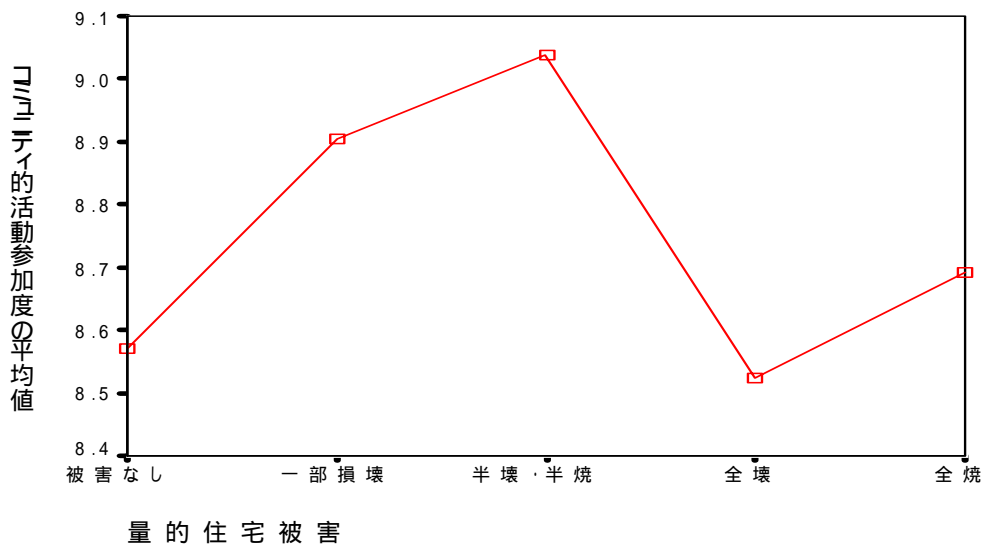
図3：地域被害とコミュニティ的活動参加



イ．個人被害との関連

個人被害（家屋被害）とコミュニティ的活動参加との関連をみると、統計的に意味のある関連は見られなかった。

図4：個人被害とコミュニティ的活動参加



以上から、家屋被害等の個人被害より、地域全体としての被害の大小が、被災者のコミュニティ的活動参加に影響を与えているといえる。

4 . 行政とのかかわり

1) 市民と行政との新しい関係 (問 45)

震災を契機に、市民と行政との関係に新しい価値観が根付こうとしている。震災以前は、行政に全てまかせておけば、後見人としてこれ以上の存在はないとする「後見主義的」考え方、市民一人一人が自由な考えでふるまっていけばよいとする「自由主義的」考え方の二つの考え方が多かったといわれている。震災後はボランティアや市民の共助の重要性を認識する機会を得て、元来行政だけの仕事と考えられていた公共的なことについても、市民の積極的関与によって担われるとする「共和主義的」考え方が定着しつつあると考えられる。

市民と行政とのかかわり方についてどのようなものがよいと思うか回答を求めた。

具体的には「震災以来、市民と行政との関係が注目されるようになりました。あなたはどのような市民と行政とのかかわり方がよいとお考えですか」として、4つのテーマ「ゴミ出しのルール」「地域活動」「大災害の時に、市民の命を守るのは」「まちづくり」について、「後見主義」「自由主義」「共和主義」のそれぞれの考え方に基づく選択肢を用意し回答を求めた。(問 45)

得られた回答について、等質性分析(回答データからの情報を損なわない形で、質問項目の似ているカテゴリーを探し出し、似通った反応を示す調査対象者を見つけ出す統計的分析手法)を行った。

その結果得られた得点から、回答者が行政とのかかわり方について、「後見主義」「自由主義」「共和主義」のどの考えを強く持っているかによって、3つのグループに分けた。

2003年調査の「行政とのかかわり」に関する回答傾向は、2001年調査と同様に、「後見主義」「自由主義」「共和主義」にグループ分けすることができた。(図1)

*共和主義は「自律と連帯をもとに成立」、後見主義は「連帯は重視するが自律は弱い」、自由主義は「連帯は無視して、自律についてはコミットしていない」という特徴を持つ考え方である。

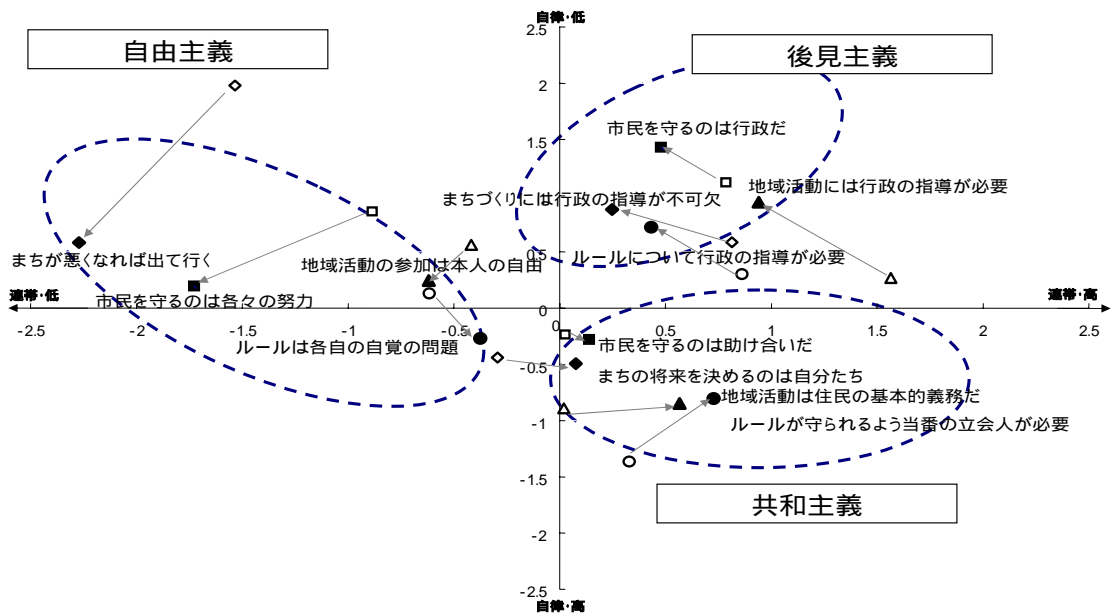


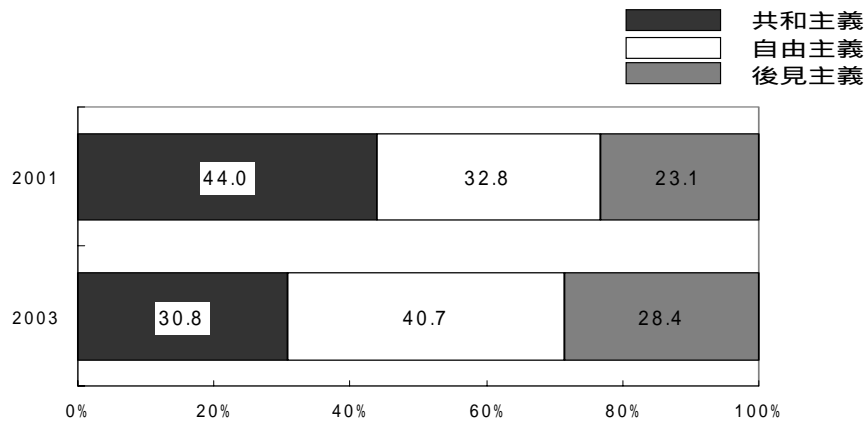
図1： 2001年調査結果(白抜き)と2003年調査結果(黒)

2001年・2003年調査における回答傾向

- ・共和主義的な考え方を持つ人は、全体の30.8%で、2001年調査に比べて13.2%減少した。

各カテゴリーに属する回答者の人数を比較すると、共和主義的な考え方を持つ人は30.8%で2001年調査に比べて13.2%減少、自由主義的な考え方を持つ人は40.7%で7.9%増加、後見主義的な考え方を持つ人は28.4%で5.3%増加した。(図2)

図2： 行政との関わりにおける各カテゴリーに属する人数の割合



世代との関連

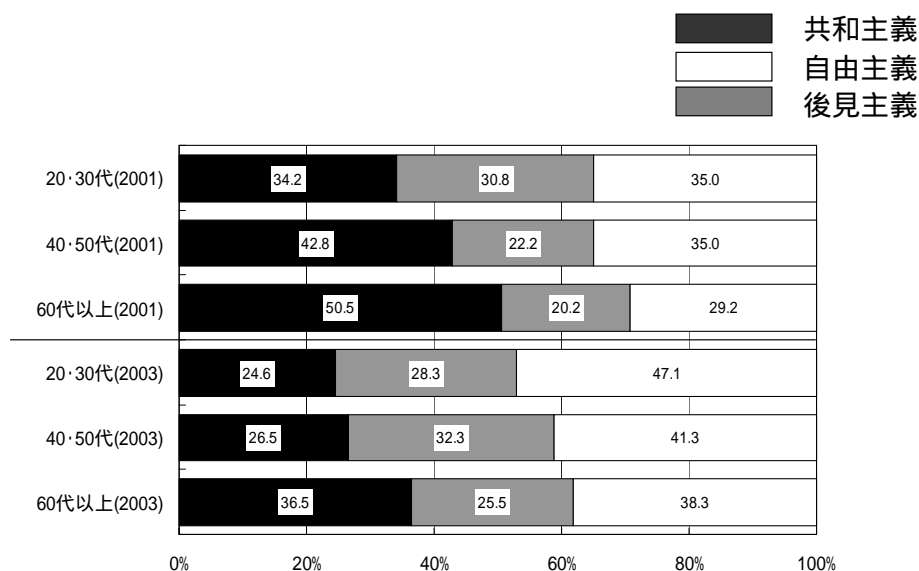
- ・ 20・30代より、40・50代、60代と、世代が上になればなるほど、共和主義的な考え方の人が多かった。(図3)

世代別に行政とのかかわり方を見ると、2001年調査に引き続き、世代が上になればなるほど、共和主義的な考え方を持つ人が多い傾向にあった。

2001年調査については、20・30代より40・50代、60代と、世代が上になるほど、共和主義的な考え方を持つ人の割合が多かった。

2003年調査においても、その傾向は同様であったが、どの世代でも、共和主義的な考え方を持つ人が減り、自由主義的な考え方を持つ人の割合が高くなった。

図3： 行政との関わりにおける各カテゴリーに属する人数(各調査世代別)



地域との交流との関連

- ・ 共和主義的な考え方を持つ人ほど、地域の人々との交流が活発である。(図4)(図5)

地域の人々との交流の度合いと、行政とのかかわり方についてみると、共和主義的な考え方を持つ人ほど、「おすそわけをする近隣の人」や「買い物や食事をする近隣の人」の人数が多かった。

図4： 市民と行政の新しい関係(おすそわけをする人の数)

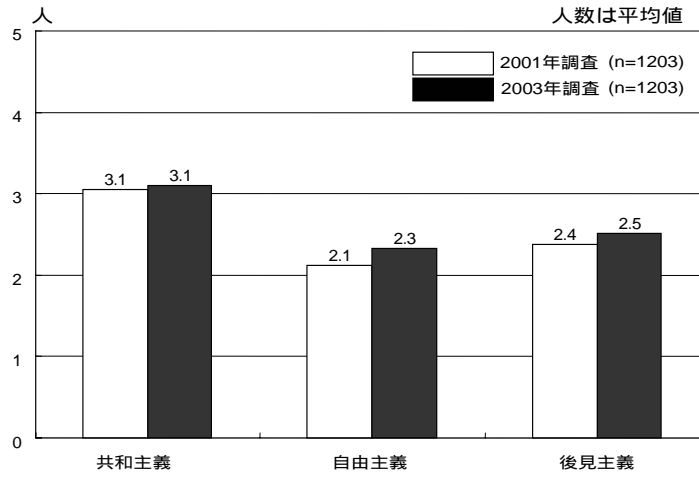
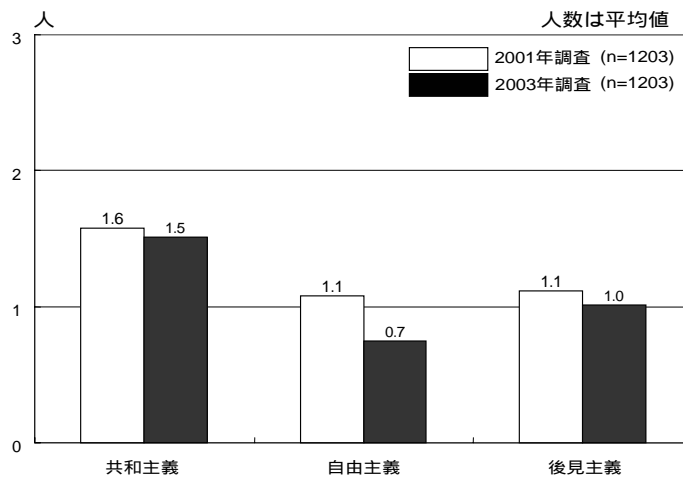


図5： 市民と行政の新しい関係(買い物や食事をする人の数)

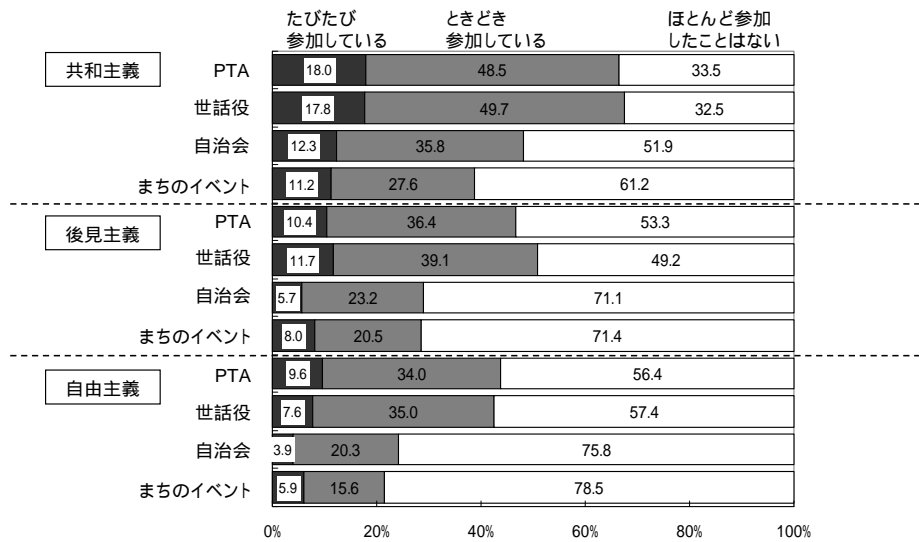


地域活動との関連

- ・共和主義的な考え方を持つ人ほど、地域への活動の参加度合いが高い。(図6)

地域活動とのかかわり方と行政とのかかわり方についてみると、共和主義的な考え方を持つ人ほど、「PTA 活動への参加」「地域のイベントに世話役として参加」「自治会活動への参加」「まちのイベントへの参加」のいずれにおいても、「たびたび参加」「ときどき参加」と答えた割合が高く、地域への活動の参加の度合いが高いことがわかった。

図6： 行政とのかかわりと地域活動への参加の度合い



2) 地域を維持するための負担金・労働力の提供 (問 44)

人々が地域を維持するために、どのくらいの負担金や労働力を提供する意思があるのかを調べるため、以下のような質問をした。

「あなたの住んでいるまちには、みんなで維持していくべきさまざまなものがあります。そのために必要な費用や労働の提供を求められたら、あなたはどの程度、協力しようと思いますか。費用が負担できる場合は負担額を、労働が提供できる場合は時間をお答えください。」

その後で、1. 近所の公園の維持管理、2. 地域の行事(祭り・運動会など)、3. 地域活動や市民活動の3つについて、1年間にどの程度の負担金(円)・労働力(時間)が提供できるのかをたずねた。(問 44)

地域のために提供できる負担金・労働力

「1. 近所の公園の維持管理」「2. 地域の行事(祭り・運動会など)」「3. 地域活動や市民活動」のそれぞれについて提供できる負担金・労働力をまとめた。(表 1)

なお、2001年調査でも同様の質問を行っていたため、結果については、2001年調査と2003年調査の両方を掲載した。

表 1 : 地域を維持するための負担金・労働力の提供

地域に必要な費用の提供を求められたら・・・年間何円まで負担しますか

	2001年度調査			2003年度調査		
	有効回答数	平均負担金	最頻値(n)	有効回答数	平均負担金	最頻値(n)
1. 公園の維持管理	641	1820	1000(249)	659	1626	1000(286)
2. 地域の行事	670	2130	1000(254)	696	1788	1000(282)
3. 地域・市民活動	658	2040	1000(257)	678	1759	1000(267)

地域に必要な労働の提供を求められたら・・・年間何時間までなら提供しますか

	2001年度調査			2003年度調査		
	有効回答数	平均労働時間	最頻値(n)	有効回答数	平均労働時間	最頻値(n)
1. 公園の維持管理	682	21.5	12(101)	695	15.8	10(101)
2. 地域の行事	655	16.5	10(121)	662	11.4	0(114)
3. 地域・市民活動	692	23.7	12(101)	674	16.6	0(103)

地域を維持するための負担金

- ・2001年調査・2003年調査とも、傾向は変わらず、年間1,000円と答えた人がもっとも多い。

「1. 近所の公園の維持管理」「2. 地域の行事(祭り・運動会など)」「3. 地域活動や市民活動」の平均負担金(表1)を見ると、2001年調査では年間1,820円~2,130円であったのに対し、2003年調査では、年間1,626円~1,788円と、平均負担金額が下がっていた。

ただし、最頻値(最も回答が多かった値)は、2001年調査・2003年調査とも1,000円であり、これが両調査とも全体の約4割を占めた。

つまり、地域の活動を維持するための負担金として、多くの人々が負担してもよいと考えている金額は、年間1,000円であり、2001年・2003年ともその傾向に差はみられなかった。

地域を維持するための労働力

- ・「公園の維持管理」のための労働時間については、2001年、2003年調査とも傾向は変わらず、年間10~12時間と答えた人がもっとも多い。
- ・「地域の行事」「地域活動や市民活動」のための労働時間については、最も回答が多かったのは、2001年は10~12時間であったが、2003年調査では0時間になった。

地域の活動に対して提供できる平均労働時間をみると(表1)、2001年では年間16.5~23.7時間であったが、2003年では年間11.4~16.6時間と、提供できる労働時間数が減少した。

また、最頻値(最も回答が多かった値)については、2001年調査では、3つの活動全てで10~12時間であったが、2003年調査では、「1. 近所の公園の維持管理」は10時間で変わらなかったが、「2. 地域の行事(祭り・運動会など)」「3. 地域活動や市民活動」は0時間になっていた。

この2つの活動については、2001年調査では10時間から12時間が全体の3割を占めていたが、2003年調査では、「4時間以下」と答えた人が全体の4割を占めていた。

行政へのかかわり方と負担金・労働力との関連

- ・共和主義的な考え方の人は、地域に対して資金や労働力を提供する意思の高い人が多い。

行政とのかかわり方と地域を維持するための負担金・労働力との関連をみると(図1~4)、共和主義的な考え方を持つ人が、最も地域への資金や労働力を提供する意思が高く、自由主義的な考え方・後見主義的な考え方を持つ人は低かった。

図1：行政とのかかわり方と公園の維持管理費

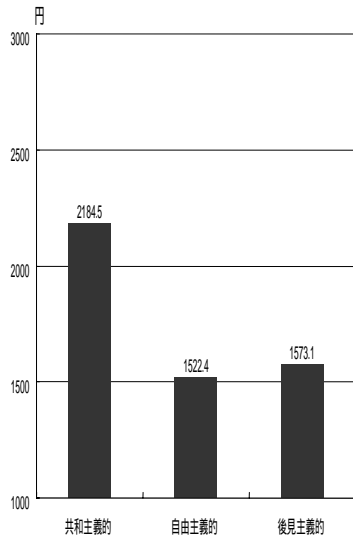


図2：行政とのかかわり方と地域の行事への負担金

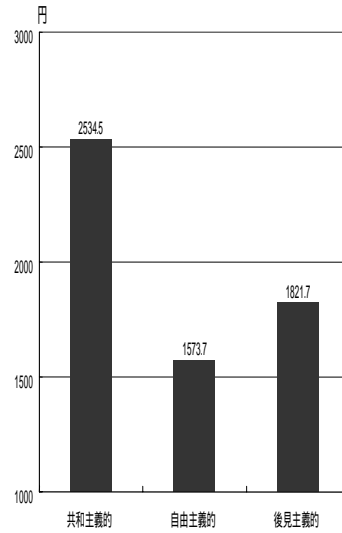


図3：行政とのかかわり方と地域の行事への提供時間

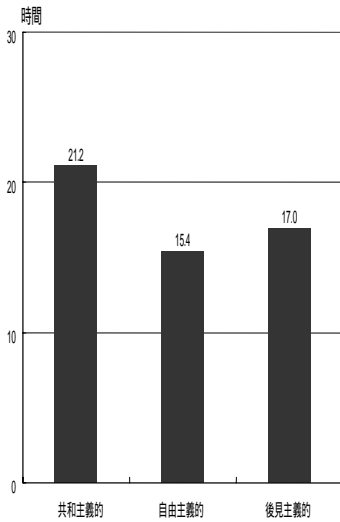
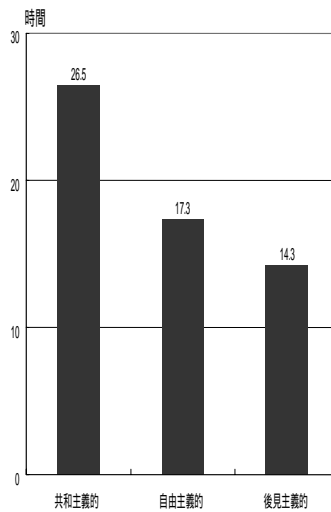


図4：行政とのかかわり方と地域活動や市民活動への提供時間



第4章 将来の災害に対するそなえ意識の変化

近年、東南海・南海地震の危険性が高まっており、国の中央防災会議によれば、その発生は今世紀前半にも予想される。政府は、2003年12月、「東南海・南海地震に係る地震防災対策の推進に関する特別措置法」に基づき、「東南海・南海地震対策大綱」を決定し、1都2府18県652市町村を「著しい地震災害の恐れがある地域」として「東南海・南海地震防災対策推進地域」(以下推進地域)に指定した。阪神・淡路大震災の被災地も、その多くがこの推進地域に含まれている。

さらに、東南海・南海地震については、特に2つの地震が同時発生した場合、空前の広域災害になることが予想され、国や地元自治体、さらには、近隣の自治体や外部ボランティアによる救援・復旧活動にも多大な困難が予想されている。そのため、国や自治体による「公助」のみならず、地域コミュニティを基盤とした住民間の「共助」、各世帯を基盤とした「自助」の必要性が強調されているところである。

そこで、2003年調査では、阪神・淡路大震災の体験や教訓、知識、情報等が、被災地に暮らす人々の将来の災害(東南海・南海地震)に対する「そなえ」意識を、どのように変化させたかについて検討した。

具体的には、第1に、東南海・南海地震によって、どの程度の被害が予測されるか(被害予測)について、第2に、自助・共助・公助に対する態度について、それぞれ検討した。

1. 被害の予測(将来の災害に対する不安)

2003年調査では、「京都大学防災研究所・巨大災害研究センターでは、阪神・淡路大震災以降、西日本は地震の活動期に入り、2040年ごろに、静岡から四国沖にかけて「東南海・南海地震」が起こると予想しています」との文章とともに、阪神地域を中心とした震度予想地図を質問紙に示し、表1の8種類の被害発生の可能性について、「可能性がまったくない - 可能性が非常に高い」の5段階評定で回答を求めた。(問48)

得られた回答に対して、因子分析を行った。具体的には、2001年調査と同様、主因子法を用いたところ、1因子が抽出された。この因子は、「東南海・南海地震」の被害予測の程度、あるいは、同地震に対する不安の程度を示す因子であり、前回調査と同様、本因子得点をもって、「南海・東南海地震の被害予測」得点とした。この得点は、点数が高いほど、大きな被害が出る可能性が高いと回答していることを示す。

表 1：東南海・南海地震の被害予測：因子分析の結果（主因子法）

	被害予測得点	
	因子負荷量	共通性
1 あなたやあなたの身近な誰かが亡くなったり、入院が必要なほどの病気・ケガをする	.725	.525
2 あなたのお住まいが、住めなくなるほどの大きな被害を受ける	.771	.594
3 あなたやご家族の、収入や財産に大きな被害がでる。	.818	.670
4 ふだんの生活が戻ってくるまで、長い時間がかかる。	.845	.715
5 あなたのまちの建物・施設が、広範囲にわたって大きな被害を受ける。	.844	.712
6 人々のつながりや、つきあいに大きな変化を受ける。	.758	.574
7 津波によって、海岸部や河川沿いに被害がでる。	.551	.304
8 被害によって家に帰れない人（帰宅困難者）がでる。	.691	.477
固有値	4.97	
寄与率（％）	62.16	

個人属性との関連

東南海・南海地震に対する被害予測と個人属性（性別・年齢・職業）との関連をみると、統計的に意味のある差は見られなかった。

これについては、2001年調査と同様であり、将来の災害に対する被害予測や不安の程度は、性別、年齢、職業といった個人属性によっては決まらないということを示唆している。

被害程度との関連

東南海・南海地震に対する被害予測と阪神・淡路大震災における被害程度との関連をみると、被害程度の大小によって、被害予測の程度は大きく左右されることがわかった。これは、2001年調査と同様の傾向であった。

すなわち、過去の被災体験（被災の程度）が、将来発生するかもしれない地震に対する被害予測、不安の程度に大きな影響を及ぼすことがわかった。

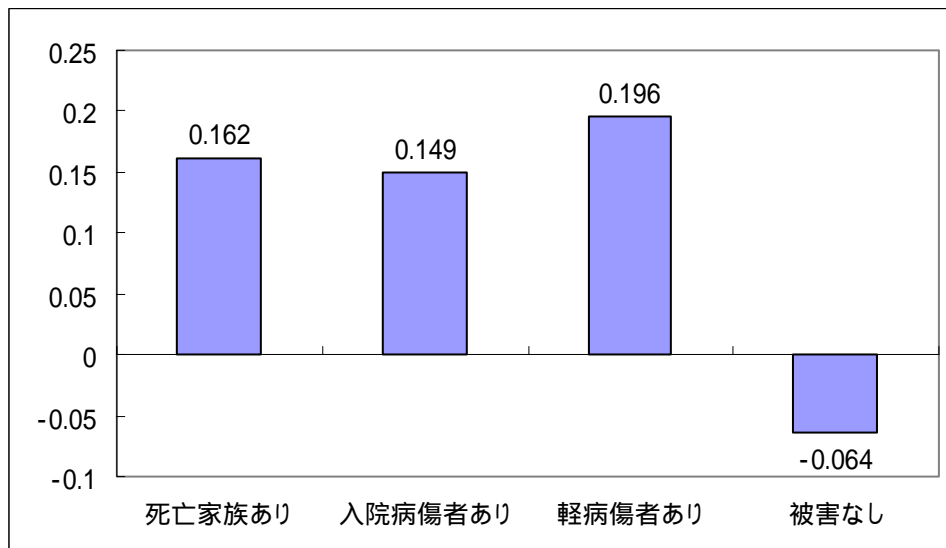
ア．人的被害との関連

- ・「死亡家族あり」よりも「軽病傷者あり」の人が大きな被害を予測していた。
- ・「人的被害なし」の人は、被害程度を小さく見積もっていた。(図1)

東南海・南海地震の被害予測と、回答者本人や同居家族の人的被害（死亡家族あり、入院病傷者あり、軽病傷者あり、人的被害なし）との関連をみると、統計的に意味のある差が認められた。

「死亡家族あり」の人よりも「軽病傷者あり」の人の方が、大きな被害を予測していた。また、「人的被害なし」の人は、将来の地震に対して、被害を小さく見積もる傾向があった。なお、この傾向は、2001年調査でもほぼ同様であった。

図1：東南海・南海地震の被害予測（人的被害別）



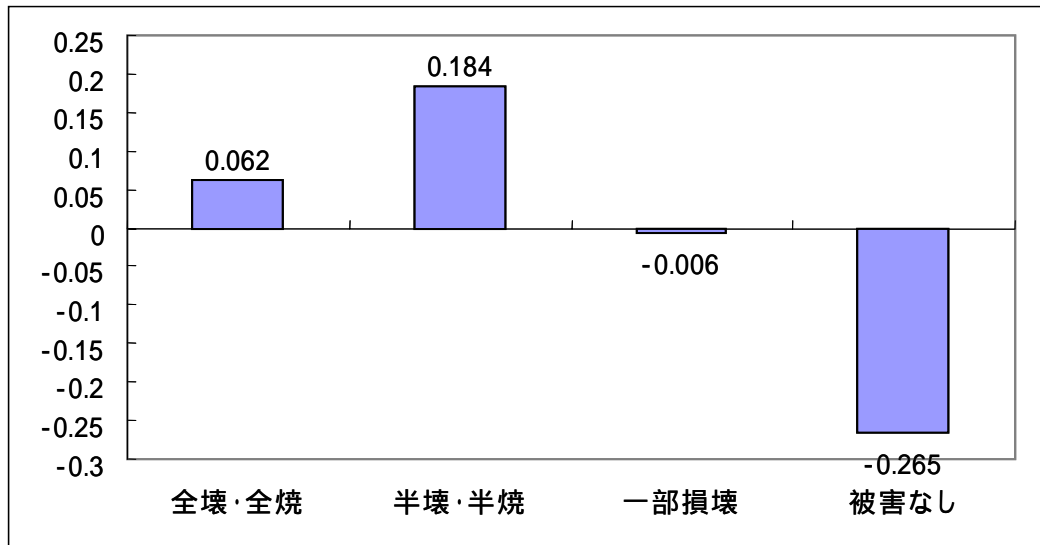
イ．家屋被害との関連

- ・「全壊・全焼」の人より「半壊・半焼」の人の方が、被害程度が大きくなると予測する人が多かった。
- ・「被害なし」の人は、被害程度を小さく見積もっていた。(図2)

東南海・南海地震の被害予測と、回答者の家屋被害（全壊・全焼、半壊・半焼、一部損壊、被害なし）との関連をみると、統計的に意味のある差が認められた。

「半壊・半焼」の人が、他よりも突出して大きな被害を予測していた。また、「被害なし」の人は、将来の地震に対して、被害を小さく見積もる傾向があった。なお、この傾向は、2001年調査でもほぼ同様であった。

図 2：東南海・南海地震の被害予測（家屋被害別）



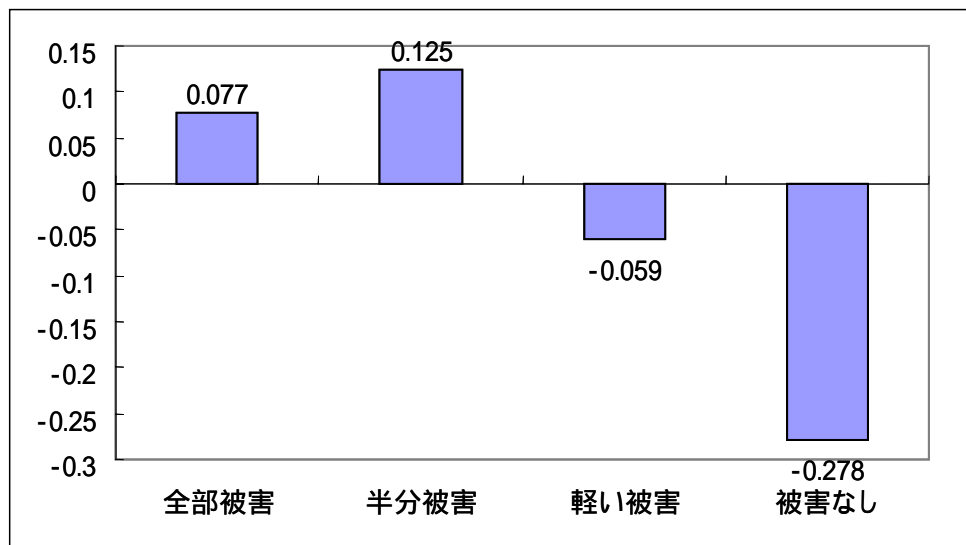
ウ．家財被害との関連

- ・「半分被害」の人は、被害程度が大きくなるという予測が多かった。
- ・「被害なし」の人は、被害程度を小さく見積もっていた。（図 3）

東南海・南海地震の被害予測と、回答者の家財被害（全部被害、半分被害、軽い被害、被害なし）との関連をみると、統計的に意味のある差が認められた。

「半分被害」の人が、「全部被害」の人よりも大きな被害を予測していた。また、「被害なし」の人は、将来の地震に対して、被害を小さく見積もる傾向があった。なお、この傾向は、2001年調査と同様であった。

図 3：東南海・南海地震の被害予測（家財被害別）



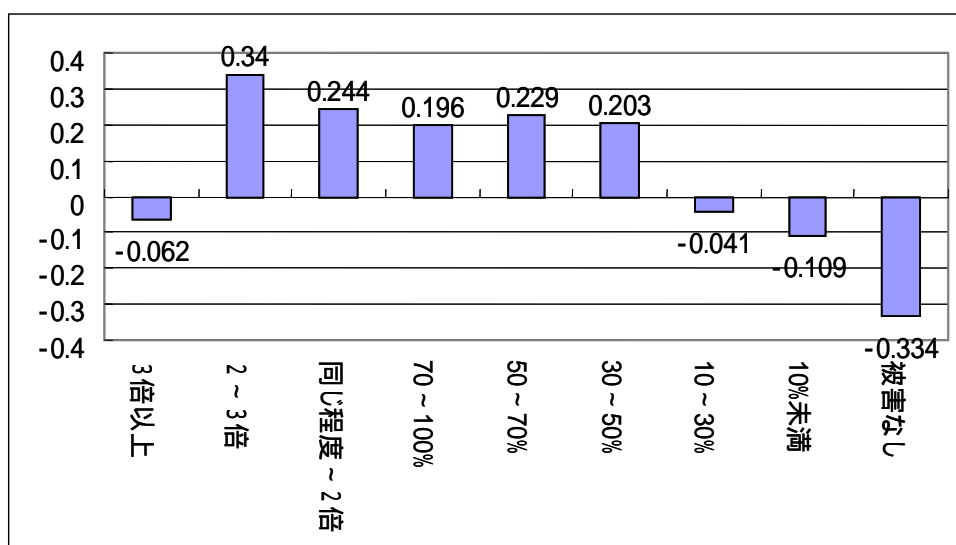
エ．被害総額との関連

被害総額が年収の「2～3倍」の人に、被害程度が大きくなると予測する人が多い。「被害なし」の人は、被害程度を小さく見積もっている。(図4)

東南海・南海地震の被害予測と、回答者の被害総額(住宅、家財等をすべて含む)との関連をみると、統計的に意味のある差が認められた。

被害総額が年収の「2～3倍」「同じ程度～2倍」などと答えた人は、被害総額が年収の「3倍以上」の人よりも大きな被害を予測していた。また、「被害なし」の人は、将来の地震に対して、被害を小さく見積もる傾向があった。なお、この傾向は、2001年調査と同様であった。

図4：東南海・南海地震の被害予測(被害額の年収に占める割合別)



まとめ

以上をまとめると、東南海・東南海地震の被害がどの程度になるかという予測は、回答者の年齢・性別・職業といった個人属性によって決まるのではなく、阪神・淡路大震災で、実際にどの程度の被害を受けたかによって大きく左右されることがわかった。つまり、過去の被災体験は、将来の災害に対する認知・予測に大きな影響を及ぼすことが示唆される。特に、過去の災害で被害のなかった人は、災害そのものは体験しているにもかかわらず、将来の災害に対しては楽観的な被害予測をしているという点は、留意しておく必要がある。

また、将来予測される災害(東南海・南海地震)に対して、大きな被害が発生すると予想した人は、震災で大きな被害を受けた人ではなく、「中程度」の被害を受けた人であった。つまり、「死亡家族あり」、「全壊・全焼」といった大きな被害を受けた人は、中程度の被害を受けた人よりも、むしろ、被害を小さく予測する傾向があった。

これには、いくつかの心理的メカニズムが関わっていると考えられる。

第1に、大きな被害を受けた人々が、「これ以上悪いことが起こるわけがない(起こって欲しくない)」といった心的メカニズムの結果として、震災で実際に受けた被害以上のものを想像しえないことが影響していることが考えられる。

第2に、事態に対するコントロール感覚(制御感覚)が関与している可能性がある。すなわち、人間は、自然に対しても、あるいは、他人の行動に対しても、自らがコントロールできる可能性に上限があることを直観的に知っている。このコントロール感覚が高い対象に対して、恐怖や不安を感じないのは当然である。そのため、被災程度が小さかった人は、将来の被害を総体的に低く予測していると考えられる。

ここで注目したいのは、非常に大きな被害を被った人が、将来の災害による被害程度を低く予測していた点であり、このことから、コントロール感覚が極端に低い場合にも、恐怖や不安を感じなくなる傾向にあることが考えられる。

すなわち、災害に対するコントロール感覚が高すぎると、無警戒(油断)を生む一方、コントロール感覚が低すぎると、それは、諦めにつながるともいえる。

これらのことから、個人(自助)、地域社会(共助)、自治体(公助)それぞれのレベルで、将来の災害に対する適度なコントロール感覚を身につけていくことが、将来の災害に対する高い警戒感を醸成することにつながることを示唆される。

2. 自助・共助・公助への態度 - 将来へのそなえ -

非常に広域にわたって大規模な被害が発生することが予想される東南海・南海地震では、国や自治体による「公助」のみならず、地域コミュニティを基盤とした住民間の「共助」、各世帯を基盤とした「自助」の必要性が強調されている。

そこで、本調査では、阪神・淡路大震災の体験や教訓、知識、情報が、被災地に暮らす人々の将来の災害(「南海・東南海地震」)に対する「そなえ」意識をどのように変化させたかについて検討した。

具体的には、以下の2つの質問項目によって、「自助・共助・公助」に対する意識をとらえることを試みた。

第1の質問項目は、主として、「自助・共助」の側面を念頭においたものである。具体的には、『以下のことがらについて、すでに「やっている」、または「生活の不便・自分自身の経済的な負担がある程度あっても、やらなければならない」と思うようになったことがあれば教えて下さい。それぞれについて、あてはまる番号1つに をしてください。』という項目である。そして、消火器や三角バケツを準備している、近くの学校や公園など、避難する場所を決めているなど、合計18項目について、「やっている」、「やるべきだ」、「やったほうがよい」、「やる必要がない」の4段階評定での回答を求めた。

(問49)

第2の質問項目は、主として、「公助」の側面を念頭においたものである。具体的には、『あなたが大地震に関して、国や地方公共団体に力を入れてもらいたい対策はどのようなことですか。この中のそれぞれについて、あてはまる番号1つに をしてください。』という項目である。そして、避難経路や避難場所の整備、食料・飲料水・医薬品の備蓄など、合計12項目について、「やるべきだ」、「やったほうがよい」、「やる必要がない」の3段階評定での回答を求めた。(問50)

将来へのそなえ(何が求められているか)

問49(18項目)、問50(12項目)の合計30項目に挙げられた「そなえ」について、どのようなそなえが最も求められているのかを概括的に把握した。

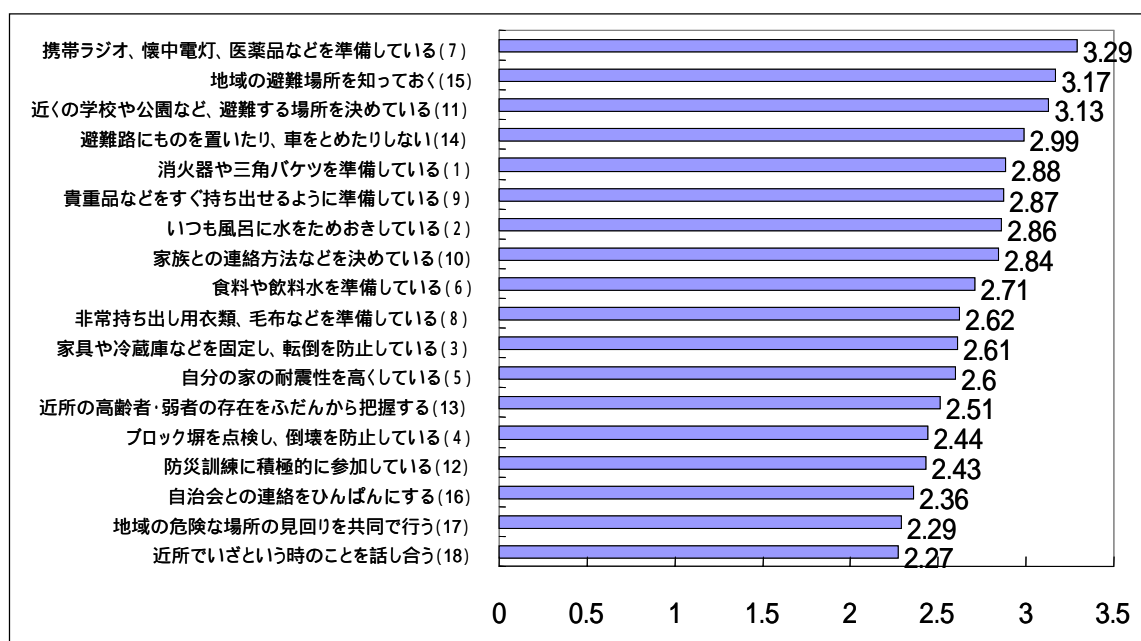
すなわち、4段階評定の問49に含まれる18項目については、「やっている」を4点、「やるべきだ」を3点、「やったほうがよい」を2点、「やる必要がない」を1点として得点化し、3段階評定の問50に含まれる12項目については、「やるべきだ」を3点、「やったほうがよい」を2点、「やる必要がない」を1点として得点化した。

ア.「自助・共助」に関わる項目(図5)

自助・共助に関して求められている項目をみると、「携帯ラジオ、懐中電灯、医薬品などを準備している」が最も多く、「地域の避難場所を知っておく」、「近くの学校や公園など、避難する場所を決めている」などがそれに続いた。

他方で、自治会を中心とした活動については、優先度が低く、「近所でいざという時のことを話し合う」が最下位となったほか、「地域の危険な場所の見回りを共同で行う」、「自治会との連絡をひんぱんにする」もそれに続いた。

図5：何が求められているか(自助・共助)

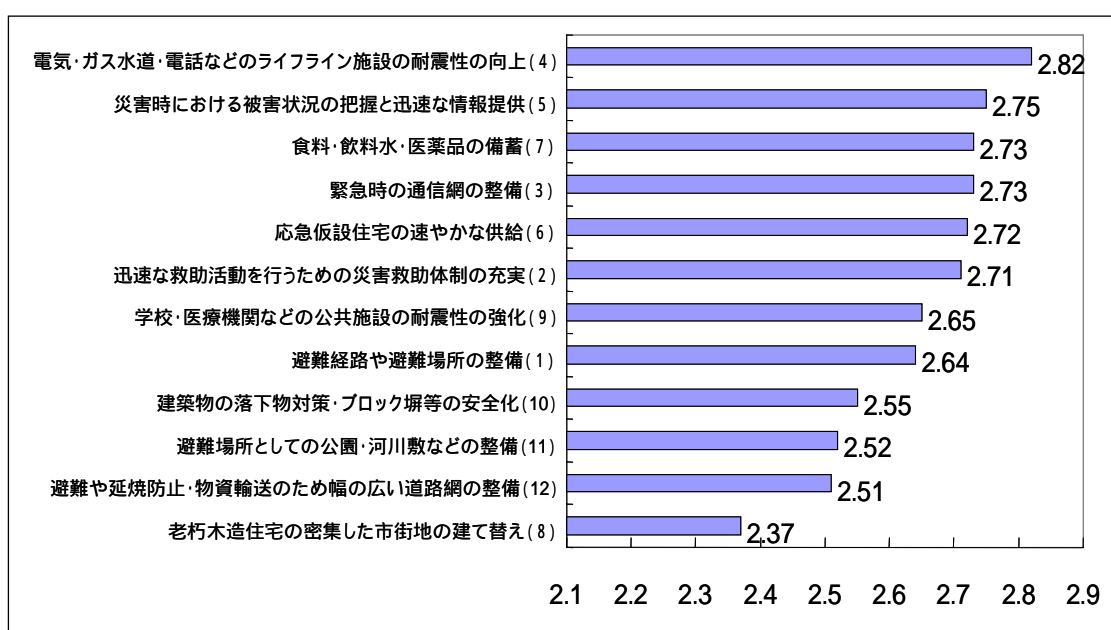


イ．公助に関わる項目（図6）

公助に関して求められている項目をみると、「電気・ガス水道・電話などのライフライン施設の耐震性の向上」が最も多く、「災害時における被害状況の把握と迅速な情報提供」、「緊急時の通信網の整備」などがそれに続いた。

他方で、より抜本的な改善や広域にわたる取り組みが必要とされる項目については、その必要性が低く評価される傾向にあった。例えば、「老朽木造住宅の密集した市街地の建て替え」が最下位になったほか、「避難や延焼防止・物資輸送のため幅の広い道路網の整備」、「避難場所としての公園・河川敷などの整備」もそれに続いた。

図6：何が求められているか（公助）



自助・共助・公助意識の構造分析

・被災者の自助・共助・公助意識は、6つのグループに分類された。（図7）

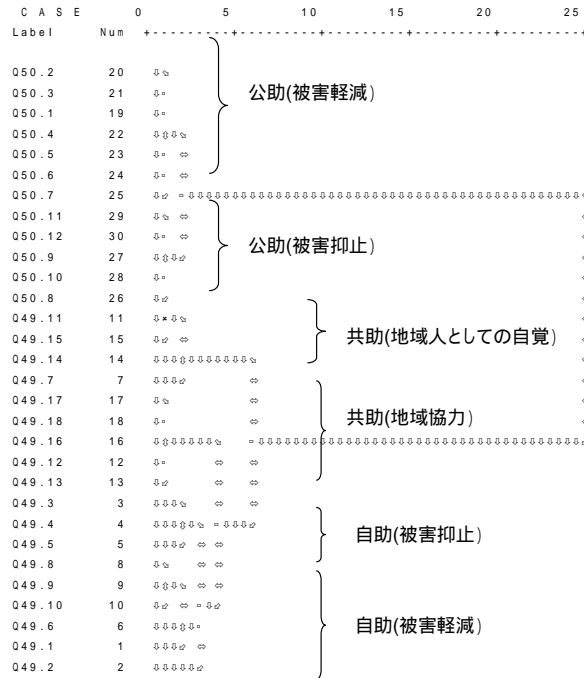
ここでは、自助・共助に関する項目群（問49）と、公助に関する項目群（問50）が、回答者の回答パターン（意識）の上で、どのような構造を形成しているのかどうかを分析した。

分析には、クラスター分析（ワード法）と呼ばれる手法を用いた（クラスターとは、果実などの房、かたまりを意味する）。

図7はデンドログラムと呼ばれるもので、回答パターンに類縁性が見られた項目が、相互にグルーピングされて表示される。つまり、回答者の意識の上で、類似していると認識されている項目同士は、図中で近距離に配列され、かつ矩形の記号で集約されて表示される。項目相互の関連性が薄まるほど、遠距離に配置され、より高次のレベルで（図7では右側で）矩形で集約されて表示される。

分析の結果、合計30項目は、大別して、以下の6つのグループに分類されることがわかった。

図7：自助・共助・公助項目のクラスター分析図



ア．「公助（被害軽減）」のクラスター

第1は、迅速な救助活動を行うための災害救助体制の充実（問50.2）、緊急時の通信網の整備（問50.3）、避難経路や避難場所の整備（問50.1）、電気・ガス水道・電話などのライフライン施設の耐震性の向上（問50.4）、災害時における被害状況の把握と迅速な情報提供（問50.5）、応急仮設住宅の速やかな供給（問50.6）、食料・飲料水・医薬品の備蓄（問50.7）の7項目から成るクラスターである。

これらは、すべて「公助」に関わる項目であり、かつ、災害対応時のモノ・情報のフローに関する対応を中心に、被災後の被害軽減に関わる項目である。

よって、「公助（被害軽減）」のクラスターと名付けた。

イ．「公助（被害抑止）」のクラスター

第2は、避難場所としての公園・河川敷などの整備（問50.11）、避難や延焼防止・物資輸送のため幅の広い道路網の整備（問50.12）、学校・医療機関などの公共施設の耐震性の強化（問50.9）、建築物の落下物対策・ブロック塀等の安全化（問50.10）、老朽木造住宅の密集した市街地の建て替え（問50.8）の5項目から成るクラスターである。

これらも、すべて「公助」に関する項目であり、かつ、災害発生以前のハードウェアの整備によって被害を抑止する方策が中心である。

よって、「公助（被害抑止）」のクラスターと名付けた。

ウ．「共助（地域人としての自覚）」のクラスター

第3は、近くの学校や公園など、避難する場所を決めている（問 49.11）地域の避難場所を知っておく（問 49.15）避難路にものを置いたり、車をとめたりしない（問 49.14）携帯ラジオ、懐中電灯、医薬品などを準備している（問 49.7）の4項目から成るクラスターである。

これらの4項目は、共助（地域）と自助（個人・家庭）との境界領域を構成する内容になっており、地域での防災を有効ならしめるために、個人として貢献できること、地域人として果たさねばならない義務が、ここにはリストアップされている。

また、図5に示したとおり、これら4項目は、もっとも優先度が高いとされた項目群でもあり、多くの回答者が「やっている」、「やるべきだ」と回答している。

さらに、図7に示されるとおり、この第3クラスターは、後述の第5、第6クラスター（自助のクラスター）よりも、第4クラスター（「共助」のクラスター）とより近縁性を有する。

よって、「共助（地域人としての自覚）」のクラスターと名付けた。

エ．「共助（地域協力）」のクラスター

第4は、地域の危険な場所の見回りを共同で行う（問 49.17）近所でいざという時のことを話し合う（問 49.18）自治会との連絡をひんばんにする（問 49.16）防災訓練に積極的に参加している（問 49.12）近所の高齢者・弱者の存在をふだんから把握する（問 49.13）の5項目から成るクラスターである。

これらは、すべて「共助」に関する項目であり、かつ、地域内の協力、相互援助によって、災害対応を進めようとする項目である。

よって、「共助（地域協力）」のクラスターと名付けた。

オ．「自助（被害抑止）」のクラスター

第5は、家具や冷蔵庫などを固定し、転倒を防止している（問 49.3）ブロック塀を点検し、倒壊を防止している（問 49.4）自分の家の耐震性を高くしている（問 49.5）の3項目から成るクラスターである。

これらは、すべて「自助」に関する項目であり、かつ、家庭において、災害による被害発生そのものを抑止しようとする方策ばかりである。

よって、「自助（被害抑止）」のクラスターと名付けた。

カ．「自助（被害軽減）」のクラスター

第6は、非常持ち出し用衣類、毛布などを準備している（問 49.8）貴重品などをすぐ持ち出せるように準備している（問 49.9）家族との連絡方法などを決めている（問 49.10）食料や飲料水を準備している（問 49.6）消火器や三角バケツを準備している（問 49.1）いつも風呂に水をためおきしている（問 49.2）の6項目から成るクラスターである。

これらも、すべて「自助」に関する項目であり、かつ、家庭において、災害発

生時の対応を有効ならしめ、被害の発生・拡大を最小限に抑えることを念頭においた対応項目である。

よって、「自助（被害軽減）」のクラスターと名付けた。

さて、図7をみると、災害に対するそなえ意識は、「公助期待」（第1、2クラスター）「共助意識」（第3、第4クラスター）「自助準備」（第5、第6クラスター）の3要素から構成されているといえる。

詳細な構成をみると、「公助期待」（第1・2クラスター）と「共助意識・自助準備」（第3～6クラスター）とは明確に分かれている。また、「共助意識（地域協力）」は「自助準備」と関連を有し、さらに、それらと「共助意識（地域人としての自覚）」が関連を有するという構成になっている。

自助準備・共助認識・公助期待と諸項目との関係

前節の分析の結果、自助・共助・公助は、互いに独立した防災意識を構成していると考えられることができる。

そこで、ここでは、自助準備・共助認識・公助期待の高低を表現する得点をそれぞれ算出し、その得点を、回答者の属性項目などの重要な項目ごとに比較する。

自助準備の得点については、クラスター分析の結果に基づいて、第5および第6クラスターに分類された9項目の回答（4段階評定）を合計し（合計点は、9～36点となる）、それを項目数の9で除した得点（1～4点）とした。

共助認識の得点については、同様に、第3および第4クラスターに分類された9項目の回答（4段階評定）を合計し（合計点は、9～36点となる）、それを項目数の9で除した得点（1～4点）とした。

公助期待についても、クラスター分析の結果に基づき、第1および第2クラスターに分類された12項目の回答（3段階評定）を合計し（合計点は、12～36点となる）、それを項目数の12で除した得点（1～3点）を、自助準備、共助認識の得点と相互比較できるように、3分の4倍した数値（1～4点）をもって得点とした。

ア．自助・共助・公助意識

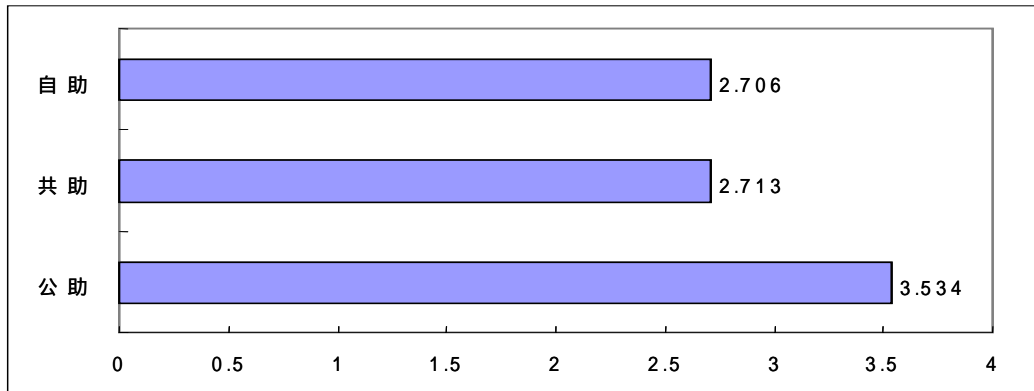
- ・公助期待は、自助準備、共助認識よりも高い。
- ・回答者属性（性別、年齢別、職業）によって、自助・共助・公助意識に大きな差は見られない。

公助に対する期待が、自助準備、共助認識よりも高い傾向が見られた。

これは、国や地方自治体による公的な防災施策に対する期待が高いこと、裏を返せば、それらに依存し、地域社会、家庭、個人による防災に対する意識が依然として低いレベルにとどまっていることを示している。（図8）

また、個人属性（性別・年齢・職業）と自助準備・共助意識・公助期待との間には、統計的に意味のある差は見られなかった。

図8：自助・共助・公助意識得点（全体平均）



イ．被害程度との関連

- ・自助準備の意識は、被害程度に影響を受け、被害程度の大きかった人ほど、自助準備の意識が高い傾向にあった。

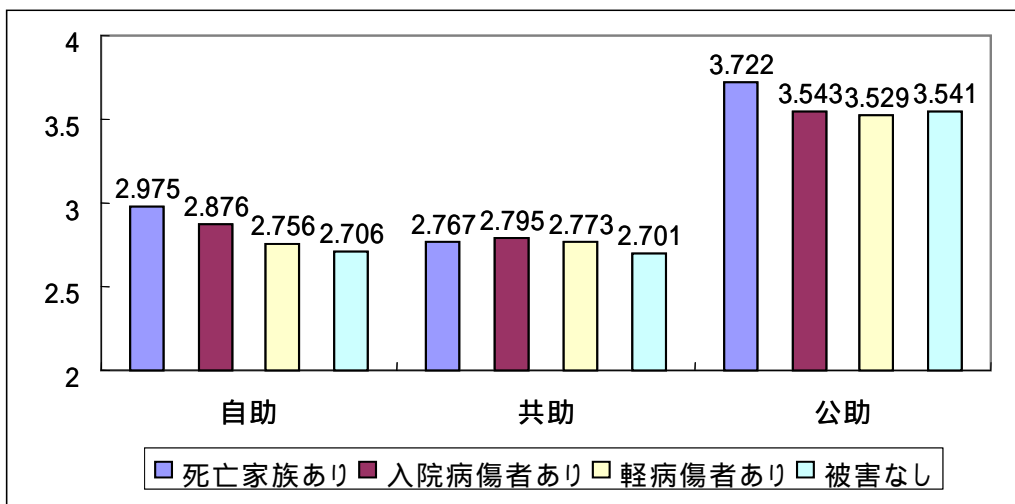
自助準備の意識と被害程度(ここでは、人的被害程度)の関連をみると(図9)、自助準備の意識は、死亡家族あり、入院病傷者あり、軽病傷者あり、被害なしの順で高く、被害程度の大きかった人ほど、自助準備が高い傾向にあった。

他方、共助認識、公助期待についても、人的被害の程度により多少の差が見られるが、統計学的には意味のない差である。

なお、これとほぼ同様の結果が、家屋被害、家財被害、収入被害についても見られた。

よって、結論として、過去の災害による被災体験は、当事者の自助準備の醸成には寄与するものの、共助認識の高低、公助期待の高低にはあまり影響を及ぼさないといえる。

図9：自助・共助・公助意識得点（人的被害別）



2001年調査との比較

本調査項目は、2003年調査においてはじめて盛り込まれた項目であり、2001年調査との比較はできない。

ただし、2001年調査には、東南海・南海地震発生時に、「復旧・復興を優先させるべき施設・サービス」について尋ねた調査項目が盛り込まれていた。

これは、災害後の復旧・復興に焦点を当てた調査項目であり、本調査における項目と必ずしも正確に対応するものではないが、本調査における「公助」項目に概ね相当するものと言える。

ここで、両者を比較して注目すべき点は、被災者のライフライン施設の復旧・復興に対する意識の高さである。

2001年調査の項目は、いくつかの施設・サービスから復旧・復興を優先させるべきものを答えてもらうものであり、その結果は、1位が水道、2位が電力、3位がガス、4位が総合・救急病院、5位が電話（複数回答）というものであった。

本調査でも、図6に示した通り、公助項目でもっとも高い得点を示したのは、ライフライン施設の整備であった。

これらから、被災者の「公助」に対する期待の中心は、ライフラインであると考えられる。

第2部 生活復興感

第1章 生活復興感尺度の結果

「生活の充実度」「生活の満足度」「1年後の生活の見通し」の3つに関する質問項目を設けた。

具体的には、生活の充実度に関しては、「あなたは現在の生活を震災前の生活と比べてどのように感じておられますか」として、「仕事の量は」「忙しく活動的な生活を送ることは」「自分のしていることに生きがいを感じることは」「まわりの人びととうまくつきあっていくことは」「日常生活を楽しく送ることは」「自分の将来は明るいと感ずることは」「元気ではつらつとしていることは」の7項目に対して、「かなり減った かなり増えた」までの5選択肢で回答を求めた。(問29)

生活の満足度については、「あなたは現在、つぎにあげたことがらについて、どの程度満足されていますか。」として、「毎日のくらしに」「ご自分の健康に」「今の人間関係に」「今の家計の状態に」「今の家庭生活に」「ご自分の仕事に」の6項目に対して「たいへん不満である たいへん満足している」の5選択肢で回答を求めた。(問31)

1年後の生活の見通しについては、「1年後のあなたを想像してください。あなたは今よりも生活が良くなっていると思いますか、どうですか。」として、「かなり良くなる かなり悪くなる」まで5選択肢を与えた。(問33)

これら3種類の質問を、質問紙の中で、異なった場所でたずねた。

得られた回答により、これらの14質問項目が「生活復興感」という一つの潜在変数をはかっているかどうか確かめるために、因子分析を行った結果、1因子が抽出された。

このことから、14質問項目は、確かに一つの潜在変数を測っていることがわかり、この潜在変数を「生活復興感」と名づけ、2001年調査に引き続き、2003年調査でも分析対象とした。(表1)

表1 2003年度生活復興感尺度・因子分析結果(N=1203)

		因子負荷量	共通性
問29	震災前と比べて増えましたか？減りましたか？		
	1 忙しく活動的な生活を送ること	0.564	0.318
	2 生きがいを感じることに	0.718	0.515
	3 まわりの人々とのつきあい	0.610	0.372
	4 日常生活を楽しく送ること	0.719	0.516
	5 将来は明るいと感ずること	0.696	0.484
	6 元気ではつらつとしていること	0.707	0.499
	7 仕事の量	0.388	0.150
問31	あなたの満足度は？		
	1 毎日のくらしに	0.687	0.472
	2 ご自分の健康に	0.549	0.301
	3 今の人間関係に	0.634	0.402
	4 今の家計の状態に	0.567	0.321
	5 今の家庭生活に	0.647	0.419
	6 ご自分の仕事に	0.627	0.394
問33	1年後のあなたは？		
	3 今より生活はよくなっていますか？	0.428	0.183
固有値		5.347	
寄与率(%)		38.196	

2001年調査との比較

・2003年調査の生活復興感の全体傾向を、2001年調査と比較すると、統計的に意味のある差異は見られなかった。

「生活復興感」の全体傾向について、2001年調査と2003年調査との比較を行った。

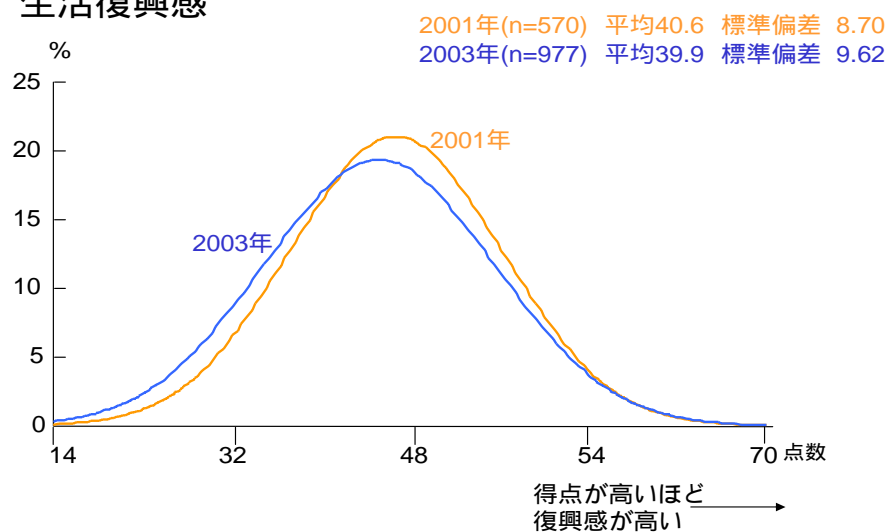
具体的な方法としては、それぞれの調査での生活復興感に関する13設問に対する回答を得点化し、それぞれの調査年における生活復興感得点とした。(表2)

表2 生活復興感・得点表

震災前と比べて増えましたか？減りましたか？	かなり増えた	少し増えた	変わらない	少し減った	かなり減った
1 忙しく活動的な生活を送ること	5点	4点	3点	2点	1点
2 生きがいを感ずること	5点	4点	3点	2点	1点
3 まわりの人々とのつきあい	5点	4点	3点	2点	1点
4 日常生活を楽しく送ること	5点	4点	3点	2点	1点
5 将来は明るいと感じること	5点	4点	3点	2点	1点
6 元気で生活していること	5点	4点	3点	2点	1点
7 仕事の量	5点	4点	3点	2点	1点
あなたの満足度は？	いつもある	たびたびある	たまにある	まれにある	まったくない
1 毎日のくらしに	5点	4点	3点	2点	1点
2 ご自分の健康に	5点	4点	3点	2点	1点
3 今の人関係に	5点	4点	3点	2点	1点
4 今の家計の状況に	5点	4点	3点	2点	1点
5 今の家庭生活に	5点	4点	3点	2点	1点
6 ご自分の仕事に	5点	4点	3点	2点	1点
1年後のあなたは？	かなり良くなる	やや良くなる	変わらない	やや悪くなる	かなり悪くなる
今より生活はよくなっていますか？	5点	4点	3点	2点	1点

2001年調査・2003年調査における生活復興感得点の代表値を比較すると、統計的に意味のある差異はなかった。(図1)

図1 生活復興感



2001年と2003年間には差無し(F(1,1545)=1.963, n.s.)

第2章 生活復興感を規定する生活復興課題

本章においては、2001年調査に引き続き、生活再建課題7要素*と生活復興感との関連を調べた。

*「生活再建課題7要素」とは、震災5年目に被災地で行われた神戸市震災復興検証の市民ワークショップにおける言語データを集約した結果導き出された7つの要素（すまい・人と人とのつながり・まち・そなえ・こことからだ・くらしむき・行政とのかかわり）である。

1. すまい

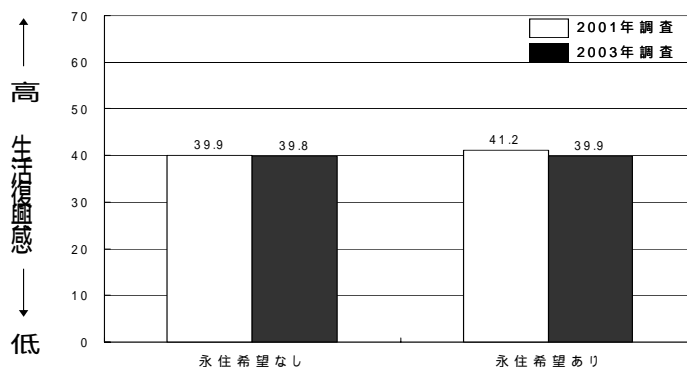
すまいの永住希望と生活復興感

・永住希望の有無によって、生活復興感には差異がなかった。（図1）

すまいの永住希望と生活復興感との関連をみると、統計的に意味のある関連はなかった。

これは、全体の81.7%の人が、現在の住まいに満足しており、「ずっと暮らしていきたい」と答えているためと考えられる。

図1 生活復興感（永住希望）

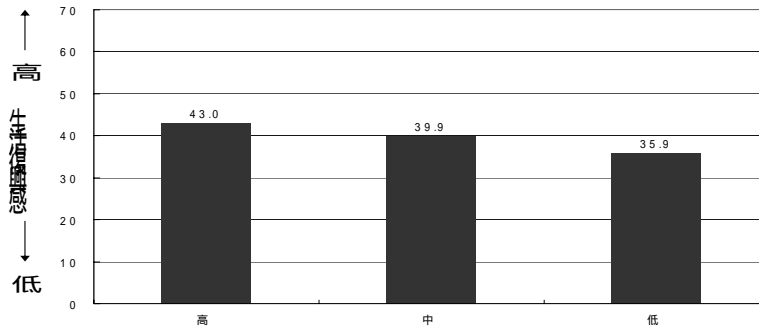


すまい満足度と生活復興感

・すまい満足度の高い人ほど、生活復興感が高い（図2）

すまい満足度と生活復興感との関連をみると、現在の自分自身の住居に対して、高い満足度を示す人ほど、生活復興感が高いことが明らかとなった。

図2 生活復興感（住宅満足度）



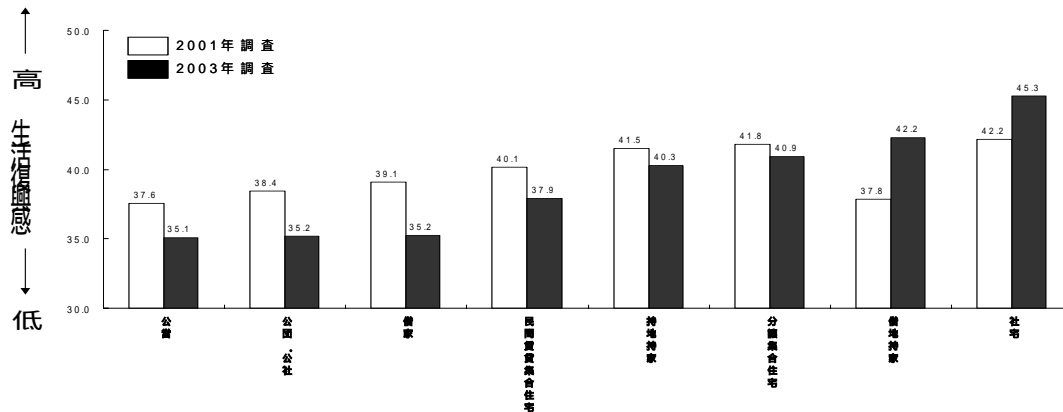
すまいの形態と生活復興感

- ・社宅、借地持家、持地持家、分譲集合住宅に住んでいる人の生活復興感が高かった。公営・公団・公社・借家に住んでいる人の生活復興感が低かった。(図3)

すまいの形態と生活復興感との関連を見ると、2001年調査では、社宅に住んでいる人の生活復興感が最も高く、次に、自分で住宅を所有している人（持地持家、分譲集合住宅）の生活復興感が高かった。逆に、自分で住宅を所有していない人（公営住宅、借地持家、公団・公社、借家）の生活復興感は低かった。民間賃貸集合住宅に住んでいる人の生活復興感、住宅所有と非所有者の間に位置していた。

2003年調査では、社宅に住んでいる人の生活復興感さらには高くなり、次に生活復興感が高かったのは、2001年調査では生活復興感が低かった「借地持家」の人であった。次いで、自分で住宅を所有している人たち（持地持家、分譲集合住宅）の生活復興感が高かった。一方、自分で住宅を所有していない人たち（公営、公団・公社、借家）の生活復興感、2001年調査に比べて、さらに低かった。

図3 生活復興感（住居の形態）



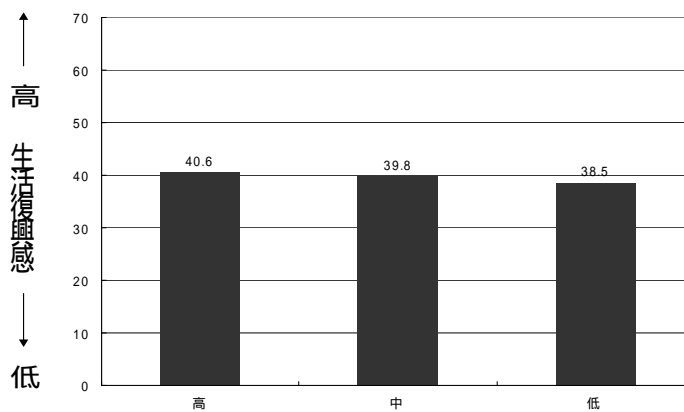
2. 人と人とのつながり

市民性と生活復興感

- ・市民性の高い人ほど、復興感が高かった。（図4）

市民性と生活復興感との関連をみると、市民性という震災後の新しい価値を自分の価値観とした人ほど、生活復興感が高いことがわかった。

図4 生活復興感（市民性）



近所づきあい、地域活動と生活復興感

- ・2001年・2003年調査とも、近所づきあいが多く、地域活動にたびたび参加する人ほど、生活復興感が高かった。（図5）（図6）

近所づきあい（「おすそわけする家の数」、「買い物や食事に行く人の数」）や地域活動（「まちのイベントに参加する頻度」、「まちのイベントに世話役として参加する頻度」）と生活復興感との関連をみると、近所づきあいや地域活動に積極的に関わっている人ほど、生活復興感が高かった。2001年調査も同様の傾向であった。

図5：生活復興感（近所つきあい）

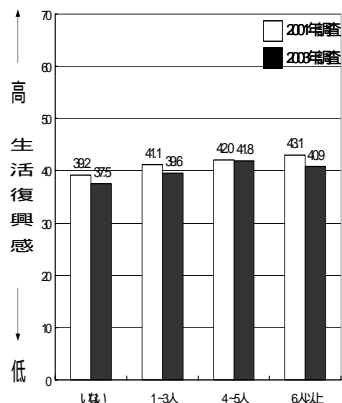
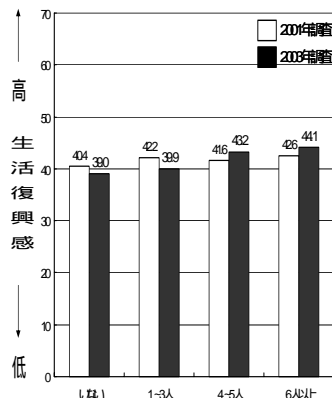


図6 生活復興感（地域活動）



家族関係と生活復興感

- ・2001年・2003年調査とも、家族成員間のきずな（心理的な結びつき）かじとり（リーダーシップ）について、中庸なバランスの取れた人ほど、復興感が高かった。（図7）（図8）

家族関係と生活復興感との関連をみると、家族関係に中庸なバランス（きずなでは「サラリ、ピッタリ」、かじとりでは「きっちり、柔軟」）の取れた人ほど、生活復興感が高かった。2001年調査においても、同様の傾向であった。

図7 生活復興感（家族のきずな）

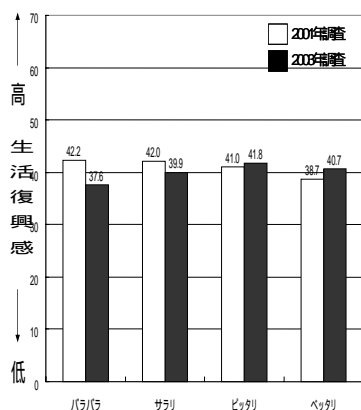
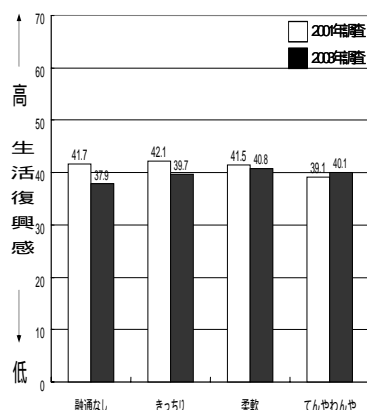


図8 生活復興感（家族のかじとり）



3. まち

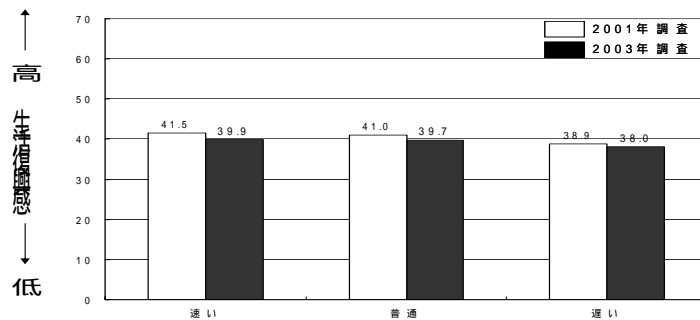
まちの復興速度感と生活復興感

・2001年・2003年調査とも、まちの復興が速いと感じている人ほど、生活復興感が低かった。(図9)

まちの復興速度感について、自分の「まち」の復旧・復興を「かなり速い」「やや速い」と答えた人に「速い」「ふつう」の人に「ふつう」「やや遅い」「かなり遅い」と答えた人に「遅い」のカテゴリーを与えて、生活復興感との関連をみた。

その結果、まちの復興が「速い」と感じている人ほど、生活復興感が高かった。2001年調査においても、同様の傾向であった。

図9 生活復興感（復興速度感）



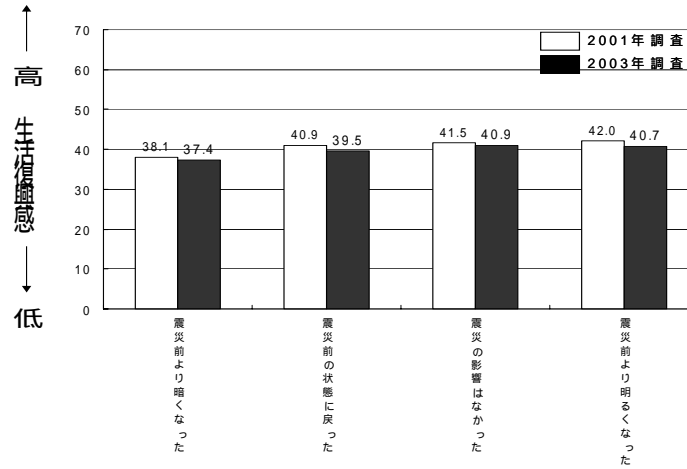
地域の夜の明るさと生活復興感

・2001年・2003年調査とも、地域の夜の明るさについて「震災前より明るくなった」と感じている人ほど、生活復興感が高かった。(図10)

地域の夜の明るさについての感覚と生活復興感との関連をみると、「震災前より明るくなった」と答えた人は生活復興感が高く、次いで、「震災の影響はなかった」と答えた人の生活復興感が高かった。「震災前より暗くなった」と答えた人の生活復興感が目立って低かった。「震災前の状態に戻った」と答えた人の生活復興感、中庸な値をとっていた。2001年調査においても、同様の傾向であった。

これらから、まちが元の状態に戻る（復旧）だけの状態では、生活復興感が高くも低くもない値であるが、まちが震災前よりよい状態（復興）になると、生活復興感が高くなることがわかった。

図 1 0 生活復興感（地域の夜の明るさ）



4 . そなえ

被害予測（将来の災害に対する不安）と生活復興感

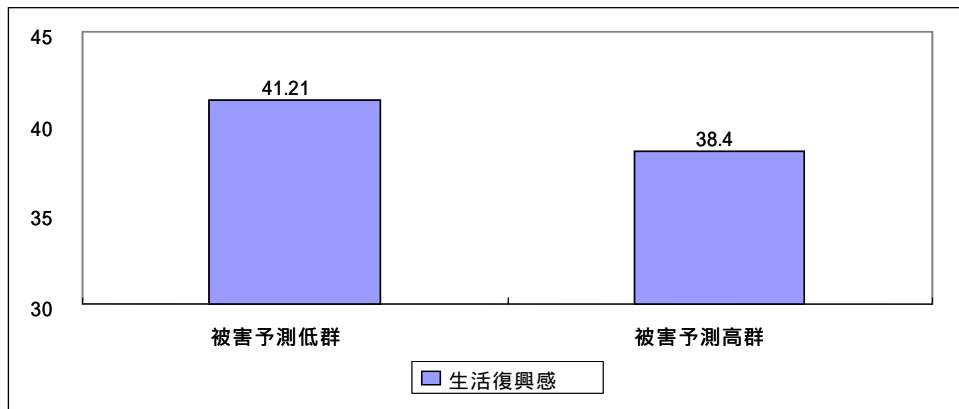
- ・ 将来の災害による被害を低く予測している人の方が、生活復興感が高かった。

（図 11）

被害予測と生活復興感との関連をみると、将来の災害による被害を相対的に低く予測している人の方が、高く予測している人より、生活復興感が高かった。

このことから、将来の被害を相対的に低く予測している人は、震災からの生活復興を成し遂げただけではなく、そのことが、将来の災害への不安の払拭にもつながっていると見える。また、将来の被害を相対的に高く予測している人は、震災からの復興が相対的に遅れていると同時に、そのことが、将来の災害に対する不安にもつながっていると考えられる。

図 1 1 東南海・南海地震被害予測得点別にみた生活復興感



自助準備・共助意識・公助期待と生活復興感との関連

・自助、共助によって、将来の災害に対して立ち向かおうとしている人は、生活復興感が高かった。(図12)(図13)(図14)

自助準備・共助意識・公助期待と生活復興感との関連をみると、それほど明確な関連ではないが、自助、共助によって、将来の災害に対して立ち向かおうとしている人々の方が、生活復興感が高いという傾向は考察できる。

すなわち、災害(阪神・淡路大震災)からの生活復興とは、単に、過去の物質的・精神的被害からの回復を意味するのみならず、将来の災害に対する自主的な関与(そなえ意識の醸成と高揚)をも含んだプロセスであるといえる。

図12 自助準備の得点別にみた生活復興感

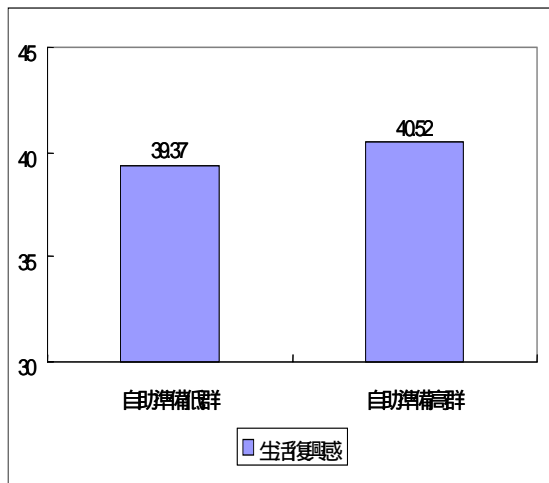


図13 共助意識の得点別にみた生活復興感

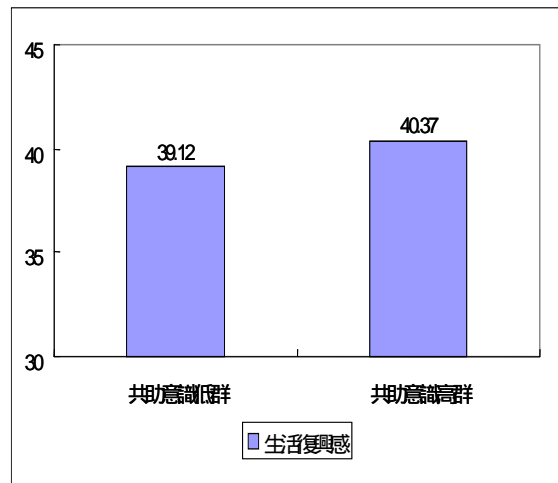
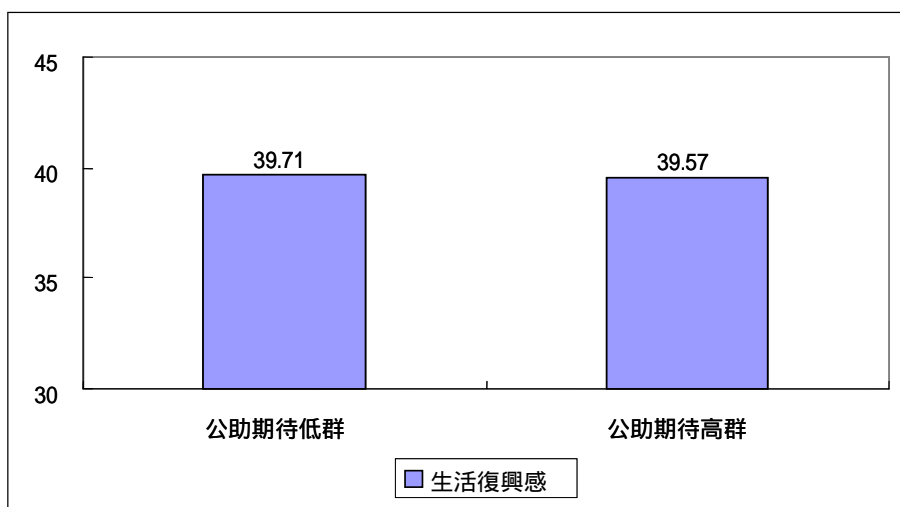


図14 公助期待意識の得点別にみた生活復興感



5. 心とからだ

心とからだのストレスと生活復興感

- ・2001年・2003年調査とも、心、からだのストレスが低い人ほど、生活復興感が高かった。(図15)(図16)

心とからだのストレスと生活復興感との関連をみると、心、からだのストレスが低い人ほど、生活復興感が高かった。2001年調査においても、同様の傾向であった。

図15 生活復興感(心のストレス)

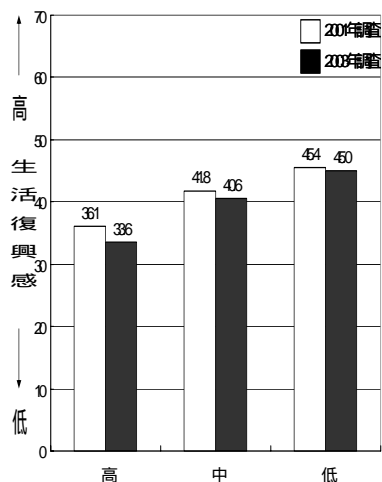
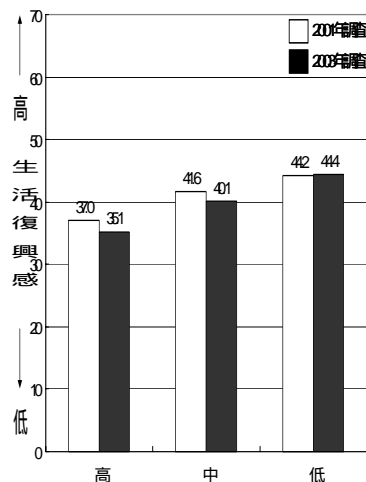


図16 生活復興感(からだのストレス)



6. くらしむき

家計の収支と生活復興感

- ・2001年・2003年調査とも、家計の収支が「好転」「トントン」の人は生活復興感が高く、「悪化」の人は、生活復興感が低かった。(図17)

家計の収支が生活復興感に与える影響を調べるため、家計調査の結果を、以下のように整理した。

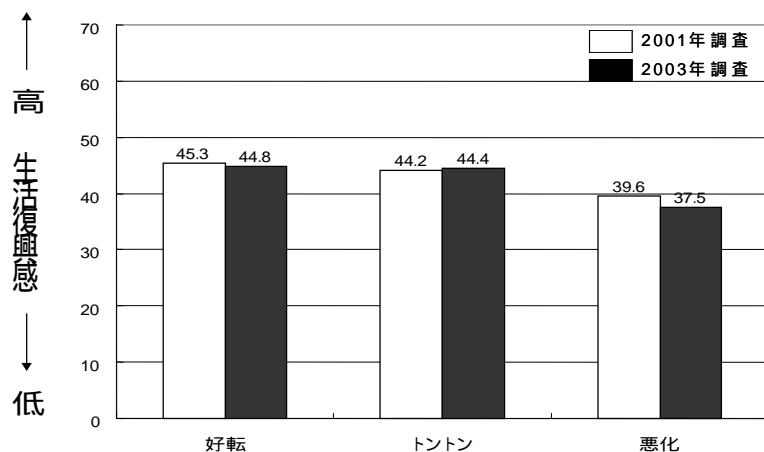
収入・預貯金については「増えた」とした回答には+1点、「変わらない」には0点、「減った」とした回答には-1点を与え、支出については、「増えた」とした回答には-1点、「変わらない」には0点、「減った」とした回答には+1点を与えた。

それらを回答者ごとに足し合わせ、+となったものを「好転」、0となったものを「トントン」、-の値となったものを「悪化」とした。

この場合の「好転」「悪化」とは、震災前と比較した家計収支の傾向を表している。収入が増えて支出が減った人をおしなべて「『好転』傾向にある」、収入が減って支出が増えた人をおしなべて「『悪化』傾向にある」とし、「好転」「悪化」という言葉を用いた。

その結果と生活復興感との関連をみると、家計の収支が「好転」「トントン」の人の生活復興感が高く、逆に「悪化」となった人の生活復興感は低かった。2001年調査においても、同様の傾向であった。なお、家計が「悪化」の人は、家計の設問に回答した人の68%を占めていた。

図 1 7 生活復興感（家計収支）

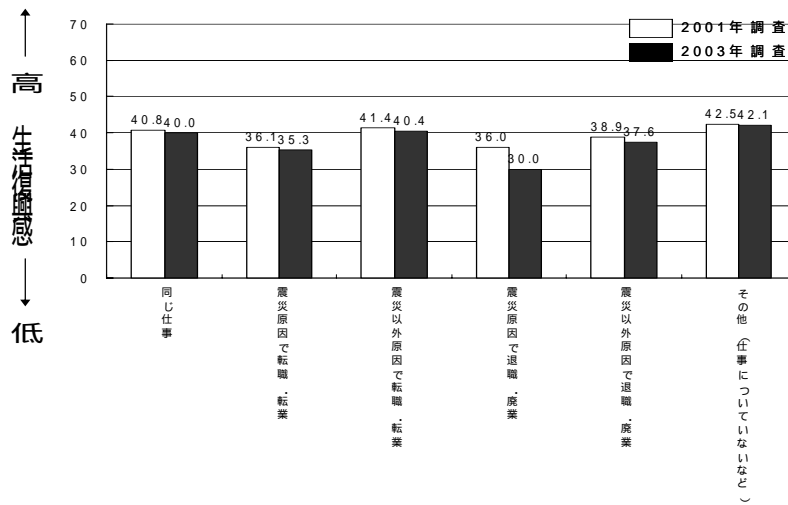


職業変化と生活復興感

- ・震災が原因で転退職した人の生活復興感が低かった。（図 18）

震災後の職業変化との関連をみると、「震災が原因で退職・廃業」した人の生活復興感が最も低く、その傾向は2001年調査よりさらに顕著になった。次いで、「震災原因で転職・転業」した人の復興感が低かった。「震災前後で同じ仕事」「震災以外の原因で転職・転業」した人の生活復興感、比較的高かった。

図 1 8 生活復興感（職業変化）



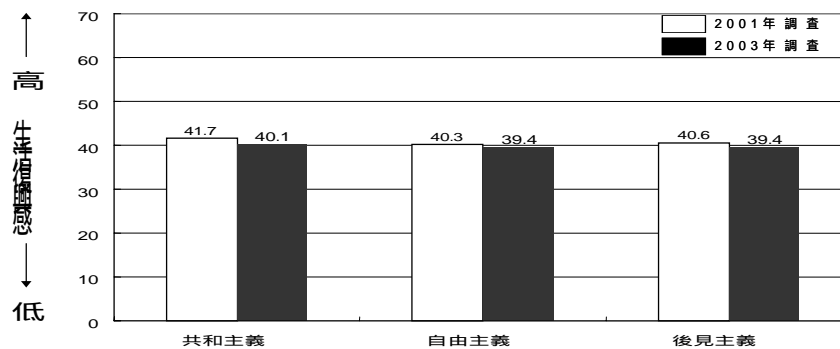
7. 行政とののかかわり

行政とののかかわり方と生活復興感

- ・2001年・2003年調査とも、共和主義的な考え方（公共的なことがらは、市民の積極的にかかわりによって担われるべきという考え方）の人は、生活復興感が高かった(図 19)

行政とののかかわり方と生活復興感との関連をみると、共和主義的な考え方の人は生活復興感が高く、自由主義的な考え方、後見主義的な考え方の人は、生活復興感が低かった。市民性と同様に、被災地に新しく芽吹いた考え方を受け入れている人ほど生活復興感が高いことがわかった。2001年調査においても、同様の傾向であった。

図 1 9 生活復興感（行政とののかかわり）



第3章 地域や職業による生活復興感の違いとその規定因

1. 地域による違い

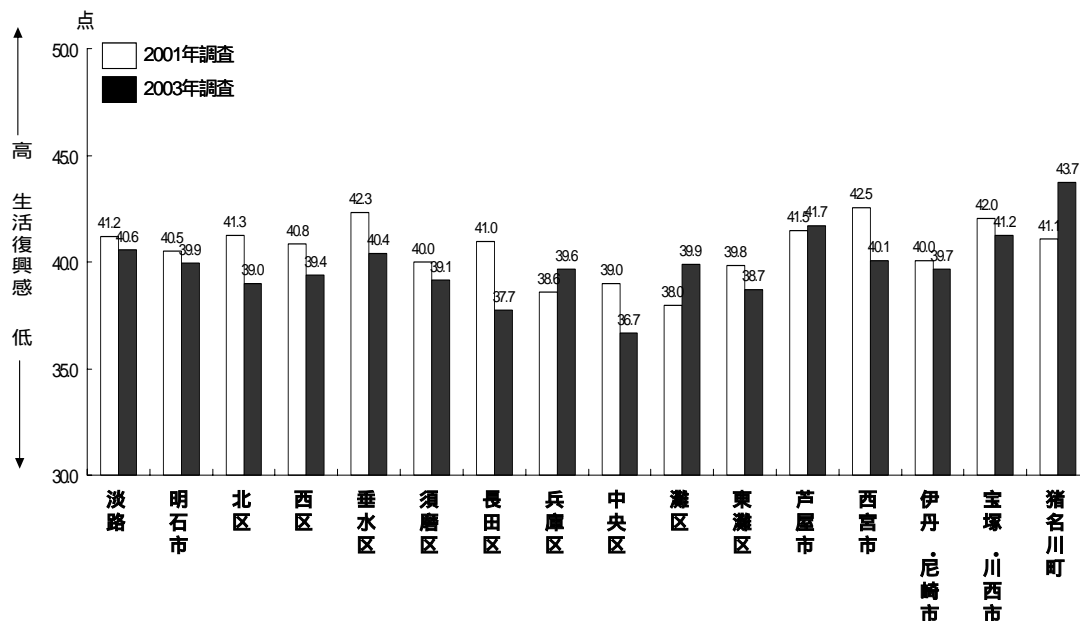
1) 地域による生活復興感の違い

- ・生活復興感が高かったのは、猪名川町、芦屋市、宝塚・川西市であり、生活復興感が低かったのは、中央区、長田区、東灘区、北区、須磨区などである。

地域別の生活復興感をみると(図1)、生活復興感が高かったのは、猪名川町、芦屋市、宝塚・川西市であり、生活復興感が低かったのは、中央区、長田区、東灘区、北区、須磨区であった。

また、2001年調査と比較すると、生活復興感が上がったのは、猪名川町、灘区、兵庫区、芦屋市の4地域だけであり、生活復興感が下がったのは、長田区、西宮市、中央区、北区などであった。

図1 生活復興感(地域別)



2) 地域差とさまざまな要因との関連

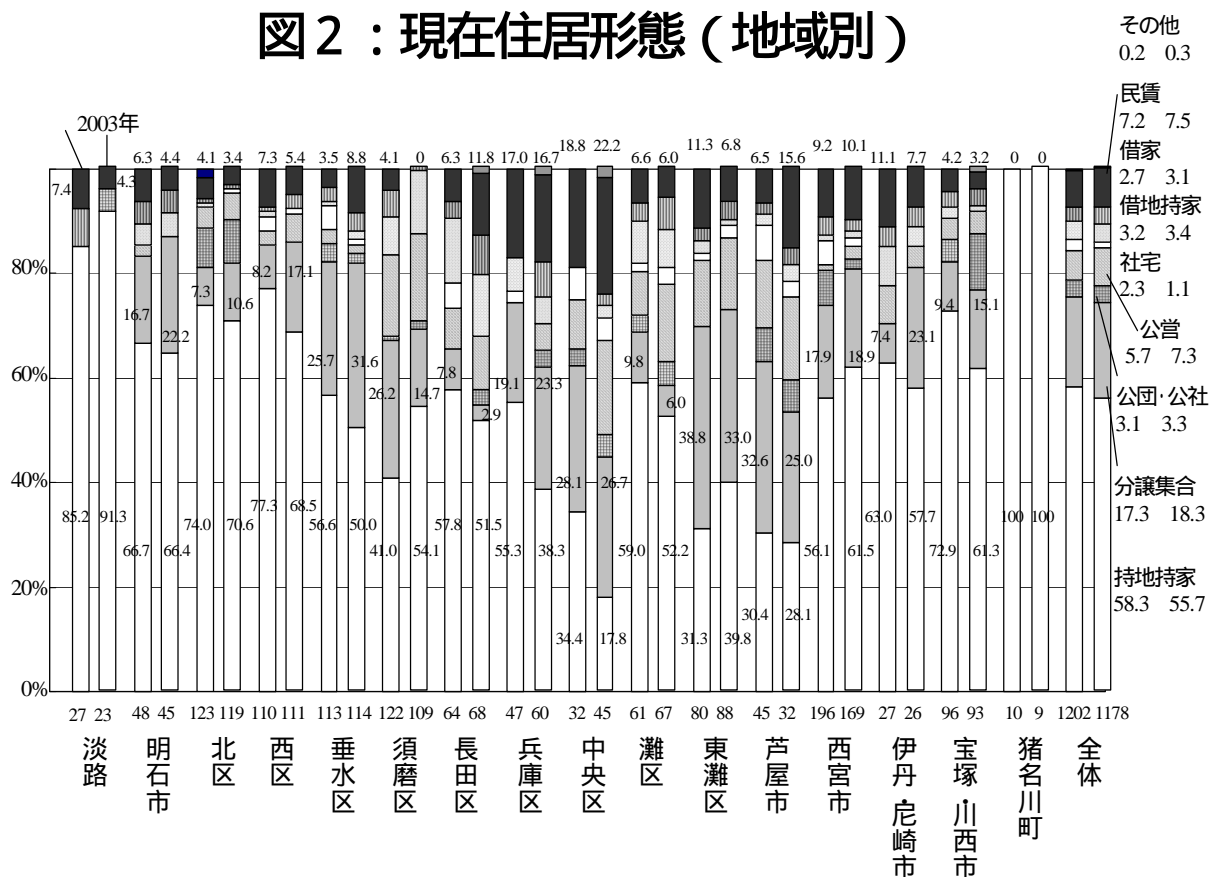
住居形態

- ・持地持家が増えたのは、須磨区、東灘区、西宮市である。
- ・分譲集合住宅が増えたのは、西区、北区、垂水区、宝塚・川西市である。
- ・民間賃貸集合住宅が増えたのは、芦屋市、長田区、垂水区である。

地域別の住居形態の構成をみると(図2)、持地持家が多いのは、明石市、北区、西区、西宮市、宝塚・川西市であり、民間賃貸集合住宅が多いのは、中央区、兵庫区、芦屋市、長田区であった。

2001年調査と比較すると、持地持家が増えたのは、須磨区(+13.1ポイント)、東灘区(+8.5ポイント)、西宮市(+5.4ポイント)など、分譲集合住宅が増えたのは、西区(+8.9ポイント)、宝塚・川西市(+6.0ポイント)、垂水区(+5.9ポイント)など、民間賃貸集合住宅が増えたのは、芦屋市(+7.1ポイント)、長田区(+5.5ポイント)、垂水区(+5.3ポイント)であった。

図2：現在住居形態（地域別）



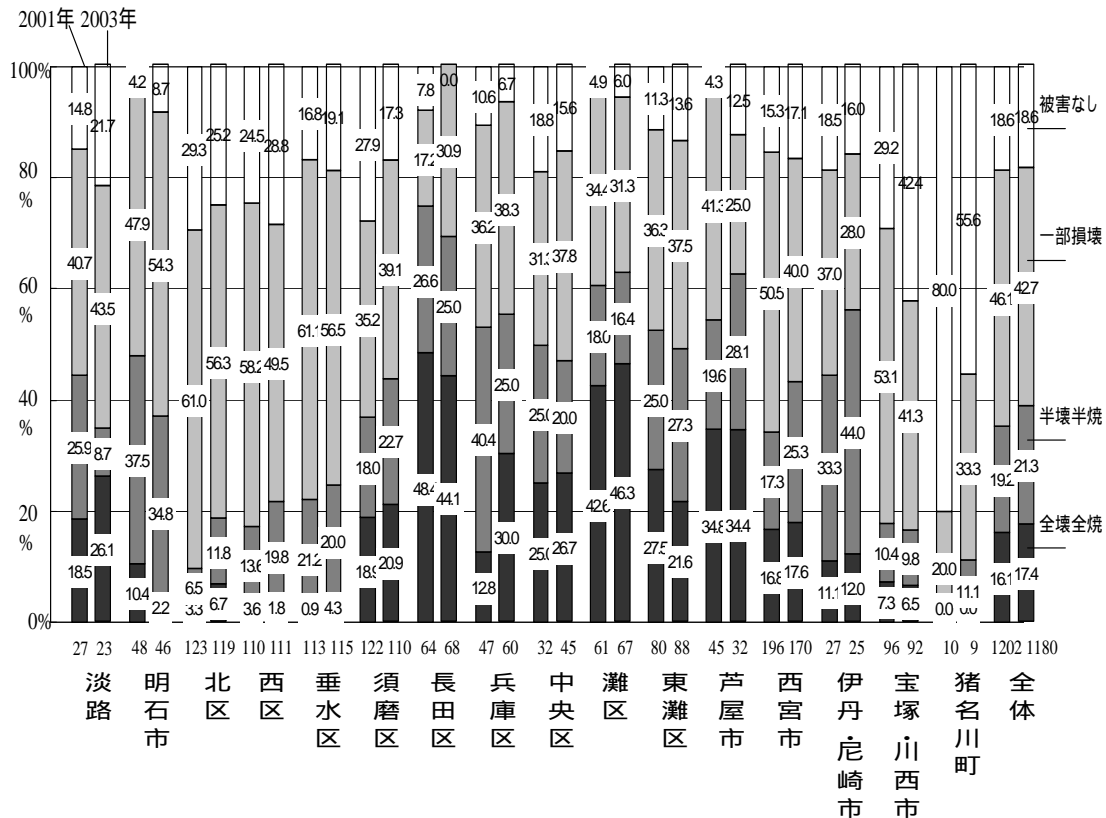
家屋被害程度

- ・長田区から芦屋市にかけては、全壊全焼・半壊半焼が半数以上であり、特に、灘区、長田区は、全壊全焼が半数近くあった。
- ・垂水区、北区、明石市、西区は、一部損壊が半数程度であった。

地域別の家屋被害程度の構成をみると(図3)、長田区から芦屋市にかけては、全壊全焼と半壊半焼を合わせて5割程度であった。特に、灘区(全壊全焼 46.3%)、長田区(全壊全焼 44.1%)、芦屋市(34.4%)、兵庫区(30.0%)、中央区(26.7%)の被害が大きく、震災の帯に該当する地域においては、全壊全焼が3割～5割程度を占めていた。

また、その他の地域では、一部損壊が主であり、垂水区(56.5%)、北区(56.3%)、明石市(54.3%)、西区(49.5%)では、一部損壊が半数程度を占めていた。

図3 家屋被害程度(地域別)



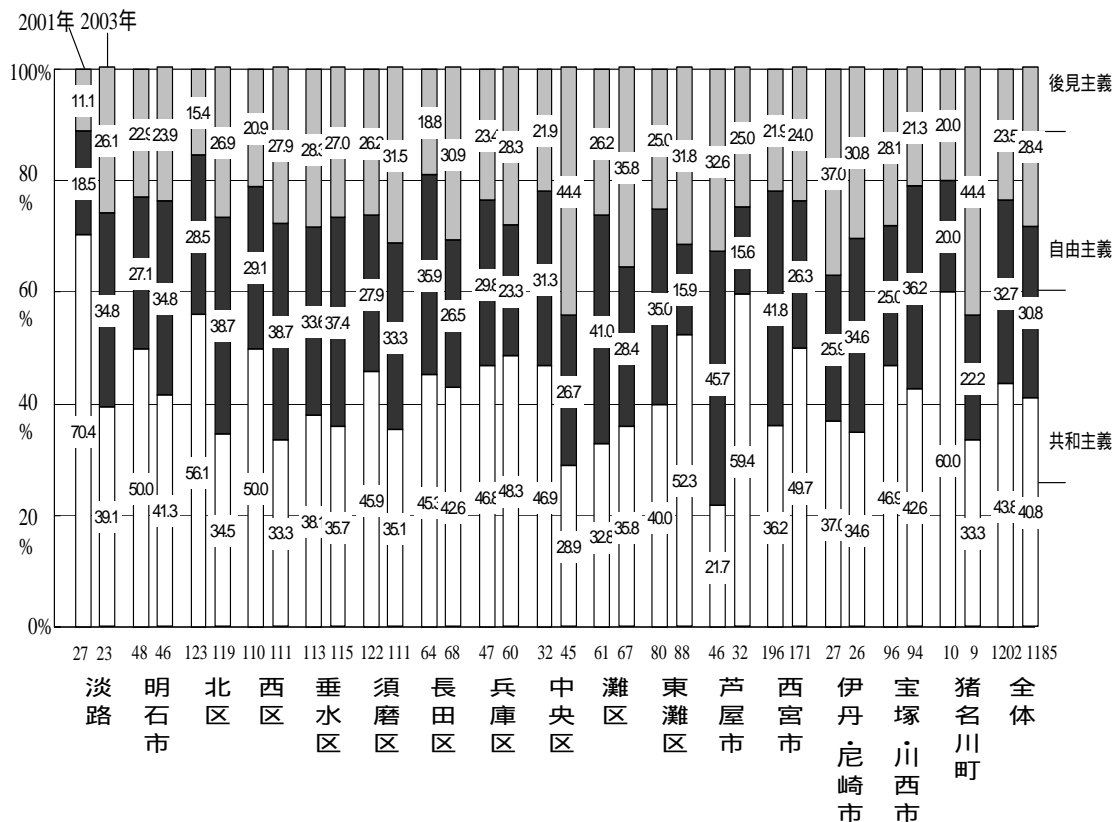
行政とのかかわり

- ・共和主義の人が増加したのは、芦屋市、西宮市、東灘区である。
- ・後見主義の人が増加したのは、中央区、長田区、北区、灘区、西区である。
- ・自由主義の人が増加したのは、北区、西区、宝塚・川西市である。

地域別の行政とのかかわり方の構成をみると(図4)、共和主義が多いのは、芦屋市、東灘区、西宮市、兵庫区など、後見主義が多いのは、中央区、灘区、東灘区、須磨区など、自由主義が多いのは、北区、西区、宝塚・川西市などであった。

2001年調査と比較すると、共和主義の人が増加したのは、芦屋市(+37.7ポイント)、西宮市(+13.5ポイント)、東灘区(+12.3ポイント)、後見主義の人が増加したのは、中央区(+22.5ポイント)、長田区(+12.1)、北区(+11.5ポイント)など、自由主義の人が増加したのは、宝塚・川西市(+11.2ポイント)、北区(+10.2ポイント)、西区(+9.6ポイント)であった。

図4 行政とのかかわり(地域別)



まちのイメージ

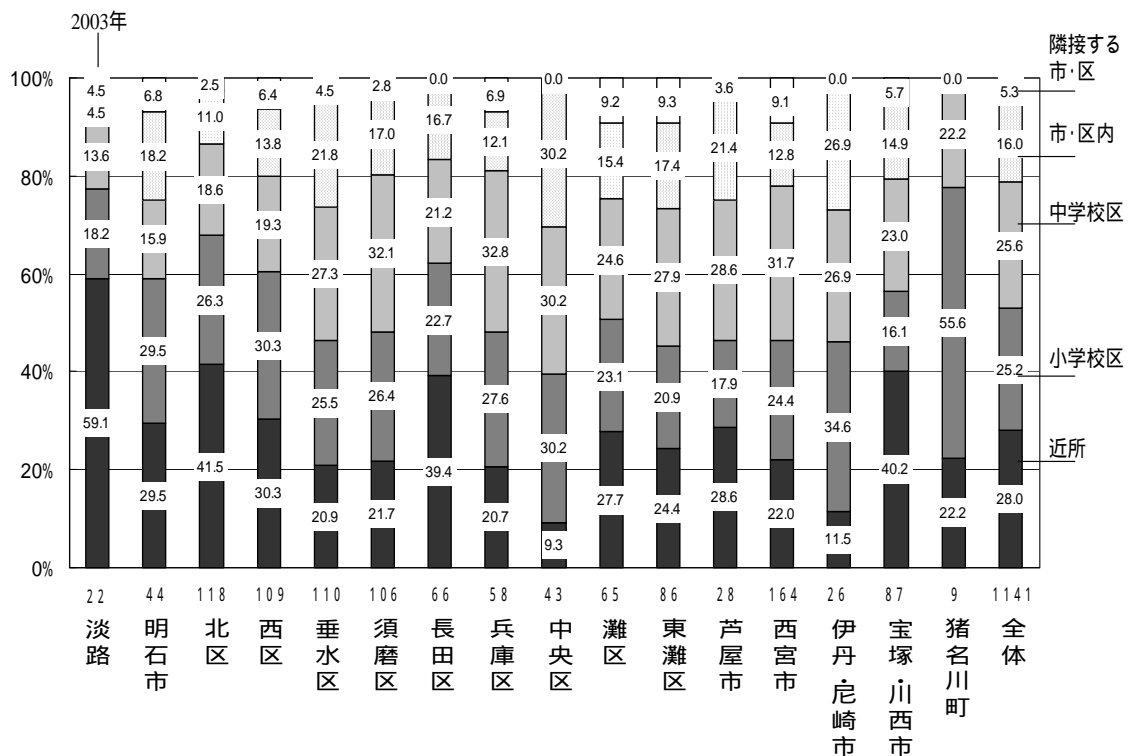
- ・「まち」のイメージを「小学校区」までの範囲と考えている人が多いのは、明石市、北区、西区、長田区、宝塚・川西市であった。
- ・「中学校区」以上と考えている人が多いのは、垂水区、須磨区、兵庫区、中央区、灘区、東灘区、西宮市などであった。

地域別の「まち」のイメージの構成をみると(図5)、「まち」のイメージを「近所」と答えた人が多かったのは、北区(41.5%)、宝塚・川西市(40.2%)、長田区(39.4%)であった。

小学校区までの比較的狭い範囲でとらえている人が多かったのは、明石市、北区、西区、長田区、宝塚・川西市であった。

中学校区以上の比較的広い範囲でとらえている人が多かったのは、垂水区、須磨区、兵庫区、中央区、灘区、東灘区、西宮市などであった。特に、中央区は、「中央区内」を「まち」の範囲ととらえている人が3割と、他に比べて多かった。

図5 まちのイメージ(地域別)



2. 職業による違い

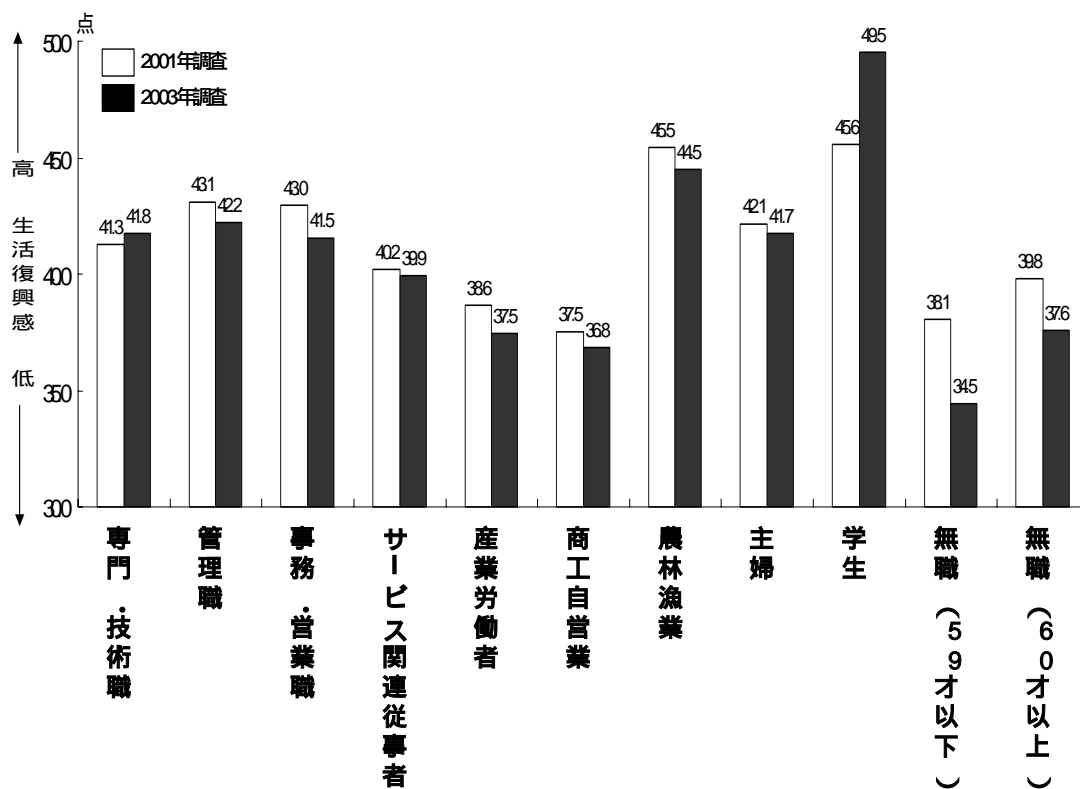
1) 職業による生活復興感の違い

- ・生活復興感が高かったのは、学生、農林漁業、管理職であった。
- ・生活復興感が低かったのは、無職、商工自営業、産業労働者などであった。

職業別の生活復興感をみると(図1)、生活復興感が高かったのは、学生、農林漁業、管理職であった。生活復興感が低かったのは、無職、商工自営業、産業労働者であった。

2001年調査と比較すると、生活復興感が上がったのは、学生と専門・技術職のみであり、無職、事務・営業職、産業労働者などの生活復興感が下がった。

図1 生活復興感(職業別)



2) 職業とさまざまな要因との関連

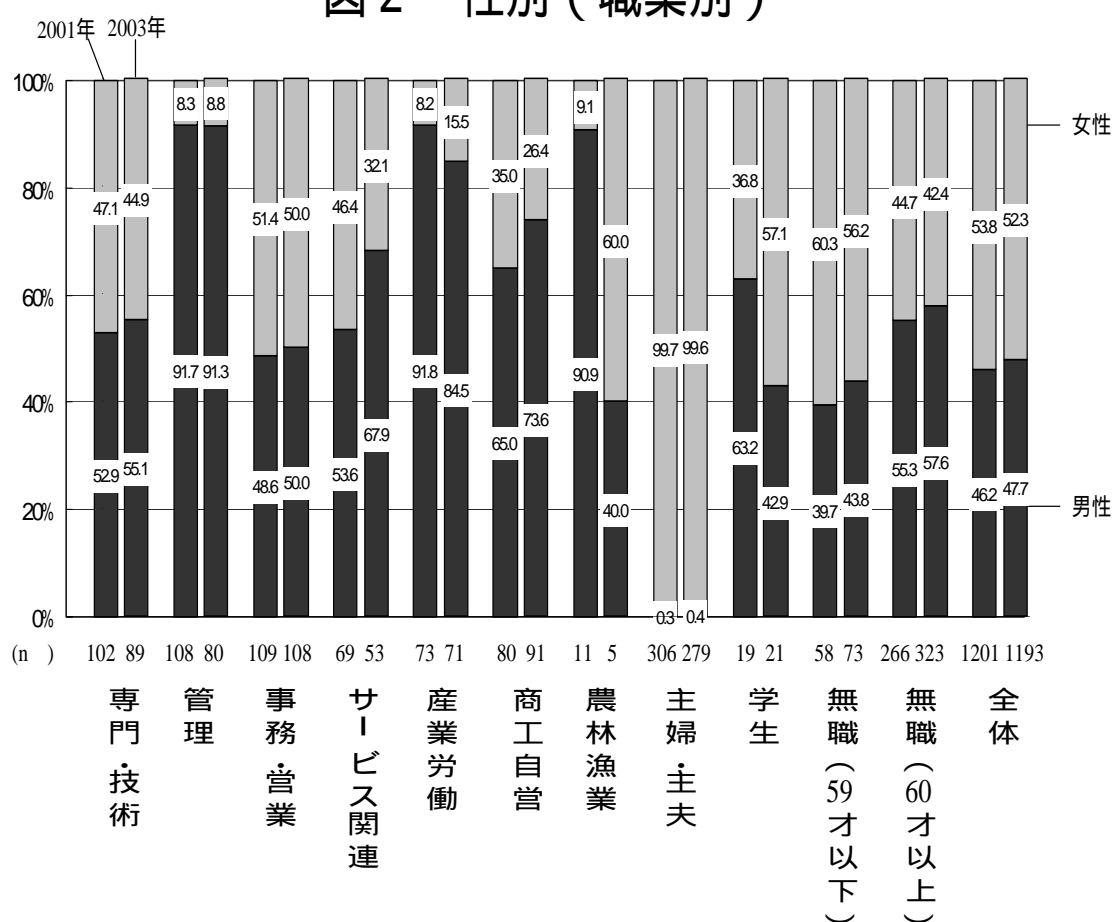
性別

- ・2001年調査と比較すると、サービス関連従事者、商工自営業は、男性が増加し、産業労働者は、女性が増加した。

職業別の男女構成を見ると、男性が多いのは、管理職、産業労働者、商工自営業であり、事務・営業職、専門・技術職は、男女が半々であった。

2001年調査と比較すると、男性が増加したのは、サービス関連従事者(+14.3ポイント)、商工自営業(+8.6ポイント)であり、女性が増加したのは、産業労働者(+7.3ポイント)であった。

図2 性別（職業別）



世代

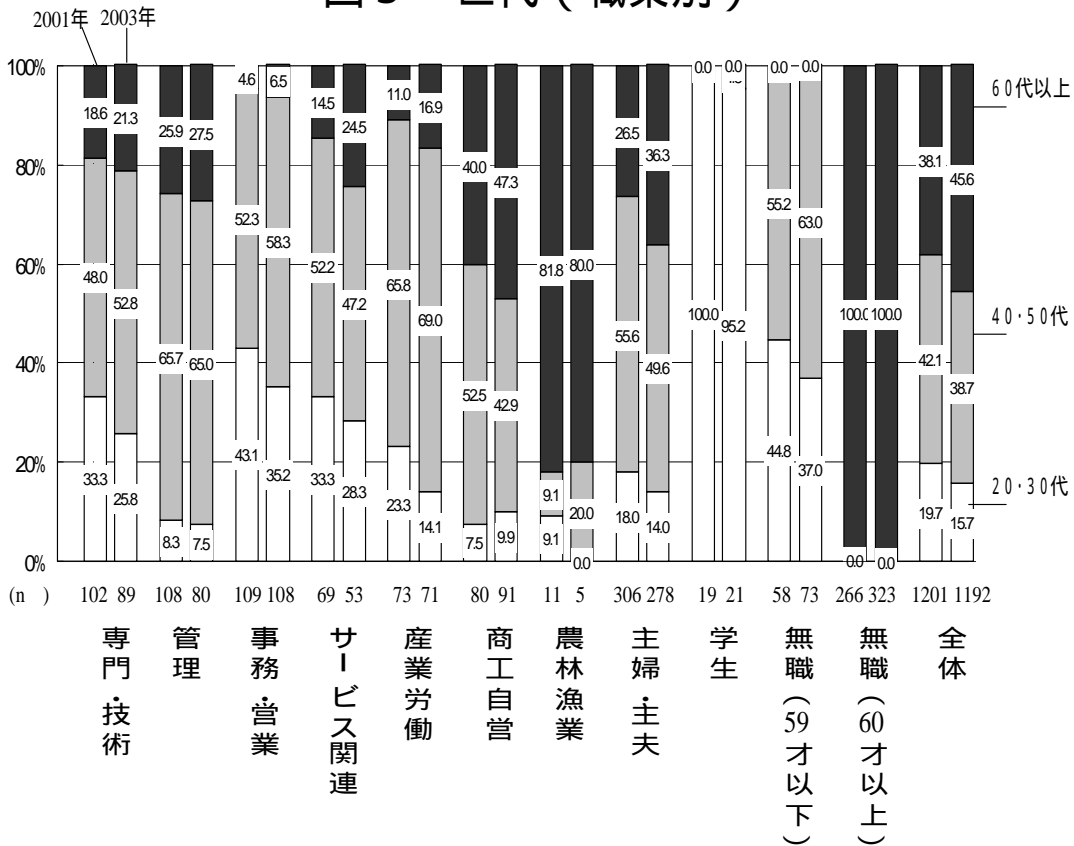
- ・商工自営業は、60代以上の割合が目立って高かった。
- ・2001年調査に比べて、60代以上が増加したのは、サービス関連従事者、商工自営業、産業労働者であった。
- ・59歳以下の無職では、40・50代の割合が増加した。

職業別の世代構成をみると(図3)、20・30代が多かったのは、無職、事務・営業職、サービス関連従事者、40・50代が多かったのは、産業労働者、無職、管理職、専門・技術職、事務・営業職など、60代以上が多かったのは、商工自営業であった。

2001年調査と比較すると、60代以上の割合が増加したのは、サービス関連従事者(+10.0ポイント)、商工自営業(+7.3ポイント)、産業労働者(+5.9ポイント)であった。

また、59歳以下の無職のうち、40・50代は、2001年調査に比べて、7.8ポイント増加した。

図3 世代(職業別)



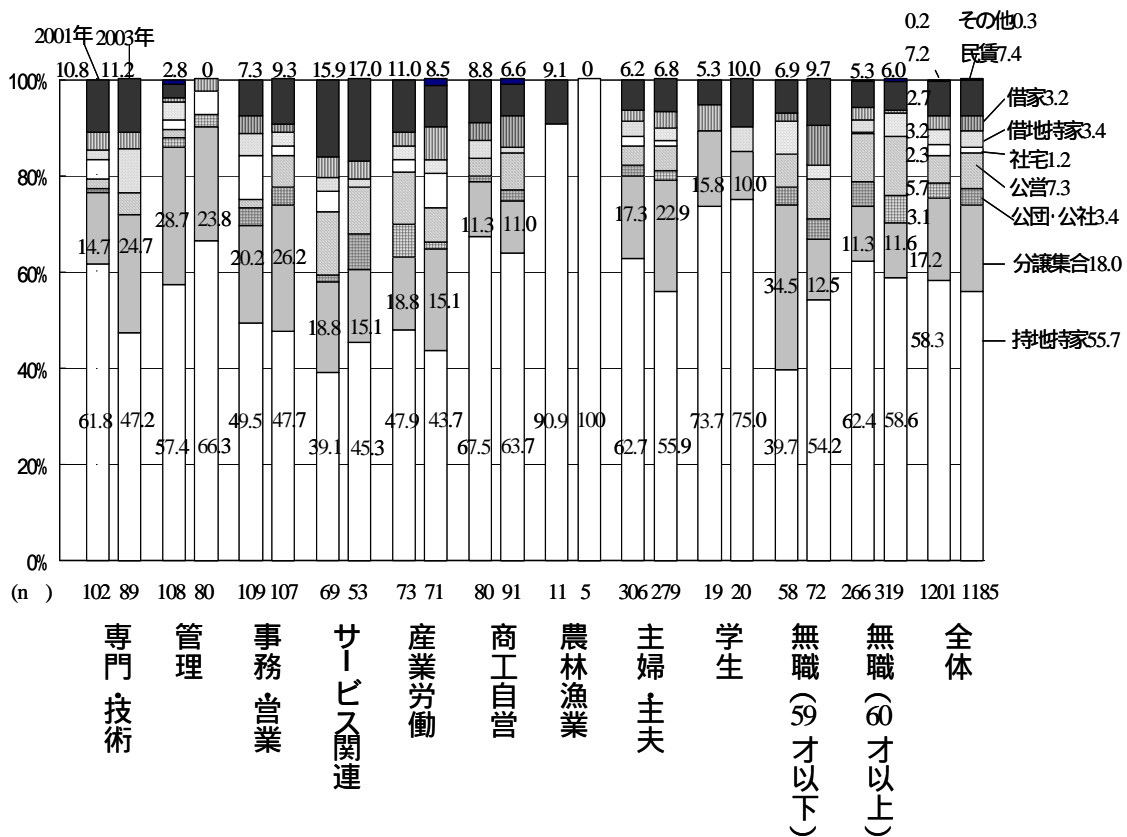
住居形態

- ・専門・技術職は、持地持家が減少し、分譲集合住宅や借地持家が増加した。
- ・事務・営業職、サービス関連従事者は、社宅が減少し、公営住宅や公団・公社住宅が増加した。
- ・産業労働者は、公営住宅や公団・公社住宅が減少し、社宅や借家が増加した。

職業別の住居形態構成をみると(図4)、持地持家が多かったのは、管理職、商工自営業、民間賃貸住宅が多かったのは、サービス関連従事者、専門・技術職、無職(59才以下)であった。

2001年調査と比較すると、専門・技術職は、持地持家が減少したが、分譲集合住宅や借地持家が増加した。事務・営業職、サービス関連従事者は、社宅が減少し、公営住宅や公団・公社住宅が増加した。産業労働者は、公営住宅や公団・公社住宅が減少し、社宅や借家が増加した。

図4：住居形態（職業別）

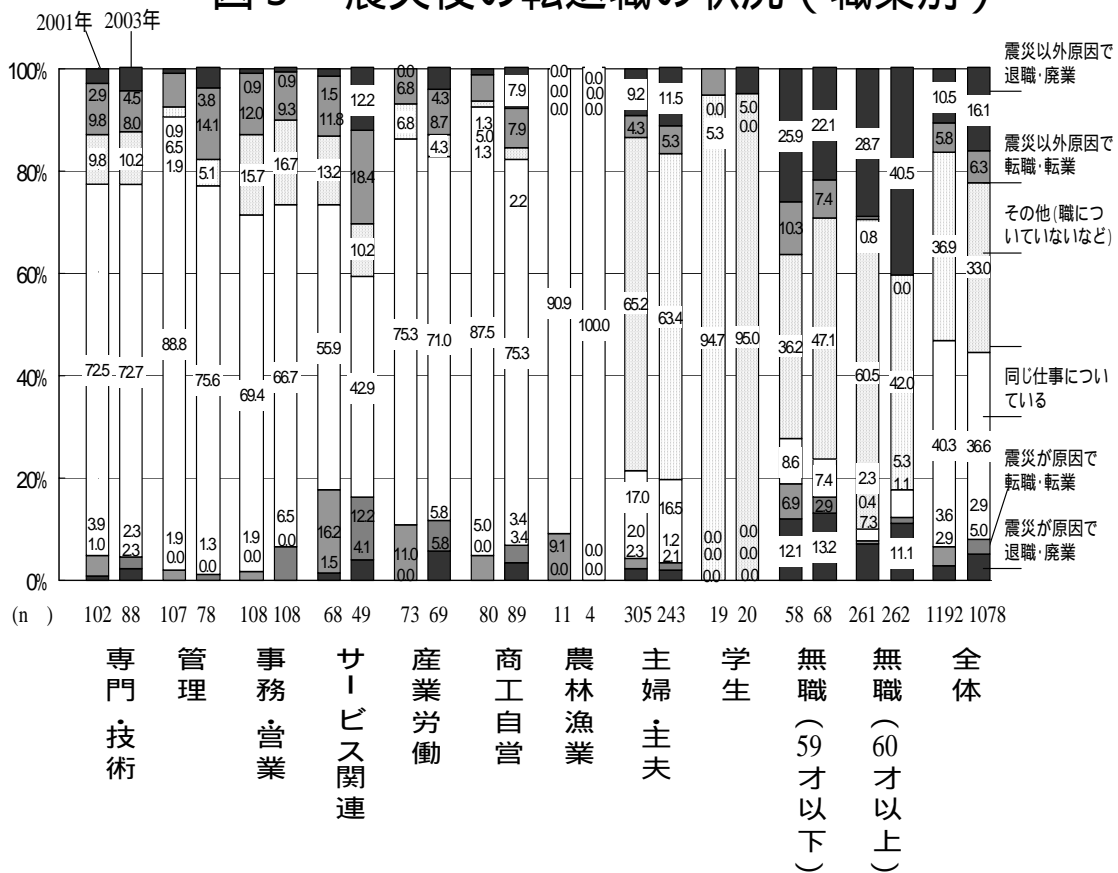


震災後の転退職等の状況

- ・震災原因・震災以外原因にかかわらず、退職・廃業、転職・転業した人が多かったのは、無職、サービス関連従事者であった。
- ・震災前と同じ仕事についている人が多かったのは、管理職、商工自営業、専門・技術職、事務・営業職であった。

職業別の震災後の転退職・転廃業の状況をみると(図5)、震災原因・震災以外原因にかかわらず、退職・廃業、転職・転業した人が多かったのは、無職(震災原因が16.1%、震災以外原因が29.5%)、サービス関連従事者(震災原因が16.3%、震災以外原因が30.6%)であった。震災前と同じ仕事についている人が多かったのは、管理職(75.6%)、商工自営業(75.3%)、専門・技術職(72.7%)、事務・営業職(66.7%)であった。

図5 震災後の転退職の状況(職業別)



まちのイメージ

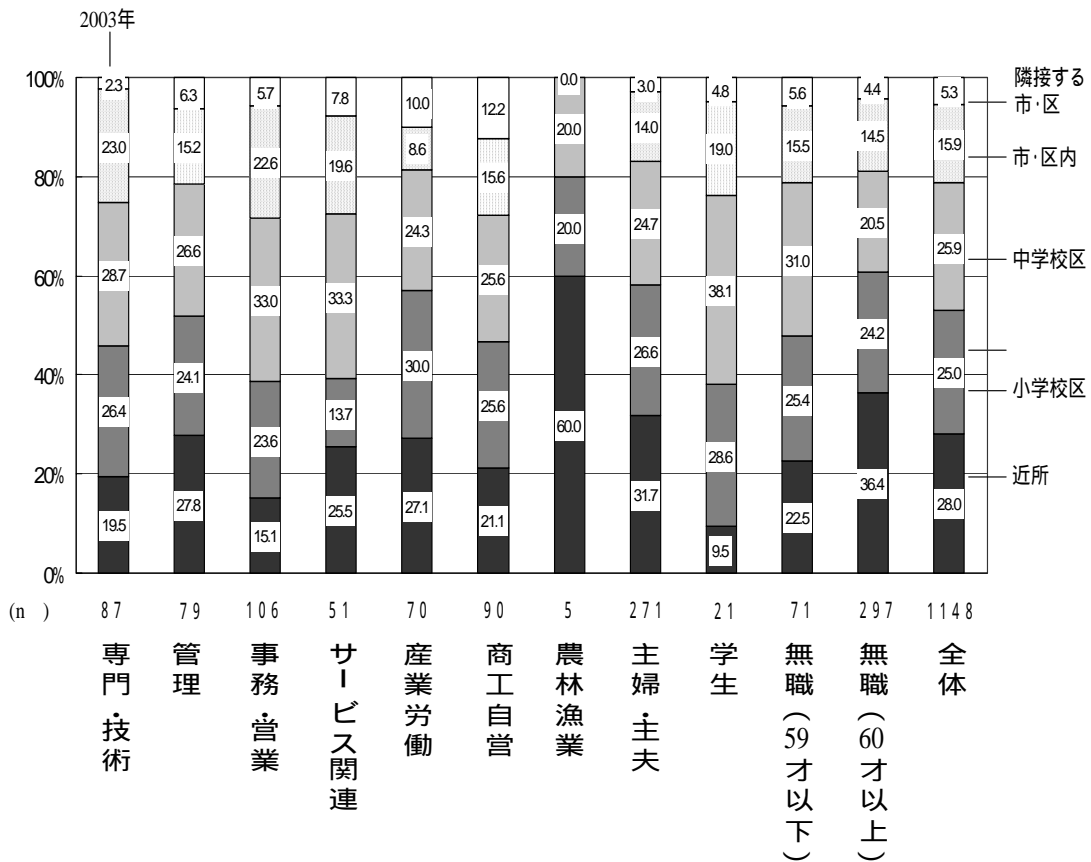
- ・小学校区までの比較的狭い範囲でとらえている人が多かったのは、無職（60才以上）、主婦・主夫、産業労働者であった。
- ・中学校区以上の比較的広い範囲でとらえている人が多かったのは、事務・営業職、サービス関連従事者、専門・技術職、商工自営業であった。

職業別の「まち」のイメージの構成をみると(図6)、「まち」のイメージを「近所」と答えた人が多かったのは、主婦・主夫(31.7%)、無職(60才以上)(36.4%)であった。

小学校区までの比較的狭い範囲でとらえている人が多かったのは、無職(60才以上)、主婦・主夫、産業労働者であった。

中学校区以上の比較的広い範囲でとらえている人が多かったのは、事務・営業職、サービス関連従事者、専門・技術職、商工自営業であった。

図6 まちのイメージ(職業別)



第3部 新たな生活復興モデルの構築

第1章 生活復興モデルの充実に向けた検討

第2部で述べたように、2001年調査では、被災者の「生活の充実度」「生活の満足度」「1年後の生活の見通し」についての因子分析を行い、「生活復興感」として尺度化するとともに、生活復興感を規定する生活再建課題7要素との関係を分析し、「生活復興感を規定する要因モデル」を構築した。

2003年調査の実施にあたっては、基本的には、2001年調査のモデルを踏襲するとともに、一方で、これまでの防災学の分野における生活復興感の尺度化に関する議論等も参考にして、生活復興モデルの充実に向けた検討を行うこととした。

生活復興感の尺度化に関する主な議論

生活復興感の尺度化に関する議論の代表的なものとしては、次のようなものがあげられる。

ア．災害被災者の生活復興過程は、長期にわたるものであるが、これまでの研究の多くは、単発的・短期的な視野からの研究がほとんどであり、被災者の生活復興過程を規定する要因まで視野に入れたものではなかった。また、少数の例外的な実証研究についても、生活復興に関する各種の要因が、直接的・加算的に、生活復興感に影響を与えるという関係を想定したものであり、生活復興感は、各要因の効果を積み上げた「結果」（アウトカム）としか位置づけられてこなかった。

（「災害からの長期的復興に関するパネル・ディスカッション」米国コロラド大学「自然災害ワークショップ Wenger, Wenger, Rubin, Nigg, Berke & Bolton, 1996）

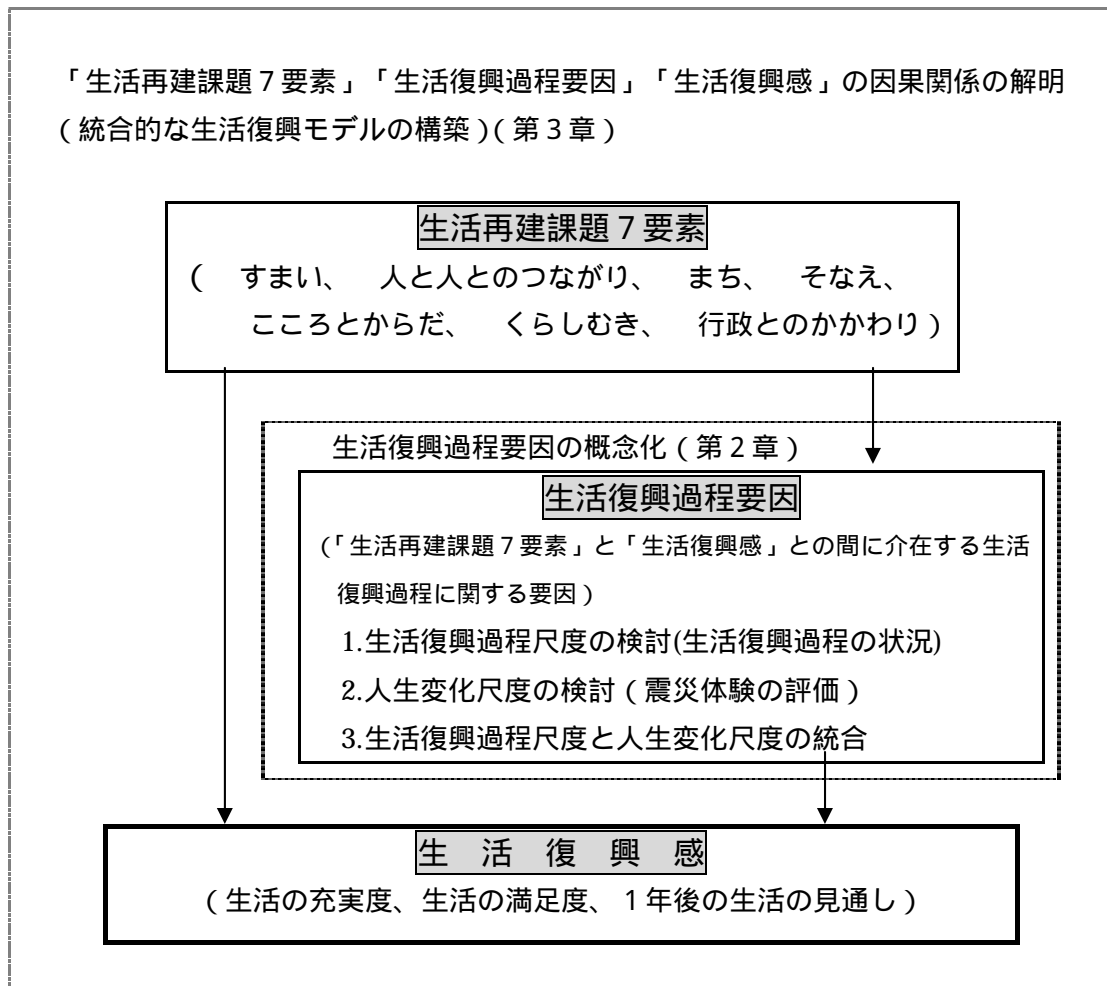
イ．2001年調査における「生活復興感」については、被災を受けていない一般市民の生活満足度や生活充実感とどのように異なるのかという点がわかりにくい。（地域安全学会,2002）

生活復興モデルの充実に向けた検討

これらの議論を踏まえ、2003年調査においては、被災者一人ひとりの8年間の長期にわたる生活復興過程が顕わとなるような分析手法を検討することとした。

具体的には、被災者の生活復興を促進する要因である「生活再建課題7要素」のすべてと、生活復興の結果（アウトカム）としての「生活復興感」を、直接的に結びつけるのではなく、その間に媒介する被災者の生活復興過程を規定する要因を分析（概念化）する作業を行ったうえで、「生活再建課題7要素」「生活復興過程要因」「生活復興感」のそれぞれの因果関係を解明することをめざした。（参考1）

(参考1) 生活復興モデルの充実にに向けた検討の概念図



第2章 生活復興過程の概念化

本章では、被災者の生活復興過程を測定する尺度として、被災者の復興過程がどのような状況であるのか(生活復興過程尺度)、被災者が震災体験をどのように評価しているのか(人生評価尺度)に着目して、分析を進めた。

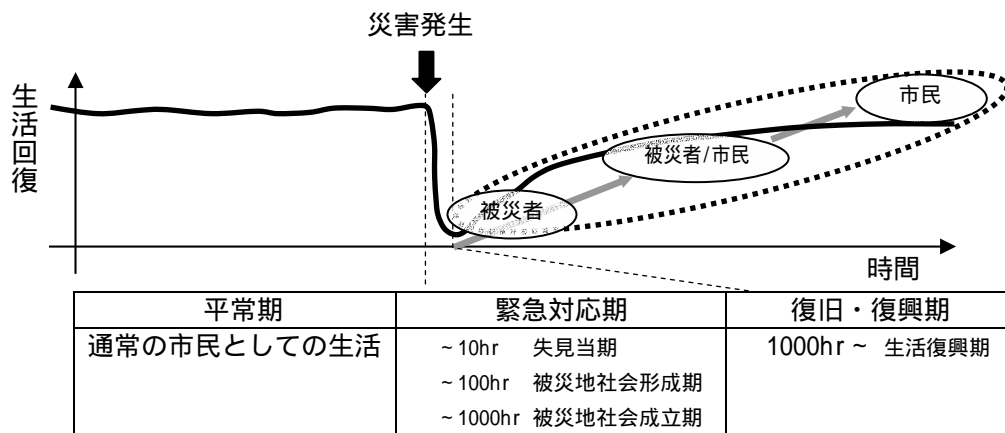
1. 生活復興過程尺度

1) 生活復興過程のイメージ化

前章で述べたような議論を踏まえ、被災者一人ひとりの生活復興過程を視野に入れ、臨床的な先行研究も参考にしながら、生活復興過程のイメージ化を試みた。

具体的には、被災地におけるマクロ社会経済指標の回復に関する時系列的变化に関する研究や、災害後の被災地域内の電力需要の落ち込みが以前の状態にまで回復するまでを回復期として捉える研究、過去の災害被災地での市民意識調査の分析から、市民の防災意識が約9.5年で災害前の状態に回帰すると指摘した研究等のマクロな社会の復興過程に関する研究を、個人の生活復興過程に援用して、被災者の生活復興過程のイメージ化を行い、図式化した。(図1)

図1 当初に想定した生活復興過程のイメージ



失見当期 : 震災の衝撃から強いストレスを受け、身体的精神的に変調をきたしている時期
 被災地社会の形成期 : 震災によるダメージを理性的に受け止め、新しい現実が始まったことを理解する時期
 被災地社会の成立期 : 震災による一時的な社会が完成し、人々がその中で活動する時期。被災社会の間で互いに助け合おうとする気持ちが共有され一種の幸福感が存在する時期であることから「災害ユートピア」の時期ともいわれる

これまでの京大防災研の分析によると、人間の行動変化で捉えた災害後の社会は、時間経過とともに、失見当期(震災当日)、被災地社会の形成期(震災後2~4日)、被災地社会の成立期(震災後2か月)、生活復興期(震災後2か月以降)と移行し、個々人の被災者としての意識もまた時間経過と共に変化する。

この過程は、被災地が復興する過程であるとともに、個々人が被災者であることを超えて再び日常の市民生活に戻っていく生活回復の過程であると捉えられる。

2) 生活復興過程尺度の分析

生活復興過程尺度の検討

前節でイメージ化した生活復興過程を具体的に概念化するために、日常性の社会学 (Burger & Luckman, 1966)・精神医学 (Frankl, 1959; Lifton, 1968)・医学 (Kubler-Ross, 1969)の分野における関連文献を渉猟し、次の3つの視点から、生活復興過程に関する質問項目を検討した。

すなわち、日常化 (日常性への回復) の過程として生活復興過程をとらえる社会学の視点、心的外傷ストレス障害が固定化する上で大きな原因となる体験の意味づけに関する精神医学的視点、死の受容や心的外傷体験を乗り越える上で重要となる体験の意味づけ努力に関する医学や精神医学的研究からの視点である。

これらの視点に基づいて、表1、表2に代表されるような質問項目を作成した。

表1:「日常化」の代表的項目

今の住まいで、どのように暮らしていけば良いのか、そのめどは立った。
毎日の生活は、震災前と同じように、決まったことのくり返しに感じられるようになった。
震災直後は物欲が減ったという人が多かったが、今はもう震災前と変わらない。
現在が、「ふつう」のくらしに感じられる。

Berger, P.L., & Luckman, T. *Social construction of reality: A treatise in the sociology of knowledge*. NY: Anchorbooks, 1966.

表2:体験の「肯定的意味づけ」対「否定的意味づけ」の代表的項目

震災での体験は、日常生活では得られない得がたい経験だった。(肯定的)
震災での体験は、私の過去から消し去ってしまいたい経験だった(否定的)。
今ではもう震災を話題にすることもなくなった(否定的)。
「自分に与えられた人生の使命とは何か」を考えるようになった。(肯定的)

•Frankl, V. E. *Man's search for meaning*. NY: Pocket Books, 1959.
•Lifton, R.J. *Death in Life: The Survivors of Hiroshima*. London: Weidenfeld and Nicolson, 1968.
•Kubler-Ross, E. *On Death and Dying*. NY:Simon & Schuster/Touchstone, 1969

生活復興過程尺度の因子分析

2003年調査では、上記のような「日常化(回復)」、「肯定的意味づけ」、「否定的意味づけ」という3概念を射程においた質問項目を17項目用意した。(問32)

これら全17項目間の関連性について、調査対象者1,203名の回答を因子分析(主因子法・バリマックス回転)したところ(表3)、3因子構造として解釈できることがわかった。

この3つの因子を、震災体験を忘れない過去と感じ、自己のあり方を決めかね、十分な活動ができていない「再興途上」(第1因子)、震災体験を重要なものと感じ、使命感を持って前向きに活動している「自立(奮闘中)」(第2因子)、現在の生活を日常的なものとして捉えて活動している「自立(回復)」(第3因子)と名付けた。

これらのことから、被災者がどのような生活復興過程にあるのかについては、「再興途上」「自立(奮闘中)」「自立(回復)」の3タイプで測れることがわかった。

表3:生活復興過程尺度全17項目の因子分析結果

	再興途上 Retreat	自立 (奮闘中) Struggle for Meaning	自立 (回復) Return to Normalcy	Commonality
14.震災については触れてほしくない	0.839	-0.023	-0.089	0.713
19.震災の話は聞きたくない	0.819	-0.072	-0.057	0.680
11.震災のことを思い出したくない	0.813	-0.009	-0.049	0.663
5.震災での体験は過去から消したい*	0.728	0.005	-0.043	0.531
13.震災後感動することが少なくなった	0.660	-0.128	-0.117	0.466
8.自分の運命に無関心になった	0.573	-0.201	0.101	0.379
6.今では震災を話題にすることもない*	0.424	-0.187	0.141	0.234
12.生きる事は意味があると強く感じる	-0.174	0.704	0.079	0.532
9.震災によって精神的に成長できた	-0.045	0.687	-0.006	0.475
18.人生には何らかの意味があると思う	-0.135	0.670	0.020	0.467
7.人生の使命を考えるようになった*	0.079	0.637	-0.114	0.425
20.震災後人も捨てた物でないと感じる	-0.126	0.613	0.115	0.405
16.宿命に流されず生きる勇気がある	-0.025	0.585	0.071	0.347
4.震災での体験は得がたい経験だった*	-0.139	0.406	0.163	0.211
3.現在がいつものくらしに感じられる*	-0.059	0.108	0.855	0.746
2.毎日の生活は決まった事の繰り返し*	0.107	-0.029	0.745	0.568
1.暮らし方のめどが立っている*	-0.114	0.164	0.727	0.569
因子回転後の負荷量平方和	3.630	2.842	1.939	
回転後因子寄与率(%)	21.35%	16.72%	11.40%	

N=1203

注) *は代表的項目として、表1・2で示した生活復興過程尺度7項目

2 . 人生変化尺度

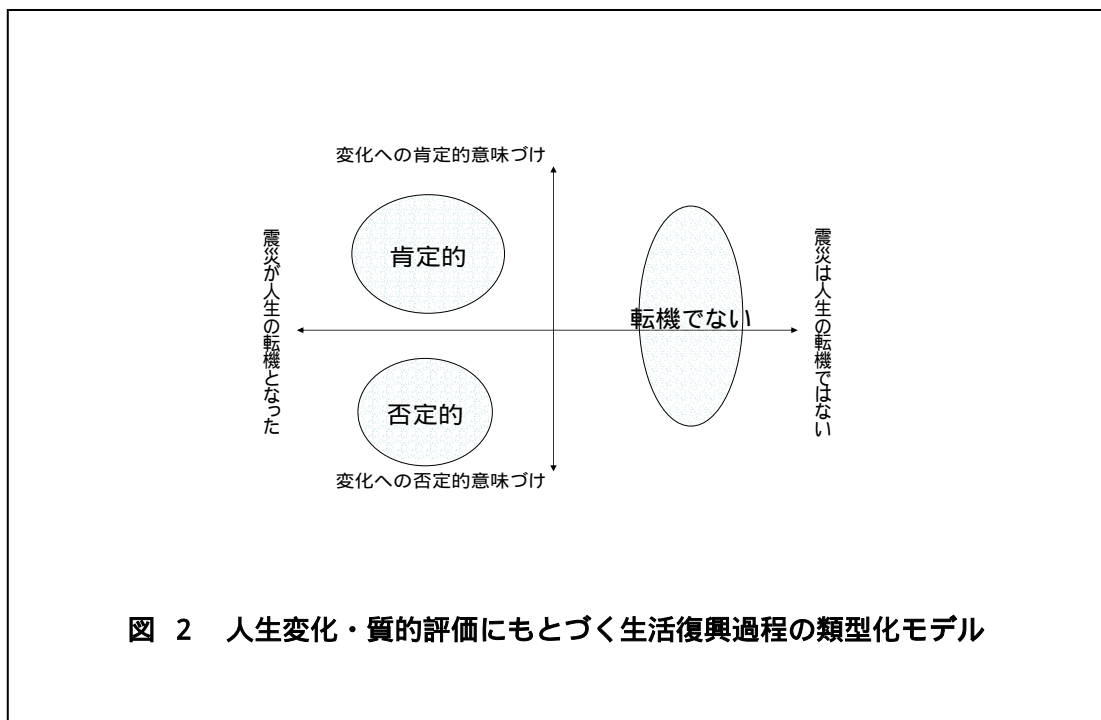
1) 生活復興過程の類型化

被災者の生活復興過程については、図1のような社会・経済統計等のマクロ指標の示す復興曲線の相似形として、「復興 = 元に戻る」を前提とした概念が想定される。

しかしながら、被災者の中には、「元に戻る」ことで生活復興過程が終結するものもいるが、一方では、それだけで生活復興過程のすべてを捉えることはできないという側面もある。むしろ、「今、ここ (here and now)」において、被災者が、自分の人生の中で、被災体験をどのように位置づけているか、それこそが復興過程をとらえる上で重要であると考えられる。

そのような観点から、精神医学や心理学分野の関連研究等を参考にし、被災者の生活復興過程を、「被災体験が自分の人生にとって「人生の転機」としてとらえられているか」(人生変化の感覚)そして、体験が「転機」として位置づけられるなら、それは現時点で、「肯定的にとらえられているのか、否定的にとらえられているのか」(人生変化の方向)という2つの価値判断軸によって類型化するモデルを想定した。

すなわち、図2の示したように、生活復興過程を「肯定的意味づけ」「否定的意味づけ」「転機でない」の3つに類型化したモデルである。



2) 人生変化尺度の因子分析

2003年調査では、人生変化の感覚や方向に関する質問項目を5項目用意した。

(問34)

これら5項目の関連性について、本調査対象者1,203名の回答を因子分析(主因子法・バリマックス回転)したところ、「震災が人生の転機と感じられている感覚」(第1因子)と「震災を肯定的な体験と評価している感覚」(第2因子)という2因子構造が抽出された。(表4)

このことから、被災者が震災体験をどのように評価しているのかについては、「震災が人生の転機」「(震災は)肯定的な体験」の2つで測定できることがわかった。

表4: 人生変化尺度5項目の因子分析結果

	震災は人生の 転機	肯定的な体験	Communality
	Sense of Life Change	Life Change Direction	
3.自分の人生は変わったと感じる	0.852	0.113	0.738
2.震災前後で自分は変わったと感じる	0.844	0.251	0.775
1.震災を時間的区切りとした言い方	0.725	-0.127	0.542
3(SQ1)人生の変化の方向 ¹	-0.040	0.902	0.816
2(SQ1)自分の変化の方向 ¹	0.176	0.880	0.805
因子回転後の負荷量平方和	1.996	1.681	
因子寄与率(%)	39.92	33.62	

注) *は無回答を「どちらともいえない」に変換

N=1203

3. 生活復興過程尺度と人生変化尺度の統合

前2節の結果から、生活復興過程に関する2つの視点に基づいて用意した項目群が、それぞれ意図した通りの生活復興過程概念を捉えていることがわかった。

すなわち、マクロ経済指標の復旧・復興曲線をもとにイメージ化した「生活復興過程尺度」17項目が、「自立(回復)」「自立(奮闘中)」「再興途上」という3因子構造で解釈できること、また、人生変化とその評価を主軸とする「人生変化尺度」の5項目も、「震災が人生の転機となった」・「(震災は)肯定的な体験」という2因子構造で解釈できることが明らかになった。

「生活復興過程尺度」と「人生変化尺度」との関連性の分析

被災者の生活復興過程を測定する「生活復興過程尺度」と「人生変化尺度」との関連性を明らかにするため、生活復興過程尺度 17 項目と人生変化尺度 5 項目を合わせた計 22 項目について因子分析を行った。(表 5)

その結果、「自立(回復)」、「自立(奮闘中)」、「再興途上」、「震災が人生の転機となった」、「(震災は)肯定的な体験」の 5 つの想定していた因子構造が、明快に出現した。

また、それぞれの尺度項目は、自らが所属する因子で最大の因子負荷量を示すことも確認された。

* 「生活復興過程尺度」「人生変化尺度」が捉えるとの間には概念上の関連性が十分に想定されるため、主因子法を用いてデータの縮約を図ったのち、因子軸の回転にあたっては、因子間に相関関係を想定するプロマックス(斜交解)法を用いて因子の抽出を行った。

表 5 : 生活復興過程尺度17項目と人生変化尺度5項目の因子分析(斜交解)結果

	再興途上 Retreat	自立 (奮闘中) Struggle for Meaning	震災が人 生の転機 Sense of Life Change	自立 (回復) Return to Normalcy	肯定的な 体験 Life Change Direction	Communality
14.震災については触れてほしくない	0.842	-0.134	0.026	-0.138	-0.145	0.719
19.震災の話は聞きたくない	0.828	-0.177	0.004	-0.116	-0.165	0.691
11.震災のことを思い出したくない	0.806	-0.119	0.114	-0.072	-0.208	0.659
5.震災での体験は過去から消したい	0.716	-0.101	0.208	-0.049	-0.212	0.552
13.震災後感動することが少なくなった	0.669	-0.226	0.130	-0.138	-0.228	0.469
8.自分の運命に無関心になった	0.577	-0.254	-0.051	0.063	-0.259	0.380
6.今では震災を話題にすることもない	0.453	-0.186	-0.382	0.019	-0.083	0.385
12.生きる事は意味があると強く感じる	-0.249	0.738	0.043	0.137	0.259	0.567
18.人生には何らかの意味があると思う	-0.200	0.706	0.040	0.060	0.215	0.520
9.震災によって精神的に成長できた	-0.112	0.658	0.332	0.065	0.331	0.475
20.震災後人も捨てた物でないと感じる	-0.192	0.620	0.185	0.169	0.295	0.402
7.人生の使命を考えるようになった	0.013	0.612	0.282	-0.046	0.130	0.434
16.宿命に流されず生きる勇気がある	-0.072	0.600	-0.007	0.071	0.292	0.398
4.震災での体験は得がたい経験だった	-0.208	0.412	0.210	0.256	0.096	0.264
(人生変化2)震災前後で自分は変わったと感じる	0.080	0.234	0.818	-0.224	0.349	0.740
(人生変化3)自分の人生は変わったと感じる	0.120	0.194	0.806	-0.301	0.216	0.700
(人生変化1)震災を時間的区切りとした言い方	0.087	0.065	0.718	0.052	-0.082	0.592
3.現在がいつものくらしに感じられる	-0.124	0.153	-0.140	0.850	0.146	0.730
2.毎日の生活は決まった事の繰り返し	0.049	-0.009	-0.094	0.749	-0.059	0.593
1.暮らし方のめどが立っている	-0.166	0.204	-0.138	0.713	0.269	0.562
(人生変化2-1)自分の変化の方向*	-0.251	0.353	0.257	0.106	0.872	0.783
(人生変化3-1)人生の変化の方向*	-0.267	0.330	0.049	0.160	0.866	0.766
因子回転後の負荷量平方和	3.952	3.387	2.443	2.163	2.465	

N=1203

5 因子間の関連性の分析（生活復興過程尺度と人生変化尺度の統合）

さらに、この5因子間にどのような関連性があるのかについて分析した。

全22項目間の関連性の因子分析では、プロマックス法（斜交解）を用いて、全5因子それぞれの因子負荷量を求めた。

そこで、この負荷量行列を用いて、1,203名の回答者それぞれの因子得点を求め、これら5因子間の関連性について再度の因子分析（二次因子分析）を行った。（表6）

*この再度の因子分析では、因子間に相関を認めないバリマックス回転によって因子の解釈を試みた。

この二次因子分析の結果、「自立（回復）」「自立（奮闘中）」「再興途上」「震災が人生の転機となった」「（震災は）肯定的な体験」の5因子は、さらに上位の2因子によって、統合的に関連づけられることが明らかとなった。

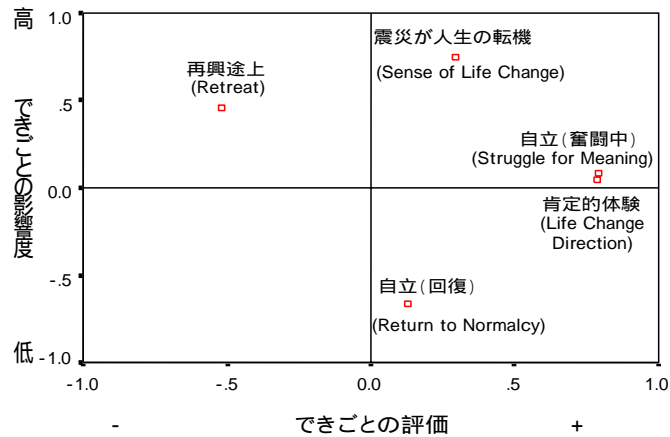
そこで、第1軸の因子を「できごとの評価（震災というできごとへの現在の評価）」、第2軸の因子を「できごとの影響度（震災というできごとの現在の影響度）」と名付けた。

表6：生活復興過程尺度・人生変化尺度の二次因子分析（斜交因子間相関行列の因子分析）の結果

	できごとの評価 Event Evaluation	できごとの影響度 Event Impact	Communality
自立（奮闘中） (Struggle for Meaning)	0.789	0.055	0.629
肯定的体験 (Life Change Direction)	0.784	0.015	0.617
再興途上 (Retreat)	-0.534	0.474	0.493
震災が人生の転機 (Sense of Life Change)	0.267	0.740	0.633
自立（回復） (Return to Normalcy)	0.150	-0.668	0.463
回転後の負荷量平方和	1.617	1.222	
因子寄与率（%）	32.3%	24.4%	N=1203

このようにして得られた二次因子分析の結果をもとに、できごと評価（横軸）とできごと影響度（縦軸）からなる空間上に5因子を布置したものが、図3である。

図3 生活復興過程概念の二次因子分析結果



まとめ

2003年調査では、結論として、震災後から現在の生活復興（アウトカム）に至るまでの過程について、マクロ経済指標の復旧・復興曲線を原イメージとする生活復興過程と、「震災が人生の転機となっているか、現在をどう評価するか」という質的判断に重きをおく人生変化の評価という2つの視点から分析し、「震災というできごとが現在の生活に与える影響度」と「震災というできごとに対する現在の評価」の2つの生活復興過程要因を表す統合的な概念を明らかにした。

第3章 統合的な生活復興モデルの構築

1. 生活復興過程要因と生活復興感との関係

前章までの分析を踏まえ、本章では、生活復興感に影響を及ぼす、生活再建課題7要素、生活復興過程要因（生活復興過程・人生変化）、生活復興感の間の構造的な関係を全体として解析（モデル化）することを試みた。

生活復興過程要因と生活復興感との関係の解析（モデル化）

生活復興過程要因と生活復興感との関係については、前章で明らかにした2つの生活復興過程要因（「できごとの評価」「できごとの影響度」）が、最終的に、生活復興感（アウトカム指標）を規定する要因になっていることを想定した。

そのような想定をモデル化し、潜在変数を含む構造方程式モデリング手法（Structural Equation Modeling, SEM）を利用して、生活復興過程要因と生活復興感との関係を解析した。

図1は、その解析結果をパス図（変数間の因果関係の方向性を矢印で示し、その因果関係の強さを示す指標として標準化編回帰係数 - パス係数 - を矢印に付した連関図 参考1）で表現したものである。

生活復興過程要因と生活復興感との関係

生活復興過程要因と生活復興感との関係は、以下の3点にまとめられる。

ア. 「できごとの評価」「できごとの影響度」は、生活復興感を規定する要因になっていた（統計的に意味のある影響を与えていた）。

* 適合度指標（GFI）は0から1までの値を取るが、0.918という値は、標本数が1,203名という今回の調査では、大変高い適合度と見なすことができる。また、図1のパス図に付されたパス係数は、すべて統計的に有意であった。

イ. 震災というできごとを肯定的に評価している人ほど、生活復興感が高かった。

（「できごとの評価」は、生活復興感に正の影響（パス係数 = .28, $p < .001$ ）を与えていた。）

なお、震災というできごとに対する肯定的評価は、被災体験と正面から向き合うこと（再興途上） 被災体験は自分の人生にとって肯定的な意味のあるできごとであったと意味づけられていること（自立（奮闘中）） 現在の人生は震災時と比べて肯定的な方向に進んでいると感じられていること（震災は肯定的体験）という3要因から影響を受けていた。

生活復興感に対して、
できごと評価は正の、
できごと影響度は負の
因果係数を示した

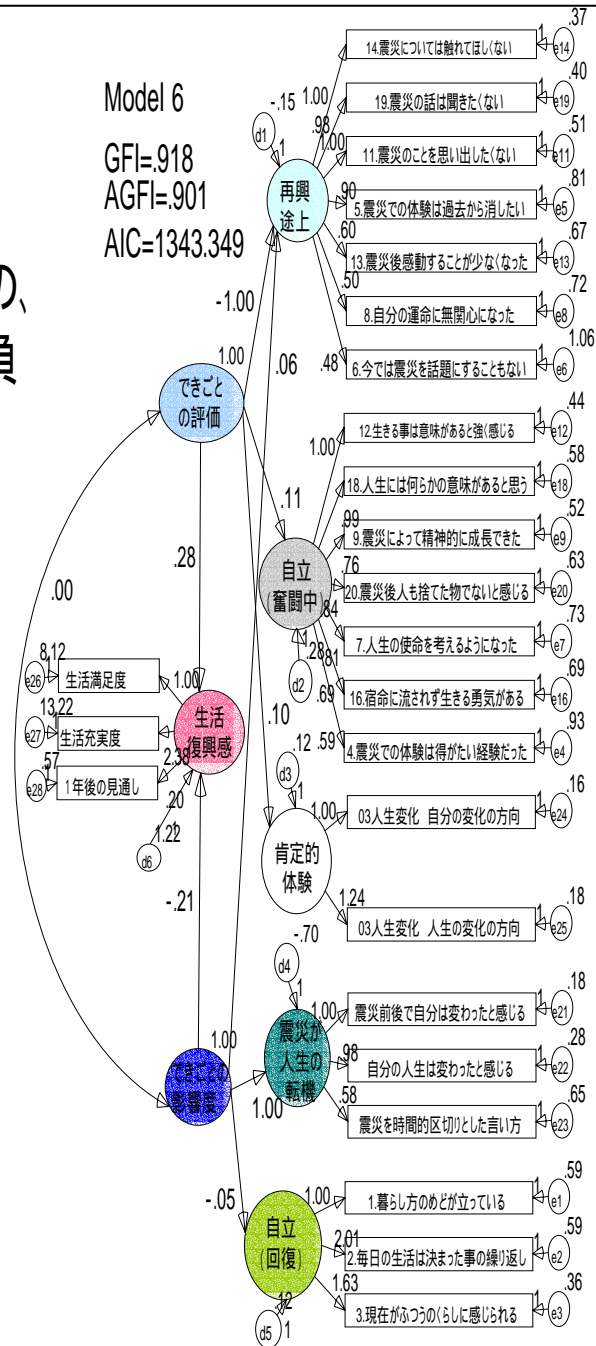


図 1 生活復興過程要因と生活復興感（アウトカム指標）の関係のパス図表現

ウ。「震災は現在の生活には影響を与えていない」と思っている人ほど（現在の生活が安定している人ほど）生活復興感が高かった。

（「できごとの影響度」は、生活復興感に負の影響（パス係数 $=-.21$, $p<.001$ ）を与えていた。）

なお、震災というできごとの現在への影響度の高さは、震災によって人生が変わったと感じられること（震災が人生の転機）、その変化の原因となった震災体験を意識的にふりかえることはできるだけ避けようとする（再興途上）、日常生活に戻ったという感覚（自立（回復））という3要因から影響を受けていた。

2. 統合的な生活復興モデルの構築

「生活再建課題7要素」「生活復興過程要因」「生活復興感」の因果関係の解析

以上のような分析を踏まえ、「生活再建課題7要素」「生活復興過程要因（できごとの評価・できごとの影響度）」「生活復興感」に関連する諸要因の因果関係について、潜在変数を含む構造方程式モデリング手法（SEM 参考2、参考3）を利用して解析し、その結果を、統合的な生活復興モデルとして構築した。（図2）

解析結果（統合的な生活復興モデル）の概要

「生活再建課題7要素」「生活復興過程要因」「生活復興感」の因果関係の解析結果（統合的な生活復興モデル）の概要は、以下のとおりである。

ア。「生活再建課題7要素」「生活復興過程要因」「生活復興感」の因果関係

生活復興感（アウトカム指標）は、「生活復興過程要因」「生活再建課題7要素」に関する次の4つの要素によって規定されていることがわかった。

a) 「できごとの影響度」（生活復興過程要因）

震災というできごとが現在の生活に影響を与えていないと感じているほど、生活復興感が高まることがわかった。

具体的には、震災がそもそも人生の転機とは感じられていないこと（人生の転機）、日常性が回復したこと（自立（回復））、震災体験に対して否定的ではないこと（再興途上）などである。

なお、できごとの影響度は、「こころやからだのストレス、家計の変化、すまいの満足度、家屋・家財の被害程度」から影響を受けることがわかった。これらの諸要素は、生活再建課題7要素の「こころとからだ」「くらしむき」「すまい」に関連する要素である。

Model 2-8

2乗=1299.727 (df=327)

GFI=.924 AGFI=.905

AIC=1457.727 RMSEA=.050

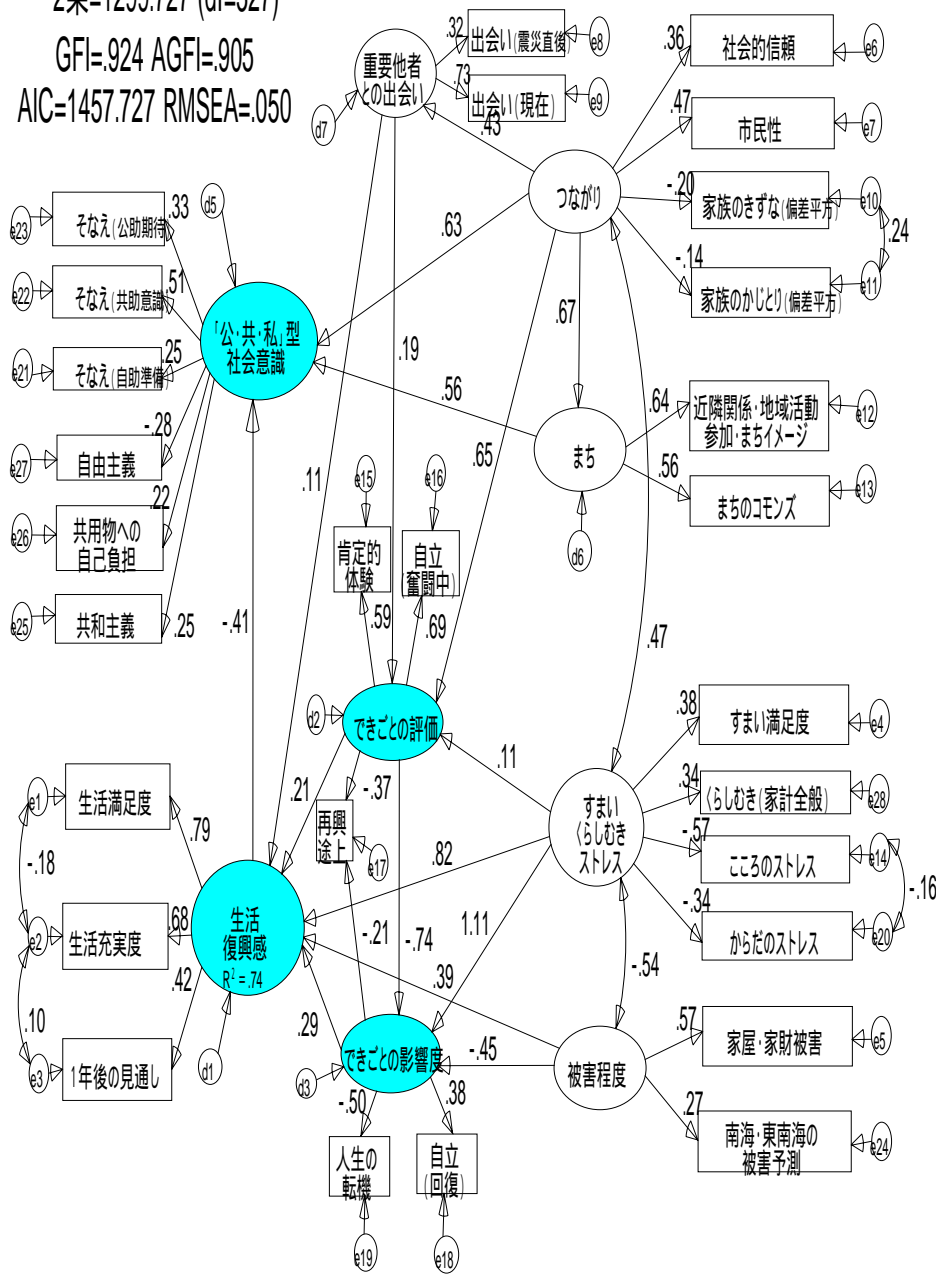


図2 生活再建課題7要素・生活復興過程要因・生活復興感を統合した生活復興モデルのSEM分析結果 (*図2中の各要素等の測定方法は参考3のとおり)

b) 「できごとの評価」(生活復興過程要因)

震災体験を現在では肯定的に評価しているほど、生活復興感が高まることがわかった。

具体的には、被災体験と正面から向き合っていること(再興途上)、被災体験が肯定的に意味づけられていること(自立(奮闘中))、現在は肯定的な方向に進んでいると感じられていること(震災は肯定的体験)などである。

なお、できごとの評価は、自律・連帯を基盤とした市民性、社会的信頼感、バランスのとれた家族関係(きずな・かじとり)から影響を受けることがわかった。これらの諸要素は、生活再建課題7要素モデルの「まち」と「つながり」に関連する要素である。

c) 「こころやからだのストレス、家計の変化、住宅満足度」(生活再建課題7要素の「こころとからだ」「くらしむき」「すまい」の要素)

こころやからだのストレスが少ないこと、家計が良好であること、現在のすまいに対する満足度が高いほど、生活復興感が高まることがわかった。

d) 「重要他者との出会い」(生活再建課題7要素の「つながり」の要素)

震災直後あるいは現在までに、自分の人生を安定化させるきっかけとなるような重要な他者との出会いがあるほど、生活復興感が高まることがわかった。

今回の分析によって、2003年調査における生活復興感(アウトカム指標)の決定係数(R^2 値*)は、2001年調査の59.3%から74.0%へと上昇し、生活復興感の説明力を15%以上も高めることができた。

つまり、今回の統合的な生活復興モデルの構築によって、生活復興感に関わる4分の3の情報を解明することができたことになる。

* R^2 値とは、多変量の一般線形モデルの数式が従属変数を予測するための説明力を示す指標。1に近づくほど説明力が高い。

イ. 「公・共・私」型社会意識の形成についての定量的な実証

生活復興感と生活復興過程要因等の因果関係の解析過程において、「つながり」「まち」の2つの要素(家族・地域における豊かな人間関係や、地域活動への熱心な参加など)が大きな促進要因となって、新しい社会意識(「公・共・私」型社会意識)を形成されていることが判明した。

「公・共・私」型社会意識とは、公共の領域を行政だけに任せるのではなく、共（地域・コミュニティ等）も私（個人）も参画し、公と協働して、地域を共治しようとする意識と定義できる。

このことは、震災後、被災地において広がってきたと考えられている創造的市民社会意識の存在が、定量的にも実証されたものといえる。

また、生活復興感と「公・共・私」型社会意識の関係をみると、生活復興感が高まるにつれて、「公・共・私」型社会意識、すなわち、公共を市民も主体となって担う参画と協働の意識が薄れる効果があることがわかった。

震災後の被災地では、つながりやまちづくりへの主体的参画を基調とした市民社会意識が高まったが、これは、「公・共・私」型社会意識を強める効果を持ちながら、一方では、生活復興感の向上によって、「喉元過ぎれば熱さを忘れる」効果も有していることを示唆しているといえる。

3 . 今後の生活復興施策のあり方への提案

以上の知見をもとに、今後の生活復興施策のあり方をモデル化した。（図3）

2001年調査が示唆した生活復興施策モデル

2001年調査で構築した「生活復興感を規定する要因モデル」が示唆した生活復興施策のあり方は、次の通りである（図3下段）

すなわち、震災によって、家族にけが人や死亡者が出るなどの人的被害や、家屋の倒壊や家財の損傷などの物的被害を受けた。そのような震災による被害程度の大小は、家計などのくらしむきや、こころやからだのストレスなど、被災者の生活に大きな影響を及ぼし、それがひいては、被災者の生活復興感の高低につながった。そのような観点から、被災者に対して、すまいの再建や、家計・しごとなどの生活支援、こころ・からだのストレスのケアなどの諸施策を行うことによって、被災者の震災のダメージを和らげ、結果的に、生活復興感を高めることに寄与するというものである。

2003年調査から得られた生活復興施策モデル

これに対して、今回の調査で新たに確認された知見にもとづく生活復興施策のあり方は、次のとおりである。（図3上段）

すなわち、家族関係や地域における人間関係が豊かになるほど、被災者の震災体験の評価は肯定的なものになり、ひいては、被災者の生活復興感が高まる。また、

地域における人間関係の豊かさは、地域活動への積極的な参加を促し、それらの活動を通じて、震災体験を肯定的なものへと変換させるきっかけとなる「重要他者」との出会いも生まれ、そのことも被災者の生活復興感を高めることにつながる。

さらに、地域活動への積極的な参加は、参画と協働を基調とする「公・共・私」型社会意識を高めるといえる。

しかしながら、留意すべきことは、前節で述べたように、生活復興感が高まるにつれて、この「公・共・私」型社会意識が薄れるということであり、これは、被災地における生活復興の進展に伴って、「喉元過ぎれば熱さを忘れる」効果を示しているといえる。

今後の生活復興施策への提案

以上のような知見が示唆する施策のあり方とは、常日頃からの家族や地域における人間関係を豊かにし、地域活動への参加を高めることをめざすものである。

復興10年以降を見据えた被災地のこれからの施策のあり方としては、生活復興の視点を超えて、これからの市民主体の社会づくりの一環として、家族や地域における人間関係の豊かさ、いわゆるソーシャル・キャピタルの醸成や、地域活動の促進等につながる施策を一般施策として進めることが重要である。

すなわち、大震災を経験した兵庫県において、今後、家族のきずなやつながり、地域・コミュニティにおける人と人とのつながりを高めるための施策、地域の住民がそれぞれの「まち」への帰属意識を高め、地域活動への積極的な参加を促すための施策、市民が「公」の領域に積極的に参画し、市民と行政との協働を進めていくための施策などが推進されることによって、「公・共・私」型社会意識（創造的市民社会）の形成につながっていくことが期待されるものである。

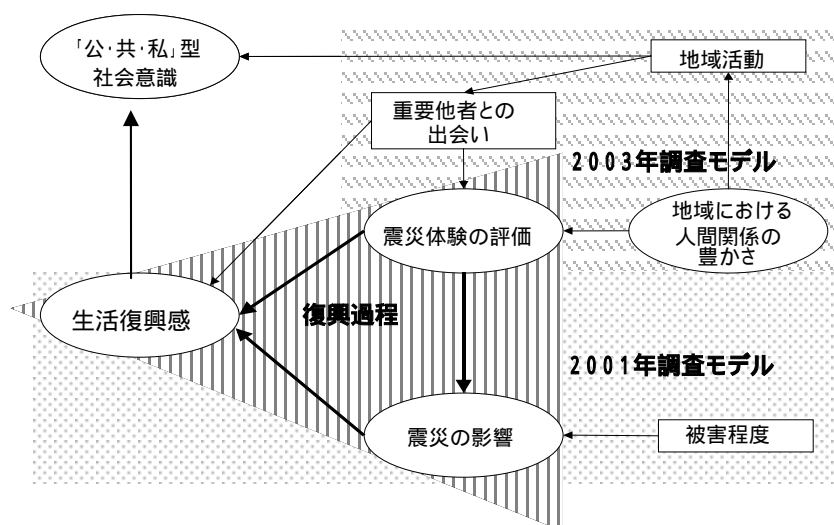


図3 生活復興を進める施策モデルの概念図

(参考1)

パス図において、実際の調査により観測された変数は四角形で、観測変数が反映していると想定される潜在的な概念(因子)は楕円形で表記する。SEMが示す結果が、どの程度実際のデータ(この場合には22個の復興過程感に関する項目と生活復興感(アウトカム指標)に関する3項目を合わせた25項目間の相関係数行列)と適合するかどうかは、適合度指標(Goodness of Fit Index, GFI)や自由度調整済み適合度指標(Adjusted Goodness of Fit Index)、あるいは赤池の情報量基準(AIC)などから判断示される。通常、SEM分析では多数の構造方程式モデルを想定し、それらのモデルの適合度指標を比較した後に、最上の適合度指標を示すモデルを選択することによって、観測変数や潜在変数(因子)間の関係を決定する。

このような作業を経て得られたのが図1であり、観測変数とその一次因子、その一次因子を束ねる二次因子が最終的に生活復興感に影響を及ぼすというモデルである。

(参考2)

SEM分析手法は、多量の観測変数間の関係性を確認的因子分析手法により縮約して、少数の潜在変数間の因果構造のモデル化を研究者に許すとともに、因果構造の形態も直接的な関係だけではなく、媒介変数を介した間接的効果をもモデルとして組み込むことのできる自由度の高さに特徴がある。また、SEMはそのとりあつかう観測変数の量がおよそ40を超えると、適合度の高いモデルを求めることが大変困難になるということが経験的に知られており、今回は、「観測変数は潜在変数を反映している(これを測定方程式モデルと呼ぶ)」という想定を可能な限り遵守するとともに、できるだけ観測変数を増やさないようにするために、意味のあるひとかたまりの尺度項目については、あえて測定方程式を想定せずに単一の因子得点を利用する手法も合わせて採用した。その結果、「できごとの評価」や「できごとの影響度」、またこころやからだのストレス、家計の変化、住宅満足度、地域活動の参加の程度、南海・東南海自身による被害程度の予測などについては、それぞれの尺度の因子得点をもって代用することにした。さらに、家屋・家財被害や重要他者との出会いでは、素回答をそのまま観測変数として用いている。これらは、できるだけ多数の生活再建要素に関連する観測変数をモデルに組み込みたいという希望と、同時に分析の対象とする観測変数の個数をできるだけ減らしたいという実際上の要求のバランスを考慮して決定したものである。

上記のような変数選択の過程をへて100近いモデルを想定し、その適合度指標について検討を行った結果、最上の適合度が得られたのが、図3に示すパス図である。このパス図上のパス係数はすべて統計的に有意($P<.001$)であった。

(参考3)

(1)回答者の基本属性および被害程度の測定方法

年齢・性別・職業・家族構成・住宅種別(現在・被災時)・被害状況(家財被害・家屋被害・ライフライン被害・経済的被害)などの項目を用いた。なお、最終的な分析にあたっては、家屋被害(1.全壊・全焼, 2.半壊・半焼, 3.一部損壊, 4.被害なし)の回答と家財被害(1.被

害なし, 2. 軽い被害, 3. 半分被害を受けた, 4. 全部被害を受けた, 5. わからない)の両項目について最適尺度(質的データの主成分分析)法により、標準化合成得点を求めて、被害程度の指標とした。

(2)生活復興要因の測定方法

a)すまい

すまいについては、2003年調査で、新たに、以下の6項目(1. そう思う～4. そう思わない)を設けた。今まで住んできたなかで、現在のすまいがいちばんいい、今、住んでいる住環境を大切にしたい、現在の住宅は住みごちがよい、現在のすまいには不満がある(逆項目)、この住宅にずっと住み続けるつもりだ、今の住宅で安心して暮らしていける。これら6項目は2002年暮れから翌1月にかけて実施した復興公営住宅団地コミュニティ調査の項目をほぼ踏襲した内容であり、これら6項目全体で住宅満足度に関する共通因子が測定されることが明らかになっている。これをもとに、本研究では、以上6項目について主成分分析を行い、最大固有値に対応する第1解の得点をもって住宅満足度の得点とした。

b)つながり

つながりについては、社会的信頼8項目、市民性13項目、家族関係2項目、および重要他者との出会い2項目(震災直後、現在)をそれぞれ利用した。これらは、市民社会的な意識・志(ethos)・態度について問うものであり、行動意図や直接の行動を測るものではない。このうち、社会的信頼8項目(例、ほとんどの人は基本的に正直である、ほとんどの人は信頼できる、私は人を信頼するほうである、等)(各設問とも1. あてはまる、2. あてはまらない)は、2001年調査から採用しているものがある。全8項目に対して最適尺度(質的データの主成分分析法)により、第1主成分得点をもって社会的信頼得点とした。

市民性については、市民自治の精神を「自律」と「連帯」という側面から測定するものである。2003年調査では、両次元を独立に測定する意図から項目数を増やし、13項目を採用した。回答は「1. 全くそう思う～5. まったくそう思わない」までの5件法にした。全13項目に対して主成分分析を行ったところ「自律」・「連帯」の2成分が明瞭に分離されなかったために、最終的には第1主成分得点をもって「市民性(自律・連帯)」の指標とした。

家族関係は、2001年調査から継続して測定しているもので、家族システム円環モデルのもとづき、家族のきずな・家族のかじとりの程度を、それぞれサー斯顿尺度8項目(FACESK GIV-16 Version2)から測定する。円環モデルでは、きずな・かじとりともに中庸である場合に、もっとも家族関係が機能的であるとする。そこで回答の偏差平方和を求めて(i.e. 偏差平方和が大きいほど家族関係は機能的でなくなる)家族関係の指標とした。

重要他者との出会いは、社会学的自己論(Mead, 1973/1934)の中核概念で、自己の成長や安定、維持には重要他者との関係が大きな意味をもつという主張を根拠としており、2003年調査で新たに加えた項目(「震災前と比べて、震災直後は心を開いて話すことができる人が増えたか、変わらないか、減ったか」, 「震災前と比べて、現在は心を開いて話す

ことができる人が増えたか、かわらないか、へったか)である。両項目とも増えた場合を1, 変わらない場合を0, 減った場合を-1として得点化した。

c) まち

生活復興要因としての「まち」とは、外的・客体的な器としての街区そのものの性質ではなく、自らが関与し「育てあげていく」対象であり、そこに含まれる主要な要素は、実際の近隣関係づくり(世間話, おすそ分け, 一緒に買い物・食事, 近所への散歩の程度)や地域活動実践(まちのイベントへの参加, イベントへの世話役としての参加, 趣味・スポーツのサークル参加, 自治会の仕事の経験, P T A 役員の経験, 地域でのボランティア活動)など行動的な側面と、活動エリアである「まち」イメージの地理的な規模(近所・小学校区・中学校区・市や区・隣市や隣区まで)そして地域自治やまち作り活動の誘発因としての「まち」への愛着や共有意識の程度(豊かな緑, 愛着のある公園, 好きだと思うまちなみ, 等21項目)を問う設問から成り立っている。近隣関係づくり4項目と地域活動参加6項目および「まち」の地理的規模のイメージに関する1項目の計11項目については、最適尺度(質的データの主成分分析)法により標準化合成得点を求めた。

一方、「まち」への愛着については、2001年調査同様の手法を踏襲し、全21項目に対して最適尺度(質的データの主成分分析)法により標準化合成得点を求め、これを「まちのコモンズ(わがことと愛着のもてる共有物)得点」と名付けた。

d) こととからだ

こととからだについては、2001年調査と同様に、最近1ヶ月についてこととからだのストレスについての6項目(気持ちが落ち着かない, 寂しい気持ちになる, 気分が沈む, 次々よくないことを考える, 集中できない, 何をしてもおっくうだ), からだのストレスについての6項目(動悸がする, 息切れがする, 頭痛・頭が重い, 胸がしめつけられるような痛みがある, めまいがする, のどがかわく)を引き続き利用した。回答は「1.まったくない~5.いつもあった」の5件法である。それぞれのストレスごとに第一主成分得点をもってストレスの指標とした。

e) そなえ

2003年調査では、そなえの項目の充実をはかった。具体的には個人や地域で実施可能な被害抑止・被害軽減策を18項目あげ、それに関する行動や態度を4件法で(1.やっている, 2.やるべきだ, 3.やったほうがよい, 4.やる必要がない)質問した。このうち自助実践に関する11項目(消火器や三角バケツを用意している, いつも風呂に水をためおきしている, 家具や冷蔵庫などを固定している, 等)の第1主成分得点をもって「自助実践」得点とした。また共助に関する7項目(防災訓練に積極的に参加している, 近所の高齢者・弱者の存在をふだんから把握する, 自治会との連絡を頻繁にする, 等)の第1主成分得点をもって「公助意識」得点とした。次に、大地震に対して国や地方自治体が力を入れるべき被害抑止・被害軽減策を12項目(避難経路や避難場所の整備, 電気・ガス・水道・電話などのライフライン施設の耐震性の向上, 食料・飲料水・医薬品の備蓄, 等)をあげ、その期待の

程度を3件法（1.やるべきだ，2.やったほうがよい，3.やる必要がない）で測定した。これら12項目の第1主成分得点をもって「公助期待」得点とした。最後に、大阪湾周辺部における南海・東南海地震の推定PGAマップを回答者に見せ、自身や家族にどの程度の被害が起こると予想するかを8項目（あなたやあなたの身近な誰かが亡くなったり，入院が必要なほどの病気・ケガをする，あなたのお住まいが，住めなくなるほどの大きな被害を受ける，あなたのやご家族の，収入や財産に大きな被害がでる，等）から問い合わせた。回答は5件法（1.可能性がまったくない～5.可能性が非常に高い）で求め、第1主成分得点をもって「南海・東南海地震による自らの被害予測」指標とした。

f)くらしむき

くらしむきについては、2001年調査と同一の「家計のやりくり」尺度16項目を利用した。これは大きく収入・支出・預貯金の3項目の増減について調べる。支出については家計簿の項目を参考に食費・外食費・住居費など13細目について詳細に尋ねている。各項目について回答は、増えた・変わらない・減ったの選択肢が与えられている。以上の計16項目について、最適尺度（質的データの主成分分析）法により第1主成分得点をもって「暮らし向き（家計全般）」指標とした。さらに、2003年調査では現在の世帯収入を5カテゴリー（1.300万未満，2.300～700万未満，3.700万～1000万未満，4.1000万～1500万未満，5.1500万以上）で問い合わせた。

g)行政とのかかわり

「行政との関わり」尺度は、2003年調査と同一のもので、4つのテーマ（ゴミ出しのルール，地域活動，大災害時に市民の命を守るのは，まちづくりについて）について、回答者の意思を「行政依存」・「自由や権利優先」・「住民自治優先」の3選択肢から選ぶ形式になっている。最適尺度（質的データの主成分分析）法により第1主成分得点は住民自治を優先させる「共和主義」得点とし、第2主成分得点は自由や権利を優先させる「自由主義」得点が求められる。

基礎資料 編

1. 質問文及び単純集計

問1. あなたの年齢と性別を教えてください。

n=1203

--	--	--	--	--

#2P06 (上欄には記入しないでください)

年齢 (AV. 56.04) 歳 性別 (AV. 男^{47.6}₅₇₃ ・ 女^{52.4}₆₃₀)

	TOTAL	20代	25代	30代	35代	40代	45代	50代	55代	60代	65代	70歳以上	不明	(平均年齢)	男性	女性
TOTAL	100 1203	3.1 37	3.9 47	3.5 42	5.1 61	7.4 89	8.6 103	11.6 139	11.1 134	13.3 160	12.4 149	19.9 239	0.2 3	56.04	47.6 573	52.4 630
男性小計	100 573	2.3 13	2.3 13	3.1 18	5.2 30	7.7 44	8.2 47	11.9 68	10.6 61	14.8 85	13.8 79	19.9 114	0.2 1	57.08	100 573	-
20代	100 26	50 13	50 13	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	24.23	100 26	-
30代	100 48	-	-	37.5 18	62.5 30	-	-	-	-	-	-	-	-	35.29	100 48	-
40代	100 91	-	-	-	-	48.4 44	51.6 47	-	-	-	-	-	-	44.88	100 91	-
50代	100 129	-	-	-	-	-	-	52.7 68	47.3 61	-	-	-	-	54.55	100 129	-
60代	100 164	-	-	-	-	-	-	-	-	51.8 85	48.2 79	-	-	64.34	100 164	-
70歳以上	100 114	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100 114	-	75.92	100 114	-
女性小計	100 630	3.8 24	5.4 34	3.8 24	4.9 31	7.1 45	8.9 56	11.3 71	11.6 73	11.9 75	11.1 70	19.8 125	0.3 2	55.08	-	100 630
20代	100 58	41.4 24	58.6 34	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	24.90	-	100 58
30代	100 55	-	-	43.6 24	56.4 31	-	-	-	-	-	-	-	-	34.73	-	100 55
40代	100 101	-	-	-	-	44.6 45	55.4 56	-	-	-	-	-	-	44.88	-	100 101
50代	100 144	-	-	-	-	-	-	49.3 71	50.7 73	-	-	-	-	54.63	-	100 144
60代	100 145	-	-	-	-	-	-	-	-	51.7 75	48.3 70	-	-	64.12	-	100 145
70歳以上	100 125	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100 125	-	76.32	-	100 125
1人	100 108	0.9 1	1.9 2	-	4.6 5	6.5 7	8.3 9	11.1 12	6.5 7	12 13	13 14	35.2 38	-	61.64	30.6 33	69.4 75
2人	100 394	-	3.3 13	2.5 10	2.8 11	2.3 9	4.6 18	7.6 30	11.7 46	12.4 49	20.8 82	32.0 126	-	62.27	51.0 201	49.0 193
3人	100 312	2.2 7	3.5 11	5.8 18	6.1 19	6.1 19	7.4 23	11.9 37	16.0 50	18.9 59	11.9 37	9.9 31	0.3 1	54.38	48.1 150	51.9 162
4人	100 210	9.5 20	6.2 13	2.9 6	9.5 20	15.2 32	10.5 22	18.1 38	9.0 19	10.5 22	1.9 4	5.7 12	1 2	46.98	46.7 98	53.3 112
5人	100 102	6.9 7	6.9 7	5.9 6	2.0 6	11.8 12	20.6 21	14.7 15	7.8 8	9.8 10	4.9 5	8.8 9	-	48.54	48.0 49	52.0 53
6人以上	100 73	2.7 2	1.4 1	1.4 1	5.5 4	13.7 10	13.7 10	8.2 6	4.1 3	8.2 6	9.6 7	31.5 23	-	57.67	53.4 39	46.6 34
死亡家族あり	100 11	-	-	-	-	9.1 1	-	18.2 2	27.3 3	27.3 3	18.2 2	-	-	57.82	36.4 4	63.6 7
入院病傷者あり	100 27	3.7 1	-	3.7 1	11.1 3	3.7 1	3.7 1	11.1 3	7.4 2	11.1 3	11.1 3	33.3 9	-	59.3	48.1 13	51.9 14
軽病傷者あり	100 180	1.7 3	5.6 10	5.0 9	5.6 10	10.0 18	10.0 18	14.4 26	8.3 15	11.1 20	8.9 15	19.4 35	-	54.35	43.3 78	56.7 102
全員無事	100 889	3.5 31	4.0 36	3.4 30	5.2 46	7.2 64	8.4 75	11.7 104	11.9 106	13.0 116	12.3 109	19.0 169	0.3 3	55.68	49.2 437	50.8 452
全壊・全焼	100 210	1.9 4	1.4 3	4.3 9	4.8 10	7.1 15	5.7 12	7.1 15	7.1 15	16.2 34	16.7 35	27.6 58	-	59.72	50.5 106	49.5 104
半壊・半焼	100 252	1.2 3	5.6 14	2.4 6	4.8 12	5.6 14	8.3 21	11.9 30	10.3 26	15.1 38	10.7 27	24.2 61	-	57.46	44.4 112	55.6 140
一部損壊	100 512	4.5 23	1.6 8	3.7 19	6.4 33	8.2 42	9.8 50	12.9 66	13.7 70	11.1 57	11.7 60	16.4 84	-	54.79	46.3 237	53.7 275
被害なし	100 224	3.1 7	9.8 22	3.1 7	2.7 6	8.0 18	8.9 20	12.1 27	10.3 23	13.4 30	11.6 26	16.1 36	0.9 2	53.87	52.2 117	47.8 107

選択肢後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

問2. 現在、(ご自分をふくめて)同居しているご家族は何人ですか。 n=1203

(AV.3.05) 人

付問: 現在、あなたから見て、どのような方が同居していらっしゃいますか。該当する方に、
つけ、人数もお書きください。

1. 配偶者	71.2	857
2. 子ども (1.57) 人	49.9	600
3. 子どもの配偶者 (1.03) 人	5.7	68
4. 孫 (1.92) 人	5.9	71
5. 祖父母	1.7	20
6. 自分の両親	14.1	170
7. 配偶者の両親	3.6	43
8. 自分のきょうだい (1.36) 人	5.8	70
9. その他 () (1.44) 人	0.7	9
(10. 単身	9.0	108)
カッコの中は平均値	DK / NA	0.5 6

	TOTAL	1人	2人	3人	4人	5人	6人以上	不明	(平均人数)
TOTAL	100 1203	9.0 108	32.8 394	25.9 312	17.5 210	8.5 102	6.1 73	0.3 4	3.05
男性小計	100 573	5.8 33	35.1 201	26.2 150	17.1 98	8.6 49	6.8 39	0.5 3	3.12
20代	100 26	3.8 1	11.5 3	15.4 4	42.3 11	15.4 4	11.5 3	-	3.88
30代	100 48	6.3 3	18.8 9	41.7 20	22.9 11	6.3 3	4.2 2	-	3.17
40代	100 91	9.9 9	15.4 14	23.1 21	25.3 23	15.4 14	11.0 10	-	3.57
50代	100 129	3.9 5	21.7 28	31.8 41	24.8 32	10.9 14	5.4 7	1.6 2	3.38
60代	100 164	5.5 9	46.3 76	29.3 48	10.4 17	4.9 8	3.0 5	0.6 1	2.74
70歳以上	100 114	5.3 6	62.3 71	13.2 15	3.5 4	5.3 6	10.5 12	-	2.81
女性小計	100 630	11.9 75	30.6 193	25.7 162	17.8 112	8.4 53	5.4 34	0.2 1	3.00
20代	100 58	3.4 2	17.2 10	24.1 14	37.9 22	17.2 10	-	-	3.48
30代	100 55	3.6 2	21.8 12	30.9 17	27.3 15	9.1 5	5.5 3	1.8 1	3.39
40代	100 101	6.9 7	12.9 13	20.8 21	30.7 31	18.8 19	9.9 10	-	3.75
50代	100 144	9.7 14	33.3 48	31.9 46	17.4 25	6.3 9	1.4 2	-	2.83
60代	100 145	12.4 18	37.9 55	33.1 48	6.2 9	4.8 7	5.5 8	-	2.72
70歳以上	100 125	25.6 32	44.0 55	12.8 16	6.4 8	2.4 3	8.8 11	-	2.50
死亡家族あり	100 11	9.1 1	45.5 5	27.3 3	9.1 1	-	9.1 1	-	2.73
入院病傷者あり	100 27	14.8 4	29.6 8	37 10	14.8 4	-	3.7 1	-	2.7
軽病傷者あり	100 180	6.7 12	31.1 56	23.9 43	19.4 35	12.2 22	6.7 12	-	3.24
全員無事	100 889	7.4 66	33.1 294	26.5 236	18.2 162	8.1 72	6.3 56	0.3 3	3.08
全壊・全焼	100 210	11.4 24	33.8 71	27.1 57	12.9 27	6.2 13	8.1 17	0.5 1	2.95
半壊・半焼	100 252	7.5 19	34.9 88	23.8 60	17.1 43	8.7 22	7.5 19	0.4 1	3.13
一部損壊	100 512	9.2 47	30.7 157	25.4 130	19.9 102	9.6 49	5.1 26	0.2 1	3.08
被害なし	100 224	8.0 18	34.4 77	28.1 63	16.1 36	8.0 18	4.9 11	0.4 1	3.01

選択肢後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

震災当時のあなたのことを教えてください。

問3. 震災が起こった時、あなたは、どちらにいましたか。 n=1203

1. 自宅	94.6	1138	その場所は、	1. 被災地内	85.2	1025
2. 勤務先	1.6	19		2. 被災地外	5.6	67
3. 通勤途上	0.5	6		3. わからない	1.1	13
4. 宿泊施設	0.5	6		DK / NA	8.1	98
5. その他	2.4	29				
DK / NA	0.4	5				

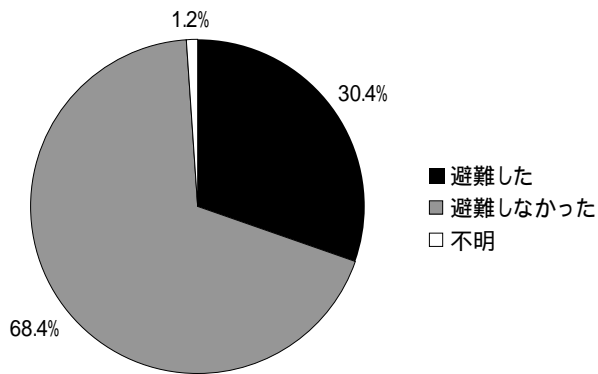
	TOTAL	自宅	勤務先	通勤途上	宿泊施設	その他	不明	被災地内	被災地外	わからない	不明
TOTAL	100 1203	94.6 1138	1.6 19	0.5 6	0.5 6	2.4 29	0.4 5	85.2 1025	5.6 67	1.1 13	8.1 98
男性小計	100 573	92.5 530	2.8 16	1.0 6	0.7 4	2.4 14	0.5 3	82.9 475	6.1 35	0.7 4	10.3 59
20代	100 26	88.5 23	-	-	3.8 1	7.7 2	-	96.2 25	3.8 1	-	-
30代	100 48	91.7 44	2.1 1	-	2.1 1	4.2 2	-	93.8 45	4.2 2	-	2.1 1
40代	100 91	94.5 86	2.2 2	1.1 1	-	1.1 1	1.1 1	86.8 79	6.6 6	1.1 1	5.5 5
50代	100 129	91.5 118	3.1 4	2.3 3	0.8 1	2.3 3	-	85.3 110	6.2 8	-	8.5 11
60代	100 164	92.1 151	3.7 6	0.6 1	-	3 5	0.6 1	76.8 126	7.9 13	1.8 3	13.4 22
70歳以上	100 114	93.9 107	2.6 3	0.9 1	0.9 1	0.9 1	0.9 1	78.1 89	4.4 5	-	17.5 20
女性小計	100 630	96.5 608	0.5 3	-	0.3 2	2.4 15	0.3 2	87.3 550	5.1 32	1.4 9	6.2 39
20代	100 58	96.6 56	-	-	-	1.7 1	1.7 1	87.9 51	6.9 4	3.4 2	1.7 1
30代	100 55	90.9 50	-	-	-	9.1 5	-	92.7 51	5.5 3	-	1.8 1
40代	100 101	97 98	1 1	-	-	2 2	-	86.1 87	2 2	4 4	7.9 8
50代	100 144	98.6 142	0.7 1	-	-	0.7 1	-	88.2 127	6.3 9	-	5.6 8
60代	100 145	97.2 141	-	-	0.7 1	2.1 3	-	82.8 120	4.8 7	0.7 1	11.7 17
70歳以上	100 125	95.2 119	0.8 1	-	0.8 1	2.4 3	0.8 1	90.4 113	4.8 6	1.6 2	3.2 4
1人	100 108	89.8 97	3.7 4	0.9 1	2.8 3	2.8 3	-	82.4 89	6.5 7	0.9 1	10.2 11
2人	100 394	95.4 376	1.8 7	-	0.3 1	2.5 10	-	84.5 333	4.6 18	0.8 3	10.2 40
3人	100 312	95.5 298	1.0 3	0.6 2	0.3 1	2.2 7	0.3 1	87.5 273	5.1 16	1.3 4	6.1 19
4人	100 210	95.7 201	1.9 4	0.5 1	0.5 1	1.0 2	0.5 1	85.2 179	7.6 16	1.4 3	5.7 12
5人	100 102	93.1 95	1.0 1	1.0 1	-	2.9 3	2.0 2	85.3 87	4.9 5	1.0 1	8.8 9
6人以上	100 73	91.8 67	-	1.4 1	-	5.5 4	1.4 1	84.9 62	5.5 4	1.4 1	8.2 6
死亡家族あり	100 11	100 11	-	-	-	-	-	81.8 9	-	-	18.2 2
入院病傷者あり	100 27	88.9 24	3.7 1	3.7 1	-	-	3.7 1	92.6 25	3.7 1	-	3.7 1
軽病傷者あり	100 180	92.2 166	1.7 3	0.6 1	-	4.4 8	1.1 2	92.2 166	3.3 6	0.6 1	3.9 7
全員無事	100 889	95.6 850	1.5 13	0.3 3	0.6 5	1.9 17	0.1 1	84.1 748	6.0 53	1.2 11	8.7 77
全壊・全焼	100 210	95.7 201	1.9 4	0.5 1	0.5 1	0.5 1	1.0 2	91.9 193	0.5 1	0.5 1	7.1 15
半壊・半焼	100 252	95.2 240	0.8 2	-	0.4 1	3.2 8	0.4 1	88.9 224	2.4 6	0.4 1	8.3 21
一部損壊	100 512	94.9 486	1.6 8	0.4 2	0.4 2	2.5 13	0.2 1	85.4 437	4.5 23	0.8 4	9.4 48
被害なし	100 224	92.0 206	2.2 5	1.3 3	0.9 2	3.1 7	0.4 1	74.6 167	16.1 36	3.1 7	6.3 14

選択肢後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

問4. あなたは、震災当日(1月17日)、避難しましたか。

n=1203

1. 避難した 30.4 366
 2. 避難しなかった 68.4 823
 DK/NA 1.2 14



付問

	TOTAL	避難した	避難しなかった	不明
TOTAL	1203	366	823	14
男性 小計	573	165	403	5
20代	26	9	17	-
30代	48	17	31	-
40代	91	39	52	-
50代	129	27	100	2
60代	164	39	123	2
70歳以上	114	34	79	1
女性 小計	630	201	420	9
20代	58	14	44	-
30代	55	18	37	-
40代	101	34	65	2
50代	144	40	102	2
60代	145	50	92	3
70歳以上	125	45	78	2
1人	108	43	63	2
2人	394	122	270	2
3人	312	89	219	4
4人	210	60	148	2
5人	102	25	75	2
6人以上	73	25	47	1
死亡家族あり	11	7	4	-
入院病傷者あり	27	18	9	-
軽病傷者あり	180	94	84	2
全員無事	889	207	674	8
全壊・全焼	210	161	47	2
半壊・半焼	252	109	140	3
一部損壊	512	87	420	5
被害なし	224	9	211	4

選択枝後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

付問：(「1. 避難した」と回答した人のみお答えください) あなたはどのようにして避難をしましたか。

その理由についてあてはまる番号すべてに をしてください。 n=366

1. 余震がこわかったから	61.7	226
2. 建物の安全性に不安があったから	61.2	224
3. 室内の家具やものが散乱していたから	59.8	219

4. 断水していたから	72.1	264
5. 停電していたから	65.6	240
6. ガスが使えなかったから	68.3	250

7. トイレが使えなかったから	61.5	225
8. 家族に高齢者がいたから	13.4	49
9. 家族に乳幼児がいたから	7.1	26

10. 家族の中に特別なケアを必要とする人がいたから	6.6	24
11. 自宅には、食べものがなかったから	23.8	87
12. とにかく人のいるところに行きたかったから	30.1	110

13. 情報や物資が得られると思ったから	32.0	117
14. 行政の支援が得られると思ったから	15.3	56
15. 家族が避難したから	18.9	69

16. 周囲の人に誘われたから	18.3	67
17. 避難命令が出たから	17.2	63
18. その他(具体的に：)	11.2	41
DK / NA	0.8	3

問5. 震災当日(1月17日)に、あなたが行った場所にすべて、夜、もっとも長い時間を過ごした場所に
1つだけをつけてください。

n=1203

被災地内の			被災地外の		
1. 自宅	74.2 893	62.2 748	11. 自宅	4.3 52	4.1 49
2. 別居している(親・子ども)の家	14.0 169	4.3 52	12. 別居している(親・子ども)の家	1.2 15	1.0 12
3. 親せきの家	9.2 111	1.2 15	13. 親せきの家	1.7 20	0.9 11
4. 友人の家	7.8 94	0.9 11	14. 友人の家	0.3 4	0.0 0
5. 近所の家	10.6 127	0.7 9	15. 近所の家	0.2 3	0.0 0
6. 避難所	19.6 236	12.6 151	16. 避難所	0.3 4	0.1 1
7. 車の中・テント等	10.4 125	3.0 36	17. 車の中・テント等	0.7 8	0.2 3
8. ホテル・旅館	0.3 4	0.2 2	18. ホテル・旅館	0.9 11	0.4 5
9. 職場	11.4 137	2.3 28	19. 職場	2.0 24	0.3 4
10. その他()	7.1 86	1.8 22	20. その他()	0.6 7	0.2 3
			DK / NA	0.9 11	3.4 41

問6. 震災当時、(ご自分をふくめて)同居していたご家族は何人でしたか。 n=1203

(AV.3.39) 人

付問: 震災当時、あなたから見て、どのような方が同居していらっしゃいましたか。該当する方につけ、人数もお書きください。

1. 配偶者	70.2	845
2. 子ども(1.71)人	55.3	665
3. 子どもの配偶者(1.10)人	4.3	52
4. 孫(2.00)人	4.8	58
5. 祖父母	3.2	39
6. 自分の両親	19.0	229
7. 配偶者の両親	4.2	51
8. 自分のきょうだい(1.37)人	10.2	123
9. その他()(2.15)人	2.2	27
(10. 単身	7.0	84)
カッコの中は平均値	DK / NA	0.3 4

選択肢後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

	TOTAL	1人	2人	3人	4人	5人	6人以上	不明	(平均人数)
TOTAL	100 1203	7.0 84	25.0 301	24.2 291	23.7 285	12.1 145	7.7 93	0.3 4	3.39
男性小計	100 573	6.6 38	24.4 140	23.4 134	25.0 143	13.1 75	7.2 41	0.3 2	3.42
20代	100 26	11.5 3	3.8 1	7.7 2	30.8 8	30.8 8	15.4 4	-	4.31
30代	100 48	8.3 4	20.8 10	31.3 15	22.9 11	14.6 7	2.1 1	-	3.27
40代	100 91	9.9 9	11.0 10	19.8 18	30.8 28	17.6 16	11.0 10	-	3.75
50代	100 129	5.4 7	10.1 13	23.3 30	38.8 50	13.2 17	8.5 11	0.8 1	3.76
60代	100 164	2.4 4	28.7 47	28 46	23.2 38	12.2 20	4.9 8	0.6 1	3.33
70歳以上	100 114	9.6 11	51.8 59	19.3 22	7 8	6.1 7	6.1 7	-	2.75
女性小計	100 630	7.3 46	25.6 161	24.9 157	22.5 142	11.1 70	8.3 52	0.3 2	3.37
20代	100 58	3.4 2	3.4 2	19.0 11	41.4 24	22.4 13	10.3 6	-	4.10
30代	100 55	5.5 3	21.8 12	27.3 15	27.3 15	10.9 6	7.3 4	-	3.55
40代	100 101	6.9 7	9.9 10	19.8 20	29.7 30	17.8 18	15.8 16	-	3.99
50代	100 144	5.6 8	19.4 28	30.6 44	29.2 42	10.4 15	4.9 7	-	3.4
60代	100 145	5.5 8	29 42	37.2 54	14.5 21	7.6 11	6.2 9	-	3.16
70歳以上	100 125	14.4 18	53.6 67	10.4 13	6.4 8	5.6 7	8.0 10	1.6 2	2.66

問7. あなたや同居されていた方の中で、震災が原因で、ケガや病気をされた方はいらっしゃいますか。

あてはまるものすべての番号に をつけ、人数もお書きください。 n=1203

- | | | |
|------------------------------|------|-----|
| 1. 全員、ケガも病気もしなかった。 | 73.9 | 889 |
| 2. 亡くなった(1.09人) | 0.9 | 11 |
| 3. ケガで入院した(1.29人) | 0.6 | 7 |
| 4. 病気で入院した(1.05人) | 1.7 | 21 |
| 5. ケガで受診した(1.17人) | 4.5 | 54 |
| 6. 病気で受診した(1.56人) | 3.1 | 37 |
| 7. ケガをしたが、受診・入院はしなかった(1.30人) | 8.4 | 101 |
| 8. 病気をしたが、受診・入院はしなかった(1.33人) | 1.7 | 20 |

カッコの中は平均値

DK / NA 8.0 96

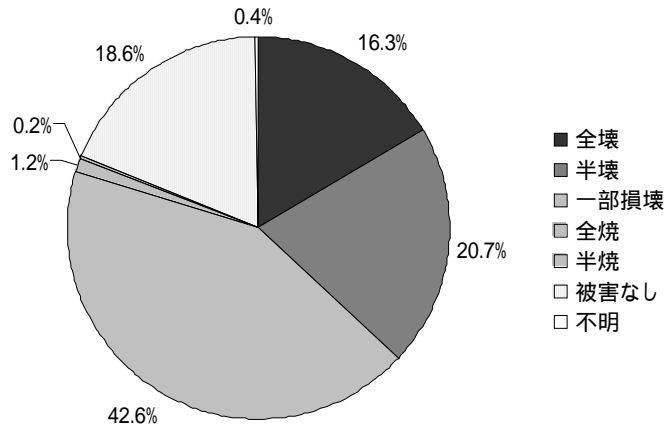
	TOTAL	た 気も しな か 病	全 員 ケ ガ も 病	亡 く な っ た	た ケ ガ で 入 院 し	た 病 気 で 入 院 し	た ケ ガ で 受 診 し	た 病 気 で 受 診 し な か つ た	受 診 ・ 入 院 は し な か つ た	ケ ガ を し た が 受 診 ・ 入 院 は し な か つ た	病 気 を し た が 受 診 ・ 入 院 は し な か つ た	不 明
TOTAL	100 1203	73.9 889	0.9 11	0.6 7	1.7 21	4.5 54	3.1 37	8.4 101	1.7 20	8.0 96	8.0 96	
男性小計	100 573	76.3 437	0.7 4	0.9 5	1.4 8	4.7 27	2.3 13	7.5 43	1.7 10	7.2 41	7.2 41	
20代	100 26	76.9 20	-	-	3.8 1	7.7 2	3.8 1	-	3.8 1	7.7 2	7.7 2	
30代	100 48	75 36	-	2.1 1	2.1 1	12.5 6	-	4.2 2	-	6.3 3	6.3 3	
40代	100 91	73.6 67	1.1 1	-	1.1 1	5.5 5	2.2 2	13.2 12	-	5.5 5	5.5 5	
50代	100 129	82.2 106	1.6 2	-	1.6 2	3.9 5	1.6 2	6.2 8	1.6 2	4.7 6	4.7 6	
60代	100 164	75.6 124	0.6 1	1.8 3	0.6 1	4.3 7	0.6 1	7.3 12	1.2 2	9.1 15	9.1 15	
70歳以上	100 114	72.8 83	-	0.9 1	1.8 2	1.8 2	6.1 7	7.9 9	4.4 5	8.8 10	8.8 10	
女性小計	100 630	71.7 452	1.1 7	0.3 2	2.1 13	4.3 27	3.8 24	9.2 58	1.6 10	8.7 55	8.7 55	
20代	100 58	81 47	-	-	-	5.2 3	1.7 1	10.3 6	-	1.7 1	1.7 1	
30代	100 55	72.7 40	-	-	3.6 2	7.3 4	3.6 2	12.7 7	1.8 1	1.8 1	1.8 1	
40代	100 101	71.3 72	-	-	1.0 1	5.0 5	4.0 4	8.9 9	2.0 2	8.9 9	8.9 9	
50代	100 144	72.2 104	2.1 3	0.7 1	2.1 3	4.9 7	2.8 4	13.9 20	-	4.2 6	4.2 6	
60代	100 145	69.7 101	2.8 4	-	1.4 2	2.8 4	5.5 8	6.2 9	0.7 1	15.2 22	15.2 22	
70歳以上	100 125	68.8 86	-	0.8 1	4.0 5	3.2 4	4.0 5	5.6 7	4.8 6	12.8 16	12.8 16	
全壊・全焼	100 210	55.7 117	3.8 8	1.9 4	3.3 7	10 21	7.1 15	13.3 28	1.9 4	8.6 18	8.6 18	
半壊・半焼	100 252	63.9 161	0.8 2	0.4 1	2 5	6.3 16	5.2 13	13.9 35	3.6 9	10.3 26	10.3 26	
一部損壊	100 512	78.9 404	0.2 1	0.4 2	1.6 8	2.5 13	1.4 7	6.6 34	1.2 6	8.2 42	8.2 42	
被害なし	100 224	91.1 204	-	-	0.4 1	1.3 3	0.9 2	1.3 3	0.4 1	4.5 10	4.5 10	

選択枝後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

問8. 震災の時、お住まいになっていた住宅はどのような被害を受けましたか。(〃はひとつ)

n=1203

1. 全壊	16.3	196	4. 全焼	1.2	14
2. 半壊	20.7	249	5. 半焼	0.2	3
3. 一部損壊	42.6	512	6. 被害なし	18.6	224
			DK / NA	0.4	5



	TOTAL	全壊	半壊	一部損壊	全焼	半焼	被害なし	不明	全壊・全焼	半壊・半焼	一部損壊	被害なし	不明
TOTAL	100 1203	16.3 196	20.7 249	42.6 512	1.2 14	0.2 3	18.6 224	0.4 5	17.5 210	20.9 252	42.6 512	18.6 224	0.4 5
男性小計	100 573	16.9 97	19.2 110	41.4 237	1.6 9	0.3 2	20.4 117	0.2 1	18.5 106	19.5 112	41.4 237	20.4 117	0.2 1
20代	100 26	7.7 2	26.9 7	30.8 8	3.8 1	-	30.8 8	-	11.5 3	26.9 7	30.8 8	30.8 8	-
30代	100 48	16.7 8	12.5 6	58.3 28	-	-	10.4 5	2.1 1	16.7 8	12.5 6	58.3 28	10.4 5	2.1 1
40代	100 91	17.6 16	19.8 18	44 40	1.1 1	-	17.6 16	-	18.7 17	19.8 18	44 40	17.6 16	-
50代	100 129	10.1 13	19.4 25	43.4 56	0.8 1	-	26.4 34	-	10.9 14	19.4 25	43.4 56	26.4 34	-
60代	100 164	19.5 32	17.1 28	39.6 65	1.2 2	1.2 2	21.3 35	-	20.7 34	18.3 30	39.6 65	21.3 35	-
70歳以上	100 114	22.8 26	22.8 26	35.1 40	3.5 4	-	15.8 18	-	26.3 30	22.8 26	35.1 40	15.8 18	-
女性小計	100 630	15.7 99	22.1 139	43.7 275	0.8 5	0.2 1	17.0 107	0.6 4	16.5 104	22.2 140	43.7 275	17.0 107	0.6 4
20代	100 58	6.9 4	17.2 10	39.7 23	-	-	36.2 21	-	6.9 4	17.2 10	39.7 23	36.2 21	-
30代	100 55	18.2 10	21.8 12	43.6 24	1.8 1	-	14.5 8	-	20.0 11	21.8 12	43.6 24	14.5 8	-
40代	100 101	9.9 10	16.8 17	51.5 52	-	-	21.8 22	-	9.9 10	16.8 17	51.5 52	21.8 22	-
50代	100 144	11.1 16	21.5 31	55.6 80	-	-	11.1 16	0.7 1	11.1 16	21.5 31	55.6 80	11.1 16	0.7 1
60代	100 145	21.4 31	23.4 34	35.9 52	2.8 4	0.7 1	14.5 21	1.4 2	24.1 35	24.1 35	35.9 52	14.5 21	1.4 2
70歳以上	100 125	22.4 28	28.0 35	35.2 44	-	-	14.4 18	-	22.4 28	28.0 35	35.2 44	14.4 18	-
1人	100 108	22.2 24	17.6 19	43.5 47	-	-	16.7 18	-	22.2 24	17.6 19	43.5 47	16.7 18	-
2人	100 394	16.8 66	21.8 86	39.8 157	1.3 5	0.5 2	19.5 77	0.3 1	18.0 71	22.3 88	39.8 157	19.5 77	0.3 1
3人	100 312	16.7 52	18.9 59	41.7 130	1.6 5	0.3 1	20.2 63	0.6 2	18.3 57	19.2 60	41.7 130	20.2 63	0.6 2
4人	100 210	12.4 26	20.5 43	48.6 102	0.5 1	-	17.1 36	1 2	12.9 27	20.5 43	48.6 102	17.1 36	1 2
5人	100 102	11.8 12	21.6 22	48 49	1.0 1	-	17.6 18	-	12.7 13	21.6 22	48 49	17.6 18	-
6人以上	100 73	20.5 15	26 19	35.6 26	2.7 2	-	15.1 11	-	23.3 17	26 19	35.6 26	15.1 11	-
死亡家族あり	100 11	63.6 7	18.2 2	9.1 1	9.1 1	-	-	-	72.7 8	18.2 2	9.1 1	-	-
入院病傷者あり	100 27	33.3 9	22.2 6	33.3 9	7.4 2	-	3.7 1	-	40.7 11	22.2 6	33.3 9	3.7 1	-
軽病傷者あり	100 180	28.9 52	31.7 57	31.1 56	2.2 4	-	5.0 9	1.1 2	31.1 56	31.7 57	31.1 56	5.0 9	1.1 2
全員無事	100 889	12.4 110	17.8 158	45.4 404	0.8 7	0.3 3	22.9 204	0.3 3	13.2 117	18.1 161	45.4 404	22.9 204	0.3 3
全壊・全焼	100 210	93.3 196	-	-	6.7 14	-	-	-	100 210	-	-	-	-
半壊・半焼	100 252	-	98.8 249	-	-	1.2 3	-	-	-	100 252	-	-	-
一部損壊	100 512	-	-	100 512	-	-	-	-	-	-	100 512	-	-
被害なし	100 224	-	-	-	-	-	100 224	-	-	-	-	100 224	-

選択枝後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

問9. あなたの家財(家具、電気器具、食器など)の被害はどれくらいだと思いますか。ひとつだけ選んでください。

n=1203

1. 被害はなかった	8.6 103	3. 半分被害を受けた	28.9 348	5. わからない	1.6 19
2. 軽い被害を受けた	48.3 581	4. 全部被害を受けた	12.5 150	DK / NA	0.2 2

	TOTAL	た被害はなかつ	け軽い被害を受	け半分被害を受	け全部被害を受	わからない	不明
TOTAL	100 1203	8.6 103	48.3 581	28.9 348	12.5 150	1.6 19	0.2 2
男性小計	100 573	10.5 60	49.4 283	25.7 147	13.1 75	1.2 7	0.2 1
20代	100 26	15.4 4	38.5 10	30.8 8	15.4 4	-	-
30代	100 48	6.3 3	50.0 24	25 12	12.5 6	4.2 2	2.1 1
40代	100 91	4.4 4	51.6 47	34.1 31	7.7 7	2.2 2	-
50代	100 129	13.2 17	53.5 69	24.8 32	8.5 11	-	-
60代	100 164	12.8 21	49.4 81	22.0 36	15.9 26	-	-
70歳以上	100 114	9.6 11	44.7 51	24.6 28	18.4 21	2.6 3	-
女性小計	100 630	6.8 43	47.3 298	31.9 201	11.9 75	1.9 12	0.2 1
20代	100 58	17.2 10	46.6 27	31.0 18	1.7 1	3.4 2	-
30代	100 55	3.6 2	41.8 23	43.6 24	10.9 6	-	-
40代	100 101	4.0 4	58.4 59	24.8 25	10.9 11	2.0 2	-
50代	100 144	6.3 9	57.6 83	25.7 37	9 13	1.4 2	-
60代	100 145	6.9 10	42.1 61	34.5 50	13.1 19	2.8 4	0.7 1
70歳以上	100 125	6.4 8	34.4 43	37.6 47	20.0 25	1.6 2	-
死亡家族あり	100 11	-	9.1 1	45.5 5	45.5 5	-	-
入院病傷者あり	100 27	-	22.2 6	40.7 11	37.0 10	-	-
軽病傷者あり	100 180	-	31.7 57	42.8 77	23.3 42	1.7 3	0.6 1
全員無事	100 889	10.8 96	53.9 479	25.2 224	8.9 79	1.2 11	-
全壊・全焼	100 210	0.5 1	9.0 19	38.1 80	49 103	2.9 6	0.5 1
半壊・半焼	100 252	2.0 5	29.4 74	56.7 143	9.5 24	2.4 6	-
一部損壊	100 512	4.1 21	69.1 354	21.9 112	3.9 20	1.0 5	-
被害なし	100 224	33.5 75	58.5 131	5.8 13	1.3 3	0.9 2	-

選択肢後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

問 10 . あなたの住宅・家財等をすべて含んだ被害総額は、震災当時のあなたの世帯の年収の、どの程度にあたると思われますか。あてはまる番号1つを選んで をつけてください。 n=1203

被害総額は震災当時の年収の...

1 . 被害はなかった	9.3 112	4 . 30% ~ 50%	12.0 144	7 . 同じ程度 ~ 2 倍	4.9 59
2 . 10%未満	28.1 338	5 . 50% ~ 70%	6.3 76	8 . 2 倍 ~ 3 倍	3.9 47
3 . 10% ~ 30%	20.9 252	6 . 70% ~ 100%	3.8 46	9 . 3 倍以上	9.0 108
				DK / NA	1.7 21

	TOTAL	た被害はなかった	10%未満	30% ~ 50%	50% ~ 70%	70% ~ 100%	100%以上	同じ程度 ~ 2 倍	2 倍 ~ 3 倍	3 倍以上	不明
TOTAL	100 1203	9.3 112	28.1 338	20.9 252	12.0 144	6.3 76	3.8 46	4.9 59	3.9 47	9.0 108	1.7 21
男性 小計	100 573	10.3 59	29.7 170	20.9 120	9.8 56	5.9 34	3.8 22	4.9 28	4.2 24	8.7 50	1.7 10
20 代	100 26	15.4 4	30.8 8	15.4 4	11.5 3	-	3.8 1	3.8 1	3.8 1	15.4 4	-
30 代	100 48	4.2 2	33.3 16	27.1 13	10.4 5	6.3 3	4.2 2	4.2 2	4.2 2	4.2 2	2.1 1
40 代	100 91	5.5 5	36.3 33	27.5 25	5.5 5	4.4 4	1.1 1	4.4 4	8.8 8	6.6 6	-
50 代	100 129	12.4 16	34.1 44	17.8 23	14.7 19	5.4 7	3.9 5	3.1 4	2.3 3	4.7 6	1.6 2
60 代	100 164	13.4 22	27.4 45	18.9 31	7.9 13	7.3 12	3.7 6	6.1 10	4.3 7	8.5 14	2.4 4
70 歳以上	100 114	8.8 10	20.2 23	21.1 24	9.6 11	7.0 8	6.1 7	6.1 7	2.6 3	15.8 18	2.6 3
女性 小計	100 630	8.4 53	26.7 168	21.0 132	14.0 88	6.7 42	3.8 24	4.9 31	3.7 23	9.2 58	1.7 11
20 代	100 58	17.2 10	39.7 23	20.7 12	10.3 6	1.7 1	1.7 1	3.4 2	-	1.7 1	3.4 2
30 代	100 55	3.6 2	32.7 18	18.2 10	16.4 9	9.1 5	-	5.5 3	3.6 2	9.1 5	1.8 1
40 代	100 101	6.9 7	34.7 35	29.7 30	8.9 9	6.9 7	3.0 3	4.0 4	1.0 1	3.0 3	2.0 2
50 代	100 144	6.9 10	28.5 41	25.3 36	15.3 22	9.0 13	1.4 2	6.3 9	2.1 3	5.6 8	-
60 代	100 145	9.7 14	17.9 26	20.2 29	17.2 25	6.9 10	4.8 7	4.8 7	6.9 10	9.7 14	2.1 3
70 歳以上	100 125	7.2 9	19.2 24	12.0 15	13.6 17	4.8 6	8.8 11	4.8 6	5.6 7	21.6 27	2.4 3
1 人	100 108	12.0 13	18.5 20	25.0 27	13.0 14	10.2 11	2.8 3	2.8 3	2.8 3	12.0 13	0.9 1
2 人	100 394	9.9 39	25.1 99	22.6 89	11.9 47	6.3 25	4.8 19	3.8 15	4.6 18	8.9 35	2.0 8
3 人	100 312	10.9 34	27.9 87	16.7 52	13.5 42	6.7 21	2.9 9	6.1 19	3.8 12	10.3 32	1.3 4
4 人	100 210	6.7 14	37.6 79	22.4 47	11.4 24	3.8 8	3.3 7	4.3 9	2.4 5	6.7 14	1.4 3
5 人	100 102	8.8 9	37.3 38	20.6 21	9.8 10	3.9 4	2.0 2	7.8 8	2.9 3	4.9 5	2.0 2
6 人以上	100 73	4.1 3	19.2 14	21.9 16	8.2 6	9.6 7	8.2 6	5.5 4	8.2 6	12.3 9	2.7 2
死亡家族あり	100 11	-	9.1 1	-	-	27.3 3	-	9.1 1	18.2 2	36.4 4	-
入院病傷者あり	100 27	3.7 1	11.1 3	22.2 6	18.5 5	7.4 2	3.7 1	7.4 2	-	22.2 6	3.7 1
軽病傷者あり	100 180	-	13.3 24	21.7 39	17.2 31	8.9 16	4.4 8	8.3 15	7.8 14	15.0 27	3.3 6
全員無事	100 889	11.7 104	33.0 293	21.0 187	10.1 90	5.2 46	3.6 32	3.8 34	3.1 28	7.3 65	1.1 10
全壊・全焼	100 210	1.0 2	3.3 7	8.6 18	7.6 16	7.1 15	9.5 20	10.5 22	10.5 22	39.5 83	2.4 5
半壊・半焼	100 252	0.8 2	7.9 20	15.5 39	23.4 59	14.7 37	7.5 19	10.7 27	6.7 17	9.1 23	3.6 9
一部損壊	100 512	2.9 15	38.3 196	35.2 180	13.3 68	4.5 23	1.2 6	2 10	1.6 8	0.4 2	0.8 4
被害なし	100 224	41.1 92	50 112	6.7 15	0.4 1	0.4 1	0.4 1	-	-	-	0.9 2

選択枝後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

問 11 . 電気・水道・ガス・電話・下水 (トイレ) といったライフラインの被害についてお聞きします。

災害時、あなたのご自宅では、どのような不便がありましたか。 それぞれ 1 ~ 5 のあてはまる番号に
 をつけてください。 n=1203

A . 電気は

1 . 停電した	85.4	1027	2 . 停電しなかった	12.0	144
3 . わからない	0.7	8	4 . おぼえていない	0.7	9
			DK / NA	1.2	15

B . 水道は

1 . 断水した	85.8	1032	2 . 断水しなかった	11.6	139
3 . わからない	0.7	8	4 . おぼえていない	0.5	6
			DK / NA	1.5	18

C . ガスは

1 . 止まった	84.3	1014	2 . 止まらなかった	9.0	108
3 . わからない	0.9	11	4 . おぼえていない	0.4	5
5 . プロパンガスを使用していた	4.3	52	DK / NA	1.1	13

D . 電話は

1 . 通じなかった	78.6	945	2 . 通じた	18.2	219
3 . わからない	1.0	12	4 . おぼえていない	0.7	9
5 . 電話は引いていなかった	0.4	5	DK / NA	1.1	13

E . トイレは

1 . 不都合があった	80.4	967	2 . 不都合はなかった	16.7	201
3 . わからない	0.7	9	4 . おぼえていない	0.7	9
			DK / NA	1.4	17

F . いつも使う交通機関は

1 . 止まった	84.9	1021	2 . 止まらなかった	2.8	34
3 . わからない	2.0	24	4 . おぼえていない	1.4	17
5 . ふだんは利用しない	8.1	97	DK / NA	0.8	10

	TOTAL	停電した	た停電しなかった	わからない	いおぼえていない	不明	断水した	た断水しなかった	わからない	いおぼえていない	不明	止まった	た止まらなかった	わからない	いおぼえていない	不明	通じなかった	通じた	わからない	いおぼえていない	不明	た都合があつた	不都合はなかった	わからない	いおぼえていない	不明	止まった	た止まらなかった	わからない	いおぼえていない	不明	止まった	た止まらなかった	わからない	いおぼえていない	不明							
TOTAL	100	85.4	12.0	0.7	0.7	1.2	85.8	11.6	0.7	0.5	1.5	84.3	9.0	0.9	0.4	4.3	1.1	78.6	18.2	1.0	0.7	0.4	1.1	80.4	16.7	0.7	0.7	1.4	84.9	2.8	2.0	1.4	8.1	0.8									
死亡家族あり	100	81.8	9.1	-	-	9.1	90.9	-	-	-	9.1	81.8	9.1	-	-	9.1	81.8	9.1	-	-	-	9.1	81.8	9.1	-	-	-	9.1	81.8	9.1	-	-	-	9.1	81.8	9.1	-	-	-				
入院病弱者あり	100	77.8	11.1	-	-	7.4	82.6	3.7	-	-	3.7	81.5	3.7	-	-	7.4	74.1	22.2	-	-	-	3.7	81.5	11.1	-	-	3.7	77.8	11.1	-	-	3.7	82.6	3.7	-	-	3.7	77.8	11.1	-	-	3.7	
軽病傷者あり	100	93.9	4.4	1.1	-	0.6	96.7	2.2	1.1	-	-	92.2	4.4	1.7	-	1.7	87.8	10.6	0.6	0.6	-	0.6	92.2	5.0	2.2	0.6	-	0.6	93.9	4.4	1.1	-	0.6	96.7	2.2	1.1	-	0.6	93.9	4.4	1.1	-	0.6
全員無事	100	83.8	13.9	0.6	0.8	0.9	83.2	14.5	0.7	0.4	1.1	82.8	10.8	0.8	0.4	4.6	0.6	76.3	20.9	1.1	0.8	0.1	0.8	77.6	20.4	0.3	0.7	1.0	85	3.3	2.0	1.6	7.6	0.4									
全壊・全焼	100	93.3	4.3	1.0	-	1.4	96.7	-	1.4	0.5	1.4	94.8	-	1.4	-	1.9	1.9	89	6.7	1.4	-	-	2.9	94.8	0.5	1.0	1.0	2.9	90.5	1.4	1.9	-	4.8	1.4									
半壊・半焼	100	88.5	9.5	0.4	0.4	1.2	95.6	3.2	0.4	-	0.8	92.1	4.0	0.4	-	3.2	0.4	84.5	13.9	0.4	0.4	0.4	90.1	7.9	0.8	0.8	0.4	0.8	85.7	1.2	1.2	1.6	9.1	1.2									
一部損壊	100	86.5	11.5	0.2	1.0	0.8	84.6	13.3	0.2	0.6	1.4	82.8	9.8	0.4	0.6	5.5	1.0	76.4	21.1	0.6	0.8	0.8	80.1	17.8	0.4	0.6	1.2	86.1	2.1	1.8	1.8	7.6	0.6										
被害なし	100	72.8	22.8	1.8	1.3	1.3	67.4	28.1	1.3	0.9	2.2	69.6	21.0	2.2	0.9	5.4	0.9	66.5	27.7	2.2	1.8	-	1.8	57.1	38.8	1.3	0.9	1.8	76.3	7.1	3.6	1.8	10.7	0.4									

選択肢後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

問 12 .(「ライフラインに不便・不都合があった」方に、おたずねします)

それはいつごろ解消しましたか。だいたいの日にちで結構ですので教えてください。

A～Fのそれぞれの問いについて、カレンダーの日にちのところに をつけてお答えください。

%

カレンダー：平成7年(1995年)1月17日～5月末

			A n=1027 停電が 解消した のは	B n=945 電話が 通じたのは	C n=1032 断水が 解消した のは	D n=1014 ガスが 使用可能に なったのは	E n=967 トイレが 使えたのは	F n=1021 いつも使う 交通機関が 回復したのは
月	日	曜日	できごと					
1月	17	火	39.6	16.1	4.1	4.9	12.5	2.4
	18	水	12.8	13.0	2.7	1.8	5.0	4.3
	19	木	6.1	8.0	3.8	1.9	3.8	2.7
	20	金	5.6	7.5	3.7	2.0	2.8	2.3
	21	土	2.7	3.4	2.1	1.8	2.0	1.1
	22	日	0.7	1.3	1.2	0.2	1.0	0.7
	23	月	1.8	2.8	2.4	1.4	2.0	1.4
	24	火	1.7	2.1	2.1	1.2	2.1	0.8
	25	水	1.2	2.1	2.0	0.7	1.3	1.0
	26	木	0.6	0.5	1.3	0.9	1.2	0.7
	27	金	0.5	0.7	1.6	1.0	0.8	1.0
	28	土	0.4	0.7	1.2	0.7	0.9	0.8
	29	日	0.7	1.2	1.3	0.7	0.9	0.5
	30	月	0.6	1.3	1.4	1.3	1.2	1.1
	31	火	0.6	1.6	2.6	1.7	2.0	1.5
2月	1	水	0.8	1.2	3.7	2.4	3.1	1.7
	2	木	0.1	0.4	0.6	0.6	0.4	0.1
	3	金	0.2	0.3	0.6	0.6	0.6	0.2
	4	土	0.0	0.1	0.9	0.7	0.7	0.4
	5	日	0.2	0.2	1.3	0.4	1.1	2.7
	6	月	0.1	0.2	0.5	0.3	0.5	0.2
	7	火	0.0	0.0	0.6	0.7	0.4	0.2
	8	水	0.0	0.2	0.4	0.1	0.3	0.0
	9	木	0.1	0.0	0.1	0.0	0.0	0.1
	10	金	0.1	0.1	2.7	1.1	1.9	0.7
	11	土	0.0	0.1	0.9	0.3	0.6	0.2
	12	日	0.2	0.2	0.8	1.0	0.6	0.8
	13	月	0.0	0.0	0.3	0.7	0.2	0.2
	14	火	0.0	0.0	0.7	0.5	0.4	0.1
	15	水	0.2	0.2	1.4	1.1	0.8	0.1
	16	木	0.0	0.0	0.4	0.2	0.3	0.2
	17	金	0.2	0.3	2.7	2.9	2.3	0.4
	18	土	0.2	0.0	1.2	1.0	1.0	0.2
	19	日	0.1	0.1	0.1	0.6	0.0	0.2
	20	月	0.3	0.1	1.6	2.7	1.3	0.5
	21	火	0.0	0.0	0.2	0.7	0.2	0.0
	22	水	0.0	0.0	0.3	0.4	0.1	0.1
	23	木	0.0	0.0	0.3	0.5	0.2	0.0
	24	金	0.0	0.0	0.6	0.2	0.4	0.1
	25	土	0.1	0.0	0.9	0.6	0.8	0.3
	26	日	0.1	0.0	0.3	0.5	0.2	0.0
	27	月	0.1	0.0	0.4	0.3	0.4	0.1
	28	火	0.0	0.1	1.6	1.5	0.7	0.5
3月上旬	(3/ 1～3/10)		1.0	1.2	7.5	9.3	6.4	4.5
中旬	(3/11～3/20)		0.0	0.3	1.6	3.8	1.8	1.3
下旬	(3/21～3/31)		0.1	0.0	1.3	4.5	0.9	1.5
4月上旬	(4/ 1～4/10)		0.1	0.1	0.9	3.7	0.6	2.7
中旬	(4/11～4/20)		0.1	0.1	0.4	1.1	0.4	0.3
下旬	(4/21～4/30)		0.1	0.1	0.1	0.8	0.1	0.8
5月上旬	(5/ 1～5/10)		0.1	0.1	0.2	1.2	0.2	1.5
中旬	(5/11～5/20)		0.0	0.0	0.1	0.2	0.1	0.4
下旬	(5/21～5/31)		0.2	0.3	0.3	0.7	0.5	3.6
わからない			13.5	22.4	21.4	24.0	21.3	39.3
DK / NA			6.1	8.8	6.9	6.1	7.8	10.1

この欄は集計に使用しますので、記入しないでください

A	B	C	D	E	F
---	---	---	---	---	---

選択枝後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

実数(人)

カレンダー:平成7年(1995年)1月17日~5月末

月	日	曜日	できごと	A n=1027 停電が 解消した のは	B n=945 電話が 通じたのは	C n=1032 断水が 解消した のは	D n=1014 ガスが 使用可能に なったのは	E n=967 トイレが 使えたのは	F n=1021 いつも使う 交通機関が 回復したのは
1月	17	火	震災発生	407	152	42	50	121	24
	18	水		131	123	28	18	48	44
	19	木		63	76	39	19	37	28
	20	金		57	71	38	20	27	23
	21	土		28	32	22	18	19	11
	22	日	震災以来最初の雨	7	12	12	2	10	7
	23	月		18	26	25	14	19	14
	24	火		17	20	22	12	20	8
	25	水		12	20	21	7	13	10
	26	木		6	5	13	9	12	7
	27	金		5	7	17	10	8	10
	28	土	国道43号線全線閉通	4	7	12	7	9	8
	29	日		7	11	13	7	9	5
	30	月		6	12	14	13	12	11
	31	火	天皇・皇后両陛下被災地訪問	6	15	27	17	19	15
2月	1	水		8	11	38	24	30	17
	2	木		1	4	6	6	4	1
	3	金		2	3	6	6	6	2
	4	土		0	1	9	7	7	4
	5	日	阪急「西宮北口・宝塚」再開	2	2	13	4	11	28
	6	月		1	2	5	3	5	2
	7	火	仮設・公団住宅の入居発表(神戸市)	0	0	6	7	4	2
	8	水		0	2	4	1	3	0
	9	木		1	0	1	0	0	1
	10	金		1	1	28	11	18	7
	11	土		0	1	9	3	6	2
	12	日		2	2	8	10	6	8
	13	月		0	0	3	7	2	2
	14	火	ポートタワー・ライトアップ再開	0	0	7	5	4	1
	15	水		2	2	14	11	8	1
	16	木		0	0	4	2	3	2
	17	金		2	3	28	29	22	4
	18	土		2	0	12	10	10	2
	19	日		1	1	1	6	0	2
	20	月		3	1	16	27	13	5
	21	火		0	0	2	7	2	0
	22	水		0	0	3	4	1	1
	23	木		0	0	3	5	2	0
	24	金		0	0	6	2	4	1
	25	土		1	0	9	6	8	3
	26	日	合同慰霊祭(西宮・芦屋市)	1	0	3	5	2	0
	27	月		1	0	4	3	4	1
	28	火		0	1	17	15	7	5
3月上旬	(3/ 1~3/10)			10	11	77	94	62	46
中旬	(3/11~3/20)			0	3	17	39	17	13
下旬	(3/21~3/31)			1	0	13	46	9	15
4月上旬	(4/ 1~4/10)			1	1	9	38	6	28
中旬	(4/11~4/20)			1	1	4	11	4	3
下旬	(4/21~4/30)			1	1	1	8	1	8
5月上旬	(5/ 1~5/10)			1	1	2	12	2	15
中旬	(5/11~5/20)			0	0	1	2	1	4
下旬	(5/21~5/31)			2	3	3	7	5	37
わからない				139	212	221	243	206	401
DK/NA				63	83	71	62	75	103

この欄は集計に使用しますので、記入しないでください

A	B	C	D	E	F
---	---	---	---	---	---

選択肢後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

〒 -

兵庫県 { 神戸市 区 } 町

町 丁目

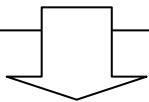
	TOTAL	神戸市中央区	灘区	東灘区	兵庫区	長田区	須磨区	垂水区	西区	北区	西宮市	芦屋市	明石市	市宝塚市・川西市	市伊丹市・尼崎市	猪名川町	淡路	その他不明	不明
TOTAL	100 1203	3.7 45	5.6 67	7.3 88	5.0 60	5.7 68	9.2 111	9.6 115	9.2 111	9.9 119	14.2 171	2.7 32	3.8 46	7.8 94	2.2 26	0.7 9	1.9 23	0.1 1	1.4 17
男性小計	100 573	4.4 25	6.6 38	7.3 42	5.9 34	5.4 31	9.2 53	9.9 57	6.6 38	10.3 59	13.3 76	2.4 14	3.7 21	9.2 53	2.1 12	1.0 6	1.6 9	-	0.9 5
20代	100 26	-	11.5 3	11.5 3	15.4 4	-	11.5 3	3.8 1	15.4 2	7.7 3	15.4 4	3.8 1	-	3.8 1	-	-	-	-	-
30代	100 48	4.2 2	4.2 2	10.4 5	10.4 5	6.3 3	10.4 5	8.3 4	2.1 1	6.3 3	12.5 6	4.2 2	4.2 2	10.4 5	2.1 1	-	2.1 1	-	2.1 1
40代	100 91	4.4 4	2.2 2	7.7 7	9.9 9	3.3 3	6.6 6	6.6 6	9.9 9	9.9 9	18.7 17	6.6 6	5.5 5	5.5 5	-	1.1 1	1.1 1	-	1.1 1
50代	100 129	6.2 8	6.2 8	7.0 9	5.4 7	5.4 7	8.5 11	8.5 11	9.3 12	13.2 17	7.8 10	-	2.3 3	10.1 13	4.7 6	2.3 3	2.3 3	-	0.8 1
60代	100 164	5.5 9	7.3 12	3.7 6	3.0 5	5.5 9	11 18	12.8 21	7.3 12	11.0 18	13.4 22	1.8 3	3.7 6	7.3 10	3.0 5	1.2 2	1.2 2	-	1.2 2
70歳以上	100 114	1.8 2	9.6 11	10.5 12	3.5 4	7.9 9	8.8 10	12.3 14	-	7.9 9	14.9 17	1.8 2	4.4 5	14.9 17	-	-	1.8 2	-	-
女性小計	100 630	3.2 20	4.6 29	7.3 46	4.1 26	5.9 37	9.2 58	9.2 58	11.6 73	9.5 60	15.1 95	2.9 18	4.0 25	6.5 41	2.2 14	0.5 3	2.2 14	0.2 1	1.9 12
20代	100 58	6.9 4	1.7 1	17.2 10	3.4 2	1.7 1	8.6 5	5.2 3	10.3 6	8.6 5	15.5 9	5.2 3	3.4 2	4.1 3	1.7 1	-	1.7 1	-	3.4 2
30代	100 55	3.6 2	7.3 4	3.6 2	7.3 4	-	5.5 3	10.9 6	18.2 10	5.5 3	25.5 14	1.8 1	-	1.8 1	5.5 3	-	3.6 2	-	-
40代	100 101	5.0 5	5.0 5	5.0 3	3.0 3	5.9 6	6.9 7	7.9 8	12.9 13	5 5	14.9 15	5.0 5	4.0 4	7.9 8	4.0 4	1.0 1	4.0 4	-	3 3
50代	100 144	1.4 2	4.2 6	7.6 11	2.8 4	3.5 5	11.8 17	10.4 15	14.6 21	11.8 17	16.0 23	1.4 2	4.9 7	4.2 6	1.4 2	0.7 1	1.4 2	0.7 1	1.4 2
60代	100 145	2.8 4	6.2 9	6.2 9	6.2 9	10.3 15	9.7 14	8.3 12	11.0 16	9.0 13	13.8 20	2.8 4	3.4 5	7.6 11	0.7 1	-	0.7 1	-	1.4 2
70歳以上	100 125	2.4 3	3.2 4	7.2 9	3.2 4	8.0 10	8.8 11	11.2 14	5.6 7	13.6 17	11.2 14	2.4 3	5.6 7	9.6 12	1.6 2	0.8 1	3.2 4	-	2.4 3

	TOTAL	神戸市中央区	灘区	東灘区	兵庫区	長田区	須磨区	垂水区	西区	北区	西宮市	芦屋市	明石市	市宝塚市・川西市	市伊丹市・尼崎市	猪名川町	淡路	その他不明	兵庫県表記以外の兵	西兵庫以外の開	開西以外の	不明	
TOTAL	100 332	4.8 16	7.5 25	6.6 22	6.9 23	6.3 21	7.2 24	6.9 23	3.9 13	5.7 19	14.5 48	5.4 18	4.5 15	6.9 23	5.4 18	-	0.6 2	0.3 1	3.3 11	-	-	3.0 10	
神戸市中央区	100 22	45.5 10	4.5 1	9.1 2	9.1 2	4.5 1	4.5 1	-	4.5 1	-	-	-	4.5 1	4.5 1	4.5 1	-	-	-	-	-	-	-	4.5 1
灘区	100 25	8.0 2	72.0 18	4.0 1	4.0 1	-	-	4.0 1	-	-	4.0 1	-	-	-	-	-	-	4.0 1	-	-	-	-	-
東灘区	100 25	8.0 2	-	60.0 15	-	4.0 1	-	-	-	4.0 1	4.0 1	8.0 2	-	4.0 1	4.0 1	-	-	-	-	4.0 1	-	-	-
兵庫区	100 21	-	-	-	61.9 13	19.0 4	4.8 1	4.8 1	-	-	4.8 1	-	-	-	-	-	-	-	-	4.8 1	-	-	-
長田区	100 15	-	-	-	6.7 1	53.3 8	6.7 1	6.7 1	6.7 1	6.7 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	13.3 2
須磨区	100 23	4.3 1	4.3 1	-	-	13.0 3	52.2 12	13.0 3	-	-	-	-	-	-	8.7 2	-	-	-	-	4.3 1	-	-	-
垂水区	100 20	5.0 1	-	-	5.0 1	10.0 2	-	70.0 14	-	-	-	-	5.0 1	-	-	-	-	-	-	5 1	-	-	-
西区	100 30	-	6.7 2	-	3.3 1	3.3 1	10.0 3	3.3 1	26.7 8	6.7 2	-	-	23.3 7	-	3.3 1	-	-	-	-	10.0 3	-	-	3.3 1
北区	100 26	-	3.8 1	3.8 1	15.4 4	3.8 1	11.5 3	-	3.8 1	50.0 13	7.7 2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
西宮市	100 59	-	1.7 1	3.4 2	-	-	3.4 2	1.7 1	3.4 2	1.7 1	62.7 37	6.8 4	1.7 1	5.1 3	5.1 3	-	-	-	-	1.7 1	-	-	1.7 1
芦屋市	100 18	-	-	-	-	-	5.6 1	-	-	11.1 2	66.7 12	-	-	5.6 1	5.6 1	-	-	-	-	5.6 1	-	-	-
明石市	100 8	-	-	12.5 1	-	-	-	12.5 1	-	-	-	-	62.5 5	-	12.5 1	-	-	-	-	-	-	-	-
宝塚市・川西市	100 26	-	3.8 1	-	-	-	-	-	-	-	11.5 3	-	-	65.4 17	19.2 5	-	-	-	-	-	-	-	-
伊丹市・尼崎市	100 4	-	-	-	-	-	-	-	-	25.0 1	-	-	-	75.0 3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
猪名川町	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
淡路	100 5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	40.0 2	-	40.0 2	-	-	-	20.0 1
その他不明	100 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

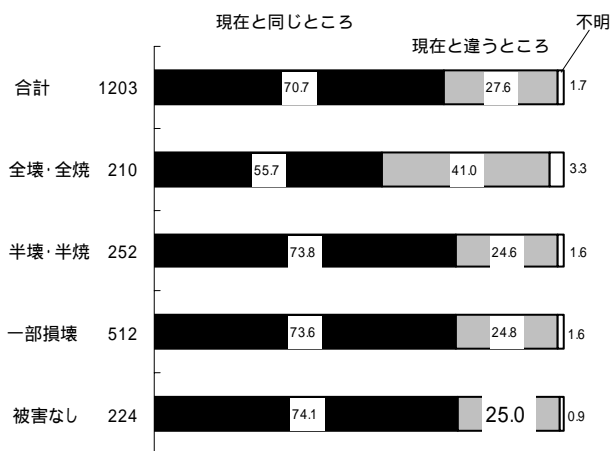
選択枝後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

問 14 . 震災の時には、あなたはどちらにお住まいでしたか。 n=1203

1 問13と同じところ 70.7 850 2 問13と違うところ 27.6 332 DK / NA 1.7 21

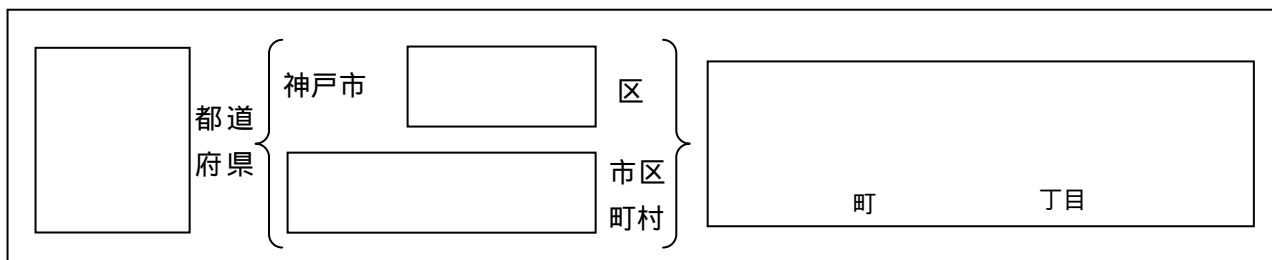


	TOTAL	現在と同じところ	現在と違うところ	不明
TOTAL	100 1203	70.7 850	27.6 332	1.7 21
1 人	100 108	59.3 64	36.1 39	4.6 5
2 人	100 394	71.6 282	25.9 102	2.5 10
3 人	100 312	72.4 226	26.9 84	0.6 2
4 人	100 210	69.0 145	30.5 64	0.5 1
5 人	100 102	77.5 79	22.5 23	-
6 人以上	100 73	71.2 52	24.7 18	4.1 3
死亡家族あり	100 11	63.6 7	36.4 4	-
入院病傷者あり	100 27	63.0 17	37.0 10	-
軽病傷者あり	100 180	59.4 107	38.3 69	2.2 4
全員無事	100 889	73.7 655	24.9 221	1.5 13
全壊・全焼	100 210	55.7 117	41.0 86	3.3 7
半壊・半焼	100 252	73.8 186	24.6 62	1.6 4
一部損壊	100 512	73.6 377	24.8 127	1.6 8
被害なし	100 224	74.1 166	25.0 56	0.9 2



付問：(「2. 問13と違うところ」と回答した方へ) 震災の時には、どこにお住まいでしたか。

n=332



	TOTAL	神戸市中央区	灘区	東灘区	兵庫区	長田区	須磨区	垂水区	西区	北区	西宮市	芦屋市	明石市	宝塚市・川西市	伊丹市・尼崎市	猪名川町	淡路	その他不明	兵庫県以外の兵	西兵庫以外の間	関西以外	不明
TOTAL	100 332	4.8 16	7.5 25	6.6 22	6.9 23	6.3 21	7.2 24	6.9 23	3.9 13	5.7 19	14.5 48	5.4 18	4.5 15	6.9 23	5.4 18	-	0.6 2	0.3 1	3.3 11	-	-	3.0 10
男性小計	100 158	3.8 6	9.5 15	6.3 10	5.7 9	11.4 18	7.0 11	5.1 8	3.8 6	5.7 9	14.6 23	6.3 10	2.5 4	5.7 9	5.1 8	-	0.6 1	0.6 1	3.8 6	-	-	2.5 4
20代	100 9	11.1 1	-	-	-	-	-	11.1 2	22.2 2	11.1 1	22.2 2	11.1 1	-	-	-	-	-	-	-	11.1 1	-	-
30代	100 24	4.2 1	8.3 2	8.3 2	12.5 3	4.2 1	8.3 2	12.5 3	-	4.2 1	4.2 1	8.3 2	4.2 1	8.3 2	8.3 2	-	-	-	-	4.2 1	-	-
40代	100 37	-	2.7 1	8.1 3	2.7 1	5.4 2	10.8 4	2.7 1	8.1 3	5.4 2	24.3 8	8.1 3	2.7 1	5.4 2	2.7 1	-	-	-	-	8.1 3	-	-
50代	100 28	3.6 1	7.1 2	-	3.6 1	21.4 6	3.6 1	7.1 2	3.6 1	3.6 1	10.7 3	3.6 1	3.6 1	3.6 1	14.3 4	-	3.6 1	3.6 1	3.6 1	-	-	3.6 1
60代	100 29	10.3 3	13.8 4	3.4 1	3.4 1	20.7 6	-	3.4 1	-	10.3 3	10.3 3	10.3 3	-	3.4 1	3.4 1	-	-	-	-	-	-	6.9 2
70歳以上	100 30	-	20.0 6	13.3 4	10.0 3	10.0 3	13.3 4	-	-	3.3 1	16.7 5	-	3.3 1	10.0 3	-	-	-	-	-	-	-	-
女性小計	100 174	5.7 10	5.7 10	6.9 12	8.0 14	11.7 19	7.5 13	8.6 15	4.0 7	5.7 10	14.4 25	4.6 8	6.3 11	8.0 14	5.7 10	-	0.6 1	-	2.9 5	-	-	3.4 6
20代	100 26	-	-	7.7 2	3.8 1	-	23.1 6	11.5 3	3.8 1	11.5 3	3.8 1	7.7 2	3.8 1	7.7 2	3.8 1	-	-	-	3.8 1	-	-	7.7 2
30代	100 29	-	6.9 2	6.9 2	-	3.4 1	6.9 2	6.9 2	3.4 1	-	34.5 10	3.4 1	10.3 3	-	6.9 2	-	-	-	-	10.3 3	-	-
40代	100 36	8.3 3	8.3 3	5.6 2	5.6 2	-	-	8.3 3	5.6 2	8.3 3	11.1 4	2.8 1	2.8 1	22.2 8	5.6 2	-	2.8 1	-	-	-	-	2.8 1
50代	100 29	3.4 1	3.4 1	10.3 3	13.8 4	3.4 1	3.4 1	10.3 3	3.4 1	10.3 3	17.2 5	3.4 1	3.4 1	6.9 2	6.9 2	-	-	-	-	-	-	-
60代	100 31	9.7 3	9.7 3	3.2 1	16.1 5	3.2 1	3.2 1	6.5 2	6.5 2	3.2 1	3.2 1	6.5 2	12.9 4	3.2 1	3.2 1	-	-	-	3.2 1	-	-	3.2 1
70歳以上	100 23	13.0 4	4.3 1	8.7 2	8.7 2	-	13.0 4	8.7 2	-	-	17.4 5	4.3 1	4.3 1	4.3 1	4.3 1	-	-	-	-	-	-	8.7 2
1 人	100 39	12.8 5	12.8 5	2.6 1	5.1 2	2.6 1	7.7 3	2.6 1	5.1 2	5.1 2	5.1 2	7.7 3	5.1 2	5.1 2	5.1 2	-	-	-	5.1 2	-	-	10.3 4
2 人	100 102	3.9 4	8.8 12	11.8 16	10.8 15	5.9 8	5.9 8	4.9 7	3.9 5	4.9 7	15.7 21	2.0 3	2.9 4	6.9 9	6.9 9	-	-	-	1 1	-	-	3.9 5
3 人	100 84	2.4 3	8.3 11	4.8 6	7.1 10	8.3 11	13.1 18	2.4 3	8.3 11	15.5 21	9.5 13	4.8 6	4.8 6	3.6 5	3.6 5	-	-	-	-	-	-	-
4 人	100 64	4.7 6	1.6 2	7.8 11	6.3 9	6.3 9	6.3 9	6.3 9	6.3 9	11.1 15	2.8 4	15.6 21	3.1 4	7.8 11	4.7 6	-	1.6 2	1.6 2	6.3 9	-	-	-
5 人	100 23	8.7 3	4.3 6	-	-	8.7 12	4.3 6	4.3 6	-	17.4 24	-	4.3 6	4.3 6	8.7 12	8.7 12	-	-	-	-	13 18	-	4.3 6
6 人以上	100 18	-	11.1 15	-	-	11.1 15	16.7 23	5.6 8	-	-	16.7 23	-	5.6 8	11.1 15	5.6 8	-	5.6 8	-	5.6 8	-	-	5.6 8
死亡家族あり	100 4	-	25.0 33	-	25.0 33	-	-	-	-	-	-	25.0 33	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
入院病傷者あり	100 10	10.0 13	-	10.0 13	10.0 13	20.0 27	-	-	-	-	20.0 27	10.0 13	-	10.0 13	10.0 13	-	-	-	-	-	-	-
軽病傷者あり	100 69	2.9 4	10.1 13	13.0 17	7.2 9	7.2 9	8.7 11	7.2 9	4.3 6	1.4 2	20.3 27	4.3 6	1.4 2	5.8 8	1.4 2	-	1.4 2	-	2.9 4	-	-	-
全員無事	100 221	4.5 6	6.8 9	5.0 7	5.9 8	5.4 7	7.7 10	8.1 11	4.1 5	7.2 9	13.6 18	5.4 7	5.4 7	5.9 8	7.2 9	-	0.5 1	0.5 1	3.6 5	-	-	3.2 4
全壊・全焼	100 86	4.7 6	15.1 20	8.1 11	11.8 16	18.6 25	7 9	1.2 2	1.2 2	-	12.8 17	7.0 9	1.2 2	4.7 6	1.2 2	-	-	-	1.2 2	-	-	4.7 6
半壊・半焼	100 62	6.5 8	8.1 11	9.7 13	6.6 9	3.2 4	8.1 11	4.8 6	3.2 4	1.6 2	14.5 19	6.5 9	3.2 4	9.7 13	9.7 13	-	-	-	-	-	-	1.6 2
一部損壊	100 127	6.3 8	3.1 4	5.5 7	5.5 7	2.4 3	9.4 12	12.6 17	4.7 6	10.2 14	4.7 6	13.8 18	6 8	7.1 9	5.5 7	-	0.8 1	-	0.8 1	-	-	1.6 2
被害なし	100 56	-	5.4 7	3.6 5	-	-	1.8 2	5.4 7	7.1 10	8.9 12	3.6 5	17.9 24	3.6 5	8.9 12	7.1 9	-	1.8 2	1.8 2	16.1 21	-	-	5.4 7

選択肢後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

問 15 . 震災の時、お住まいになっていたのは、 n=1203

1. 持地持家	54.0 650	6. 県営・市営・町営住宅	5.3 64
2. 借地持家	4.6 55	7. 社宅・寮	2.7 32
3. 公団・公社分譲マンション	4.7 56	8. 借家	5.2 63
4. 民間分譲マンション	9.9 119	9. 民間賃貸アパート・マンション	10.2 123
5. 公団・公社賃貸住宅	3.0 36	10. その他 ()	0.0 0
		DK / NA	0.4 5

付問 1 : そのお住まいの構造は、

1. 一戸建て	55.4	666
2. 棟割式住宅 (二戸ーや三戸ー・長屋など)	8.9	107
3. 木造集合住宅 あなたの住居は (1.61) 階	3.4	41
4. 鉄筋コンクリート・鉄骨集合住宅 あなたの住居は (3.94) 階	31.3	376
カッコの中は平均値	DK / NA	1.1 13

付問 2 :
震災当時、お住まい
だった住宅の築年
数(当時)をお答え
下さい。
築 (20.25) 年
カッコの中は平均値

	TOTAL	持地持家	借地持家	公団・公社分譲マンション	民間分譲マンション	公団・公社賃貸住宅	町営・市営住宅	社宅・寮	借家	民間賃貸マンション	その他	不明
TOTAL	100 1203	54.0 650	4.6 55	4.7 56	9.9 119	3.0 36	5.3 64	2.7 32	5.2 63	10.2 123	-	0.4 5
1 人	100 108	32.4 35	3.7 4	4.6 5	10.2 11	7.4 8	9.3 10	4.6 5	6.5 7	19.4 21	-	1.9 2
2 人	100 394	56.9 224	3.8 15	5.3 21	9.1 36	3.6 14	5.1 20	1.8 7	4.8 19	9.4 37	-	0.3 1
3 人	100 312	55.4 173	4.8 15	5.1 16	12.2 38	1.6 5	5.8 18	1.6 5	5.1 16	8.0 25	-	0.3 1
4 人	100 210	52.4 110	2.4 5	4.3 9	9.0 19	2.9 6	5.7 12	5.7 12	2.9 6	14.3 30	-	0.5 1
5 人	100 102	55.9 57	5.9 6	2.9 3	11.8 12	2.0 2	3.9 4	2.9 3	7.8 8	6.9 7	-	-
6 人以上	100 73	67.1 49	13.7 10	2.7 2	4.1 3	1.4 1	-	-	8.2 6	2.7 2	-	-
死亡家族あり	100 11	36.4 4	18.2 2	-	9.1 1	-	9.1 1	-	9.1 1	18.2 2	-	-
入院病傷者あり	100 27	63 17	7.4 2	3.7 1	3.7 1	3.7 1	3.7 1	3.7 1	3.7 1	7.4 2	-	-
軽病傷者あり	100 180	42.2 76	5.6 10	5.0 9	13.3 24	2.2 4	8.9 16	3.9 7	6.7 12	12.2 22	-	-
全員無事	100 889	57.5 511	4.2 37	4.8 43	9.7 86	2.9 26	4.5 40	2.6 23	4.6 41	8.9 79	-	0.3 3
全壊・全焼	100 210	50 105	10.0 21	1.9 4	4.3 9	-	3.8 8	0.5 1	13.8 29	15.2 32	-	0.5 1
半壊・半焼	100 252	57.5 145	5.6 14	2.4 6	12.7 32	1.2 3	7.5 19	2.4 6	4.8 12	5.6 14	-	0.4 1
一部損壊	100 512	55.5 284	3.5 18	5.3 27	11.7 60	3.5 18	4.7 24	2.7 14	2.9 15	9.8 50	-	0.4 2
被害なし	100 224	50.4 113	0.9 2	8.5 19	7.6 17	6.7 15	5.8 13	4.9 11	3.1 7	11.6 26	-	0.4 1

選択枝後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

問 16 . (震災当時、住宅を所有されていた方 < 問 15 で 1 ~ 4 を回答された方 > にお伺いします)

あなたは、その住宅を建て直しましたか。 n=880

カッコの中は平均値












1. はい	15.0	132	2. いいえ	79.9	703	DK / NA	5.1	45
-------	------	-----	--------	------	-----	---------	-----	----

	TOTAL	再 建 し た	い 再 建 し て い な い	不 明
TOTAL	100 880	15.0 132	79.9 703	5.1 45
男 性 小 計	100 413	15.7 65	79.4 328	4.8 20
20 代	100 21	19.0 4	76.2 16	4.8 1
30 代	100 28	21.4 6	78.6 22	- -
40 代	100 53	11.3 6	84.9 45	3.8 2
50 代	100 101	10.9 11	87.1 88	2.0 2
60 代	100 125	15.2 19	77.6 97	7.2 9
70 歳 以 上	100 84	22.6 19	71.4 60	6.0 5
女 性 小 計	100 467	14.3 67	80.3 375	5.4 25
20 代	100 43	4.7 2	90.7 39	4.7 2
30 代	100 33	18.2 6	78.8 26	3.0 1
40 代	100 68	10.3 7	83.8 57	5.9 4
50 代	100 107	9.3 10	86 92	4.7 5
60 代	100 114	15.8 18	78.1 89	6.1 7
70 歳 以 上	100 100	24.0 24	70.0 70	6.0 6

付問 1 : 住宅を修理・補修しましたか n=703	1. いいえ 28.2 198	DK / NA 3.0 21	修理・補修は()年()月ごろ
	2. はい 68.8 484		
付問 2 : そのまま引越しましたか n=703	1. いいえ 27.9 196	DK / NA 65.4 460	引越しは()年()月ごろ
	2. はい 6.7 47		

付問 3 : 住宅を解体しましたか n=132	1. いいえ 9.8 13	DK / NA 4.5 6	解体は()年()月ごろ
	2. はい 85.6 113		
付問 4 : 建て直したのはもとの場所ですか n=132	1. いいえ 6.8 9	DK / NA 8.3 11	建て直しは()年()月ごろ
	2. はい 84.8 112		

問 17. お住まいになっていた住宅の被害のようすを、下の図を参考にしてくわしく教えてください。最もあてはまる番号1つに をつけてください。 n=1203

		< 被害の特徴 >	< 被害例 >	
4.0 48	6 ←	瓦礫（がれき）状態になった。		
1.8 22	5 ←	ある階がつぶれた。		
15.0 181	4 ←	家の構造に大きな被害が出て、住宅に傾きが見られた。		
1.2 15	3 ←	屋根の部分が全体的に壊れた。		
3.7 44	2 ←	{ 屋根の瓦(かわら)の大部分が、はがれ落ちた。 柱や梁(はり)が折れた。 }		
55.3 665	1 ←	{ 壁にひびが入ったり、壁がはがれ落ちた。 屋根の瓦(かわら)がずれたり、落ちたりした。 }		
14.9 179	0 ←	被害はなかった。		
4.1 49	DK / NA			

	TOTAL	無傷	下壁剥落・瓦落	折瓦剥落・柱梁	屋根全壊	損傾斜・構造破	層破壊	瓦礫化	損*壊半計壊・一部	壊*計全壊・層破	不明
TOTAL	100 1203	14.9 179	55.3 665	3.7 44	1.2 15	15 181	1.8 22	4.0 48	75.2 905	5.8 70	4.1 49
全壊・全焼	100 210	0.5 1	7.6 16	5.2 11	0.5 1	52.9 111	9 19	22.9 48	66.2 139	31.9 67	1.4 3
半壊・半焼	100 252	0.4 1	58.7 148	11.9 30	4.4 11	20.6 52	0.8 2	- -	95.6 241	0.8 2	3.2 8
一部損壊	100 512	6.3 32	85.9 440	0.6 3	0.6 3	3.3 17	0.2 1	- -	90.4 463	0.2 1	3.1 16
被害なし	100 224	63.8 143	26.3 59	- -	- -	0.4 1	- -	- -	26.8 60	- -	9.4 21

選択枝後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

問 18 . 現在、お住まいになっているのは、

n=1203

1. 持地持家	55.4 666	7. 災害復興公営住宅	0.7 8
2. 借地持家	3.3 40	8. 社宅・寮	1.2 14
3. 公団・公社分譲マンション	4.7 57	9. 借家	3.2 38
4. 民間分譲マンション	13.2 159	10. 民間賃貸アパート・ マンション	7.5 90
5. 公団・公社賃貸住宅	3.3 40	11. その他 ()	0.3 4
6. 県営・市営・町営住宅	6.7 80	DK / NA	0.6 7

付問 1 : そのお住まいの構造は、

1. 一戸建て	56.6	681
2. 棟割式住宅 (二戸ーや三戸ー・長屋など)	4.8	58
3. 木造集合住宅 あなたの住居は (1.67) 階	1.5	18
4. 鉄筋コンクリート・鉄骨集合住宅 あなたの住居は (4.52) 階	35.0	421
カッコの中は平均値	DK / NA	2.1 25

付問 2 :

現在、お住まいの住宅の築年数(現時点)をお答え下さい。
築 (19.38) 年
カッコの中は平均値

	TOTAL	持地持家	借地持家	公団・公社分譲マンション	民間分譲マンション	公団・公社賃貸住宅	町営住宅・市営住宅	災害復興公営住宅	社宅・寮	借家	民間賃貸アパート・マンション	その他	不明	一戸建て	棟割式住宅	木造集合住宅	鉄筋コンクリート・鉄骨	不明
TOTAL	100 1203	55.4 666	3.3 40	4.7 57	13.2 159	3.3 40	6.7 80	0.7 8	1.2 14	3.2 38	7.5 90	0.3 4	0.6 7	56.6 681	4.8 58	1.5 18	35.0 421	2.1 25
男性小計	100 573	57.8 331	2.8 16	5.1 29	11.0 63	4.0 23	5.4 31	0.7 4	1.7 10	3.5 20	7.0 40	0.3 2	0.7 4	58.5 335	4.7 27	1.4 8	32.8 188	2.6 15
20代	100 26	69.2 18	- 1	3.8 -	7.7 2	- -	3.8 1	- -	3.8 1	- -	7.7 2	- -	3.8 1	66.4 17	3.8 1	- -	26.9 7	3.8 1
30代	100 48	37.5 18	4.2 2	4.2 2	20.8 10	8.3 3	6.3 3	2.1 1	- -	8.3 4	8.3 4	- -	- -	43.8 21	4.2 2	2.1 1	50.0 24	- -
40代	100 91	45.1 41	2.2 2	6.6 6	18.7 17	1.1 1	4.4 4	- -	4.4 4	4.4 4	13.2 12	- -	- -	49.5 45	2.2 2	4.4 3	42.9 39	1.1 1
50代	100 129	63.6 82	3.1 4	2.3 3	13.2 17	2.3 3	3.1 4	0.8 1	3.1 4	3.1 4	3.1 4	1.6 2	0.8 1	63.6 82	5.4 7	2.3 3	26.4 34	2.3 3
60代	100 164	64.0 105	3.0 5	7.3 12	7.3 12	4.9 6	6.1 10	0.6 1	0.6 1	1.8 3	4.3 7	- -	- -	62.2 102	6.7 11	- -	29.3 48	1.8 3
70歳以上	100 114	58.8 67	2.6 3	4.4 5	4.4 5	6.1 5	7.9 9	0.9 1	- -	4.4 5	8.8 10	- -	1.8 2	59.6 68	3.5 4	- -	30.7 35	6.1 7
女性小計	100 630	53.2 335	3.8 24	4.4 28	15.2 96	2.7 17	7.8 49	0.6 4	0.6 4	2.9 18	7.9 50	0.3 2	0.5 3	54.9 346	4.9 31	1.6 10	37.0 233	1.6 10
20代	100 58	48.3 28	1.7 1	- -	15.5 9	3.4 2	5.2 3	- -	1.7 1	3.4 2	20.7 12	- -	- -	50.0 29	3.4 2	1.7 1	44.8 26	- -
30代	100 55	36.4 20	1.8 1	3.6 2	29.1 16	1.8 1	5.5 3	- -	1.8 1	3.6 2	16.4 9	- -	- -	40.0 22	1.8 1	- -	58.2 32	- -
40代	100 101	50.5 51	2.0 2	6.9 7	19.8 20	2.0 2	5.0 5	1.0 1	2.0 2	3.0 3	6.9 7	- -	1.0 1	50.5 51	6.9 7	3.0 3	39.6 40	- -
50代	100 144	53.5 77	4.9 7	4.9 7	16.0 23	1.4 2	8.3 12	- -	- -	3.5 5	7.6 11	- -	- -	53.5 77	7.6 11	2.1 3	35.4 51	1.4 2
60代	100 145	60.7 88	4.8 7	4.8 7	9.0 13	3.4 5	8.3 12	0.7 1	- -	3.4 5	4.1 6	0.7 1	- -	66.9 97	1.4 2	2.1 3	28.3 41	1.4 2
70歳以上	100 125	56.0 70	4.8 6	4.0 5	11.2 14	4.0 5	11.2 14	1.6 2	- -	0.8 1	4.0 5	0.8 1	1.6 2	56.0 70	5.6 7	- -	33.6 42	4.8 6

選択肢後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

現在のあなたのお住まいについて、お伺いします。

問 19. 現在のあなたのお住まいについて、あなたの考えを教えてください。それぞれ、あてはまる番号に
を1つだけつけてください。

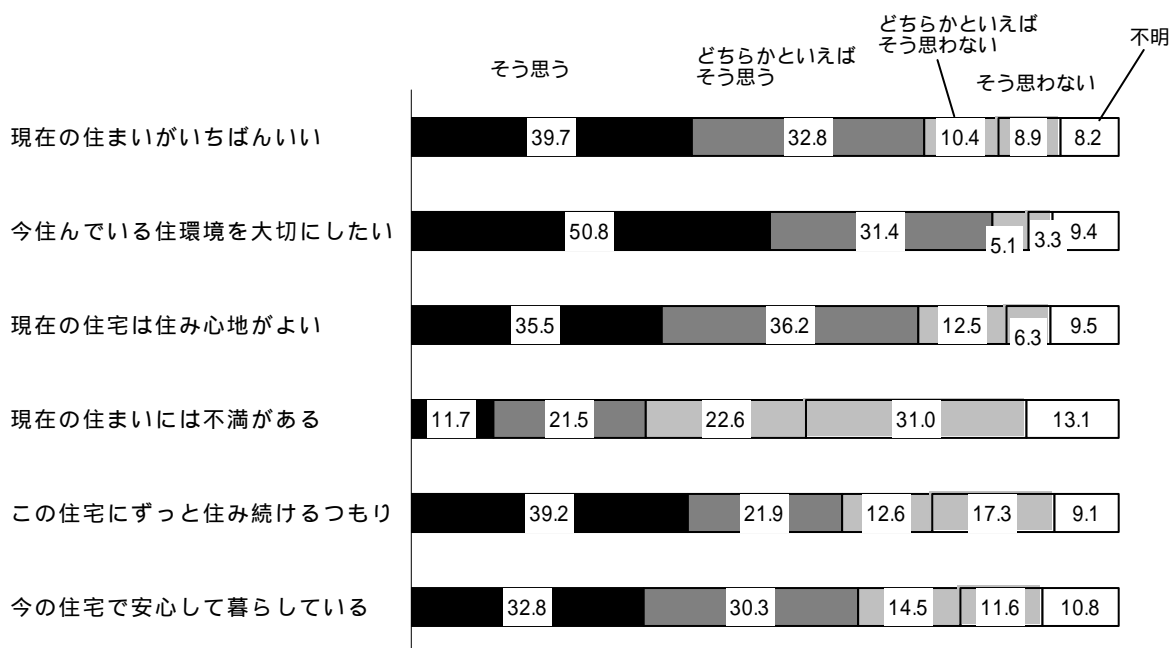
n=1203

以下のことについて、どう思いますか



	1		2		3		4		DK / NA	
今まで住んできたなかで、現在の住まいがいちばんいい	39.7	478	32.8	394	10.4	125	8.9	107	8.2	99
今、住んでいる住環境を大切にしたい	50.8	611	31.4	378	5.1	61	3.3	40	9.4	113
現在の住宅は住みごこちがよい	35.5	427	36.2	436	12.5	150	6.3	76	9.5	114

現在の住まいには不満がある	11.7	141	21.5	259	22.6	272	31.0	373	13.1	158
この住宅にずっと住み続けるつもりだ	39.2	472	21.9	263	12.6	151	17.3	208	9.1	109
今の住宅で安心して暮らしている	32.8	395	30.3	365	14.5	174	11.6	139	10.8	130



問 20 . あなたはこれからもこの場所で、ずっと暮らしていきたいと思いませんか、それとも引っ越したいと思いませんか。

n=1203

1. 引っ越したい 22.9 276

2. ずっと暮らしていきたい 72.2 869

問 21 へ

DK / NA 4.8 58

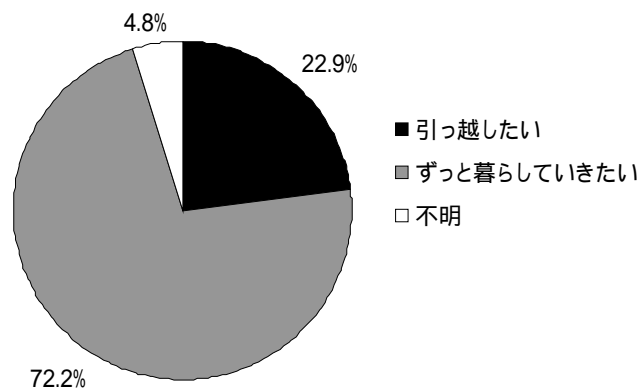
付問 1 : どこに引っ越したいと思われますか。以下から 1つ選んでください。

n=276

- | | |
|---------------------|------|
| 1. 震災前に住んでいたのと同じ地域 | 37.3 |
| | 103 |
| 2. 震災の被害があった兵庫県南部地域 | 22.1 |
| | 61 |
| 3. 震災の被害がなかった兵庫県地域 | 11.2 |
| | 31 |
| 4. 兵庫県以外の関西 | 6.2 |
| | 17 |
| 5. 関西以外 | 9.8 |
| | 27 |
| 6. その他 (場所 :) | 9.1 |
| | 25 |
| DK / NA | 4.3 |
| | 12 |

付問 2 : その理由をお聞かせください。

	TOTAL	引っ越したい	ずっと暮らしたい	不明
TOTAL	100 1203	22.9 276	72.2 869	4.8 58
男性 小計	100 573	21.8 125	72.4 415	5.8 33
20 代	100 26	15.4 4	80.8 21	3.8 1
30 代	100 48	27.1 13	66.7 32	6.3 3
40 代	100 91	37.4 34	57.1 52	5.5 5
50 代	100 129	24.8 32	72.1 93	3.1 4
60 代	100 164	14.6 24	78.0 128	7.3 12
70 歳 以上	100 114	14.9 17	78.1 89	7.0 8
女性 小計	100 630	24.0 151	72.1 454	4.0 25
20 代	100 58	37.9 22	60.3 35	1.7 1
30 代	100 55	30.9 17	69.1 38	- -
40 代	100 101	31.7 32	67.3 68	1.0 1
50 代	100 144	22.2 32	73.6 106	4.2 6
60 代	100 145	22.1 32	70.3 102	7.6 11
70 歳 以上	100 125	12.8 16	82.4 103	4.8 6



選択枝後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

問 21 . 震災直後から現在までのお住まいについて教えてください。以下の ~ の時期、あなたは仮住まいをしていましたか。仮住まいしていた方は、どちらに一番長く仮住まいしていらっしゃいましたか。それぞれの時期について、最もあてはまるもの1つに をつけてください。

n=1203

	(A) 仮住まいした							(B) 仮住まい しなかった	DK / NA
	1 親 子 ど も ・ 親 せ き の 家	2 友 人 ・ 近 所 の 家	3 会 社 が 用 意 し た 施 設	4 自 分 で 借 り た ア パ ー ト 等	5 テ ン ト 車 の 中 ・ 避 難 所	6 仮 設 住 宅	7 公 共 の 場 所 ・ そ の 他		
震災後・2～4日 (1/18～1/20)	8.7 105	1.3 16	0.6 7	0.2 3	6.5 78	0.2 3	3.0 36	61.7 742	17.7 213
震災後・2週間 (1/21～1/31)	11.7 141	1.6 19	1.0 12	0.9 11	3.1 37	0.3 4	2.1 25	59.0 710	20.3 244
震災後・1ヶ月 (2/1～2/28)	6.7 80	1.2 15	1.3 16	2.2 26	1.8 22	0.5 6	1.2 15	62.6 753	22.4 270
震災後・2ヶ月 (3/1～3/31)	3.9 47	0.9 11	1.3 16	2.6 31	1.6 19	1.1 13	0.7 8	65.0 782	22.9 276
震災後・3～6ヶ月 (4/1～7/31)	3.7 44	0.2 2	0.7 9	3.2 38	0.7 9	2.3 28	0.7 9	65.9 793	22.5 271
震災後・7～12ヶ月 (8/1～12/31)	1.5 18	0.2 2	0.7 9	4.1 49	0.4 5	2.4 29	0.6 7	66.5 800	23.6 284
震災後・2年目 (平成8(1996)年)	0.9 11	0.1 1	0.2 2	3.1 37	0.1 1	2.2 26	0.8 10	67.7 815	24.9 300
震災後・3～6年目 (平成9(1997)年 ～平成12(2000)年)	0.3 4	0.0 0	0.2 2	2.0 24	0.0 0	1.2 15	0.5 6	69.7 838	26.1 314
震災後・7～8年目 (平成13(2001)年 ～平成14(2002)年)	0.2 2	0.0 0	0.2 2	1.2 15	0.0 0	0.1 1	0.8 10	71.5 860	26.0 313

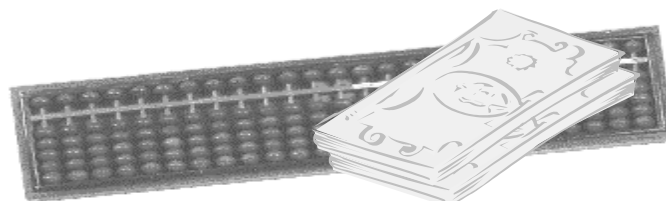
選択肢後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

震災後のくらしの変化やお仕事について、お伺いします。

問 22. 家計のやりくりには、震災後、どのような変化がありましたか。現在の家計簿を思いうかべて、各項目について、それぞれあてはまるところにをつけてください。 n=1203

震災前と比べて、現在のお宅の家計簿では...	
1) 収入	(増えた 10.4 125 ・ 変わらない 33.7 406 ・ 減った 48.0 577)
2) 支出	(増えた 32.4 390 ・ 変わらない 32.7 393 ・ 減った 16.5 199)
3) 食費	(増えた 20.2 243 ・ 変わらない 49.4 594 ・ 減った 19.2 231)
4) 外食費	(増えた 13.7 165 ・ 変わらない 39.8 479 ・ 減った 33.6 404)
5) 住居・家具費	(増えた 28.9 348 ・ 変わらない 42.6 513 ・ 減った 16.7 201)
6) 光熱費	(増えた 30.1 362 ・ 変わらない 46.8 563 ・ 減った 12.0 144)
7) 日用雑貨	(増えた 16.4 197 ・ 変わらない 54.6 657 ・ 減った 17.1 206)
8) 衣服費	(増えた 13.8 166 ・ 変わらない 45.0 541 ・ 減った 29.8 358)
9) 文化・教育費	(増えた 18.7 225 ・ 変わらない 45.4 546 ・ 減った 22.7 273)
10) 交際費(冠婚葬祭費を含む)	(増えた 23.0 277 ・ 変わらない 49.7 598 ・ 減った 15.4 185)
11) レジャー費	(増えた 9.5 114 ・ 変わらない 40.1 482 ・ 減った 38.5 463)
12) 交通費	(増えた 19.8 238 ・ 変わらない 49.5 596 ・ 減った 19.0 228)
13) 医療費	(増えた 38.6 464 ・ 変わらない 45.2 544 ・ 減った 5.5 66)
14) 保険料	(増えた 30.6 368 ・ 変わらない 45.7 550 ・ 減った 11.8 142)
15) 自動車費(ある方のみ)	(増えた 19.9 239 ・ 変わらない 38.7 465 ・ 減った 4.7 56)
16) 預貯金	(増えた 6.4 77 ・ 変わらない 24.4 294 ・ 減った 56.6 681)

DK / NAは省略



選択肢後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

付問．現在のあなたの世帯の1年間の収入（年収）はどのくらいですか。

n=1203

1. 300万円未満	26.0	313
2. 300 - 700万円未満	40.9	492
3. 700 - 1000万円未満	14.0	168
4. 1000 - 1500万円未満	6.1	73
5. 1500万円以上	2.2	27
6. 答えたくない・わからない	8.3	100
DK / NA	3.5	42

	TOTAL	満30万円未満	満70万円未満	満100万円未満	100万円以上	1500万円以上	不明
TOTAL	100 1203	26.0 313	40.9 492	14.0 168	6.1 73	2.2 27	8.3 100
男性小計	100 573	26.2 150	43.5 249	14.3 82	6.1 35	2.1 12	8.2 47
20代	100 26	11.5 3	38.5 10	19.2 5	11.5 3	-	11.5 3
30代	100 48	14.6 7	60.4 29	18.8 9	-	-	4.2 2
40代	100 91	15.4 14	45.1 41	24.2 22	5.5 5	3.3 3	8.8 8
50代	100 129	11.6 15	42.6 55	22.5 29	12.4 16	5.4 7	17.8 23
60代	100 164	36.6 60	39.6 65	6.1 10	6.1 10	0.6 1	6.7 11
70歳以上	100 114	43.9 50	43.0 49	6.1 7	0.9 1	0.9 1	1.8 2
女性小計	100 630	25.9 163	38.6 243	13.7 86	6.0 38	2.4 15	8.4 53
20代	100 58	12.1 7	25.9 15	19.0 11	8.6 5	3.4 2	12.1 7
30代	100 55	16.4 9	60.0 33	16.4 9	1.8 1	1.8 1	3.6 2
40代	100 101	10.9 11	36.6 37	28.7 29	8.9 9	5.0 5	13.9 14
50代	100 144	25.7 37	31.9 46	16.7 24	12.5 18	2.1 3	14.6 21
60代	100 145	29.7 43	45.5 66	5.5 8	3 3	2.1 3	4.1 6
70歳以上	100 125	44.0 55	36.8 46	4.0 5	1.6 2	0.8 1	2.4 3

問23．現在の、あなたのご職業を教えてください（は1つ） n=1203

1. 研究・技術職	2.4	29	12. 運輸・通信の現場従業者	1.9	23
2. 教員	1.6	19	13. 製造・建設業の現場従業者	4.0	48
3. 保健医療従事者	1.6	19	14. 自営・商工経営者	7.6	91
4. 弁護士・税理士などの専門職	0.2	2	15. 農林漁業	0.4	5
5. 自由業	1.7	20	16. 年金・恩給生活者	10.8	130
6. 管理職の公務員（課長以上）	0.3	4	17. 専業主婦	15.1	182
7. 一般の公務員	2.4	29	18. パート主婦	8.1	97
8. 会社・団体等の役員	2.4	29	19. 学生	1.7	21
9. 会社・団体等の管理職（課長以上）	3.9	47	20. 無職・その他	22.3	268
10. 一般事務従業者	6.6	79			
11. 店員・外交員・その他のサービス業の従業者	4.4	53	DK / NA	0.7	8

	TOTAL	研究・技術職	教員	保健医療従事者	弁護士の専門職	自由業	管理職の公務員	一般の公務員	会社・団体等	会社・団体等の役員	一般事務従業者	サービス業従業者	現場・通信の現場従業者	製造・建設業	自営・商工経営者	農林漁業	年金・恩給生活者	専業主婦	パート主婦	学生	無職・その他	不明
TOTAL	100 1203	2.4 29	1.6 19	1.6 19	0.2 2	1.7 20	0.3 4	2.4 29	2.4 29	3.9 47	6.6 79	4.4 53	1.9 23	4.0 48	7.6 91	0.4 5	10.8 130	15.1 182	8.1 97	1.7 21	22.3 268	0.7 8
男性小計	100 573	4.2 24	1.0 6	0.9 5	0.3 2	2.1 12	0.7 4	3.7 21	4.2 24	7.9 45	5.8 33	6.3 36	3.5 20	7.0 40	11.7 67	0.3 2	14.3 82	0.2 1	-	1.6 9	23.9 137	0.5 3
20代	100 26	7.7 2	3.8 1	-	-	-	-	3.8 1	3.8 1	7.7 2	11.5 3	7.7 3	7.7 3	-	3.8 2	-	-	-	-	34.6 9	15.4 4	-
30代	100 48	14.6 7	-	-	-	4.2 2	-	10.4 5	4.2 2	16.7 2	16.7 8	6.3 3	6.3 3	8.3 4	-	-	-	-	-	-	8.3 4	-
40代	100 91	6.6 6	2.2 2	1.1 1	-	3.3 3	1.1 1	4.4 4	4.4 13	14.3 12	13.2 7	7.7 4	4.4 7	13.2 4	8.8 8	-	1.1 1	-	-	-	12.1 11	2.2 2
50代	100 129	3.9 5	2.3 3	1.6 2	-	1.6 2	2.3 3	7.0 9	4.7 6	16.3 21	7.8 10	6.2 8	6.2 8	14.0 18	16.3 21	0.8 1	0.8 1	-	-	-	8.5 11	-
60代	100 164	1.8 3	-	-	1.2 2	2.4 4	-	1.2 2	6.1 10	4.3 7	0.6 1	5.5 9	1.8 3	3.7 6	13.4 22	-	28.7 47	0.6 1	-	-	28.0 46	0.6 1
70歳以上	100 114	0.9 1	-	1.8 2	-	0.9 1	-	-	1.8 2	0.9 1	-	0.9 1	-	0.9 1	6.6 11	0.9 1	28.9 33	-	-	-	52.6 60	-
女性小計	100 630	0.8 5	2.1 13	2.2 14	-	1.3 8	-	0.8 5	0.3 2	7.3 46	2.7 17	0.5 3	1.3 8	3.8 24	0.5 3	7.6 48	28.7 181	15.4 97	1.9 12	20.8 131	0.8 5	
20代	100 58	-	3.4 2	5.2 3	-	1.7 1	-	-	1.7 1	-	-	-	1.7 1	3.4 2	-	-	-	-	1.7 1	19.0 11	22.4 13	-
30代	100 55	5.5 3	3.6 2	-	-	-	-	1.8 1	-	-	7.3 4	1.8 1	1.8 1	3.6 2	-	-	-	-	23.6 13	10.9 6	-	-
40代	100 101	1.0 1	5.9 6	5.0 5	-	2.0 2	-	4.0 4	-	10.9 11	4.0 4	1.0 1	1.0 1	5.0 5	-	-	-	-	30.7 31	6.9 7	-	-
50代	100 144	-	1.4 2	2.8 4	-	2.1 3	-	1.4 2	2.1 3	0.7 1	7.6 11	4.2 6	0.7 1	2.8 4	3.5 5	-	0.7 1	31.9 46	27.1 39	-	9.7 14	1.4 2
60代	100 145	0.7 1	0.7 1	1.4 2	-	0.7 1	-	0.7 1	0.7 1	1.4 2	2.1 3	-	1.4 2	4.1 6	2.1 3	2.1 3	9.7 14	37.2 54	9.0 13	-	26.9 39	0.7 1
70歳以上	100 125	-	-	-	-	0.8 1	-	-	-	-	0.8 1	-	-	-	3.2 4	-	26.4 33	26.4 33	-	-	40.8 51	1.6 2

選択肢後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

問 24 . 震災時の、あなたのご職業を教えてください (は 1 つ) n=1203

1. 研究・技術職	3.4	41	12. 運輸・通信の現場従業者	2.5	30
2. 教員	1.7	21	13. 製造・建設業の現場従業者	6.3	76
3. 保健医療従事者	1.2	14	14. 自営・商工経営者	8.4	101
4. 弁護士・税理士などの専門職	0.2	2	15. 農林漁業	0.5	6
5. 自由業	1.6	19	16. 年金・恩給生活者	5.3	64
6. 管理職の公務員 (課長以上)	0.5	6	17. 専業主婦	15.1	182
7. 一般の公務員	3.1	37	18. パート主婦	7.7	93
8. 会社・団体等の役員	3.1	37	19. 学生	6.0	72
9. 会社・団体等の管理職 (課長以上)	6.1	73	20. 無職・その他	11.6	139
10. 一般事務従業者	8.6	103			
11. 店員・外交員・その他のサービス業の従業者	6.4	77	DK / NA	0.8	10

	TOTAL	研究・技術職	教員	保健医療従事者	弁護士・税理士などの専門職	自由業	管理職の公務員	一般の公務員	会社・団体等の役員	会社・団体等の管理職	自営・商工経営者	一般事務従業者	サービス業従業者	運輸・通信の現場従業者	製造・建設業の現場従業者	自営・商工経営者	農林漁業	年金・恩給生活者	専業主婦	パート主婦	学生	無職・その他	不明
TOTAL	100	3.4	1.7	1.2	0.2	1.6	0.5	3.1	3.1	6.1	8.6	6.4	2.5	6.3	8.4	0.5	5.3	15.1	7.7	6.0	11.6	0.8	
男性 小計	1203	41	21	14	2	19	6	37	37	73	103	77	30	76	101	6	64	182	93	72	139	10	
20 代	100	7.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3.8	-	-	-	-	80.8	7.7	-	
30 代	100	16.7	-	-	-	2.1	-	8.3	-	-	18.8	25.0	6.3	10.4	4.2	-	-	-	-	2.1	6.3	-	
40 代	100	6.6	2.2	1.1	-	2.2	1.1	4.4	3.3	9.9	18.7	13.2	5.5	14.3	9.9	-	1.1	-	-	-	4.4	2.2	
50 代	100	3.9	2.3	0.8	-	0.8	0.8	8.5	6.2	22.5	7.8	4.7	5.4	17.1	12.4	0.8	0.8	-	-	-	4.7	0.8	
60 代	100	5.5	-	-	0.6	2.4	1.8	3.7	9.1	15.9	9.8	6.1	6.7	14.6	15.2	-	2.4	0.6	0.6	-	4.3	0.6	
70 歳以上	100	-	0.9	1.8	-	3.5	0.9	0.9	7.0	6.1	3.5	6.1	2.6	2.6	14.9	1.8	23.7	-	-	-	23.7	-	
女性 小計	100	1.7	2.4	1.6	0.2	1.1	-	1.7	0.5	0.3	7.5	4.8	0.2	1.4	4.8	0.5	4.9	28.7	14.6	7.9	14.3	1.0	
20 代	100	-	1.7	1.7	-	-	-	-	-	-	1.7	1.7	-	1.7	1.7	-	-	-	1.7	84.5	3.4	-	
30 代	100	12.7	3.6	-	-	-	-	-	-	-	18.2	12.7	1.8	-	1.8	-	-	34.5	3.6	1.8	9.1	-	
40 代	100	2.0	5.9	2.0	-	2.0	-	4.0	-	-	9.9	4.0	-	1.0	5.0	-	-	37.6	19.8	-	6.9	-	
50 代	100	-	1.4	2.1	-	2.1	-	2.1	0.7	0.7	11.1	4.9	-	3.5	6.3	-	-	32.6	25.7	-	6.3	0.7	
60 代	100	0.7	2.1	2.1	-	0.7	-	2.8	1.4	0.7	4.8	6.9	-	1.4	6.2	2.1	2.8	30.3	17.9	-	15.9	1.4	
70 歳以上	100	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	-	-	-	-	2.4	0.8	-	4.0	9	3	4	44	26	-	23	2	
1 人	100	1.9	1.9	2.8	-	0.9	-	6.5	0.9	-	9.3	9.3	2.8	6.5	8.3	-	12.0	5.6	7.4	2.8	19.4	1.9	
2 人	100	3.0	1.0	1.5	0.3	2.0	0.8	1.3	5.1	5.1	8.9	7.1	2.5	6.3	8.4	0.3	8.1	14.7	9.1	2.5	10.9	1.0	
3 人	100	5.1	1.6	0.6	0.3	1.3	0.6	2.2	1.9	9.3	7.7	6.4	2.9	6.7	8.3	0.6	2.9	17	7.7	5.1	10.9	0.6	
4 人	100	4.3	1.4	0.5	-	1.4	-	5.7	1.9	8.1	7.6	5.2	3.3	6.2	8.6	0.5	1.9	15.7	6.7	13.3	6.7	1.0	
5 人	100	2.0	2.0	2.0	-	2.9	-	3.9	4.9	2	9.8	4.9	-	5.9	5.9	-	3.9	17.6	8.8	12.7	10.8	-	
6 人以上	100	-	6.8	-	-	-	1.4	2.7	1.4	6.8	11.0	1.4	1.4	5.5	11.0	2.7	2.7	19.2	2.7	2.7	20.5	-	
死亡家族あり	100	-	-	-	-	9.1	-	-	-	-	9.1	18.2	-	18.2	-	-	-	-	18.2	18.2	-	9.1	-
入院病傷者あり	100	7.4	-	-	-	3.7	-	-	7.4	-	3.7	-	3.7	7.4	22.2	3.7	3.7	11.1	11.1	3.7	11.1	-	
軽病傷者あり	100	1.7	2.8	1.1	-	1.1	0.6	2.2	0.6	4.4	13.9	7.2	3.9	6.1	9.4	-	4.4	13.9	10.6	5.6	10.6	-	
全員無事	100	3.8	1.8	1.2	0.2	1.3	0.6	3.4	3.6	7.1	7.9	5.7	2.5	5.5	17.9	0.4	5.3	16	7.0	6.4	11.5	0.9	
全壊・全焼	100	4.3	1.4	1.4	0.5	2.4	1.0	1.9	3.8	3.3	8.1	7.1	3.3	6.7	11.0	-	6.7	11.4	9.0	2.9	11.9	1.9	
半壊・半焼	100	3.2	2.8	0.4	-	1.2	1.2	2.4	1.2	3.6	8.7	5.6	0.8	8.3	9.9	-	7.1	15.9	7.5	5.2	14.7	0.4	
一部損壊	100	2.9	1.6	1.4	0.2	2.0	0.2	4.3	3.1	6.8	8.8	6.1	2.9	5.5	7.4	0.8	4.5	17.8	6.4	5.7	11.1	0.6	
被害なし	100	4.0	1.3	1.3	-	1	-	2.2	4.5	9.8	8.0	7.6	2.7	5.8	6.7	0.9	4	23	9.1	8.5	10.7	8.5	
	224	9	3	3	-	1	-	5	10	22	18	17	6	13	15	2	9	27	19	24	19	2	

選択枝後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

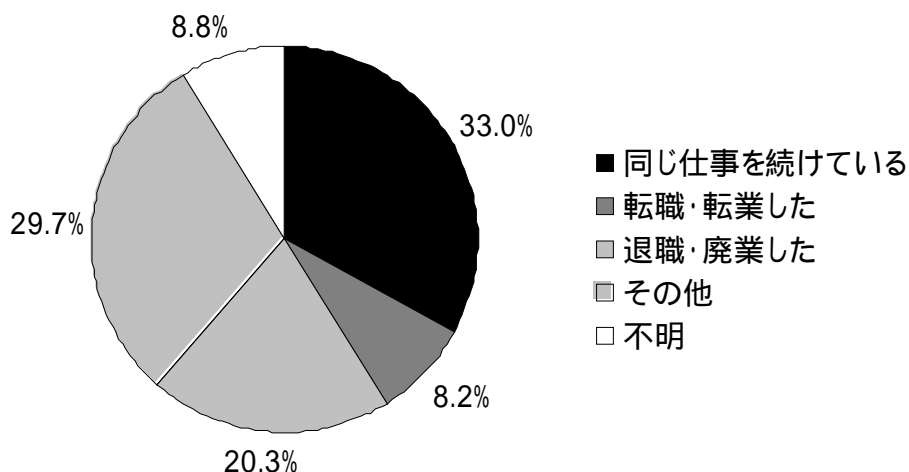
問 25. あなたの震災時の職業と現在の職業について、

n=1203

1. 同じ仕事を 33.0 397 2. 転職・転業した 8.2 99 3. 退職・廃業した 20.3 244
 続けている DK / NA 8.8 106
 4. その他（仕事について 29.7
 いなかったなど） 357
 （2・3の方は付問へ）

付問1：震災は、お仕事をえたり、やめたりした原因になっていますか。
 n=343 1. 震災が原因である 24.8 85 2. 震災は関係ない 71.1 244
 DK / NA 4.1 14

付問2：いつごろ、お仕事をえ（やめ）ましたか（注：震災は平成7年1月）
 n=343 （平成 ）年（ ）月ごろ
 カッコの中は平均値

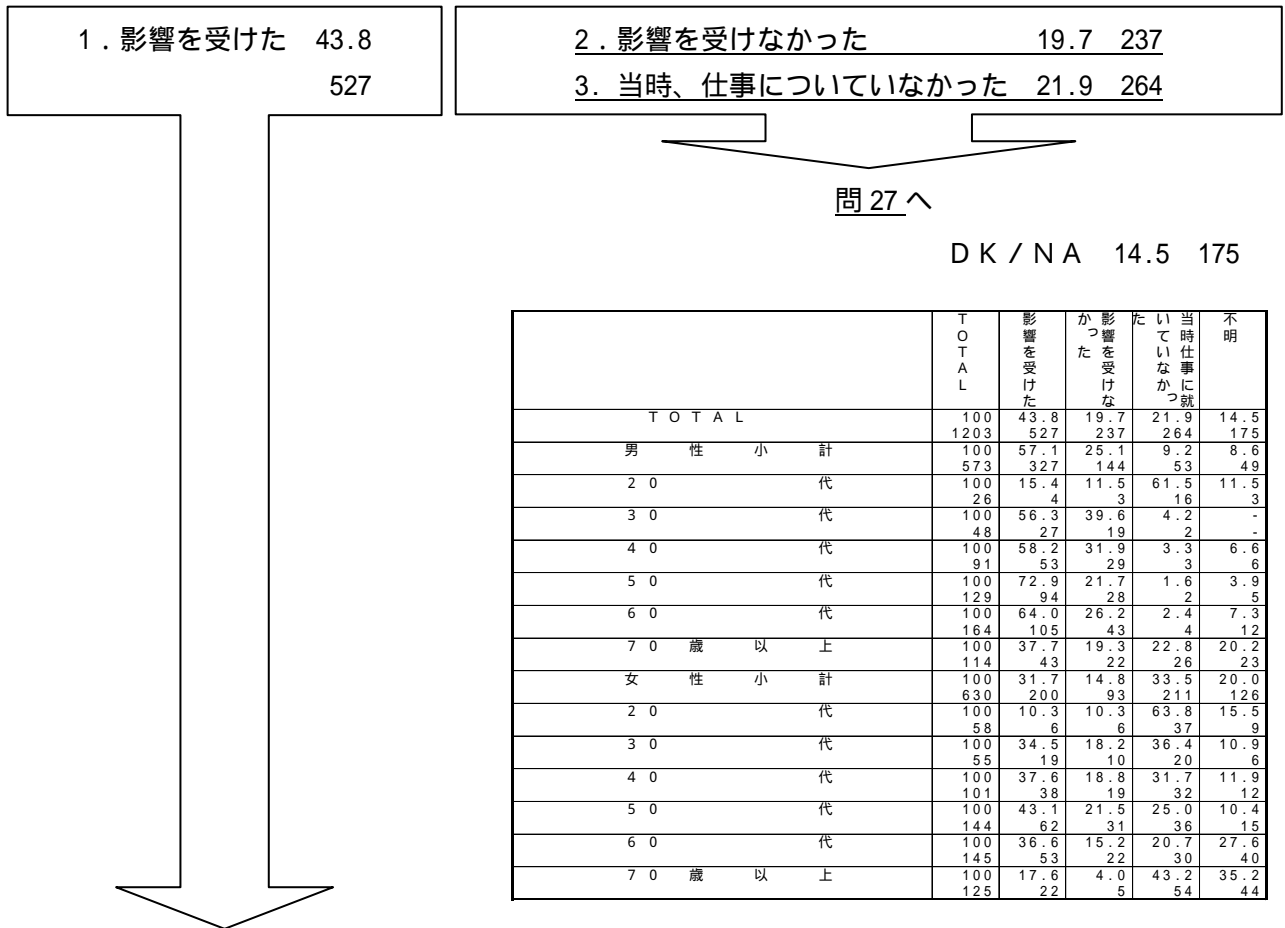


	TOTAL	続けている	転職・転業した	退職・廃業した	その他	不明
TOTAL	1203	33.0 397	8.2 99	20.3 244	29.7 357	8.8 106
男性小計	100	44.2 57.3	9.6 5.5	27.9 16.0	12.0 6.9	6.3 3.6
20代	100	11.5 2.6	3.8 1	-	76.9 2.0	7.7 2
30代	100	66.7 4.8	25.0 3.2	2.1 1.2	4.2 2	2.1 1
40代	100	69.2 9.1	16.5 6.3	8.8 1.5	2.2 2	3.3 3
50代	100	67.4 12.9	14.7 8.7	13.2 1.7	2.3 3	2.3 3
60代	100	29.9 16.4	4.3 4.9	54.9 9.0	4.3 7	6.7 1.1
70歳以上	100	16.7 11.4	0.9 1	37.7 4.3	30.7 3.5	14.0 1.6
女性小計	100	22.9 63.0	7.0 14.4	13.3 8.4	45.7 28.8	11.1 7.0
20代	100	1.7 5.8	5.2 3	6.9 4	84.5 4.9	1.7 1
30代	100	23.6 5.5	20.0 1.1	10.9 6	40.0 2.2	5.5 3
40代	100	41.6 10.1	9.9 1.0	5.0 5	41.6 4.2	2.0 2
50代	100	35.4 14.4	10.4 1.5	14.6 2.1	34.7 5.0	4.9 7
60代	100	20.0 14.5	3.4 2.9	24.8 3.6	34.5 5.0	17.2 2.5
70歳以上	100	6.4 12.5	-	9.6 1.2	58.4 7.3	25.6 3.2

選択肢後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

問 26 . あなたが震災時にお勤めだった仕事場は、震災によって、なんらかの影響を受けましたか。

n=1203



付問 : (「 1 . 影響を受けた」とお答えの方に) 建物 (店舗) ・ 備品 ・ 商品等をすべて含んだ被害総額は、いくらぐらいだと思われますか。また、年商 (1 年間の売り上げ) の何%にあたりますか。

n=527

被害総額の推定は...

1 . 3 億円以上	13.1	69	6 . 500万 ~ 1000万円	5.5	29
2 . 1 億 ~ 3 億円	5.5	29	7 . 100万 ~ 500万円	12.0	63
3 . 5000万 ~ 1 億円	5.5	29	8 . 100万円未満	8.5	45
4 . 3000万 ~ 5000万円	4.2	22	9 . 被害はなかった	3.6	19
5 . 1000万 ~ 3000万円	9.5	50	10 . 年商とは関係のない仕事場	19.5	103
DK / NA				13.1	69

被害総額は年商の...

1 . 3 倍以上	6.6	35	6 . 30% ~ 50%	6.1	32
2 . 2 倍 ~ 3 倍	2.5	13	7 . 10% ~ 30%	9.9	52
3 . 同じ程度 ~ 2 倍	3.6	19	8 . 10%未満	18.4	97
4 . 70% ~ 99%	1.5	8	9 . 被害はなかった	3.2	17
5 . 50% ~ 70%	4.4	23	10 . 年商とは関係のない仕事場	25.0	132
DK / NA				18.8	99

選択肢後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

問 27 . 震災発生(1995 年)から 2 年間(1996 年)、あなたのお勤めになっている事務所・会社の売上げ・年商は、震災前と比べてどのような変化がありましたか。 n=1203

震災後 2 年間の平均年商は、震災前の年商と比べ

1. 3 倍以上の増	0.3	4	7. 3 ~ 5 割の減	6.2	74
2. 2 ~ 3 倍の増	1.2	14	8. 5 ~ 7 割の減	2.2	27
3. 同じ程度 ~ 2 倍の増	4.0	48	9. 7 割以上の減	2.2	27
4. 同じ程度	11.0	132	10. 売上の年商とは関係のない仕事場	11.8	142
5. 1 割未満の減	2.5	30	11. 仕事についていなかった	18.6	224
6. 1 ~ 3 割の減	9.8	118	DK / NA	30.2	363

	TOTAL	3倍以上の増	2}3倍の増	倍の増 同じ程度 1}2	同じ程度	1割未満の減	1}3割の減	3}5割の減	5}7割の減	7割以上の減	仕事は売上の年商とは関係のない仕事に就いていない	仕事に就いていない	*増えた計	*減った計	不明
TOTAL	100 1203	0.3 4	1.2 14	4.0 48	11.0 132	2.5 30	9.8 118	6.2 74	2.2 27	2.2 27	11.8 142	18.6 224	5.5 66	22.9 276	30.2 363
男性小計	100 573	0.5 3	2.1 12	6.5 37	16.6 95	4.2 24	14.1 81	9.4 54	2.8 16	2.8 16	12.7 73	9.1 52	9.1 52	33.3 191	19.2 110
20代	100 26	-	-	-	3.8 1	-	7.7 2	3.8 1	-	-	3.8 1	46.2 12	-	11.5 3	34.6 9
30代	100 48	-	2.1 1	10.4 5	20.8 10	-	12.5 6	4.2 2	2.1 1	-	20.8 10	8.3 4	12.5 6	18.8 9	18.8 9
40代	100 91	1.1 1	4.4 4	9.9 9	14.3 13	3.3 3	23.1 21	8.8 8	1.1 1	3.3 3	15.4 14	3.3 3	15.4 14	39.6 36	12.1 11
50代	100 129	1.6 2	1.6 2	10.9 14	21.7 28	4.7 6	16.3 21	12.4 16	1.6 2	1.6 2	14.7 19	3.9 5	14.0 18	36.4 47	9.3 12
60代	100 164	-	3.0 5	3.7 6	16.5 27	8.5 14	15.2 25	10.4 17	5.5 9	4.9 8	14.0 23	2.4 4	6.7 11	44.5 73	15.9 26
70歳以上	100 114	-	-	1.8 2	14.0 16	0.9 1	5.3 6	8.8 10	2.6 3	2.6 3	5.3 6	21.1 24	1.8 2	20.2 23	37.7 43
女性小計	100 630	0.2 1	0.3 2	1.7 11	5.9 37	1.0 6	5.9 37	3.2 20	1.7 11	1.7 11	11.0 69	27.3 172	2.2 14	13.5 85	40.2 253
20代	100 58	-	-	-	1.7 1	-	5.2 3	-	-	-	3.4 2	67.2 39	-	5.2 3	22.4 13
30代	100 55	1.8 1	1.8 1	5.5 3	10.9 6	1.8 1	9.1 5	3.6 3	1.8 1	3.6 2	10.9 18	32.7 18	9.1 5	20.0 11	16.4 9
40代	100 101	-	-	3.0 3	15.8 16	1.0 1	6.9 7	3.0 3	2.0 2	1.0 1	14.9 15	20.8 21	3.0 3	13.9 14	31.7 32
50代	100 144	-	0.7 1	2.8 4	3.5 5	2.1 3	9.0 13	5.6 8	2.8 4	2.1 3	20.1 29	16.7 24	3.5 5	21.5 31	34.7 50
60代	100 145	-	-	-	5.5 8	0.7 1	4.8 7	3.4 5	1.4 2	2.8 4	9.0 13	19.3 28	-	13.1 19	53.1 77
70歳以上	100 125	-	-	0.8 1	0.8 1	-	1.6 2	1.6 2	1.6 2	0.8 1	3.2 4	32.0 40	0.8 1	5.6 7	57.6 72

付問：上記の年商になった理由としてどのようなことが考えられますか
あてはまる番号にいくつでも をしてください。

(減った人) n=276

- | | | |
|----------------------------|------|-----|
| 1. 建物や設備が破壊されて生産(商売)できなかった | 34.4 | 95 |
| 2. 昔からの顧客が減った(商圏が変わった) | 44.9 | 124 |
| 3. 人手が足りなかった | 4.0 | 11 |
| 4. 資金が得られなかった | 8.7 | 24 |
| 5. 仕入れができなかった・原料が手に入らなかった | 5.8 | 16 |
| 6. 日本全体の不況の影響を受けた | 59.4 | 164 |
| 7. その他(ご記入ください) | 5.8 | 16 |
| DK / NA | 0.4 | 1 |

(増えた人) n=66

- | | | |
|----------------------|------|----|
| 8. 震災による需要増があった | 77.3 | 51 |
| 9. 行政等による支援を得ることができた | 0.0 | 0 |
| 10. その他(ご記入ください) | 10.6 | 7 |
| DK / NA | 12.1 | 8 |

選択肢後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

問 28 . 震災発生から 3 年が経過した 1997(平成 9)年から、全国的な景気低迷に見舞われました。この 1997 年から現在(2003 年 1 月)まで、あなたのお勤めになっている事務所・会社の売り上げ・年商は、震災前と比べてどのような変化がありましたか。 n=1203

この 6 年間の平均年商は、震災前の年商と比べて

1. 3 倍以上の増	0.2	3	7. 3 ~ 5 割の減	9.5	114
2. 2 ~ 3 倍の増	0.4	5	8. 5 ~ 7 割の減	2.5	30
3. 同じ程度 ~ 2 倍の増	2.7	33	9. 7 割以上の減	1.8	22
4. 同じ程度	7.0	84	10. 売上の年商とは関係のない仕事場	11.6	140
5. 1 割未満の減	2.2	26	11. 仕事についていない	22.0	265
6. 1 ~ 3 割の減	11.6	139		DK / NA	28.4 342

	TOTAL	3倍以上の増	2}3倍の増	倍の増 同じ程度}2	同じ程度	1割未満の減	1}3割の減	3}5割の減	5}7割の減	7割以上の減	仕事は関係のない	売上の年商としない仕事に就いて	*増えた計	*減った計	不明
TOTAL	100 1203	0.2 3	0.4 5	2.7 33	7.0 84	2.2 26	11.6 139	9.5 114	2.5 30	1.8 22	11.6 140	22.0 265	3.4 41	27.5 331	28.4 342
男性小計	100 573	0.2 1	0.9 5	4.7 27	10.3 59	3.1 18	17.8 102	14.8 85	2.8 16	2.3 13	12.0 69	12.6 72	5.8 33	40.8 234	18.5 106
20代	100 26	-	-	-	3.8 1	3.8 1	11.5 3	7.7 2	-	3.8 2	7.7 2	34.6 9	-	26.9 7	26.9 7
30代	100 48	-	-	10.4 5	8.3 4	4.2 2	22.9 11	10.4 5	2.1 1	-	25.0 12	2.1 1	10.4 5	39.6 19	14.6 7
40代	100 91	1.1 1	1.1 1	7.7 7	13.2 12	3.3 3	24.2 22	18.7 17	5.5 5	1.1 1	15.4 14	3.3 3	9.9 9	52.7 48	5.5 5
50代	100 129	-	1.6 2	7 9	11.6 15	6.2 8	22.5 29	16.3 21	3.1 4	1.6 2	14.7 19	3.1 4	8.5 11	49.6 64	12.4 16
60代	100 164	-	0.6 1	3 5	9.8 16	1.8 3	18.9 31	18.9 31	1.8 3	4.9 8	11.0 18	12.8 21	3.7 6	46.3 76	16.5 27
70歳以上	100 114	-	0.9 1	0.9 1	9.6 11	0.9 1	4.4 5	7.9 5	2.6 3	0.9 1	3.5 4	29.8 34	1.8 2	16.7 19	38.6 44
女性小計	100 630	0.3 2	-	1.0 6	4.0 25	1.3 8	5.9 37	4.6 29	2.2 14	1.4 9	11.3 71	30.6 193	1.3 8	15.4 97	37.5 236
20代	100 58	1.7 1	-	-	1.7 1	-	3.4 2	1.7 1	1.7 1	1.7 1	10.3 6	56.9 33	1.7 1	8.6 5	20.7 12
30代	100 55	-	-	1.8 1	10.9 6	7.3 4	9.1 5	5.5 3	1.8 1	3.6 2	12.7 7	34.5 19	1.8 1	27.3 15	12.7 7
40代	100 101	-	-	2.0 2	8.9 9	1.0 1	10.9 11	5.0 5	3.0 3	1.0 1	17.8 18	19.8 20	2.0 2	20.8 21	30.7 31
50代	100 144	0.7 1	-	0.7 1	3.5 5	1.4 2	9.0 13	7.6 11	2.8 4	2.1 3	19.4 28	20.8 30	1.4 2	22.9 33	31.9 46
60代	100 145	-	-	1.4 2	2.1 3	0.7 1	4.1 6	4.1 6	2.1 3	1.4 2	7.6 11	26.9 39	1.4 2	12.4 18	49.7 72
70歳以上	100 125	-	-	-	0.8 1	-	-	2.4 3	1.6 2	-	0.8 1	40.0 50	-	4.0 5	54.4 68

付問：上記の年商になった理由としてどのようなことが考えられますか

あてはまる番号にいくつでも をしてください。

(減った人) n=331

1. 建物や設備が破壊されて生産(商売)が軌道に乗らなかった	13.6	45
2. 昔からの顧客が減った(商圏が変わった)	37.2	123
3. 人手が足りなかった	0.9	3
4. 資金が得られなかった	7.6	25
5. 仕入れができなかった・原料が手に入らなかった	2.1	7
6. 日本全体の不況の影響を受けた	80.7	267
7. その他(ご記入ください)	5.1	17

DK / NA 0.9 3

(増えた人) n=41

8. 震災による需要増があった	17.1	7
9. 行政等による支援を得ることができた	2.4	1
10. その他(ご記入ください)	70.7	29

DK / NA 9.8 4

選択肢後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

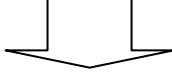
震災前と比べた、現在の暮らしについてお伺いします。

問 29 . あなたは、現在(平成 15 年 1 月)の生活を、震災前の生活と比べてどのように感じておられますか。

以下のそれぞれの質問を読み、あてはまる番号に をつけてください。

n=1203

あなたは、震災前と比べて、



1	2	3	4	5	DK / NA
かなり減った	少し減った	変わらない	少し増えた	かなり増えた	非該当

忙しく活動的な生活を送ることは、	24.3 292	12.1 145	40.5 487	9.2 111	8.1 97	5.9 71
自分のしていることに生きがいを感じることは、	14.5 175	13.5 163	47.5 572	13.6 164	5.5 66	5.2 63
まわりの人びととうまくつきあっていくことは、	7.0 84	9.2 111	60.5 728	12.6 152	6.3 76	4.3 52
日常生活を楽しく送ることは、	10.5 126	13.9 167	50.7 610	13.4 161	7.1 86	4.4 53
自分の将来は明るいと感ずることは、	24.7 297	23.2 279	38.3 461	5.4 65	3.4 41	5.0 60
元気ではつらつとしていることは、	14.3 172	23.5 283	45.3 545	7.7 93	4.1 49	5.1 61
家で過ごす時間は、	7.3 88	10.1 122	40.6 489	15.7 189	22.5 271	3.7 44
仕事の量は、	23.9 288	10.9 131	34.1 410	10.4 125	9.6 115	11.1 134

	TOTAL	かなり減った	少し減った	変わらない	少し増えた	かなり増えた	不明	かなり減った	少し減った	変わらない	少し増えた	かなり増えた	不明	かなり減った	少し減った	変わらない	少し増えた	かなり増えた	不明
TOTAL	100 1203	24.3 292	12.1 145	40.5 487	9.2 111	8.1 97	5.9 71	14.5 175	13.5 163	47.5 572	13.6 164	5.5 66	5.2 63	7.0 84	9.2 111	60.5 728	12.6 152	6.3 76	4.3 52
男性小計	100 573	28.3 162	14.7 84	37.9 217	6.3 36	6.1 35	6.8 39	18.3 105	14.8 85	45.5 261	11.5 66	3.7 35	6.1 49	8.6 59	10.3 59	61.3 351	11.3 65	3.7 21	4.9 28
20代	100 26	11.5 3	11.5 3	38.5 10	3.8 1	30.8 8	3.8 1	11.5 3	7.7 2	42.3 11	23.1 6	11.5 3	3.8 1	3.8 1	7.7 2	53.8 14	15.4 4	15.4 4	3.8 1
30代	100 48	12.5 6	12.5 6	47.9 23	12.5 6	14.6 7	-	6.3 3	20.8 10	37.5 18	22.9 11	12.5 6	-	2.1 1	10.4 5	52.1 25	11.3 13	8.3 4	-
40代	100 91	19.8 18	19.8 18	44.0 40	9.9 9	5.5 5	1.1 1	13.2 12	18.7 17	51.6 47	12.1 11	3.3 3	1.1 1	6.6 6	9.9 9	68.1 62	11.0 10	3.3 3	1.1 1
50代	100 129	17.8 23	17.1 22	47.3 61	8.5 11	9.3 12	-	16.3 21	13.2 17	55.8 72	12.4 16	2.3 3	-	5.4 7	11.6 15	70.5 91	10.1 13	2.3 3	-
60代	100 164	37.8 62	18.9 31	31.1 51	3.0 5	0.6 1	8.5 14	24.4 40	18.3 30	40.2 66	7.9 13	3.0 5	6.1 10	10.4 17	11.6 19	59.8 98	11.0 18	1.8 3	5.5 9
70歳以上	100 114	43.0 49	3.5 4	28.1 32	3.5 4	1.8 2	20.2 23	21.9 25	7.9 9	41.2 47	7.9 9	0.9 1	20.2 23	14.0 16	7.9 9	53.5 61	6.1 7	3.5 4	14.9 17
女性小計	100 630	20.6 130	9.7 61	42.9 270	11.9 75	9.8 62	5.1 32	11.1 70	12.4 78	49.4 311	15.6 98	7.1 45	4.4 28	5.6 35	8.3 52	59.8 377	13.8 87	8.7 55	3.8 24
20代	100 58	8.6 5	5.2 3	51.7 30	10.3 6	22.4 13	1.7 1	-	6.9 4	51.7 30	27.6 16	12.1 7	1.7 1	5.2 3	6.9 4	56.9 33	12.1 7	17.2 10	1.7 1
30代	100 55	14.5 8	5.5 3	41.8 23	21.8 12	16.4 9	-	9.1 5	5.5 3	54.5 30	18.2 10	12.7 7	-	9.1 5	5.5 3	45.5 25	27.3 15	12.7 7	-
40代	100 101	8.9 9	6.9 7	47.5 48	19.8 20	16.8 17	-	5.9 6	11.9 12	48.5 49	25.7 26	7.9 8	-	1.0 1	9.9 10	56.4 57	15.8 16	15.8 16	1.0 1
50代	100 144	19.4 28	11.1 16	46.5 67	13.2 19	9.0 13	0.7 1	11.1 16	11.8 17	54.9 79	13.9 20	7.6 11	0.7 1	4.2 6	6.3 9	67.4 97	13.2 19	8.3 12	0.7 1
60代	100 145	27.6 40	13.1 19	40.7 59	6.9 10	6.2 9	5.5 8	11.7 17	20.0 29	43.4 63	12.4 18	7.6 11	4.8 7	4.8 7	12.4 18	62.1 90	11.7 17	5.5 8	3.4 5
70歳以上	100 125	32.0 40	10.4 13	33.6 42	6.4 8	0.8 1	16.8 21	20.8 26	10.4 13	47.2 59	6.4 8	0.8 1	14.4 18	10.4 13	6.4 8	59.2 74	10.4 13	1.6 2	12.0 15

選択肢後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

問 30 . あなたは、最近 1 ヶ月の間 (平成 14 年 12 月 ~ 平成 15 年 1 月) に、つぎにあげた「こころやからだの状態」を、どのくらい体験しましたか。以下のそれぞれの質問を読み、あてはまる番号に をつけてください。

n=1203

以下のようなこころやからだの状態が	1	2	3	4	5	DK / NA
	まったく ない	まれに あった	たまに あった	たびたび あった	いつも あった	
気持ちが落ち着かない	30.0 361	21.1 254	25.7 309	10.9 131	7.0 84	5.3 64
寂しい気持ちになる	32.9 396	20.9 252	23.5 283	11.1 134	6.5 78	5.0 60
気分が沈む	30.7 369	22.0 265	23.9 287	12.6 151	5.9 71	5.0 60
次々とよくないことを考える	32.8 395	23.4 281	21.2 255	11.6 139	5.7 68	5.4 65
集中できない	30.8 370	27.7 333	22.4 269	8.4 105	4.8 58	5.7 68
何をするのもおっくうだ	31.5 379	25.5 307	21.4 258	10.6 128	6.2 74	4.7 57
動悸 (どうき) がする	53.4 643	17.5 210	16.4 197	5.3 64	2.4 29	5.0 60
息切れがする	54.8 659	18.7 225	14.0 168	5.1 61	2.7 32	4.8 58
頭痛、頭が重い	44.4 534	23.6 284	16.3 196	7.6 91	3.3 40	4.8 58
胸がしめつけられるような痛みがある	63.3 762	17.0 204	10.4 125	2.6 31	1.1 13	5.7 68
めまいがする	58.9 709	19.7 237	10.7 129	3.7 44	1.8 22	5.2 62
のどがかわく	49.0 590	20.4 246	14.0 168	8.0 96	3.4 41	5.2 62

問 31 . あなたは、現在 (平成 15 年 1 月) 、つぎにあげたことごとについて、どの程度満足されていますか。それぞれの質問を読み、あてはまる番号に をつけてください。

n=1203

以下のことについての あなたの満足度は	1	2	3	4	5	DK / NA 非該当
	たいへん 不満 である	やや 不満 である	どちら でもない	やや 満足 している	たいへん 満足 している	
毎日の暮らしに、	6.8 82	22.9 276	29.3 352	30.4 366	8.6 103	2.0 24
ご自分の健康に、	9.6 115	34.2 411	20.1 242	26.9 324	7.1 85	2.2 26
今の人間関係に、	4.1 49	18.0 217	36.0 433	31.5 379	8.0 96	2.4 29
今の家計の状態に、	18.0 217	30.3 365	24.4 294	19.5 234	5.2 63	2.5 30
今の家庭生活に、	5.2 63	19.4 233	31.9 384	29.8 358	11.2 135	2.5 30
ご自分の仕事に、	10.2 123	17.7 213	32.0 385	20.4 245	6.2 75	13.5 162

選択枝後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

問 32. 震災からこれまでの8年間をふり返ると、その間の体験について、あなたはどのような印象をお持ちですか。それぞれ、あてはまる番号1つに をつけてください。

n=1203

以下のことについて、どう思いますか

	1 まったく そう 思う	2 どちらか といえば そう思う	3 どちら とも 言えない	4 どちらか といえば そう思わ ない	5 まったく そう 思わない	DK / NA
1. 今の住まいで、どのように暮らしていけば良いのか、そのめどが立っている。	16.0 193	35.0 421	31.5 379	7.6 92	5.9 71	3.9 47
2. 毎日の生活は、震災前と同じように、決まったことのくり返しに感じられる。	15.8 190	36.9 444	24.3 292	13.9 167	5.9 71	3.2 39
3. 現在が、「ふつう」の暮らしに感じられる。	19.5 235	38.4 462	23.9 288	11.1 133	4.0 48	3.1 37
4. 震災での体験は、日常生活では得られない得がたい経験だった。	52.0 626	25.7 309	11.3 136	3.7 44	4.6 55	2.7 33
5. 震災での体験は、私の過去から消し去ってしまいたい経験だった。	14.2 171	13.9 167	25.6 308	21.9 263	21.1 254	3.3 40
6. 今ではもう震災を話題にすることもなくなった。	6.7 80	24.4 293	21.1 254	27.2 327	17.3 208	3.4 41
7. 「自分に与えられた人生の使命とは何か」を考えるようになった。	12.6 151	24.9 299	39.2 472	12.0 144	7.3 88	4.1 49
8. 自分の運命に無関心になった。	3.5 42	6.8 82	33.3 400	26.1 314	26.6 320	3.7 45
9. 震災によって精神的に成長できた。	12.5 150	29.5 355	42.5 511	7.1 86	4.8 58	3.6 43
10. 次に震災がやってきても、きっとまた乗り越えていけると思う。	15.4 185	29.8 359	33.7 406	10.3 124	7.8 94	2.9 35
11. 震災のことを、思い出したくない。	12.2 147	18.0 217	30.4 366	19.7 237	16.6 200	3.0 36
12. 「生きることには意味がある」と強く感じる。	34.2 411	34.8 419	21.0 253	4.0 48	2.2 26	3.8 46
13. 震災のあと、物事に感動することが少なくなった。	3.8 46	10.1 122	32.7 393	23.4 281	26.1 314	3.9 47
14. 震災については、あまり触れてほしくない。	6.6 79	10.6 128	30.2 363	25.3 304	24.1 290	3.2 39
15. 震災体験によって、私は生まれ変わったように感じる。	4.2 50	9.1 109	47.1 567	19.1 230	16.8 202	3.7 45
16. 私には宿命に流されず生きる勇気がある。	11.4 137	20.0 240	49.0 589	10.5 126	6.0 72	3.2 39
17. 震災以降、時が止まっているみたいだ。	2.1 25	2.8 34	18.2 219	25.3 304	47.5 572	4.1 49
18. 人生には何らかの意味があると思う。	27.3 328	38.0 457	22.3 268	4.7 57	3.6 43	4.2 50
19. 震災の話は、聞きたくない。	5.1 61	9.1 110	27.5 331	24.1 290	30.7 369	3.5 42
20. 震災後、「人間も捨てたものではない」と感じるようになった。	21.3 256	34.2 411	32.2 387	5.2 63	3.7 45	3.4 41
21. 震災当時ですら、震災を「対岸の火事」だと思っていた。	5.4 65	6.8 82	15.5 187	21.4 257	47.4 570	3.5 42
22. 震災当時から、被災者としての実感はなかった。	6.3 76	16.4 197	21.9 263	20.4 245	31.5 379	3.6 43

選択肢後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

問 33 . あなたの現在住んでいるまちでの、震災後の復興状況や身近な問題についてお聞きします。それぞれの質問で、あなたの印象にあてはまるもの1つに をつけてください。

n=1203

A : あなたのまちの復旧・復興状況について

1 . かなり速い	23.2 279	4 . やや遅い	9.1 110
2 . やや速い	20.1 242	5 . かなり遅い	7.2 87
3 . ふつう	36.3 437	6 . その他 ()	1.1 13
		DK / NA	2.9 35

B : あなたの地域の夜の明るさは震災以前と比べてどうですか。

1 . 震災前より明るくなった	18.3 220	4 . 震災の影響はなかった	20.5 247
2 . 震災前の状態に戻った	44.6 537	5 . その他 ()	0.8 10
3 . 震災前より暗くなった	11.1 133	DK / NA	4.7 56

C : 1年後(2004年)のあなたを想像してください。あなたは、今よりも生活がよくなっていると思いますか、どうですか。

1 . かなり良くなる	2.5 30	4 . やや悪くなる	26.4 318
2 . やや良くなる	7.8 94	5 . かなり悪くなる	11.8 142
3 . かわらない	50.9 612	DK / NA	0.6 7

	TOTAL	かなり速い	やや速い	ふつう	やや遅い	かなり遅い	その他	不明	震災前より明るくなった	震災前の状態に戻った	震災前より暗くなった	震災の影響はなかった	その他	不明	かなり良くなる	やや良くなる	かわらない	やや悪くなる	かなり悪くなる	不明
TOTAL	100 1203	23.2 279	20.1 242	36.3 437	9.1 110	7.2 87	1.1 13	2.9 35	18.3 220	44.6 537	11.1 133	20.5 247	0.8 10	4.7 56	2.5 30	7.8 94	50.9 612	26.4 318	11.8 142	0.6 7
男性小計	100 573	24.1 138	20.1 115	34.7 199	10.1 58	8.0 46	0.7 4	2.3 13	17.6 101	46.6 267	10.5 60	20.2 116	1.2 7	3.8 22	2.8 16	8.4 48	45.2 259	28.8 165	14.0 80	0.9 5
20代	100 26	34.6 9	19.2 5	26.9 7	11.5 3	7.7 2	-	-	11.5 3	50.0 13	15.4 4	23.1 6	-	-	3.8 4	15.4 16	61.5 3	11.5 2	7.7 -	-
30代	100 48	22.9 11	14.6 7	45.8 22	-	14.6 7	-	2.1 1	20.8 10	45.8 22	10.4 5	16.7 8	2.1 1	4.2 2	4.2 2	12.5 6	47.9 23	22.9 11	12.5 6	-
40代	100 91	30.8 28	14.3 13	37.4 34	12.1 11	3.3 3	1.1 1	1.1 1	20.9 19	48.4 44	9.9 9	14.3 13	3.3 3	3.3 3	5.5 5	8.8 8	49.5 45	26.4 24	8.8 8	1.1 -
50代	100 129	26.4 34	22.5 29	25.6 33	10.1 13	11.6 15	0.8 1	3.1 4	14.7 19	47.3 61	12.4 16	21.7 28	-	3.9 5	3.9 5	10.9 14	38.0 49	31.0 40	14.0 18	2.3 3
60代	100 164	24.4 40	23.8 39	31.1 51	11.0 18	6.1 10	1.2 2	2.4 4	13.4 22	44.5 73	9.8 16	28 46	0.6 1	3.7 6	0.6 1	5.5 9	40.9 67	33.5 55	19.5 32	-
70歳以上	100 114	13.2 15	19.3 22	45.6 52	11.4 13	7.9 9	-	2.6 3	24.6 28	47.4 54	8.8 10	12.3 14	1.8 2	5.3 6	1.8 2	6.1 7	50.9 58	28.1 32	12.3 14	0.9 1
女性小計	100 630	22.4 141	20.2 127	37.8 238	8.3 52	6.5 41	1.4 9	3.5 22	18.9 119	42.9 270	11.6 73	20.8 131	0.5 3	5.4 34	2.2 14	7.3 46	56.0 353	24.3 153	9.8 62	0.2 3
20代	100 58	24.1 14	20.7 12	36.2 21	5.2 3	8.6 5	-	5.2 3	17.2 10	36.2 21	12.1 7	24.1 14	1.7 1	8.6 5	6.9 4	19.0 11	58.6 34	15.5 9	-	-
30代	100 55	21.8 12	20 11	45.5 25	5.5 3	5.5 3	-	1.8 1	30.9 17	43.6 24	5.5 3	10.9 6	-	9.1 5	3.6 2	10.9 8	50.9 28	29.1 15	5.5 3	-
40代	100 101	19.8 20	18.8 19	44.6 45	7.9 8	4.0 4	1.0 1	4.0 4	16.8 17	46.5 47	9.9 10	21.8 22	-	5.0 5	2.0 10	9.9 68	67.3 41	14.9 15	5.9 6	-
50代	100 144	23.6 34	25.0 36	33.3 48	9.0 13	5.6 8	1.4 2	2.1 3	20.1 29	45.8 66	7.6 11	24.3 35	-	2.1 3	2.1 3	6.3 9	45.8 66	28.5 41	16.7 24	0.7 1
60代	100 145	20.7 30	17.9 26	36.6 53	10.3 15	7.6 11	2.1 3	4.8 7	18.6 27	42.8 62	15.2 22	19.3 28	0.7 1	3.4 5	2.1 3	2.8 4	52.4 76	30.3 44	12.4 18	-
70歳以上	100 125	24.0 30	18.4 23	36.0 45	8.0 10	8.0 10	2.4 3	3.2 4	15.2 19	40.0 50	16.0 20	19.2 24	0.8 1	8.8 11	-	4.8 6	64.0 80	22.4 28	8.0 10	0.8 1

選択枝後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

問 34 . 以下について、あなたの体験やお考えを教えてください。

それぞれについて、あてはまる番号 1 つに をしてください。

「震災前は・・・、震災後は・・・」のように、震災を時間的な区切りとした言い方を時折耳にします。
あなた自身は、こうした言い方をされますか。 n=1203

1 . 非常によくする	3.4	41
2 . よくする	10.0	120
3 . ときどきする	36.7	441
4 . あまりしない	34.5	415
5 . しない	14.5	174
DK / NA	1.0	12

	TOTAL	非常によくする	よくする	ときどきする	あまりしない	しない	不明
TOTAL	100	3.4	10.0	36.7	34.5	14.5	1.0
男 性 小 計	1203	41	120	441	415	174	12
20 代	100	-	3.8	34.6	38.5	23.1	-
30 代	100	10.4	4.2	33.3	39.6	12.5	-
40 代	100	4.4	12.1	36.3	29.7	17.6	-
50 代	100	3.1	6.2	38.0	34.1	17.1	1.6
60 代	100	1.8	11.6	40.2	29.3	16.5	0.6
70 歳 以 上	100	4.4	9.6	36.0	40.4	7.9	1.8
女 性 小 計	100	3.2	10.8	36.0	34.9	14.0	1.1
20 代	100	-	6.9	25.9	41.4	25.9	-
30 代	100	1.8	3.6	45.5	34.5	14.5	-
40 代	100	-	6.9	26.7	48.5	17.8	-
50 代	100	6.9	8.3	36.1	36.8	11.1	0.7
60 代	100	4.1	17.2	37.2	29.0	9.7	2.8
70 歳 以 上	100	2.4	14.4	42.4	26.4	12.8	1.6

あなたは、震災前後で、「自分は変わった」とお感じになりますか。 n=1203

1 . 強く感じる	5.9	71	3 . あまり感じない	39.7	478
2 . やや感じる	27.7	333	4 . ほとんど感じない	25.8	310
			DK / NA	0.9	11

-1 の変化は、よい方向への変化ですか、それとも、悪い方向への変化ですか。

n=404

1 . よい方向	19.1	77
2 . どちらかといえばよい方向	49.3	199
3 . どちらかといえば悪い方向	23.8	96
4 . 悪い方向	2.7	11
DK / NA	5.2	21

	TOTAL	強く感じる	やや感じる	あまり感じない	ほとんど感じない	不明	TOTAL	よい方向	どちらかといえばよい方向	どちらかといえば悪い方向	悪い方向	不明
TOTAL	100	5.9	27.7	39.7	25.8	0.9	100	19.1	49.3	23.8	2.7	5.2
男 性 小 計	1203	71	333	478	310	11	404	77	199	96	11	21
20 代	100	7.7	26.9	19.2	46.2	-	100	44.4	44.4	11.1	-	-
30 代	100	6.3	22.9	50.0	20.8	-	100	28.6	42.9	14.3	7.1	7.1
40 代	100	3.3	40.7	35.2	20.9	-	100	22.5	40.0	27.5	2.5	7.5
50 代	100	5.4	22.5	45.0	25.6	1.6	100	16.7	58.3	16.7	2.8	5.6
60 代	100	6.1	20.7	42.1	29.9	1.2	100	11.4	38.6	38.6	2.3	9.1
70 歳 以 上	100	6.1	26.3	41.2	26.3	-	100	13.5	37.8	32.4	5.4	10.8
女 性 小 計	100	6.2	29.4	38.4	24.9	1.1	100	19.6	54.0	21.0	2.2	3.1
20 代	100	1.7	25.9	37.9	32.8	1.7	100	37.5	50.0	12.5	-	-
30 代	100	9.1	34.5	32.7	23.6	-	100	20.8	58.3	16.7	4.2	-
40 代	100	3.0	26.7	38.6	31.7	-	100	16.7	60.0	13.3	-	10.0
50 代	100	6.3	24.3	41.7	27.8	-	100	29.5	50.0	13.6	2.3	4.5
60 代	100	11.0	33.8	35.2	17.2	2.8	100	16.9	52.3	26.2	3.1	1.5
70 歳 以 上	100	4.0	31.2	41.6	21.6	1.6	100	9.1	54.5	31.8	2.3	2.3

選択枝後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

あなたは、震災前後で、「自分の人生は変わった」とお感じになりますか。 n=1203

1. 強く感じる	9.7	117	3. あまり感じない	39.0	469
2. やや感じる	28.0	337	4. ほとんど感じない	22.4	269
			DK / NA	0.9	11

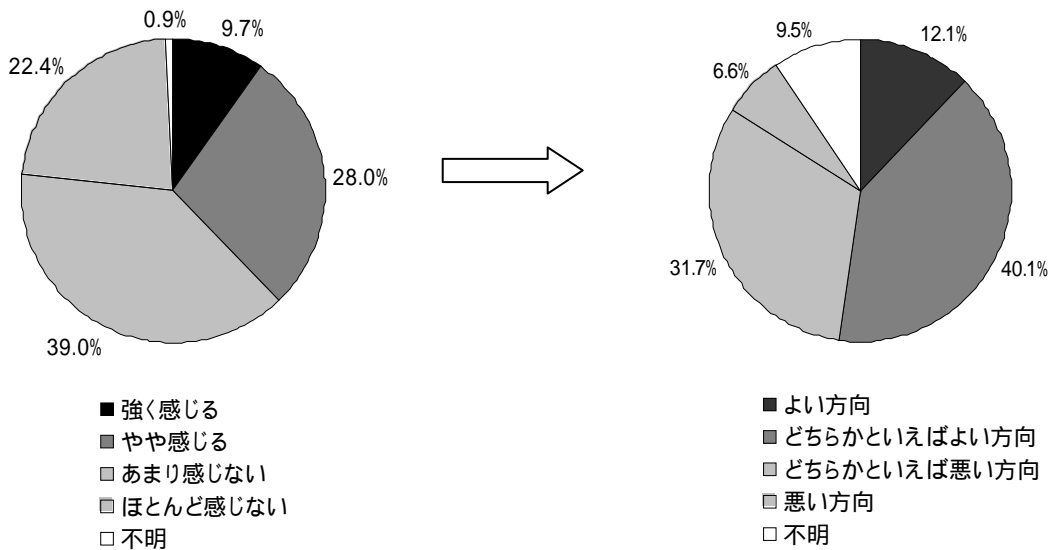
-1 の変化は、よい方向への変化ですか、それとも、悪い方向への変化ですか。

n=454

1. よい方向	12.1	55	
2. どちらかといえばよい方向	40.1	182	
3. どちらかといえば悪い方向	31.7	144	
4. 悪い方向	6.6	30	
	DK / NA	9.5	43

	TOTAL	強く感じる	やや感じる	い	あまり感じ	ない	ほとんど感じ	不明	TOTAL	よい方向	え	どちらかとい	え	どちらかとい	悪い方向	不明
TOTAL	100	9.7	28.0	39.0	22.4	0.9	100	12.1	40.1	31.7	6.6	9.5				
男 性 小 計	1203	117	337	469	269	11	454	55	182	144	30	43				
20代	100	15.4	15.4	38.5	30.8	-	100	25.0	37.5	12.5	25.0	-				
30代	100	12.5	12.5	58.3	16.7	-	100	25.0	25.0	41.7	8.3	-				
40代	100	11.0	36.3	36.3	16.5	-	100	11.6	39.5	30.2	11.6	7.0				
50代	100	10.1	27.1	37.2	24.0	1.6	100	8.3	47.9	27.1	2.1	14.6				
60代	100	6.1	25.0	42.1	25.6	1.2	100	7.8	23.5	47.1	7.8	13.7				
70歳以上	100	8.8	27.2	40.4	23.7	-	100	12.2	41.5	29.3	7.3	9.8				
女 性 小 計	100	10.2	29.7	37.1	21.9	1.1	100	12.7	42.6	30.3	5.6	8.8				
20代	100	8.6	20.7	32.8	36.2	1.7	100	35.3	47.1	5.9	5.9	5.9				
30代	100	12.7	32.7	38.2	14.5	1.8	100	16.03	48.0	16.0	8.0	12.0				
40代	100	6.9	23.8	44.6	24.8	-	100	9.7	41.9	41.9	-	6.5				
50代	100	7.6	27.8	38.9	25.7	-	100	11.8	39.2	25.5	9.8	13.7				
60代	100	17.2	33.1	32.4	14.5	2.8	100	15.1	41.1	31.5	6.8	5.5				
70歳以上	100	7.2	36.0	36.0	20.0	0.8	100	3.7	44.4	40.7	1.9	9.3				

-1



選択枝後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

問 35 . 被災地の人たちがどのように復旧・復興するかは、ほとんど知られていません。あなたの気持ちや行動が、震災後、時間とともにどんな風に変化してきたのか、ふり返ってみてください。

A~Fのそれぞれの問いについて、カレンダーの番号に をつけてください。

n=1203

%

カレンダー:平成7年(1995年)1月17日~現在

月 日 曜日	できごと	A 被害の全体像が つかめた	B もう安全だと 思った	C 不自由な暮らし が当分続くと 覚悟した	D 仕事/学校が もとに戻った	E すまいの始末が ついた	F 自分が被災者だ と意識しなく なった
平成 7(1995)年							
1月 17	火 震災発生・未明	2.8	1.6	10.6	0.5	1.2	1.2
	午前中	11.4	4.2	18.0	0.7	2.6	1.6
	午後	11.6	3.2	9.2	0.8	3.8	1.4
	よる	10.9	3.1	9.3	0.1	3.9	1.3
	よなか	1.7	1.2	1.5	0.1	0.7	0.4
18	水 震災翌日・午前	6.4	2.6	9.0	3.1	2.1	1.6
	午後	5.3	1.5	2.1	0.5	2.8	0.4
	よる	4.1	1.5	3.4	0.2	1.0	0.7
19	木 震災後3日・ひる	6.2	3.2	3.7	3.2	2.9	0.8
	よる	4.3	1.8	2.2	0.3	0.8	0.5
20	金	3.7	4.5	3.1	3.7	1.7	1.2
21	土	1.4	0.7	1.0	1.0	0.6	0.1
22	日 震災以来最初の雨	1.2	1.7	0.7	0.8	1.5	0.2
23~29		2.6	3.8	1.3	8.8	3.7	0.6
30~2/5		2.1	4.7	1.2	3.3	3.3	1.2
2月		2.3	8.8	2.1	11.6	6.6	3.8
3月		0.8	5.8	1.7	6.6	6.3	3.7
4月~6月		0.8	6.8	1.2	8.1	8.0	5.8
7月~9月		0.6	2.7	0.2	2.5	5.4	2.8
10月~12月		0.4	2.1	0.7	1.7	5.2	3.4
平成 8(1996)年		0.7	4.7	0.7	3.5	5.7	9.1
平成 9(1997)~平成10(1998)年		0.2	3.0	0.2	1.3	3.6	8.2
平成11(1999)~平成12(2000)年		0.1	0.6	0.0	0.7	1.8	5.1
平成13(2001)年~現在		0.1	0.7	0.0	0.1	0.6	4.2
現在も戻っていない 覚えていない		0.8	4.0	0.7	1.8	2.5	12.4
DK/NA		12.6	13.1	11.5	23.0	14.3	16.4

この欄は集計に使用しますので、記入しないでください

A	B	C	D	E	F
---	---	---	---	---	---

選択肢後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

実数(人)

カレンダー:平成7年(1995年)1月17日～現在

月 日 曜日	できごと	A 被害の全体像が つかめた	B もう安全だと 思った	C 不自由な暮らし が当分続くと 覚悟した	D 仕事/学校が もとに戻った	E すまいの始末が ついた	F 自分が被災者だ と意識しなく なった
平成 7(1995)年							
1月	17 火 震災発生・未明	34	19	127	6	14	15
	午前中	137	51	217	9	31	19
	午後	140	39	111	10	46	17
	よる	131	37	112	1	47	16
	よなか	20	15	18	1	9	5
18 水	震災翌日・午前	77	31	108	37	25	19
	午後	64	18	25	6	34	5
	よる	49	18	41	3	12	8
19 木	震災後3日・ひる	75	39	44	39	35	10
	よる	52	22	26	4	10	6
20 金		45	54	37	44	21	15
21 土		17	8	12	12	7	1
22 日	震災以来最初の雨	14	21	8	10	18	3
23～29		31	46	16	106	45	7
30～2/5		25	56	15	40	40	15
2月		28	106	25	140	79	46
3月		10	70	20	79	76	44
4月～6月		10	82	15	97	96	70
7月～9月		7	33	2	30	65	34
10月～12月		5	25	9	20	63	41
平成 8(1996)年		9	57	8	42	69	110
平成 9(1997)～平成10(1998)年		2	36	3	16	43	99
平成11(1999)～平成12(2000)年		1	7	0	9	22	61
平成13(2001)年～現在		1	9	0	1	7	50
現在も戻っていない 覚えていない		10	48	8	22	30	149
DK/NA		152	158	138	277	172	197

この欄は集計に使用しますので、記入しないでください

A	B	C	D	E	F
---	---	---	---	---	---

選択枝後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

問 36 . 震災から 8 年間、あなたの生活には次のような変化がありましたか。

震災直後は震災前と比べて、現在は震災前と比べて、それぞれについて、あてはまる番号 1 つに を してください。

n=1203

	震災前と比べて、 震災直後は...				震災前と比べて、 現在は...			
	増えた	変わらない	減った	DK/NA	増えた	変わらない	減った	DK/NA
心を開いてはなすことができる人が...	18.8 (226)	69.6 (837)	6.8 (82)	4.8 (58)	15.2 (183)	68.7 (826)	10.3 (124)	5.8 (70)
周囲の人と助け合うことが...	52.1 (627)	40.8 (491)	2.2 (27)	4.8 (58)	23.0 (277)	60.9 (733)	9.7 (117)	6.3 (76)
防災に対する意識が...	75.1 (904)	19.2 (231)	0.8 (10)	4.8 (58)	45.7 (550)	39.2 (472)	8.2 (99)	6.8 (82)
「非日常」の雰囲気が...	40.3 (485)	46.6 (560)	4.3 (52)	8.8 (106)	7.1 (86)	70.3 (846)	13.1 (158)	9.4 (113)
物に対する意識が...	16.0 (193)	43.0 (517)	34.4 (414)	6.6 (79)	7.6 (91)	58.7 (706)	26.2 (315)	7.6 (91)
過去をふり返ることが...	27.3 (329)	53.4 (643)	13.1 (157)	6.2 (74)	20.6 (248)	57.9 (697)	13.7 (165)	7.7 (93)
生活の不満が...	42.1 (506)	41.0 (493)	10.8 (130)	6.2 (74)	22.6 (272)	59.7 (718)	10.8 (130)	6.9 (83)
生活の不安が...	58.4 (702)	33.5 (403)	2.2 (26)	6.0 (72)	35.6 (428)	50.3 (605)	7.1 (86)	7.0 (84)
毎日のいそがしさが...	43.1 (519)	42.6 (513)	8.1 (97)	6.2 (74)	20.3 (244)	57.5 (692)	15.4 (185)	6.8 (82)
今日を楽しむ気持ちは...	14.6 (176)	45.1 (542)	35.2 (423)	5.2 (62)	23.9 (288)	56.7 (682)	12.8 (154)	6.6 (79)
自分だけが頼りだという気持ちが...	26.4 (317)	55.3 (665)	12.5 (150)	5.9 (71)	19.7 (237)	62.6 (753)	10.5 (126)	7.2 (87)
行政へのたのもしさが...	14.8 (178)	43.6 (524)	36.0 (433)	5.7 (68)	6.8 (82)	48.2 (580)	38.1 (458)	6.9 (83)

選択肢後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

問 37 . あなたのご家族の、現在のようすについておうかがいします。

n=1203

(1) あなたのご家族に最もあてはまるものを1つ選んで、[]の中に をつけてください。
家族の中でのそれぞれの役割やふるまいについて(あてはまるもの1つに)

1 []	問題が起こると家族みんなで話し合い、 決まったことはみんなの同意を得たことである	21.9	263
2 []	家でのそれぞれの役割ははっきりしているが、 皆でおぎないあうこともある	29.8	358
3 []	困ったことが起こったとき、いつも勝手に決断を下す人がいる	3.7	44
4 []	わが家ではそれぞれの家での役割を気軽に交代することができる	11.2	135
5 []	家の決まりは皆が守るようにしている	17.6	212
6 []	わが家はみんなで約束したことでもそれを実行することはほとんどない	1.9	23
7 []	問題が起こると家族で話し合いがあるが、 物事の最終決定はいつも決まった人の意見がとおる	10.7	129
8 []	わが家では家族で何か決めても、守られたためしがない	2.5	30
(9 []	単身	9.0	108)
	D K / N A	4.1	49

(2) あなたのご家族に最もあてはまるものを1つ選んで、[]の中に をつけてください。
一緒に過ごす時間について(あてはまるもの1つに)

1 []	たいがい各自好きなように過ごしているが、 たまには家族一緒に過ごすこともある	36.8	443
2 []	子どもが落ち込んでいる時はこちらも心配になるが、 あまり聞いたりしない	2.1	25
3 []	悩みを家族に相談することがある	16.6	200
4 []	家族はお互いの体によくふれあう	8.3	100
5 []	家族の間で、用事以外の関係は全くない	2.0	24
6 []	家族のものは必要最低限のことは話す、それ以上はあまり会話がな	8.3	100
7 []	休日は家族で過ごすこともあるし、友人と遊びに行くこともある	15.0	181
8 []	誰かの帰りが遅い時には、その人が帰るまでみんな起きて待っている	8.3	100
(9 []	単身	9.0	108)
	D K / N A	3.7	45

・一人ぐらしである

生活復興のとらえ方にも、大きな個人差があるといわれています。

処世の知恵、人生訓、人とのつきあい方について、あなたご自身の考え方をお教えてください。

問 38 . 下のそれぞれの意見に対して、あなたのお考えをお聞かせください。あなたの考えに最も近いと思う番号1つに をしてください。

n=1203

以下のことについて、どう思いますか

	1 まったく そう 思う	2 どちらか といえば そう思う	3 どちら とも 言えない	4 どちらか といえば そう思わ ない	5 まったく そう 思わない	DK / NA
講演会や地域の集まりに参加したとき、話し手に耳を傾けるのが礼儀だと思う。	70.5 848	22.4 270	3.7 44	0.5 6	0.4 5	2.5 30
街を歩いていて不快な目にあったら、イライラせずに気持ちを抑えようとする方だ。	11.9 143	51.4 618	23.6 284	7.8 94	2.2 27	3.1 37
地域でみんなが困っていることなら、みんなで考えることで解決の糸口が見えると思う。	33.8 407	44.9 540	14.9 179	2.2 26	1.0 12	3.2 39
苦労は、将来役に立つ試練と考える。	33.2 399	40.4 486	20.3 244	2.9 35	0.7 9	2.5 30
他人の権利を侵さないように気をつける方だ。	35.5 427	49.7 598	10.6 127	0.7 9	0.2 2	3.3 40
自分の欲求をかなえるときも、バランス感覚が大切だ。	32.4 390	47.5 571	15.6 188	0.6 7	0.3 4	3.6 43
しあわせなことが立て続けに起こると、この幸運に酔ってはいけないと、心を引き締める。自分で決めたことは、最後まで守る方だ。	28.5 343	45.7 550	17.8 214	4.0 48	1.1 13	2.9 35
約束は、できるだけ守るようにしている。	25.3 304	44.6 536	24.2 291	3.0 36	0.4 5	2.6 31
用事があれば、近所の人にも、自分からきっかけを作って話しかける方だ。	53.2 640	41.0 493	2.7 33	0.5 6	0.1 1	2.5 30
用事があれば、近所の人にも、自分からきっかけを作って話しかける方だ。	21.9 264	40.8 491	24.9 300	7.3 88	1.8 22	3.2 38
自分がしてほしいことは、他人にもしない。	48.4 582	39.5 475	8.2 99	1.4 17	0.3 4	2.2 26
たとえ方便でも人にうそをつくのはいやだ。	27.3 329	35.0 421	27.2 327	5.0 60	1.8 22	3.7 44
いつ子どもに見られても、誇れる自分がある。	16.3 196	33.6 404	38.2 459	7.0 84	0.8 10	4.2 50

選択肢後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

あなたが住んでいるまちやご近所のことについて、お聞かせください。

問 39 . あなたのご近所づきあいについてお聞きします。以下について、あてはまる人数をお答え下さい。

n=1203

世間話をする近所の人は、何人くらいいますか。

1 . 約 (AV.4.26) 人いる	67.5	2 . とくにいない	31.3
	812		376
		DK / NA	1.2
			15

おすそわけをしたり、おみやげをあげたりもらったりする近所の家は、何軒くらいありますか。

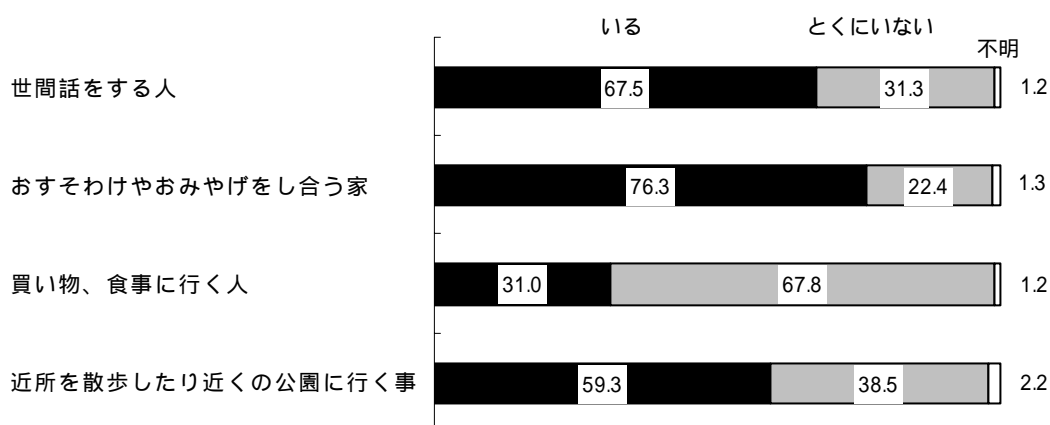
1 . 約 (AV.2.66) 軒ある	76.3	2 . とくにいない	22.4
	917		270
		DK / NA	1.3
			16

先月1ヶ月の間にいっしょに出かけたり、買い物や食事などに行ったことがある近所の人は、何人くらいいますか。

1 . 約 (AV.1.07) 人いる	31.0	2 . とくにいない	67.8
	372		816
		DK / NA	1.2
			15

月に何回くらい、近所を散歩したり、近くの公園に出かけますか。

1 . 約 (AV.6.54) 回する	59.3	2 . しない	38.5
	714		463
		DK / NA	2.2
			26



選択肢後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

問 40 . あなたが、今のまちに住むようになってから、現在で何年目ですか。

n=1203

現在で (AV. 22.27) 年目

問 41 . あなたの住んでいるまちには、いろいろな活動やイベント、また、近所づきあいがあると思います。

n=1203

A . まちのイベント(お祭り、運動会、盆踊りなど)に参加したことはありますか。

1 . たびたび参加している	12.3	148
2 . ときどき参加している	38.8	467
3 . ほとんど参加したことはない	48.0	578
DK / NA	0.8	10

B . そのようなまちのイベントに、お世話をする立場で参加したことはありますか。

1 . たびたび参加している	6.9	83
2 . ときどき参加している	25.6	308
3 . ほとんど参加したことはない	66.4	799
DK / NA	1.1	13

C . 趣味やスポーツのサークルに参加したことはありますか。

1 . たびたび参加している	12.4	149
2 . ときどき参加している	20.0	241
3 . ほとんど参加したことはない	66.7	802
DK / NA	0.9	11

D . 自治会の仕事をしたことはありますか。

1 . たびたびしている	11.6	139
2 . ときどきしている	38.7	465
3 . ほとんどしたことはない	48.6	585
DK / NA	1.2	14

E . P T A の仕事をしたことはありますか。

1 . たびたびしている	7.8	94
2 . ときどきしている	17.1	206
3 . ほとんどしたことはない	72.2	868
DK / NA	2.9	35

F . 地域でボランティア活動をしたことはありますか。

1 . たびたびしている	8.1	97
2 . ときどきしている	20.4	246
3 . ほとんどしたことはない	70.4	847
DK / NA	1.1	13

問 42 . あなたにとっての「まちのイメージ」をおたずねします。

あなたにとって「自分のまちのイメージ」は、以下の5つのうち、どれに一番当てはまりますか。
 あてはまるもの1つをお選びください(の中に をつけてください) n=1203



A .近所

26.8
323



B .小学校区

24.0
289



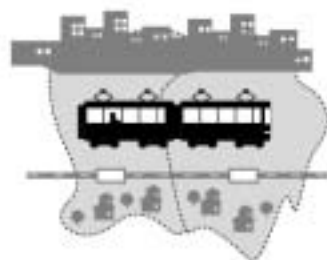
C .中学校区

25.0
301



D .市・区レベル

15.2
183



E .隣市・区まで

5.2
62

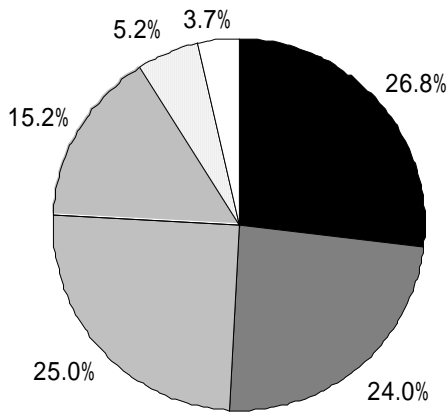


DK / NA

3.7

45

選択肢後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)



- 近所
- 小学校地区
- 中学校地区
- 市・区レベル
- 隣市・区まで
- 不明

	TOTAL	近所	小学校地区	中学校地区	市・区レベル	隣市・区まで	不明
TOTAL	100 1208	26.8 323	24.0 289	25.0 301	15.2 183	5.2 62	3.7 45
男性小計	100 573	25.3 145	23.0 151	26.4 151	15.5 89	6.1 35	3.7 21
20代	100 26	19.2 5	26.9 7	38.5 10	11.5 3	3.8 1	-
30代	100 48	22.9 11	12.5 6	33.3 16	22.9 11	8.3 4	-
40代	100 91	16.5 15	23.1 21	31.9 29	17.6 16	8.8 8	2.2 2
50代	100 129	21.7 28	24.0 31	29.5 38	17.8 23	5.4 7	1.6 2
60代	100 164	31.1 51	26.2 43	20.1 33	12.8 13	4.9 8	4.9 8
70歳以上	100 114	30.7 36	21.1 24	21.1 21	13.2 15	6.1 7	7.9 9
女性小計	100 630	28.3 178	24.9 157	23.8 150	14.9 94	4.3 27	3.8 24
20代	100 58	15.5 9	22.4 13	32.8 19	24.1 14	5.2 3	-
30代	100 55	10.9 6	34.5 19	25.5 14	20.0 11	7.3 4	1.8 1
40代	100 101	24.8 25	26.7 27	32.7 33	12.9 13	3.0 3	-
50代	100 144	28.5 41	27.1 39	24.3 35	13.2 19	4.9 7	2.1 3
60代	100 145	29.7 43	25.5 37	19.3 28	16.6 24	2.8 4	6.2 9
70歳以上	100 125	42.4 53	16.8 21	16.8 21	10.4 13	4.8 6	8.8 11
1人	100 108	39.8 43	14.8 16	17.6 19	17.6 19	5.6 6	4.6 5
2人	100 394	28.4 112	23.1 91	23.6 93	15.5 61	4.6 18	4.8 19
3人	100 312	25.6 80	25.0 78	24.7 77	16.3 51	5.8 18	2.6 8
4人	100 210	23.3 49	23.8 50	31.4 66	13.3 28	5.2 11	2.9 6
5人	100 102	14.7 15	31.4 32	28.4 29	19.6 20	5.9 6	-
6人以上	100 73	31.5 23	28.8 21	23.3 17	5.5 4	2.7 2	8.2 6
死亡家族あり	100 11	9.1 1	27.3 3	27.3 3	18.2 2	9.1 1	9.1 1
入院病者あり	100 27	29.6 8	3.7 1	25.9 7	22.2 6	11.1 3	7.4 2
軽病傷者あり	100 180	22.2 40	23.3 42	28.9 52	17.2 31	6.7 12	1.7 3
全員無事	100 889	26.5 236	24.6 219	25.3 225	15.1 134	4.7 42	3.7 33
全壊・全焼	100 210	27.1 57	25.7 54	20.5 43	15.2 32	5.7 12	5.7 12
半壊・半焼	100 252	24.6 62	23.0 58	26.6 67	15.9 40	5.2 13	4.8 12
一部損壊	100 512	26.8 137	23.8 122	25.8 132	14.5 74	5.9 30	3.3 17
被害なし	100 224	29.9 67	24.1 54	25.9 58	15.2 34	3.1 7	1.8 4

選択肢後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

問 43 . あなたのまちには、次のようなものがありますか。または次のような人たちがいますか。

それぞれについて、あてはまる番号 1 つに をしてください。 n=1203

DK / NA は省略

1. 豊かな緑	(1 . ある 75.9 913	2 . ない 18.0 217	3 . 知らない 2.7) 32
2. 愛着のある公園	(1 . ある 58.1 699	2 . ない 30.6 368	3 . 知らない 6.9) 83
3. あなたが好きだと思うまちなみ (街並み)	(1 . ある 51.8 623	2 . ない 34.8 419	3 . 知らない 8.5) 102
4. みんなが気軽に集まれる場所	(1 . ある 48.4 582	2 . ない 27.3 328	3 . 知らない 20.0) 240
5. 地域の行事 (祭り、運動会など)	(1 . ある 76.0 914	2 . ない 9.3 112	3 . 知らない 11.1) 133

6. 立ち話ができそうなみちばた・路地	(1 . ある 76.1 915	2 . ない 13.9 167	3 . 知らない 6.9) 83
7. 自治会や市民活動を行っているグループ	(1 . ある 73.1 879	2 . ない 6.8 82	3 . 知らない 17.0) 204
8. ほかのまちとは違う独自の雰囲気	(1 . ある 35.7 430	2 . ない 32.1 386	3 . 知らない 27.2) 327
9. 震災を後世に伝える「もの」	(1 . ある 19.6 236	2 . ない 47.5 571	3 . 知らない 27.6) 332
10. 歴史を感じさせる建物や言い伝え	(1 . ある 38.9 468	2 . ない 33.4 402	3 . 知らない 22.9) 276

11. お地蔵さん・小さな祠 (ほこら)	(1 . ある 56.6 681	2 . ない 26.5 319	3 . 知らない 13.3) 160
12. 買い物の便利さ	(1 . ある 79.1 952	2 . ない 17.4 209	3 . 知らない 0.8) 10
13. 文化活動やレクリエーションの施設	(1 . ある 56.1 675	2 . ない 22.8 274	3 . 知らない 16.9) 203
14. 交通網の便利さ	(1 . ある 76.6 921	2 . ない 18.6 224	3 . 知らない 1.4) 17
15. 活気のある雰囲気	(1 . ある 37.1 446	2 . ない 41.8 503	3 . 知らない 15.6) 188

16. 仲間同士で親密に交流しているグループ	(1 . ある 42.6 512	2 . ない 23.6 284	3 . 知らない 31.1) 374
17. いつも誰かしら近所の人が入り出している家	(1 . ある 26.1 314	2 . ない 30.5 367	3 . 知らない 39.8) 479

18. 住民間で家族ぐるみの交流をしている人たち	(1 . ある 36.2 435	2 . ない 25.9 312	3 . 知らない 35.8) 431
19. いつも井戸端会議をしている人たち	(1 . ある 34.3 413	2 . ない 27.4 330	3 . 知らない 34.6) 416
20. 持ち回りで「お茶会」などを行っている人たち	(1 . ある 17.5 210	2 . ない 29.8 358	3 . 知らない 49.0) 590
21. 一緒に旅行に行ったりしている人たち	(1 . ある 32.1 386	2 . ない 27.8 335	3 . 知らない 37.6) 452

選択肢後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

問 44 . あなたの住んでいるまちには、みんなで維持していくべきさまざまなものがあります。そのために必要な費用や労働の提供を求められたら、あなたはどの程度、協力しようと思いますか。費用が負担できるなら負担額を、労働提供できる場合は時間をお答えください。 数値は全て平均値

n=1203

近所の公園の維持管理 年間 1745.68 円 + 年間 17.80 時間

地域の行事（祭り・運動会など）..... 年間 1954.74 円 + 年間 12.82 時間

地域活動や市民活動 年間 3486.50 円 + 年間 19.38 時間

	TOTAL	以上0円	未上0円	未上50円	未上100円	不明	(平均金額)	以上0時間	満10時間未	6時間未	3時間未	不明	(平均時間)
TOTAL	100 1203	41.3 497	6.7 80	0.9 11	5.9 71	45.2 544	1745.68	30.3 365	3.7 45	7.5 90	16.2 195	42.2 508	17.80
男性小計	100 573	42.1 241	4.7 27	0.7 4	6.3 36	46.2 265	1774.04	35.3 202	3.1 18	5.9 34	15.2 87	40.5 232	20.26
20代	100 26	42.3 11	7.7 2	-	19.2 5	30.8 8	1677.78	30.8 8	3.8 1	3.8 1	34.6 9	26.9 7	13.47
30代	100 48	35.4 17	4.2 2	-	10.4 5	50.0 24	1758.33	20.8 10	6.3 3	4.2 2	18.8 9	50 24	17.33
40代	100 91	50.5 46	4.4 4	1.1 1	6.6 6	37.4 34	1678.95	31.9 29	-	9.9 9	19.8 18	38.5 35	13.07
50代	100 129	52.7 68	7.0 9	-	10.1 13	30.2 39	1782.27	39.5 51	3.9 5	9.3 12	19.4 25	27.9 36	15.29
60代	100 164	38.4 63	4.3 7	1.8 3	1.8 3	53.7 88	1665.79	40.9 67	4.3 7	3.7 6	12.2 20	39 64	23.74
70歳以上	100 114	30.7 35	2.6 3	-	3.5 4	63.2 72	2150.00	31.6 36	1.8 2	3.5 4	5.3 6	57.9 66	27.98
女性小計	100 630	40.6 256	8.4 53	1.1 7	5.6 35	44.3 279	1720.80	25.9 163	4.3 27	8.9 56	17.1 108	43.8 276	15.43
20代	100 58	50.0 29	13.8 8	1.7 1	6.9 4	27.6 6	3130.95	29.3 17	8.6 5	12.1 7	13.8 8	36.2 21	13.97
30代	100 55	45.5 25	16.4 9	1.8 1	5.5 3	30.9 17	1660.53	41.8 23	1.8 1	10.9 6	21.8 12	23.6 13	9.76
40代	100 101	48.5 49	8.9 9	1.0 1	6.9 7	34.7 35	1346.97	23.8 24	6.9 7	15.8 16	18.8 19	34.7 35	8.32
50代	100 144	47.9 69	5.6 8	2.8 4	6.9 10	36.8 53	1462.64	29.2 42	2.8 4	9.7 14	23.6 34	34.7 50	20.54
60代	100 145	33.1 48	6.9 10	-	2.8 4	57.2 83	1804.84	26.2 38	4.8 7	6.9 10	9.7 14	52.4 76	17.54
70歳以上	100 125	28.8 36	7.2 9	-	5.6 7	58.4 73	1451.92	15.2 19	2.4 3	2.4 3	16.8 21	63.2 79	18.35
死亡家族あり	100 11	36.4 4	-	-	18.2 2	45.5 5	666.67	54.5 6	-	9.1 1	9.1 1	27.3 3	26.38
入院病傷者あり	100 27	25.9 7	3.7 1	-	3.7 1	66.7 18	1277.78	22.2 6	3.7 1	-	14.8 4	59.3 16	11.55
軽病傷者あり	100 180	44.4 80	6.7 12	1.1 2	6.1 11	41.7 75	1411.43	31.1 56	3.3 6	5.0 9	20.6 37	40 72	15.7
全員無事	100 889	42.1 374	7.2 64	0.9 8	6.1 54	43.8 389	1833.41	30.5 271	3.8 34	8.3 74	16.3 145	41.1 365	18.22
全壊・全焼	100 210	37.6 79	2.9 6	-	8.1 17	51.4 108	1617.65	29 61	1.9 4	6.7 14	13.8 29	48.6 102	22
半壊・半焼	100 252	36.9 93	5.6 14	0.8 2	6.3 16	50.4 127	1588.83	31.7 80	3.6 9	3.2 8	15.1 38	46.4 117	18.13
一部損壊	100 512	46.1 236	6.6 34	1.4 7	4.7 24	41.2 211	1782.72	28.7 147	3.7 19	10.0 51	18.2 93	39.5 202	15.93
被害なし	100 224	38.8 87	11.2 25	0.9 2	6.3 14	42.9 96	1903.91	33.5 75	5.8 13	7.6 17	15.2 34	37.9 85	18.53

選択肢後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

問 45. 震災以来、市民と行政の関係が注目されるようになりました。あなたは、どのような市民と行政のかかわりが良いとお考えですか。

n=1203

(それぞれについて、1、2、3の中であなたのお考えに一番近いものに をしてください)

ゴミ出しのルールについて、

1. 行政がもっと指導してほしい。	32.2	387
2. ルールを守るか否かは、各自の自覚にまかせるべきだ。	55.9	672
3. ルールが守られるように、当番を決めて立会人をおくべきだ。	9.6	116
D K / N A	2.3	28

地域活動(自治会活動・婦人会活動)について、

1. 地域活動に参加する・しないは、本人の自由だ。	51.9	624
2. 行政の支援や指導がなければ、続かない。	14.5	175
3. そこに住む人々の基本的な義務だ。	31.3	377
D K / N A	2.2	27

大災害の時に、市民の命を守るのは、

1. それぞれの努力だ。	9.6	115
2. みんなの助け合いだ。	76.2	917
3. 行政の仕事だ。	12.9	155
D K / N A	1.3	16

まちづくりについて、

1. 自分の住むまちの将来を決める主役は、自分たちだ。	61.0	734
2. いいまちだから住んでいるので、悪くなれば出て行くだけだ。	5.2	62
3. まちづくりには、行政の指導が不可欠だ。	30.7	369
D K / N A	3.2	38

問 46. あなたがお住まいのまちでは、どのような課題があるとお考えでしょうか。最も関心の高いものひとつについて簡単にお書きください。 n=1203

付問: 上問であげていただいた課題について、何か取り組みをなさっていますか(なさいましたか)。あてはまる番号にいくつでも をつけてください。

1. 役所に解決(措置)を依頼している(した)	14.1	93
2. 議員に依頼している(した)	5.9	39
3. 町内会・自治会に提起して解決(措置)に取り組んでいる(いた)	26.9	177
4. 近所の人たちで解決(措置)をはかっている(いた)	11.7	77
5. 有志を募って解決をはかっている(いた)	3.3	22
6. 自分や家族で解決している(した)	11.7	77
7. 何もしていない(しなかった)	28.1	185
8. 何もできない(できなかった)	19.1	126
9. その他(具体的に)	1.7	11
D K / N A	4.9	32

選択枝後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

震災の受けとめ方は、その人のものの見方や考え方によってまちまちです。
 次の質問は、あなたがどのようなタイプの人に当てはまるのかを調べるものです。

問 47. ここには人間の意識・行動に関する様々な内容の文章があります。それぞれについて、それが自分自身に「あてはまる」か「あてはまらない」かのどちらかに をつけてください。

n=1203

DK / NAは省略

体の調子が良くないと気むずかしく なるときがある	(1. あてはまる 67.9 817	2. あてはまらない 28.9 348)
知っている人全部が好きではない	(1. あてはまる 77.5 932	2. あてはまらない 19.9 239)
もう一度、こどもになりたい	(1. あてはまる 28.8 347	2. あてはまらない 67.7 814)
家の人たちとめったにけんかしない	(1. あてはまる 59.4 714	2. あてはまらない 37.2 448)
自分の立場を進んでひとにわからせ たい	(1. あてはまる 23.3 280	2. あてはまらない 72.7 875)

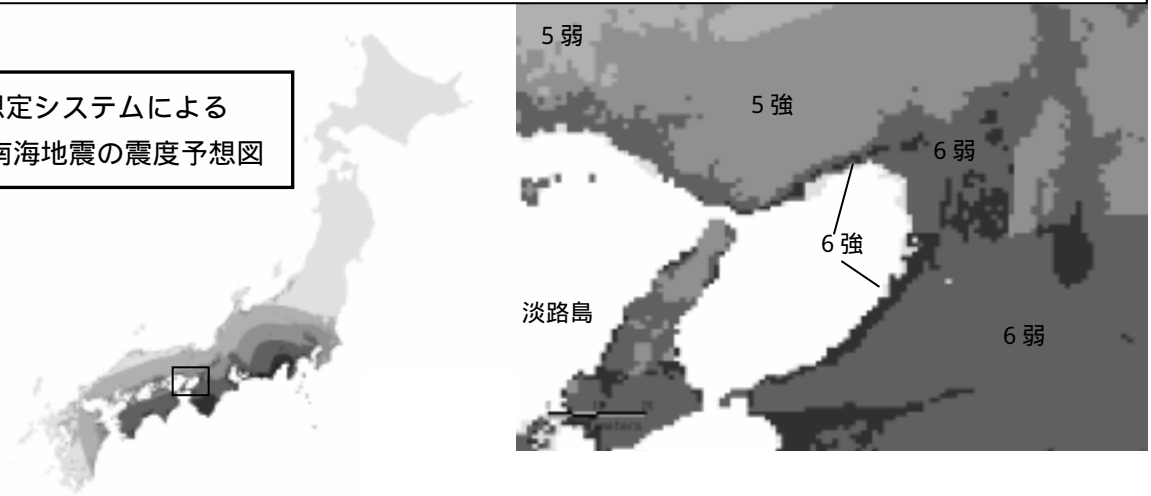
いつもほんとうのことを言うとはか ぎらない	(1. あてはまる 59.8 719	2. あてはまらない 37.2 447)
批評されたり小言をいわれると腹が 立つ	(1. あてはまる 70.1 843	2. あてはまらない 26.8 323)
人に失望するときが多い	(1. あてはまる 43.2 520	2. あてはまらない 53.1 639)
その日のうちにすべきことを翌日ま でのばすことがある	(1. あてはまる 62.1 747	2. あてはまらない 35.2 423)
時々腹を立てる	(1. あてはまる 80.8 972	2. あてはまらない 16.8 202)

ほとんどの人は基本的に正直である	(1. あてはまる 55.9 673	2. あてはまらない 41.2 496)
ほとんどの人は信頼できる	(1. あてはまる 44.4 534	2. あてはまらない 52.4 630)
ほとんどの人は基本的に善良で親切 である	(1. あてはまる 55.2 664	2. あてはまらない 41.9 504)
ほとんどの人は他人を信頼している	(1. あてはまる 35.0 421	2. あてはまらない 60.8 731)
私は、人を信頼する方である	(1. あてはまる 71.2 856	2. あてはまらない 26.3 316)

たいていの人は、人から信頼された 場合、同じようにその相手を信頼する	(1. あてはまる 73.6 886	2. あてはまらない 24.6 296)
他人はスキがあれば、あなたを利用 しようとしていると思う	(1. あてはまる 29.6 356	2. あてはまらない 67.3 810)
たいていの人は他人の役に立とうと していると思う	(1. あてはまる 41.6 501	2. あてはまらない 55.2 664)
他人の困りごとは、その人自身の問 題だ	(1. あてはまる 45.5 547	2. あてはまらない 50.7 610)

京都大学防災研究所・巨大災害研究センターでは、阪神・淡路大震災以降、西日本は地震の活動期に入り、2040年ごろに、静岡から四国沖にかけて「南海・東南海地震」が起これと予想しています。マグニチュード8クラスのこの地震は、全国的に被害をもたらす可能性があり、その時、兵庫県内でも、震度5弱から6強というゆれが予想されています。次の「南海・東南海地震」で、どのような被害が出るのか、どのような対策が必要なのかについて、あなたのお考えをお聞かせください。

地震想定システムによる
南海・東南海地震の震度予想図



震度6強：人は立つことができない。家具のほとんどが移動。弱い木造建物の多くが倒壊、耐震性の高い建物でも壁や柱が破壊。
 震度6弱：人は立つことが難しい。家具の多くが移動。開かなくなるドアが多く、耐震性の弱い建物では倒壊するものもある。
 震度5強：非常な恐怖を感じる。食器・書籍の多くが落ちる。補強されていないブロック塀が崩れたり、壁・柱が破損する。
 震度5弱：一部の人が行動に支障を感じる。窓ガラスが割れて落ちることもある。安全装置が作動しガスが遮断される家もある。

問 48. 「南海・東南海地震」が起きた場合に、以下のような被害が出るとあなたは思いますか。各項目についてあてはまる番号に をしてください。

n=1203

以下のような被害が出る可能性について

	1 可能性が まったく ない	2 可能性が 低い	3 どちら でもない	4 可能性が 高い	5 可能性が 非常に 高い	DK / NA
あなたやあなたの身近な誰かが亡くなったり、入院が必要なほどの病気・ケガをする。	1.7 21	19.6 236	21.3 256	41.1 494	12.7 153	3.6 43
あなたのお住まいが、住めなくなるほどの大きな被害を受ける。	2.2 26	24.1 290	25.2 303	34.7 418	11.1 133	2.7 33
あなたやご家族の、収入や財産に大きな被害がでる。	1.6 19	15.9 191	21.7 261	44.5 535	12.8 154	3.6 43
ふだんの生活が戻ってくるまで、長い時間がかかる。	1.0 12	12.9 155	14.6 176	49.2 592	19.3 232	3.0 36
あなたのまちの建物・施設が、広範囲にわたって大きな被害を受ける。	1.2 15	16.0 192	21.7 261	46.2 556	12.1 146	2.7 33
人々のつながりや、つきあいに大きな変化を受ける。	2.1 25	17.7 213	28.9 348	39.7 477	8.1 98	3.5 42
津波によって、海岸部や河川沿いに被害がでる。	6.2 75	16.7 201	19.2 231	40.4 486	13.8 166	3.7 44
被害によって家に帰れない人（帰宅困難者）がでる。	2.2 26	11.3 136	14.3 172	50.0 602	18.9 227	3.3 40

選択肢後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

問 49 .以下のことがらについて、すでに「やっている」、または「生活の不便・自分自身の経済的な負担が、ある程度あっても、やらなければならない」と思うようになったことがあれば教えてください。それぞれについて、あてはまる番号1つに をしてください。

n=1203

	1 やっ てい る	2 や る べ き だ	3 や っ た ほ う が よ い	4 や る 必 要 が な い	DK / NA
消火器や三角バケツを準備している	35.1 422	16.5 198	42.4 510	2.1 25	4.0 48
いつも風呂に水をためおきしている	37.5 451	14.8 178	38.3 461	6.6 79	2.8 34
家具や冷蔵庫などを固定し、転倒を防止している	16.5 198	28.1 338	50.3 605	1.7 20	3.5 42
ブロック塀を点検し、倒壊を防止している	10.1 121	29.4 354	43.8 527	8.9 107	7.8 94
自分の家の耐震性を高くしている	17.2 207	26.8 322	44.7 538	5.1 61	6.2 75
食料や飲料水を準備している	22.5 271	28.5 343	42.1 506	4.0 48	2.9 35
携帯ラジオ、懐中電灯、医薬品などを準備している	52.0 626	22.2 267	22.6 272	0.7 9	2.4 29
非常持ち出し用衣類、毛布などを準備している	13.8 166	35.2 424	45.6 548	2.3 28	3.1 37
貴重品などをすぐ持ち出せるように準備している	26.1 314	33.6 404	35.8 431	1.4 17	3.1 37
家族との連絡方法などを決めている	21.9 264	39.2 472	34.0 409	1.9 23	2.9 35
近くの学校や公園など、避難する場所を決めている	44.1 531	24.2 291	26.5 319	2.3 28	2.8 34
防災訓練に積極的に参加している	10.1 122	26.4 318	54.7 658	4.7 57	4.0 48
近所の高齢者・弱者の存在をふだんから把握する	10.7 129	29.8 359	52.6 633	2.7 33	4.1 49
避難路にものを置いたり、車をとめたりしない	27.3 328	42.3 509	25.3 304	1.2 15	3.9 47
地域の避難場所を知っておく	41.8 503	31.3 376	22.7 273	1.2 15	3.0 36
自治会との連絡をひんばんにする	9.3 112	25.9 311	52.0 625	9.5 114	3.4 41
地域の危険な場所の見回りを共同で行う	4.1 49	26.7 321	59.6 717	6.4 77	3.2 39
近所でいざという時のことを話し合う	3.3 40	26.4 318	60.6 729	6.9 83	2.7 33

選択肢後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

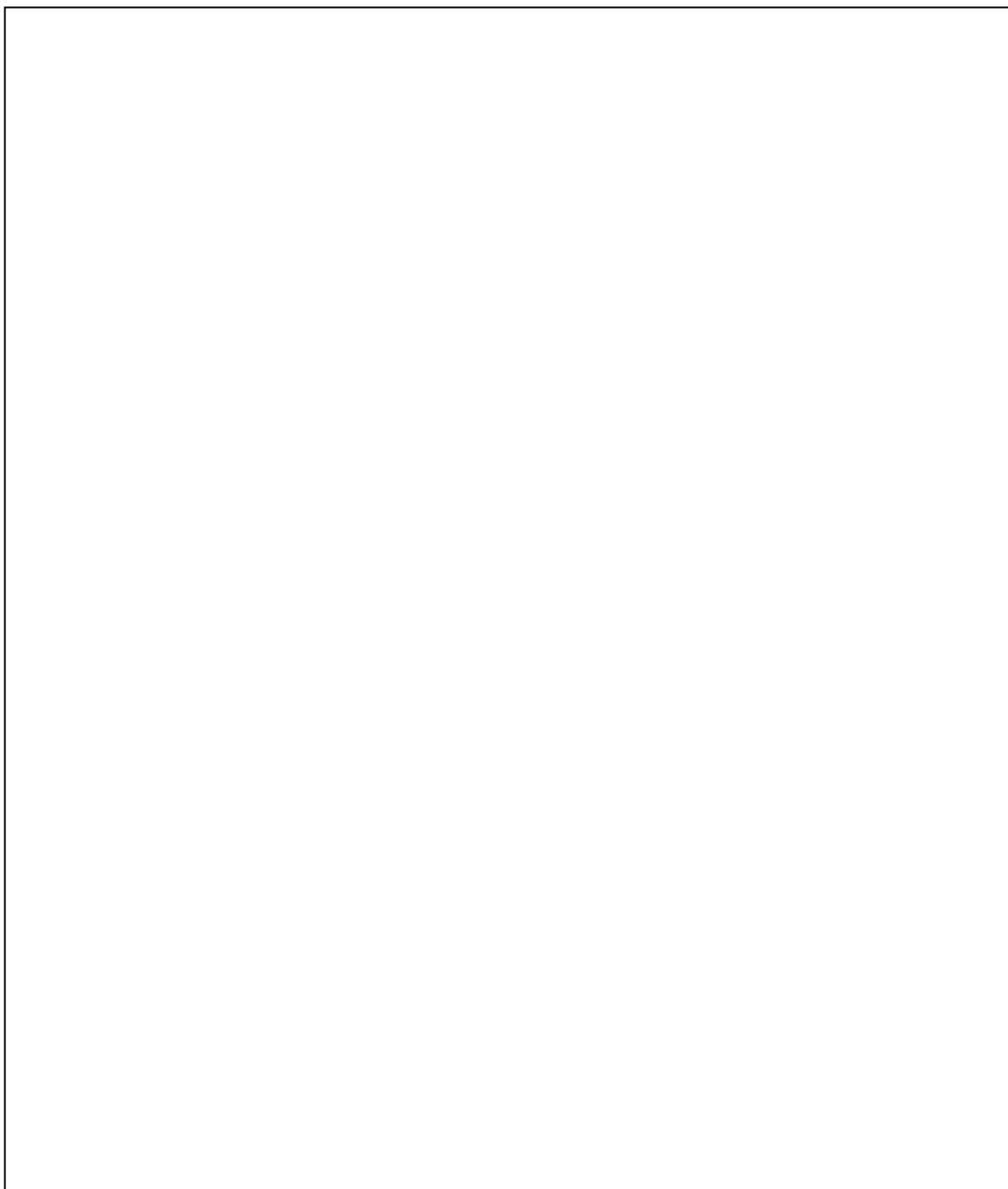
問 50 .あなたが大地震に関して、国や地方公共団体に力を入れてもらいたい対策はどのようなことですか。

この中のそれぞれについて、あてはまる番号1つに をしてください。

n=1203

	1 やるべきだ	2 やったほうがよい	3 やる必要がない	DK / NA
避難経路や避難場所の整備	62.3 750	31.8 383	1.2 14	4.7 56
迅速な救助活動を行うための災害救助体制の充実	69.6 837	25.9 312	0.7 9	3.7 45
緊急時の通信網の整備	70.7 851	24.3 292	0.7 8	4.3 52
電気・ガス・水道・電話などのライフライン施設の耐震性の向上	79.6 957	16.9 203	0.5 6	3.1 37
災害時における被害状況の把握と迅速な情報提供	72.3 870	23.2 279	0.2 2	4.3 52
応急仮設住宅の速やかな供給	69.8 840	25.1 302	0.7 9	4.3 52
食料・飲料水・医薬品の備蓄	70.9 853	24.6 296	0.7 9	3.7 45
老朽木造住宅の密集した市街地の建て替えなどを図る	38.5 463	53.5 644	3.2 39	4.7 57
学校・医療機関などの公共施設の耐震性を強化する	63.3 762	31.7 381	0.8 10	4.2 50
建築物の落下物対策・ブロック塀等の安全化を図る	53.8 647	41.2 496	1.0 12	4.0 48
避難場所としての、公園・河川敷などを整備する	52.6 633	41.4 498	2.4 29	3.6 43
避難や延焼防止・物資輸送のため、幅の広い道路網を整備する	52.0 625	41.1 495	3.2 39	3.7 44

最後に、「あなたにとって震災とは何でしたか」。みなさんのご意見をお聞かせください。



質問はこれで終わりです。ありがとうございました。

#2P06 (下欄には記入しないでください)

--	--	--	--	--

選択肢後の数値は、前および上が%、後および下が実数(人)

2 . 用語説明

* 統計的に有意な差（統計的有意）

統計的検定とは、母集団に関する仮説を標本から得られた情報に基づいて検証することである。社会調査にあっても、標本調査、全数調査を問わず、データには偶然的誤差が含まれているから、ある結論を断定するためには、それが偶然的要因によるものではないことを、統計的検定によってテストしなければならない。この統計的仮説検定の手順において、調査結果が統計的に意味を持つかどうか判断する検定のことであり、通常危険率を5%（ $\alpha = 0.05$ という）に許容している。ある標本結果に基づく危険率を有意水準といい、これが5%以下の場合、統計的に有意な差があったと判断される。

* カイ2乗検定

統計的検定の手法のうち、カイ2乗分布（あるものの集団において、特定の変数の値がどのようになっているのかの総体的様相の代表的一種）を用いる検定法の総称。度数同士を比較する検定に用いられる。

* 因子分析

観測された多数の量的データを、比較的少数の共通な「因子」（観測することのできない特定の属性を示す仮説的な概念）で説明しようとするときに用いられる統計モデル。

* 主因子法

因子分析における直交解を与える方法の一つで、相関行列から直接求められる因子解として最も重要なもの。

* バリマックス回転

因子分析において、単純構造を求めるための直交回転解の一つで、最もよく利用されているもの。単純構造の指標として、バリマックス基準をとり、これを最大化するように因子軸の直交回転をおこなって解を求める。

* 共通性

因子分析を行った結果得られた因子で説明される分散（分布のばらつきの程度を示す量）の比率のことで、0から1の値をとる。1に近い共通性の値を持つ変数ほど、因子に対する影響力が強い。

* 寄与率

因子分析の結果、求められた因子の中から因子数を決定する際、固有値と呼ばれる数値を手がかりとするが、この各因子ごとに示される値が大きければ大きいほど、因子と変数（設問）の強い関係があることを示す。この固有値をもとにして、各因子と変数との関係を%で表したものが寄与率である。寄与率が大きければ大きいほど、その因子と変数の関係は強い。

* 等質性分析（HOMALS：ホマルス）

カテゴリカルデータの分析手法の一種。回答データからの情報を損なわない形で、回答傾向により、質問項目の似ているカテゴリーを探し出し、似通った反応を示す調査対象者を見つけ出す統計的分析手法として有効である。

この分析は、さまざまな要因成分を縦軸と横軸の中に表す分析手法である。関連の強いカテゴリーは近くに、弱いカテゴリーは遠くにプロット（布置）されるので、データの傾向を視覚的・直感的に把握できるのが特徴である。また、軸の意味をプロットされたカテゴリーのウェイト値によって解釈することも可能である。

* クラスター分析

全対象者をいくつかの量的または質的データを用いて、グループに分割し、似たもの同士がなるべく同じグループに含まれるように、また異なるグループはなるべく離れるようにする分析手法である。

* 多次元尺度法

ばらつきのある変量間の関係を見るために、対象間の距離尺度を測定したデータを入力し、指定した次元（通常は2次元平面）における座標を推定する手法。距離は、非類似性と呼ばれることも多く、似ているほど近く、似ていないほど遠い測度である。

< 参考文献 >

- ・ 飽戸弘「社会調査ハンドブック」、日本経済新聞社、1987
- ・ 新井喜美夫「マーケティングの用語辞典」、東洋経済新報社、1986
- ・ 朝野熙彦「入門 多変量解析の実際」、講談社サイエンティフィック、1996
- ・ 後藤秀夫「市場調査ケーススタディ」、みき書房、1996
- ・ 猪俣清二「統計学ハンドブック」、聖文社、1990
- ・ 岩淵千明「あなたもできる データの処理と解析」福村出版、1997
- ・ 小川一夫監修「改訂新版 社会心理学用語辞典」、北大路書房、1995
- ・ 芝祐順・渡辺洋・石塚智一編「統計用語辞典」、新曜社、1984
- ・ 安田三郎・原純輔「社会調査ハンドブック（第3版）」、有斐閣双書、1982